魔法少女リリカルなのは　四神伝奇

エドワード・ニューゲート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　四神伝奇

【Ｎコード】
Ｎ０２６２Ｔ

【作者名】
エドワード・ニューゲート

【あらすじ】
ＪＳ事件から三年。ある事件の捜査のために、フェイトとティアナは地球に訪れていた。
だがその途中、日本とは別の場所でロストロギアの反応を感知、二人は急きょその調査に向かうことに、
そこで彼女たちが目にしたのは、魔法と似て非なる術を使う二人の少年少女と、彼らによって目覚められた、二体の聖獣だった。

作者の処女作です、それを承知してみていただければ幸いです。
どんな些細なことでもいいので、ご意見、ご感想、ご指摘をどしどし送ってください。

プロローグ（前書き）

皆さんこんにちは、このサイトで書かれてる多くの小説に触発されて、自分でも書いてみたくなりました。

内容云々に関しては自覚しておりますが、こんな駄文で楽しんでいただければ幸いです。

急きょ予定を変更し、プロローグに書き直しました。

それではどうぞ

プロローグ

「目覚めの時……」

黒い暗黒の世界。

その中で、どこからともなく声が聞こえてきた。

「運命の時……」

その声が発せられるとともに、一体にある黒い煙のようなものが、うめき声をあげて動く獣のように地を這いずる。

まるで意志を持っているかのようであり、今にも慟哭をあげそうだった。

「まだか……」

その中に、一人の黒衣をまとった男がいた。

「まだ足りぬか……まあ、この程度の量では、まだほど遠いか」

そう言って男が杖で地面をたたくと、足元に黒い魔法人のようなものが現れる。

「なあに、手ごまは大量にある、焦ることはない。それに……」

男は光に包まれ始めながら、周りの石像を見渡す。

「この方々がお目覚めになれば、このお方の復活も近い、そうなれば、ふふふふ……」

そう言うと、男は光に包まれ、その場から消えてしまった。

「うううううぅぅぅぅ……」

そして、まるでそれに呼応するように、再び暗黒の世界に、おぞましいうめき声が聞こえるのだった。

プロローグ（後書き）

予定を変更し、次から第一話にしたいと思います。

第一話　遭遇（前書き）

正式に第一話とします。

おかしいと思うところがあったら、ご指摘お願いします。

第一話　遭遇

「そろそろですね」

「そうだね」

次元航行艦「クラウディア」の艦内

そこで、行先の映像を見ながらフェイトとティアナは確認し合った。

二人は、ここ最近起きているある事件の調査のために、ある次元世界へ向かっていた。

事の発端は一か月前。

ミッドチルダをはじめとする各次元世界で、人が衣服のみを残して消える事件が起きていた。

目撃証言もあり、ミッドチルダのみならず、管理外を含めた次元世界、果ては管理局員にまで被害が及んでいた。

被害は既にミッドチルダだけで（管理局員除き）１０人前後、全体での被害は１００人を超えていた。

その中でも、今二人が向かっている次元世界では、被害はすでに３０人近くに及んでおり、本局は執務官である二人に調査命令を下したのだ。

そして、その場所とは……

「よりにもよってまた地球だなんて」

「ジュエルシード事件に闇の書事件、六課のころのロストロギア、

そして今回の事件。言いたくありませんけど、あの世界、何か呪われてるんじゃないんですか？」

「あはは……」

ある意味的を射ているかもしれないティアナの発言に、フェイトは乾いた笑しかできなかった。

「まあ、それはともかく。これ以上被害を増やさないようにするためには、あそこで何か起きてるのか突き止めないと」

「そうですね」

二人が気合を入れ直した、その時、突然アナウンスが聞こえてきた。

『ハラオウン執務官、ランスター執務官。提督がお呼びです。至急、艦長室まで、お越しください』

「クロノが？　何だろう？」

「とにかく行ってみましょう」

こうして二人は、艦長室に向かっていった。

「えっ？　ロストロギア反応？」

艦長室についた二人は、上司であるクロノから呼び出しの理由を聞かされていた。

それによると、地球でロストロギア反応があったというのだ。

「いや、反応がすごく酷似しているというだけで確証はない。反応も微弱で、危険性はないと思うが、もしかしたらと言うこともある。それに……」

「それに？」

途中で言葉を区切ったクロノは、コンソールを捜査して二人の前にデータを移しながら、続きを話した。

「反応が移動をしているんだ。誰かが持ち歩いているのか、あるいは自力で動いているのか、いずれにしても、このまま放置することはできない」

「確かに……」

「そこで、予定を変更して、二人には反応の調査、ロストロギアだった場合はその確保をしてほしい」

「解りました。それで場所はどこですか？」

「まさか、また海鳴？」

二人の質問に、クロノは首を横に振った。

「いや、今回は海鳴、と言うより日本じゃないんだ」

「日本じゃない？　それじゃあ、どこに？」

「それは……」

しばらくして、二人は目的地転送された。

「ここですか？」

「そうみたいだね」

二人が転送された場所は、中国、山東省だった。

具体的に言えば、二人が贈られた場所はどこかの道のだったが、人影らしきものは見えなかった。

「でも、日本ならまだしも、ここの現地住民の人と会ったらどうす

れば」

「大丈夫だよ、そのためにシャーリーが作ったっていうこの翻訳用のピアスをつけてるんだから」

今、二人の耳には、ピアスがはめられて（穴はあけておらず、耳たぶにはさんでる感じ）いる。

六課時代にシャーリーが作製したものらしいが、一応正常に機能している。

「さ、そんなことより、早く反応を探そう」

「はい」

二人はデバイスに送られた反応のデータを頼りに、それを追いかけて行った。

「ん？」

反応を追っていると、ティアナが何かを見つけた。

「これは！　（フェイトさん！　すぐ来てください！！」

そしてそれが何かを確認するや、ティアナはフェイトを呼んだ。

「どうしたの？」

「これ……」

そう言って見せたのは衣服だった。

「これって、まさか……」

「はい、おそらくこの人も」

この時、二人は確信した。
また犠牲者が出てしまったと。
だが、これとは別に、ティアナにはある仮説ができていた。

「フェイトさん」

「何？」

「もしかしたらですけど、私たちが追っている反応と、消滅事件には、何か因果関係があるんじゃないでしょうか？」

「……」

「確証はないですけど、私たちが追っている反応のルートと、この場所が一致するんです。それに、微弱な反応なら、見逃す可能性だってあります。もしかしたら……」

「もしその仮説が本当なら、その反応のもとを抑えれば……急ごう、ティアナ」

「はい！」

こうして二人は、反応を追って走り出した。

やがて二人は、大きな遺跡の前に来ていた。
四方を岩山に囲まれ、その中心にそびえたつようにたてられている大きな遺跡だった。

「この先に、例の反応がある」

「しかも、ここに来てから、あまり動いていませんね」

「そうだね、どうして……」

二人が考え始めた直後、遺跡の内部の方で轟音が聞こえてきた。

「何！　いったい何が！？」

「行くよ！　ティアナ！」

「はい！」

フェイトに促され、ティアナも遺跡の内部に入っていく。
そして遺跡の奥深くを進んでいくうちに、二人はその中に漂う感

じに気づく。

「フェイトさん。この感じ」

「うん、魔力だね」

「ってことは、この先にいるのは、魔導師」

「そう考えた方がいいかもね」

なおさら、ティアナの仮説が現実味を帯びてきたと思いながら先を進むと、やがてその先に、三人の人影が見えてきた。

「あれは！」

二人がそれを確認すると同時に、閃光とともに人影のあった場所から爆発が鳴り響いた。

二人はしばらく様子を見ていたが、やがて爆炎が晴れると、人影の正体が明らかになってきた。

「やれやれ、聞き分けのない子供たちだ」

一人は、黒い衣を纏い、杖を持っていた。布に覆われていて顔はわからないが、声の感じから男のようだ。

「そっちもいい加減しつこいっての！！」

もう一人は、腰まで届くくらいの黒髪に翡翠色の瞳をした、歳は15，6位のいかにも気の強そうな少女。

「まったくだよ」

そして最後の一人は、黒い髪と茶色の瞳と言う、少女と同年代くらいの典型的な日本人の顔と見える少年だった。

第一話　遭遇（後書き）

次から本格的に話を作って、決まった日に投稿したいと思います。
ご要望の日があれば、是非申し上げください。

第二話　龍虎覚醒（前書き）

日曜に更新するはずだったが、物語が完成せず、月曜の、しかもこんな遅い時間に投稿することに相成りました。

しかも、本来なら戦闘描写も加えて、次話でちょっと補足説明会的なのをやろうと思ってたんですが、かなり急場しのぎで初期構想の前半だけを投稿します。

プロットって大事だなあって思いました。

今回はオリキャラ二名の名前が出ます。

そして、この物語のカギを握る存在も登場

それではどうぞ。

第二話　龍虎覚醒

「おとなしく、貴様たちが持っている鍵を渡せ！」

「やなこった！！」

「断る！！」

男の言葉に反論した刹那、二人は一斉に男に襲いかかった。

「あんたもいい加減あきらめろっての！」

そう言いながら、少女は男に向かって蹴りを連続で繰り出す。

だが、黒衣の男はそれを杖を使って難なく捌いていく。

「火招符！」

すると突然、少年が札を投げつけた。

その札は火球となって、男に襲いかかる。

「ふん！」

だが、男はそれを杖で難なく消し去った。

「このような子供だましで、私を倒せると思ったのか？」

「思ってないよ。でもね……」

「隙を作るには十分！！」

その刹那、男の腹に、少女の鋭い蹴りがさく裂した。

「ぐっ！」

男は吹っ飛ばされたが、宙返りしながら着地する。

「いい加減あきらめなさいよ。何度言われたって、渡さないって言ったら渡さないわよ！」

「それに、ここまで追ってきて解ってるでしょう。僕たちはあなたに負けません！」

そう言うと、少年は懐から一枚の札を取出し、それを投げつける。

「閃！」

そしてそう唱えると、札はまばゆい光を放って爆発した。

「くっ！！」

「今だ！」

「じゃあね、ストーカーさん！」

男が光で怯んでる隙に、二人は遺跡の奥へ向かっていった。

しばらくして光が収まったとき、男の目の前には誰もいなかった。

「おのれ、あいつらが目覚めたら、あのお方の復活に支障が出る。

その前に、何としても鍵を奪い、破壊せねば……」

そう言うと、男の周りに符の様なものが現れ、それが男を包みこみ、それが晴れると、男の姿はなくなっていた。

「……一体、何だったんでしょう？」

「さあ……」

陰でその様子を見ていたティアナとフェイトは、先ほどの光景に疑問を呈した。

魔法とは明らかに違った術を男と少年が使っていたのだ、魔法に携わる者として、困惑するなという方が可笑しいだろう。

「でも、どうして傍観してたんですか？」

しかし、さっきの様子とは別に、ティアナはフェイトの動きに疑問を抱いていた。

理由は術式がどうあれ、先ほどの三人が、何らかの関係を持っている可能性は大いにあり得るのだ。

「どちらが私たちにとって敵なのか、それを見極めたかったから」
ティアナの疑問に、フェイトは答え始める。
「さっきの様子を見て、ティアナにはどっちが敵に見えた？」
「敵……ですか？」
フェイトに聞かれ、少し考察した後、ティアナは答えた。
「どう考えても、あの黒衣を纏った男ですね。さっきの二人から、何かを奪おうとしていましたし、何か目的があるようでしたし」
「私も、そうだと思う」
ティアナの答えに、フェイトも頷いた。
「さっきの様子を見ながら、バルディッシュで調べてたんだけど。例のロストロギア反応、さっきの女の子から反応してたの」
「じゃあ、あいつは」
「恐らく、あの子の持ってるロストロギアが目当てだと思う」
それを聞いて、ティアナには、何が言いたいのかはっきりした。
「それに、かなり重要物みたいだから、ここであきらめるとも思えない」
「そうですね。となると、先回りしているかもしれませんね」

「或いは、何か別の手を用意しているか……」
考えられるとすれば前者が一番可能性として大きいが、先ほどの先頭の様子を見て後者も捨てがたい。
「とはいえ、まずはさっきの二人と合流してから、ですかね」
「そうだね、先を急ごう」
こうして、二人が奥へ進もうとした時だった……
突然、大きな振動が、遺跡内を襲ったのだ。
「きゃ！？」
「何！？」
直後、二人の頭上から天井が崩れ落ちてきたが、即座に展開したプロテクションで難を逃れることができた。
そして、空いた天井から二人が外を見上げると。
「嘘……」
「何……あれ……」
そこには、頭部に角をはやした巨人がいたのだった。

「どうなってんのよ！！」

「知らないよ！！」

一方、遺跡の最奥部に到着していた二人は危機に瀕していた。

最奥部に到着した直後、地震が起きたかと思ったら、突然現れたあの巨人が天井を破壊したのだ。

二人はその瓦礫を必死にかわし、どうにかなったと思ったら、今度は巨人が攻撃を仕掛けてきたのだ。

「最奥部に来たのに何の反応もないし、本当にこれであってるの？」

「知らないわよ！　私だって言い伝えレベルでしか知らないんだから！！」

巨人の攻撃を避けながら、二人は口論などしていた。

「って言うか、こういう奴を倒すのがあんたの仕事でしょ。何とかしてよ龍清！！」

「無茶言わないでよ西麗。あんな大きいのどうやって倒せっていうの！！」

二人で口論してる間も、怪物は二人を狙ってくる。

そして、その剛腕が再び二人の居たところに振り下ろされる。

「「のわーーー！！」」

二人は奇声を上げながらその攻撃から必死に逃げまわる。

そしてその最中に、異変はおきた。

「あっ！　宝玉が！」

突如、西麗の懐から、青く光る球と、白く光る球が懐からひとりでに現れ、消えてしまったのだ。

その直後、地面が大きく揺れ始めたのだ。

怪物が揺らしてるのかと思い振り返ってみたが、そんな風には見えなかった。

「ちょ！　どうなってるの！！」

「こっちが聞きたいよ！！」

二人がこんな状況でも口論をしていると、遺跡が大きく崩れ、二人の頭上に落ちてきた。

「あわわ！！」

「ちょ、ちょっと待って――――――！！」

二人の叫びも空しく、瓦礫が二人の頭上に降り注ぐ。

「「……あれ？」」

やがて、二人は何の感触も来ないことに疑問を抱き、間の抜けた声を出す。

「僕たち、生きてる。何で？」

「さあ？」

あれだけの瓦礫が落ちてきたのだ、普通に考えれば、自分たちは下敷きになってるはずだった。

だが、今自分たちはこうして生きている。

二人が状況確認の為、顔を上げてみると。

「何とか間に合いましたね」

「そうだね」

二人の目の前には、プロテクションを張りながら二人を守るフェイトとティアナがいた。

「あ、貴方達は？」

「自己紹介は後。その前にいくつか聞きたいことがあるんだけど、

いいかしら？」

「良いけど、何？」

即座に反応した西麗が、ティアナの質問に答える。

「まず、あんた達はどうしてここに？」

「まあ、ちょっと込み入った事情があってね。それにここ、元は私の家みたいなところだし」

「あんまり大っぴらに話せないんですが、別に盗掘の為に来たわけじゃありませんから」

「誰もそんなこと聞いてないわよ」

変な誤解をされたと思ったのか、龍清の言ってきたことに、やや呆れ気味でティアナは返した。

「まあ、あんまり深く聞かないことにするよ。それで、次が一番答えてほしいことなんだけど」

人に言いにくいことだと察したフェイトは、そう言うと崩れた天井の方を見上げながら言った。

「あれ、何なの？」

「「えっ？」」

そう言って二人がフェイトの指差した方向を見てみると……

巨大な怪物と対峙する様に向かい合う、空を飛ぶ青い龍と、柱の一本に立つ白い虎がいた。

「「何アレ――――――――――――！？」」

まったく状況が呑み込めていない二人の絶叫が響いたという。

第二話　龍虎覚醒（後書き）

元ネタは一発でばれることでしょう、原作の方にも書きましたし。

次はまともな戦闘描写を書こうと思います。

何かアドバイスがあれば、是非ください。

第三話　降り立つ龍神　駆け抜ける獣神

「何、アレ？」

「龍と、虎？」

突然の事態に、龍清も西麗も困惑するしかなかった。
彼らの視線の先には、破壊の限りを尽くしていた巨人と、どこからともなく現れた、青い龍と白い虎が睨み合っていたのだ。
しかも、両者の感じを見る限り、かなりお互いを敵視しているようであった。

「なんであんなのがここにいるの？　っていうか、何時からいたの？」

「知らないの？」

「はい、西麗はともかく、僕は何も」

フェイトの質問に、龍清は素直に答えた。
そしてその言葉とともに、三人の視線は西麗に向けられる。

「あたしだって、言い伝え程度でしか知らないから、あんなのがあるなんて聞いてないわよ」

「前もそういってたよね」

「そ、でもさ……」

ここで、西麗は、二匹を見ながら言った。
「あれってもしかして、四神かな？」
「「四神？」」
声を合わせていうフェイトとティアナに、龍清が説明した。
「四神と言うのは、東西南北の四つを守護する四匹の聖獣の事です。東に青龍と言う龍、西に白虎と言う虎、南に朱雀と言う鳥、北に玄武と言う蛇と亀がいるんです」
「「へー」」
龍清の説明に、二人は感心していた。
「でもそれって、実在するの？」
「いえ、実在はしません、思想の話ですから……と言いたいところですが」
「いるじゃん。目の前に」
そう言って西麗の指差す方向では、巨人と二匹が争っていた。
白虎が巨人に向かって襲い掛かり、その鋭い爪を振り下ろす。
だが、巨人はその攻撃をものともしない様子で白虎を投げ飛ばした。
地面にたたきつけられるも、白虎はなおも怪物に向かっていく。
「……あれ？」

するとここで、フェイトが何かに気付いた。
「フェイトさん、気づきましたか？」
「ティアナも？」
「はい」
ティアナも何かに気付いた。
「あの二匹、共闘していない」
「えっ？」
フェイトの答えに、龍清は驚いた声を上げる。
「よく見て、さっきからあれを攻撃してるのは虎の方だけ、あの青い龍は何もしてないでしょ？」
「……本当だ」
よく見てみると、龍は空を飛びながら、虎と巨人の戦いを見ているだけで、何かをするそぶりはなかった。
「どうして？　あいつが敵だっていうなら、二匹でまとめてかかっちゃえばいいじゃない」
「何か理由があるのかな？」

四人が話し合ってる間も、二匹と巨人の戦いを続いていた。
もっとも、突っ込む白虎に、巨人がそれを投げ返すというワンサイドゲームになっている。
そして今、再び襲いかかった白虎をとらえた。
そしてそれを回転を加えながら投げ飛ばした。
しかも、投げ飛ばした方向には青龍がおり、二匹を空中でぶつかった後、地面に墜落した。

「ああもう！　見ちゃいらんない！！」

するとここで、しびれを切らしたように叫びだした西麗が飛び出していった、

「ちょっとあなた！　何する気！」

「決まってんでしょ！　あの化け物をブッ飛ばすの！　これ以上人が先祖代々守ってきた土地を踏み荒らされてたまるかっての！！」

「む、無茶だよ！！」

「無茶でもなんでも、やんなきゃなんないでしょうが！！」

「ちょっと、西麗！」

制止を振り切る西麗を龍清が尚も止めようとした。

その時だった……

力を望むか？

「「……えっ？」」

「どうしたの？」

突然、二人は疑問の声を上げた二人に、フェイトが何事かと聞いてきた。

「今、声が聞こえた気が……」

「声？　私たち何も言ってないけど？」

「でも、確かに……」

汝等、我等の力を受け入れるか？

「ま、また？」

「何、何なの？」

汝等、我らの力を受け入れる器たる素質あり。

なれど、我らを受け入れるも拒むも、汝等次第。

さあ、選べ。我らを受け入れるか？　それとも拒むか？

「「……」」

突然聞こえてきた声に、二人はしばらく黙り込む。

やがて、その沈黙を破ったのは龍清だった。
「もしそれで、この状況を何とかできるなら」
「……やってやろうじゃん」
次に、西麗がその言葉に続く。
「龍清！　答えはわかってるわよね！」
「解ってるよ、西麗」
二人は同時に頷き、そして叫ぶ。
「「僕は（私は）、その力を望もう！」
そして二人が叫ぶと同時に、先ほどまで倒れたいた二匹が起き上がり、ともに雄たけびをあげた。
「グオオオォォォォォォォォォ！！」
「ガアアアアアアアアアアア！！」

力を望むなら唱えよ、我らの名を

「汝、清流に住まうもの、

日出づる地を守り、天へと昇る、

始まりの時と、成長を司る蒼き神獣、

汝の名は、無敵青龍！！」

「汝、大道を駆けるもの、

日没する地を守り、風と共に去る、

実りの時と、堅固を司る白き神獣、

汝の名は、最強白虎！！」

「「必神火帝、天魔降伏！！」」

掛け声を言い終えると、二匹は眩い光となって、二人を包み込んだ。

「な、何！？」

「何なの！？」

突然の出来事に、フェイトもティアナもただ驚くばかり。

そして光が収まると、その先には、先ほどとは違う格好をした二人がいた。

「……えっ？」

「……はい？」

「「何コレーーーーーーーー！！！！」」

自分の姿を確認するなり、二人は同時に叫んだ。

龍清は全身を青い鎧を装着した、胸部に龍の頭のようなものがあり、背中には先ほどの龍の翼が生えていた。
一方西麗も似たような姿をしているが、胸部が虎の頭をしており、白と黒の虎模様をしており、しっぽが生えていた。

「何コレ？　どうなってるの？」

「うわあ、しっぽが生えちゃってるよ……」

二人があれこれ困惑していると。

「「……え？」」

頭上から、巨人の腕が二人に向かって振り下ろされようとしていた。

「「わあああ！？！？」」

二人が今まさにその腕につぶされようとしたとき……

「ライジングスマッシャー！」

「ファントムブレイザー！」

フェイトとティアナの砲撃が、見事に巨人の足元に命中、バランスを崩した巨人の腕は、二人のすぐ近くに振り下ろされた。

「大丈夫？」

「あっ、はい」

「ところで、その格好は一体」

「解らないけど、なんかいける気がする！」

四人が会話してる間に、巨人が起き始めた。

「さて、今度はこっちの番よ！　龍清！」

「解ってる！」

そう言って龍清が印を組み始めると、周囲に黄色い符のようなものが現れた。

「九天応元雷声普化天尊の名のもとに命ず。蒼雷よ、敵を貫け。急々如律令！」

呪文を唱えながら符を投げると、巨人に向かって上空から青白い雷撃が降り注いだ。

「やるー、私も負けてられないね」

雷撃を受けて倒れこんだ巨人に向かって、西麗は一気に駆け出した。

「虎王神速槍！」

西麗は手からなぎなたのような形をした槍を呼び出し、それを持つと、巨人に向かって連続で突きを繰り出した。

「いくらあんたが巨体でタフでも、これだけ連続で喰らったらどうよ！！」

次々と繰り出される突きに、加えて先ほどの雷撃が聞いているらしく、巨人のところどころに傷ができ始めた。

「止めだ！」

そういうと、龍清のしっぽの先端にあった宝珠が、彼の手元にやってくる。

「龍王破山剣！！」

そしてそれは、その叫びと共に、一本の剣となっていった。

「これで、とどめーーーーーーーー！！！！」

一気に敵の頭上へ舞い上がると、そのまま袈斬りの要領で剣を振り下ろした。

巨人はその太刀を受け、真っ二つになって消滅していった。

「何ということだ、よもや覚醒を許してしまうとは……しかも、妖魔を一体倒されてしまった」

一方、どこからともなく姿を消した黒衣の男は、遠くからその様子を見ていた。

「ふん、まあいい。奴はしょせん即席で作った名もなきもの。まだ残りの二匹が目覚めたわけではないしな」

男はそういうと、不敵な笑みを浮かべた。

「それに、あの方々がお目覚めになれば、我らの大願を成就させることはできる。いかに奴らとて、止めることはできまい」

そういうと、男の周りを黒い呪符が渦巻き始めた。

「今回はここまでにしておこう。また相見えよう、龍と虎を継ぐ者よ」

その言葉と共に、男は姿を消してしまった。

「はぁ、はぁ……」

「つ、疲れたーーー」

巨人との戦闘を終えた二人は、そのままへたり込んでしまった。
それと同時に、二人の格好は元に戻った。

「それにしても、何だったんだろう？」

「さあね。でも、これでよかったと思うよ、私は」

「僕も」

お互い、多少の困惑はあったが、自分の選んだことに後悔はしていない様子だった。

「二人とも、ちょっといいかな？」

するとここで、フェイトが二人に話しかけてきた。

「あっ、何ですか？」

「私たち、ちょっと聞きたいことがあってね、一緒に来てもらえないかしら？」

「聞きたいことって？　さっきの事ならパスね、私たちもわけわかんないんだから」

西麗は手を振りながら答えた。
実際、先ほどの事は勢いに任せた点があり、冷静になってみれば

よくわからないことでいっぱいだったのだ。

「ううん、違うよ。私たちが聞きたいのは、別の事」

「別の事？」

「そ、ちゃんと話してあげるから、ついてきてくれるかな？　悪いようにはしないから」

誘ってくるフェイトに、二人は顔を見合わせながら相談し始める。

「龍清、どうする？」

「そうだね。でも、助けてもらったりしたし、この人たち、悪い人じゃないと思うんだ」

「ふーん、龍清がそう言うなら、大丈夫かな」

「いいの？」

「あんたって意外と人を見る目があるからね、あんたがそう言うなら、大丈夫でしょ」

「あはは、ありがとう」

二人はしばらく笑いあった後、フェイトとティアナの方を向く。

「取り敢えず、僕たちで話せえることは話します」

「解った、じゃあ、ついてきてくれる」

「っていうか、立てる？」

「あたしは何とか」

「僕も大丈夫……うわっ」

西麗は一寸ふらつきながらも立てたが、龍清は立とうとしてそのまま尻餅をついてしまった。

「なんか、力が入らない」

「あんた、戦闘の時はあんなにかっこよかったのに、ホント締まらないわね」

「うぅ……」

この後、龍清は西麗に肩を貸してもらってようやく立ち上がり、フェイトとティアナに連れられて、クラウディアへと向かうこととなった。

第三話　降り立つ龍神　駆け抜ける獣神（後書き）

二人の格好については、龍虎王と虎龍王を連想していただければ結構です。

あの二匹はどこへ行ったかと言うと、それは次回解ります。

第四話　自己紹介（前書き）

今回は自己紹介と簡単な説明、そして二匹の行方についてです。

なかなか感想が来ませんのですごく不安です。

ご感想、ご指摘どうか私に下さい！！

第四話　自己紹介

「以上が、現地で起こったことです」

「ご苦労」

クラウディアに戻ってきた二人は、目的地で起こった出来事や、龍清と西麗から聞いた話などをクロノに報告していた。

「そしてこれが、反応の正体だった宝珠です」

そう言ってティアナはデスクの上に赤と黒の宝珠を置いた。
これの提供を求めた際、無論西麗は渋っていたが、龍清の説得と後で返すという条件付きであっさり納得し、渡してくれたのだ。

「残りの二つは、話によれば遺跡最奥部の床の下に消えて行ってしまったそうです」

「なるほど。しかし、聞けば聞くほど不可解だな」

二人の報告を大方聞き終えたクロノは頭を抱え込む。
ただでさえ不可解な事件が頻発しているうえに、つい先ほど起こった出来事の数々。
当事者では無いにしろ、報告を聞いているだけでも理解しがたい事ばかりだったのだ。

「それで、重要参考人の二人は？」

「今別室で休ませています。どうしますか？」

「勿論、あって実際に話を聞こう」
「じゃあ私たちも、これを返さなきゃいけないし」
こうして三人は、直接会って話を聞くため、艦長室を後にした。

そして三人は、二人がいる部屋の前に来ていた。
「二人とも、ちょっといいかな？　聞きたいことが……」
そこで、フェイトの言葉が止まる。
「フェイト？」
「どうしたんですか？」
途中で固まったフェイトに疑問を抱き、クロノとティアナも部屋をのぞいてみると。
「あはは！　ちょっと、やめてよ！」

「く、くすぐったいよ！」

そこには、小さい虎と龍とじゃれあう、二人の姿があった。

「ええっと、二人とも？」

「「あっ」」

ここでようやく再起動したフェイトの掛け声に、二人も気づいた。もっとも、二人はいまだに二匹とじゃれてる最中だが。

「その、聞きたいことがあるんだけど、まずその二匹は何時からここに？」

「えっとですね、お二人が出て行ったあと、僕たちの目の目に丸い光が下りてきて」

「それが収まったと思ったら、この二匹がいたってわけ」

二人は二匹が現れた経緯をかいつまんで話した。

「それに、触れてみて気づいたんですが、この二匹、あの青龍と白虎です」

「「えっ！」」

「そんなに驚かなくても……わっ！」

驚く二人にあきれていると、青龍が龍清の顔を再び舐めはじめる。

「ちょっと、くすぐったいってば。はは」

「んんっ！　……君たち、そろそろいいか？」

このままではいつまでたっても本題に入れないため、クロノが咳払いをしてその場を仕切りなおす。

ちなみに白虎は西麗に抱きかかえられ、青龍は龍清の頭に居座った。

「まずは自己紹介からだな。僕はクロノ・ハラオウン。このクラウディアの艦長をしている」

「つまり、この船で一番偉い人ってことですね」

「まあ、そうなるな」

次にフェイトが自己紹介を始めた。

「私はフェイト、フェイト・T・ハラオウンっていうの」

「ハラオウン？　ってことは」

「そ、クロノの妹だよ」

それを聞いて、西麗は驚きを隠せない。

「うっそー！　全然似てない！！」

「ちょ！　西麗！！」

正直に言う西麗に龍清は不味いと思い、注意する。

「ああ、気にしなくていい。似てないのは当然だからな」

「そうなんですか？」

「うん」

しかし、二人はさほど気にしていない様子だったので、ほっと胸をなでおろす。

「で、あたしはティアナ・ランスター。ティアナでいいわよ」

最後にティアナが自己紹介をして、次は二人の番になる。

「僕は、東郷龍清と言います。それで、こっちは」

「秋西麗（チョウ シーリー）よ、日本風に言えば、「しゅう　せいれい」ってなるけど」

二人も軽く自己紹介を終える。

「さて、それじゃあ、僕たちの質問に正直に答えてくれるか？」

「構いませんけど、その前にこちらも、いくつか聞きたいことがあるんですよ」

「取り敢えず、あんた達の事と目的を知りたいの」

「そうだな、僕たちは……」

二人はクロノからいろいろなことを聞いた。

魔法の事、時空管理局の事、ロストロギアの事、そして自分たちがここに来た理由である、消滅事件の事などを聞いた。

当然二人は驚きを隠せなかった。

「そうだったんですか。それにしても、魔法なんてものが存在するんですね」

「君の使ってたものも魔法じゃないの？　魔力を感じてたし」

龍清の言葉に、フェイトは疑問を呈する。

「違いますよ？　僕が使ってたのは陰陽術です」

「「「陰陽術？」」」

「えーっとですね、占いで天気や事象を当てたり、悪霊を成仏させたりする術です」

「でも、あんたの場合似たようなものだけどね」

西麗に言われると、龍清も押し黙ってしまう。

「まあ、僕のは先祖伝来の術で、明らかに普通の陰陽術とは違うってわかってるけど。その言い方はどうかと思うよ」

「事実なんだし、しょうがないでしょ」

「はぁ、君は本当に何でも直球で言うよね」
もはや反論する余地もない龍清は、呆れるように言った。
「あ、そうだ。はい、これ」
フェイトは西麗に宝珠を返した。
「あっ、どうも」
「ところでこれ、一体なんなの？」
「私もよくわかってないんですよ。私の一族があの遺跡と共に先祖代々守ってきた秘宝って事位しか」
「反応はロストロギアそのものだが、危険性は低いようだしな」
「あのお、それの事なんですけど」
するとここで、龍清が口をはさんだ。
「その宝珠、【五行霊（ごぎょうだま）】と言うもので、四神の魂を宿した珠みたいなんです」
「ちょ！？　なんであんたが知ってんの！」
「この子が教えてくれたんだ」
そう言って龍清は、上の青龍の頭を撫でる。

「って、君、その子と話せるの？」
「話せるというか、この子が僕に語りかけてるんですよ。こう、心に念じるだけで、気持ちを伝える術だそうで」
「念話みたいなものね」
龍清の問いに、ティアナが答える。
「念話？　それも魔法？」
「そうよ、念じるだけで相手に伝えるっていうものよ」
「ふーん……」
（こう？）
「えっ！」
突然聞こえてきた念話に、ティアナが驚く。
（あっ、こうなんだ。やっほー、龍清、聞こえてる？）
（えっ？　う、うん）
（そちらのお二人さんは？）
（き、聞こえるよ）

（問題ない）

二人は然程驚きもせず、二人も答える。

「まあ、念話ぐらいは誰でもできることだしな」

「そうだね」

「でもなんでいきなり」

「こいつが教えてくれた」

そう言って西麗も抱きかかえてる白虎の喉を撫でる。

「んんっ、大分脱線してしまったが、今度はこちらの質問に答えてもらうぞ」

「はい」

「オッケー」

「まず、二人はどうしてあそこにいたの？」

最初に質問したのはフェイトだった。

「あの男が、これをしつこく狙っててね、あたしはいったん日本まで逃げてきてたんだけど、私が持ってたこの珠の一つが、龍清に反応して光りだしたの」

「それで、西麗の言い伝えにならって、あの遺跡へ向かったんです」

「言い伝えって？」

「『世を覆う暗雲、目覚めるとき、青と白の御霊、赤と黒の御霊、輝きを灯しし者、御霊と共に、神の眠れる地へ誘われれん』っていうの」

「それで、僕たちはあそこに行ったというわけです」

「なるほどね。じゃあ、あの男は何なの？」

次の質問はティアナからだった。

「さあ？　あいつに関しては本当にわからないの。すごくしつこいって事位しか」

「まあ、明らかに五行霊を狙ってたみたいだけど」

「確かに、それ目当てだったみたいだし」

「それと、これ多分、貴方達が求めているものだと思いますけど」

龍清が手を上げながら言ってきた。

「あの男、人を消したんですよ」

「「「！！」」」

その言葉に、三人が驚愕の表情を見せる。

「あれは確か、僕と西麗が、チンピラに絡まれてる時でしたね。突然あいつが現れて、何か呪文を唱えたんです」

「そしたら、チンピラどもが服だけ残して消えちゃったの、何なのかわからなかったけど」

「でもこれって、貴方達の言う消滅事件と、あの男が関係してるってことですよね」

「関係してるどころか、現行犯だろうな」

クロノの言葉に、フェイトとティアナも首を振る。

「そうですか、お役にたててうれしいです」

「ところでさ、あたしたちってこのままどうなるの？　まさか、このままさようならってわけじゃないよね」

恐ろしく鋭いことを言ってくる西麗に、三人は顔を思わず背ける。

「……わっかりやすー」

その反応に呆れる西麗、龍清も苦笑いしかできない。

「すまない、本当なら僕たちだけで解決したいんだが、何分情報が少なくてね」

「素直に言ったらどう？　『どうか私たちに協力してください』ってね」

「でも……」

尚も渋るフェイトに、龍清が言ってきた。

「そんな話を聞いて、僕たちも知らんふりはできませんし、あの男が関わってるなら、放っておけません」

「あんた達と一緒にいれば、あいつもこの宝珠に手出ししにくくなると思うし」

「本当にいいの？」

「ええ。寧ろ、協力させてください」

その真剣なまなざしを見て、三人は押し黙る。

しばらくして、沈黙を破ったのはクロノだった。

「君たちが決めたのなら、何も言うことはない」

「本当ですか！」

「ああ」

こうして二人は協力することになったが、ここで西麗がとんでもないことを言い出した。

「ところでさ、魔導師に簡単になれる方法とかない？」

『えっ！？』

「し、西麗！　それ本気で言ってるの！！」

驚きのあまり、龍清が聞く。

「いや、だってさ、このまま民間協力者ってことだと、いろいろあれだと思うし。それに、この子たちの事も、いろいろ調べてもらったりする必要があるんじゃないかなあって思って」

あっさりと言っているが、言ってることにあながち間違いはない。

「まあ、無いことはないが」

「そうなんですか！」

「うん、嘱託魔導師っていうのになる試験があって、それに合格すれば、嘱託魔導師に認定されるんだよ。私もそうだったし」

「へー」

フェイトの説明に、西麗が感心したように呟く。

「ねえクロノ、確か嘱託試験がもうすぐだったよね」

「ああ、そうだが」

「じゃあこの二人を試験で合格できるようにするね」

「「へ？」」

「あ、ああ」

妙に引き攣った返事をするクロノに、龍清と西麗は何となく嫌な予感がした。

「あのお、一応聞きますけど、筆記試験とか」

「あるわよ」

西麗の質問に、ティアナが答える。

「あ、ごめん、やっぱり私、民間協力者ってことで……」

ガシッ！！

「逃がさないわよ」

「じゃあ、取り敢えず試験について説明するから、二人とも私の部屋に来てくれる？」

「解りました」

「ちょ、放して！」

「あんたが言い出したんでしょ？　大丈夫、しっかり教えてあげるから」

「放してぇぇぇぇ！！！！！」

こうして二人は部屋を後にした（一名連行）。

「やれやれ、まるで13年前の再来だな」

艦長室に戻った後、ふぅとため息をつきながら、クロノはそう呟いた。

暫くして、クロノはデスクのコンソールを叩き、ある人物に通信を繋いだ。

「あら、クロノ」

「母さん」

その相手とは、彼とフェイトの母、リンディ・ハラオウン統括官だった。

「例の件は？」

「ええ、順調よ。事態が事態だし、地上本部もあっさり了承してくれたわ」

「地上本部も！？　助かると言えばそうだが、一体どうして……」

「もし失敗すれば、責任を押し付ける。つまりそういうことよ」
その言葉に、クロノも嫌悪の混じった表情をする。
「でもまあ、あの子たちなら大丈夫でしょう。それより、そっちはどう？」
「ああ、現地で協力者を見つけてね、今嘱託試験に向けて、フェイトとティアナが勉強させているよ」
「あら、それじゃあ、その子達も入るのかしら？」
「かもな。二人は自分から協力させてくれって志願して来たんだ」
「そう」
「まるで、１３年前みたいだけどね」
呆れ気味に言っているが、その顔はどこか懐かしそうだった。
「何はともあれ、二人にこのことは？」
「勿論伝えたわ、二人にはついてから教えようかしら」
「そうだな」
その後、二人は他愛のない会話の後通信を切った。
そしてディスプレイには、二人の会話していた件についての言葉が浮かんでいた。

消滅事件担当特別部隊と言う言葉が。

第四話　自己紹介（後書き）

ちょっと伏線っぽく張ってみましたが、全然だめですね。
もうこの時点で何のことかわかってる人も多いかと思います。やっぱり精進が足りませんね。

ご意見、ご感想、ご指摘、お待ちしております。

キャラ紹介

東郷龍清　（とうごう　りゅうせい）

性別：男

年齢：１８歳

髪：茶髪の散切り頭

目：黒

好きなもの：和菓子、桜、晴れの日、読書

嫌いなもの：自分勝手な人、仲間や友達を傷つける人

特技：陰陽術及びそれを用いた占いや天気予報、和菓子作り

性格

礼儀正しく謙虚。
自己主張がなく引っ込み思案と思われがちだが、自分の意見はしっかり通す。
正義感も強く、曲がったことが大嫌い。

備考

日本の陰陽師の家系で、彼は歴代の中で強い力の持ち主。
戦闘では主に護符を用いた陰陽術を使用するが、剣道をやってた経

験もあり、近接戦闘もこなすオールラウンダー。

秋西麗　（チョウ　シーリー／しゅう　せいれい）

性別：女

年齢：１８歳

髪：黒髪の長髪、腰まで届く長さでポニーテールにしてる。

目：翡翠色

好きなもの：涼しい風、体を動かすこと

嫌いなもの：しつこい奴、はっきりしない事、根性が捻くれてる奴

特技：カンフー、太極拳、料理（中華限定）、説教（爺様直伝、最長１０時間）

性格

勝ち気で大雑把。

思ったことを口に出すが、裏表がなく、非常に親しみやすい。

一方で責任感が人一倍強く、時に抱え込むこともある。
スピードを生かした格闘戦が得意で、素手でも結構強い。

備考

山東省の遺跡を守る一族の末裔。
一族に伝わる言い伝え（伝承）を知っている。

四神

青龍

東方を守護する青い龍、主人は東郷龍清、通称「無敵青龍」
性格は大人しく慎重で物事を見極めてから動こうとする。
ただし、逆鱗に触れられると怒りだし、暫くの間暴れ回る。
結構人懐っこいが、人の心に敏感で、悪意や下心があると容赦なく
噛付いてくる。
主人である龍清の頭の上がお気に入りでそこに乗る。

白虎

西方を守護する白い虎、主人は秋西麗。通称「最強白虎」
猪突猛進な性格で後先考えず突っ込むせっかちな性分。
基本的に西麗以外に懐かない。
西麗に抱きかかえられることが多い（自身も気に入ってる）。

キャラ紹介（後書き）

まずこんなところでしょうか。
追加設定は話の区切り区切りで投稿させていただきます。

第五話　嘱託試験勉強風景

「あうぅぅぅぅぅ」

「ほら、呻いてる暇があったらさっさと解きなさい」

本局へ帰還中のクラウディア艦内のとある一室では、龍清と西麗が嘱託試験のための勉強を受けていた。

無論、先生はフェイトとティアナの執務官コンビである。

「そんなこと言ったって、あたし勉強苦手なんだもん。ましてこんな小難しいもんを解けって、鬼ですか？　あんたは鬼ですか？」

「鬼でもいいわよ。悪口いう訳じゃないけど、あたしの教官は魔王って呼ばれてたし……」

そう言った矢先、ティアナの顔が真っ青になっていった。

「どうしたの？」

「何でもないわ。うん、何でもない」

冷や汗を掻きながら顔を背ける。

何とも分かりやすい反応である。

「ってそんなことより、なんだかんだ言ってできてるじゃん。言い訳してる暇があったらさっさと続けなさい！」

「マジで鬼ーーーーーー！！」

ティアナの宣告に、西麗はマジ泣きしながら叫んだ。
ちなみにもう一方はどうかと言うと……
「解けました」
「どれどれ……全部あたってる。凄いね」
「それほどでもありませんよ。コツをつかめば簡単なものですよ」
「コツって……」
龍清の思わぬ学力にフェイトが驚かされていた。

「終わったーーーーー！」
「ふぅ」
「「お疲れ様」」
勉強開始から2時間、二人は過去問をすべて終え、一息ついてい

た。

「そう言えば、あの二匹はどうなるんでしょうか？」

ここで龍清はふと疑問を二人に投げかけた。

二匹とは無論、青龍と白虎の事である。

今二匹は、デバイスルームで調べられているのだ。

「大丈夫、調べるだけだから、悪いようにはしないよ。それに、私の補佐は頼りになるから」

心配ないとばかりにフェイトは龍清に言う。

「あの二匹、分類的にはユニゾンデバイスですかね？」

「多分ね」

「「ユニゾンデバイス？」」

龍清と西麗は同時にはもってくる。

「ユニゾンデバイスっていうのはね、所持者と融合（ユニゾン）することで、能力を向上させるデバイスの事だよ」

「確かデバイスって、貴方達が魔法を使うためのものなんですよね」

「そ、でも一口にデバイスって言ってもいろいろ種類があるのよ。ユニゾンデバイスはその一つ、いや、一人なの」

「私たちの知り合いにも、ユニゾンデバイスがいるの、二人も」

「「へー」」

フェイトとティアナの説明に、二人はただただ感心する。

「でもフェイトさん。動物型のユニゾンデバイスって聞いたことあります？」

「うーん……でも、現に私たちは見ちゃったわけだしね、聞いたことはないけど、今さら否定はできないよ」

「それはそうですけど……」

「フェイトさーーーーん！！」

突然、二人のいる部屋に通信が入った。

画面の先には、メガネをかけた女性が慌てた様子でフェイトを呼んでいた。

「シャーリー、どうしたの？」

「い、今すぐデバイスルームに来てください！　あの二匹が……」

そこで通信が途切れた。

「シャーリー！　シャーリー！！」

「フェイトさん。どうしたんですか？」

「解らないけど、デバイスルームで問題が起きたみたい。行ってみ

よう！」

「はい！」

「じゃあ、僕たちも」

「オッケー！」

こうして四人は部屋を駆け出し、デバイスルームへ向かった。

「シャーリー！」

「いったい何が……」

デバイスルームの扉が開き、四人が勢いよく入ってきた途端……

「キュー！！」

「ニャー！！」

「うわっ！？」

「おっと！」

突然、二匹が龍清と西麗の胸に収まった。

「どうしたの？」

「なんか嫌なことでもされた？」

「はぁ、はぁ……あっ、フェイトさん」

「えーっと、シャーリー、一体どうしたの？」

息切れしてる自分の副官に、フェイトは何があったのかを聞く。

「いやですね、二匹の解析を進めてたんですけど、突然龍の方が暴れだして、ほどなくして虎も台から脱走して、追いかけっこしてたんです」

「は、はぁ……」

まさか二匹が逃げ出したのか、或いはもっとやばい事態を想定していただけに、少し拍子抜けしてしまうフェイト。

「あの、フェイトさん。こちらは？」

そして龍清は目の前の女性の事を聞いてくる（青龍は、頭に乗っている）

「あっ、この子は私の補佐をしている」
「シャリオ・フィニーノです。シャーリーって呼んでね」
「あっ、どうも、東郷龍清と言います」
「あたしは秋西麗。よろしく！」
三人はお互いに自己紹介を終える。
「それで、どうして暴れだしたの？」
「うんうん……シャーリーさん、ちょっといいですか？」
「何？」
「あの、こういういい方失礼だと思いますけど、何かよからぬことを思ったりしませんでしたか？」
「どういう意味よ？」
龍清の質問に、ティアナが疑問に思いきいてみる。
「この子、人の心に敏感なんですよ。とくに下心とか悪意とか、そういうのに反応して警戒するんです」
「シャーリー、心当たりある」
「ええ、そんなわけ……あっ」

『あるの！？』

「えーっとですね。あまりにも既存のユニゾンデバイスと違うものですから、すごく興味がわいて、それで、もっと詳しく調べたいなあ、って思って……」

「もしかして、分解してみようとか、思っちゃった？」

「お恥ずかしながら……」

それを聞いて全員が納得した。

「なるほど、知的好奇心と言うわけですか。でもそんなこと考えてたらこの子もそりゃ暴れますよ」

「うぅ、ごめんなさい」

よほど反省しているのか、シャーリーはそのままうなだれてしまう。

すると、さっきまで頭の上にいた青龍がシャーリーのところに近づき、擦り寄ってきたのだ。

「えっ？」

「いったでしょ、この子は人の心に敏感だって。シャーリーさんが心から反省してるから、もう警戒する必要がないって解ったんですよ」

「クキュー」

龍清の言葉に呼応するように青龍も鳴声をあげて擦り寄る。

「あれ？　じゃあその子はどうして？」

そう言ってフェイトは、西麗が抱きかかえてる白虎に目をやる。

「ああ、この子ね、じっとしてるのが落ち着かなかったんだって」

「そ、そんな理由？」

「なんかせっかちみたいなんだよね、青龍が暴れるまで、「早く終われ、早く終われ」って思ってたんだって」

「なんか、西麗に似てるね。西麗も結構せっかちだし」

「む。龍清だって結構用心深いじゃん」

「そうかな？」

二人が他愛のない言い争いをしてる間に、フェイトとティアナはシャーリーから二匹のデータを見せてもらっていた。

「やっぱりあの二匹、構造はユニゾンデバイスみたいなんですけど、主人と使い魔の精神リンクのようなものもあるんですよ」

「それって、二匹はユニゾンデバイスであり、使い魔のようなものってこと？」

「はい、どれで、そのリンクを使って、二匹は二人から魔力を供給して、実体化してるんです」

「成程」

「でも、これ以上は本局のしかるべき部署と施設じゃないと無理ですね。次元航行艦の設備じゃ、とてもじゃないですが歯が立ちません」

「そっか、じゃあ後は向こうについてからってことで」

そう言って三人が振り向くころには、二人の言い争いも終わっていた。

「あ、もう終わりましたか？」

「うん。取り敢えず、二匹は本局に戻ったらまた調べるけど、今は一緒にいていいよ」

「あっ、フェイトさん。そろそろ」

「えっ？　あっ、そうだね」

すると二人は、龍清と西麗の腕をつかむ。

「さ、行こう」

「えっ？　行くってどこへ？」

「訓練場」

ティアナのその言葉を聞いた途端。二人の顔は青ざめていった。

「も、もう少し、もう少し待ってもらっていいですか？」

「駄目」

「即答！？」

「大丈夫よ、ちゃんと手加減してるし」

「いや、そういう問題じゃなくてですね！」

「ちょ、いやあああ！！」

努力むなしく、二人は訓練場へと連行されていった。

「大丈夫ですかあ？　お二人とも」

「「……」」

「キュ～～～～」

「ニャ～～～～」

ぐってりしてる二人と二匹、何があったのかは最早言わずもがなである。

「このくらいでへばってたら、合格できないわよ？」

「いや、お二人が強すぎるんですよ」

呆れた様にいうティアナに、龍清が率直な感想を言う。

「でも、初めのころに比べたら、大分様になってきたよね」

「そりゃあ、あれだけハードなことさせられてればね」

「それに僕ら、幾度もあの男と戦ってきましたからね。ある程度体が覚えてるんですよ」

取り敢えず上半身を起こすが、やはりその表情には疲労の色があった。

「さて、そろそろ本局に到着すると思いますよ」

「えっ？　もうそんな時間？」

「はい」

ここでシャーリーが、龍清と西麗に飲み物を渡しながら言ってきた。

「本局についたら、義母さんのところに連れて行くから、そこで起こったことをちゃんと話してね」

「あっ、はい」

「大丈夫。義母さんは話が分かる人だから、悪いようにはしないよ」

少し緊張気味の龍清に、フェイトは落ち着かせるように言う。

「じゃあ、そろそろ戻ってていいですかね」

「そうね、しっかり休んでおきなさいよ」

「「はーい」」

ティアナの言葉に対する返事をした後、二人は二匹を連れて部屋に戻っていった。

しばらくしてクラウディアは時空管理局本局に到着、龍清と西麗を送り届けたフェイトとティアナは廊下を歩いていた。

「そういえば、あの二人の相手はどうなるんでしょうか？」
「それはどうだろう？　でも、申請すればだれでもいいとは思うけど」
二人でそんな会話をしていると、突然、ティアナの携帯端末が鳴った。
「ん？　もしもし……ああ、あんたね」
電話の相手を確認するや、ティアナは少し苦笑交じりで、だが、どこか嬉しそうな顔をして話し始めた。
「うん、こっちは相変わらず。今帰ってきた所、そっちは？　へぇー……あっ！」
するとここで、何か思いついたようだ。
「ねえあんた、一週間後って空いてる？　……そう、じゃあ本局に足のばせる？　うんうん、オッケー。じゃ」
電話を切ると、ティアナは何かたくらむような顔をしていた（あくどいものではない）。
「フェイトさん。あの二人の対戦相手、ちょっとこれから試験担当のところに申請してきます」
「良いけど、誰なの？　って、聞くまでもないかな」
「はい。では、私はこれで」

そう言って一礼すると、ティアナは廊下を駆けだしていった。

「うーん、確かにあの二人なら適任だと思うけど……何とかなるよね、よし、もっと厳しくいこう」

そう言って少し困った表情をしながらも、試験に向けて二人を鍛え上げる算段を講じ始めるフェイトだった。

オマケ

「東郷龍清君と、秋西麗ちゃんね、私は時空管理局統括官、リンディ・ハラオウンです」

「「……」」

「？　どうしたの？」

「あっ！　いえ……」

「何でもありません！」

「そう？　じゃあ、私の質問に正直に答えてね」

「は、はい」

「解りました」

（（本当に二児のお母さん！！　若すぎるよ（でしょう）！！！！）
）

第五話　嘱託試験勉強風景（後書き）

やっぱり構成滅茶苦茶な気が。

一応構成は考えてるのに、勢いだけでこんなことになるんだ。

あと、この作品を読んでる皆様に、青龍と白虎の名前を募集したいと思います。

一応自分でも考えていますが、募集した中で気に入ったのがあったりすれば、採用しますので、遠慮したりせずどしどしご応募ください。

次はいよいよ嘱託試験です。はてさて、二人は無事合格できるのか？

そして対戦相手、もうわかりましたよね？

第六話　奮闘！　嘱託魔導師試験　（前編）

一週間後、ついに二人はこの時を迎えた。

「大丈夫……だよね」

「キュウー」

「うぅ……緊張する」

「ニャ～～～」

不安気味の龍清とカチカチの西麗、そしてそんな主人を心配する青龍とあくびをする白虎。

二人はこれから嘱託魔導師試験を受けるために、本局を訪れていたのだ。

しかし、やはり本番と言うだけあって、二人は不安と緊張に固くなっていた。

「二人とも、そんなに固くならないで」

「この一週間やってきたことをちゃんとやれば、全然平気よ」

そんな二人を、フェイトとティアナが落ち着かせる。

「そ、そうですね。取り敢えず、落ち着かないと……」

「えーっと、インド、インド、インド」

「いや！　そこは人でしょ！？」

二人とも相当気が動転しているらしく、西麗に至っては「人」と書くはずのところを「インド」と書いてしまい、ティアナに突っ込みを入れられる。

「取り敢えず二人とも、落ち着いて。ほら、深呼吸」

「すーーー」

「はーーー」

「すーーー」

「はーーー」

……

「落ち着いた？」

暫く深呼吸をした二人に、頃合を見計らってフェイトが聞いてくる。

「はい」

「何とか」

二人も相当落ち着いたのか、普通に返してきた。

その時……

≪東郷龍清様、秋西麗様、試験会場へお越しください≫

とアナウンスが鳴った。

「いいタイミングですね」

「だね」

「それじゃ、僕たち行ってきます」

「頑張ってね」

こうして、二人は試験会場へ向かっていった。

試験会場に入った二人は、指定された机に座って次の指示を待っていた。

青龍と白虎は近くの試験管に預けておいた。

ちゃんと大人しくしているように注意して。

「えー、東郷龍清さんと、秋西麗さんですね」

「「はい」」

突然二人の目の前にディスプレイが現れ、水色の髪をしたかわいらしい少女が確認を取ってきたので、二人もそれに答える。

「初めまして。本日お二人の試験管を務めます。リインフォース？です～！　リインと呼んでくださいね、よろしくです～！」

「「よろしくお願いします！！」」

「それでは、お二人にはまず、筆記試験を受けていただきます。準備はいいですか？」

「「はい」」

「では、スタートです～！」

リインの合図とともに、二人は筆記用具を手に取り、答案用紙に答えを書き始める。

（えーと、ここがこうなって、ここをこうするから……）

（あれ？　この問題やったことある。ラッキー♪）

（で、次がこうなるから、ここの答えは……）

（あれー、ここってどうやるんだっけ？）

まったく対照的な二人だったが、生まれ持っての才能か、はたまた執務官二人のスパルタの賜物か、一時間、二人は試験の答えを考え、書き続けた。

「はい、終了です～」

「ふぅ」

「終わった～～～！！」

「お疲れ様です～。それじゃあ、次の試験は別々になるので、係員

の誘導に従って移動してください」

「じゃあね、西麗」

「しくじるんじゃないわよ」

「解ってるよ、行くよ」

「キュ～」

「じゃ、行きますか」

「ニャ」

こうして二人はそれぞれの試験会場へ向かっていった。

龍清の場合

「ここかな？」

龍清がやってきたのは屋外だった。
龍清がしばらく周りを見渡していると、ディスプレイが目の前に現れる。

「龍清さーん。いますね？」

「あっ、はい」

ディスプレイに映ってたのはリインだった。

「それではこれより、儀式魔法の試験をしまーす」

「えっと、詠唱で発動する術ですよね？」

「そうです～」

（これだけ広いなら、あれでいこう）

何をするか決めた龍清は目を瞑り、一枚の札を出しながら、印を組み、術を唱え始める。

「神州霊山、移山召喚！！」

そう言って札を上空に投げると、上空に八卦陣が現れ、そこから轟音と共に巨大な岩山が現れ始めた。

ゆっくりと、確実に落ちてくるそれに、リインは驚きのあまり呆けた顔になっていた。

「急々如律令！！」

そして最後にそう言い放つと、山はすごい勢いで龍清の目の前に落ちてきた。

「ふぅ、これでいいですか？」

「……」

龍清が聞き返すが、当のリインはあいた口がふさがらない状態となっていた。

「あのぉ、リインさん？」

「はっ！？　あっ、はい、オッケーです～」

ようやく我に返ったリインは終了のサインを出す。

「最後の試験までは時間があるので、お昼ご飯を食べて待っていてください」

「あっ、はい」

そう受け答えすると、龍清はその場を後にした。

秋西麗の場合

「ここ？」

西麗がやってきたのは、トレーニングルームのような場所だった。
西麗もまた、辺りを見渡していると、ディスプレイが現れる。
だが、そこに映ってたのはリインではなかった。

「秋西麗ってのは、アンタで良いんだよな？」

「はい、っていうか、アンタは？」

目の前に映ってるのは、赤い髪をした、気の強そうな少女だった。

「アタシはアギト、お前の試験を担当することになった。よろしくな」

「あ、うん」

「んで、お前に受けてもらう試験は、これだ！」

そう言うと、西麗の目の前に十基のオートスフィアが現れる。

「今からお前には、このオートスフィアの攻撃を制限時間いっぱいまでかわすか防いでもらうぜ。一発でも直撃したらそこまでだ」

「成程」
「攻撃は徐々に早くなってくから、なめてっと痛い目みるぜ」
「ちなみに制限時間は？」
「一時間だ」
「オッケー、こっちは準備できてるよ」
「それじゃあ、スタート！」
アギトの合図とともに、オートスフィアが一斉に西麗に向かって攻撃を始める。
「おっと、よっと、あらよっと」
しかし、それを軽快な身のこなしで次々とかわしていく。
無論、これで終わるほどこの試験は甘くない。
十分間隔で攻撃は激しさを増していき、じょじょに回避が困難になる。
はずなのだが……
「おっと、今のは危なかった」
軽口を叩きながらも、かれこれ四十分近くこの調子で、西麗はオートスフィアの攻撃をかわし続けていた。
すでに攻撃の頻度はかなりのもので、並みの魔導師なら一発どころが四、五発当たっててもおかしくない頻度だった。

だが、それを西麗は、身のこなしだけで、防御も一切取らず、次々とかわしていたのだ。

「つまんない。これならティアナとの模擬戦の方がよっぽどましだよ」

避けながらついにはそんなことまで言い出し始めた。

「あと十分、これなら楽勝かな？」

「それはどうかな」

アギトがにやりと笑って言うと、オートスフィアの攻撃に変化が生じ始めた。

攻撃頻度がさらに上がっただけではないのだ。

突然、直線に飛んでくる弾の何発かが誘導して西麗を襲ってきたのだ。

「うわ！」

危うく当たりかけたが、器用な体の動きをしてかわす。

「言ったろ、舐めてると痛い目見るって」

「そう見たい、じゃあ、こっちも本気でいきますか！」

そう言うと、西麗は攻撃を避けるが、その中で変化はすぐに起きた。

一発の魔力弾が、西麗に命中し様とした時だった。

魔力弾が、西麗をすり抜けて行ったのだ。

「なっ！？」

これにアギトは驚く。

しかもよく見てみると、西麗は何人かに増えており、次々と攻撃をかわしていた。

やがて、試験終了のブザーが鳴る。

「よ、よし、これで試験終了だ」

「ふー、いい汗かいた」

まるで軽い運動をしていたかのような態度に、アギトは少しばかり驚きを隠せなかった。

「次の模擬戦まで時間があるからよ、食堂で飯食って来いよ」

「うん、ちょうどおなかすいたし」

そして西麗もまた、その場を後にするのだった。

「あっ、龍清」

「西麗、そっちはどうだった？」

「全然楽勝、そっちは？」

「うまくできたと思うけど、まだ解んないや」

合流した二人はお互いの試験結果を報告しあう。
そしてしばらく歩いていて、フェイトとシャーリーと合流し、二人に連れられて食堂に向かい、今は昼食をとっていた。

「それにしても、こっちにも蕎麦とかあったんですね」

「って言うか、なんでここに地球の食べ物がこんなにあるの？」

龍清は蕎麦を啜りながら、西麗は麻婆豆腐を口にしながら疑問を浮かべる。

「ああ、それはね、私の友達の影響なんだよ」

「フェイトさんの」

「うん、私の友達、地球出身の魔導師で、こっちで結構有名になったんだ」

「「ふむふむ」」

「その影響で、地球の文化もミッドに流れ込んできてね、今ではこんな感じ」

「へー、ま、知らない料理よりはいいけど」

「そうだね」

二人が会話をしながら料理を食べていると、青龍と白虎が乗っかってきた。

「何？」

「もしかしてほしいの？」

二匹の恨めしそうな顔をしてるのを見て、すぐに察した。

「はい」

「クキュ～」

すると龍清は蕎麦を露に入れ、それを青龍のもとに持っていく。

青龍はそれをおいしそうに啜り、歓喜の声を上げる。

「ニャーーー！！」

「あっ、御免」

一方、突然白虎の方が騒ぎ始めた。

「猫舌なんだ」

「ニャー……」

龍清の呟きに、白虎は辛さと熱さのダブルパンチで舌を出していた。

その後、シャーリーが水を持ってきて白虎はその水で舌を冷やすことに。

「そういえば、次は模擬戦ですけど、どんな相手なんですか？」

「いや、西麗、それ解ったら試験の意味がない気が」

「まあ、そうだけど、やっぱ気になるじゃん」

西麗の問いに、龍清はただ呆れた。

「ところで二人とも、そろそろ時間だよ」

「「あっ！！」」

フェイトに言われ、時計を見てみると、時計の針は１２時５０分をさしていた。

「やば、行くわよ！！」

「うん！　では行ってきます！！」

「「行ってらっしゃーい」」

二人は大慌てで食堂を出てその場を後にした。

そしてフェイトとシャーリーはそんな二人を見送っていった。

第六話　奮闘！　嘱託魔導師試験　（前編）（後書き）

少し西麗の描写を強くし過ぎた感がありますので、次は龍清の活躍を増やそうかと思います。

次は後編、模擬戦の相手はわかってると思いますが、あえて伏せておきます。

ご意見やご感想、ご指摘などを本当にください。

第七話　奮闘！　嘱託魔道師試験　（後編）（前書き）

あんまりネタが思い浮かばなかったし、この一週間はいろんないみでたいへんだった。

もうちょっと余裕をもって書いた方がよかったな。

と、愚痴はさておき、今回は予告してた通り模擬戦の話です。うまくかけてないと思いますが、楽しんでいってください。

第七話　奮闘！　嘱託魔道師試験　（後編）

昼食を終わらせた二人は、急いで試験会場に赴いた。

場所は訓練場ともいえる、遮蔽物も何もない、だだっ広い空間だった。

「来たですー」

「遅刻ギリギリだったな」

「すいませ……って、えーーーーーー！！」

「どうしたの？　龍せ……えーーーーーー！！」

突然大声を上げた龍清に、つられてその方向を見た西麗も大声を上げた。

「「ち、ちっちゃ……」」

二人が驚いた理由は、目の前にいたリインとアギトであった。

てっきり普通の人がやってると思ってただけに、まさか目の前にいる人物が、身長５ｃｍ位の小人だったなど、夢にも思わないだろう。

「えっと、リインさんとアギトさん、ですよね？」

「そうですー」

「うっそー！　妖精さんと小悪魔だったの！？」

「違いますー！」

「誰が小悪魔だ！」

二人から見れば完全に妖精と小悪魔（羽としっぽ的に）なのだが、二人はそれを即座に否定する。

「いや、でも、どう見ても妖精ですよね？」

「違いますー！」

こんな感じでしばらく言い争いが続いたが、程なくして二人の事を聞いて落ち着いた。

「すいませんでした」

「解ってくれたならもういいです。さて、お二人には最後に実技試験を受けてもらいますー」

「実技って、模擬戦ですよね？」

「そうですー、そして相手は……」

「こいつらだ！！」

リインのアイコンタクトに合わせてアギトが叫ぶと、突然魔法人が現れ、そこから対戦相手が現れる。

一人はツインテールにしたオレンジ色の髪の女性で、両手に銃を握っていた。
もう一人は、青いショートヘアーの髪をした、右腕に重厚な籠手、両脚にローラーブーツを履いた、元気そうな女性だ。
そして二人は、オレンジの髪の方を見て驚いた。

「二人とも、頑張ってるみたいね」

「「ティアナ（さん）！？！？」」

そう、その人物は、先日まで自分たちに勉強を教えていた、ティアナだったのだ。

「ど、どうしてティアナが！」

「まあ、実技試験は実力のある人なら誰でも良いみたいなんだけどね」

「じゃあ、そちらの方は？」

そう言って龍清はティアナの隣にいる女性の事を聞いてくる。

「私はスバル・ナカジマっていうの、よろしくね！」

「あっ……は、はい」

「よろしく～！」

ティアナが答えるより早く、元気よく自己紹介してきたスバルに、龍清は少し戸惑いながら、西麗は同じようなノリで返す。

「おっほん、お話はそこまでです～」
「そろそろ始めるからよ、二人もさっさと準備しろ」
「「あっ、はい」」
リインとアギトに催促され、龍清と西麗は準備を始める。
「いくよ」
「クキュー！」
「準備は良い」
「ニャー！」
二人の言葉に、二匹も元気よく答える。
「必神火帝！」
「天魔降伏！！」
掛け声とともに、二人と二匹は光に包まれる。
しばらくして光が晴れると、青い鎧に身を包んだ龍清と、白と黒の虎模様の鎧に身を包んだ西麗がそこに立っていた。
「準備良し！」
「何時でもいいですよ」

最後の試験と言うだけあって、二人はやる気満々だった。

「それでは、よーい……」

リインが合図をしようとすると、四人は一斉に戦闘態勢になる。

「はじめ！！」

そしてアギトの合図とともに、模擬戦が開始される。

「龍王炎符水！」

「虎王飛拳！」

合図とともに先に仕掛けたのは、龍清と西麗だった。

龍清は符を前面に出すと八卦陣が現れ、そこから火炎が現れ、ティアナに襲い掛かり、西麗は拳を前に突き出すとともに、虎の形をした衝撃波がスバルに向かって飛んでいく。

無論、そんな攻撃にあたる二人ではなく、攻撃が直線的だったこ

ともあり、あっさりかわす。

（スバル！　そっちの相手は任せたわよ！）

（オッケー！）

そして念話で確認を取ると、二人はそれぞれ分散し、龍清と西麗に向かっていく。

「さっきのお返しよ！　クロスファイア！」

「リボルバー……」

一気に二人は得意の距離に持ち込み、ティアナは周囲にオレンジ色の魔力弾を精製し、スバルは右手を一気に腕を振りかぶる。

「「シュート！！」」

そして掛け声とともに、魔力弾は龍清に襲い掛かり、スバルの拳は西麗に迫る。

「金固符！」

「よっと」

これに対し、龍清が符を地面に投げると、そこから壁が現れ、ティアナの攻撃を防ぐ。

そして西麗は迫るスバルの拳をひらりとかわす。

（これは……まさか！）

しかし、ここにきて龍清は、彼女たちの本当の目的に気付いた。
「これが、目的だったんですね」
「そういう事！」
龍清の呟きに答えるように、ティアナの魔力弾が襲い掛かる。
「水流符！」
すると今度は、符を三枚取出し、三方に投げる。
すると、符は水となって龍清を包み、攻撃を防ぐ。
「龍王炎符水！」
そして再び反撃に転ずる龍清。
今度は直線的ではなく、まるで生きてるかのように動き、やがてティアナを包み込んだ。
「やった！」
「甘い！」
「へっ？　うわ！」
当たったと思った瞬間、別方向から魔力弾が飛んでくる。
「さすがにやるわね」

「そちらこそ」

お互いを称えあうとともに、二人はこの後の手を考えながら、以降、攻撃の応酬を続けるのだった。

「はあああぁぁぁぁ！！」

「とおりゃあああぁぁぁぁ！！」

一方、スバルと西麗もまた、互いの拳をぶつけあい、しばらくして再び距離を置く。

「虎王連挺！」

そう叫ぶと、西麗の手元にヌンチャクが現れる。

そして一気に近づき、ヌンチャクを振り回す。

「わっ！」

≪Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ≫

かなりのスピードで近づいて来たため、スバルは対応が遅れたが、彼女のデバイス、マッハキャリバーがオートで防御を展開する。
その為、当然攻撃は防がれるが、西麗の攻撃は一撃では終わらない。

「まだまだいくよ！」

すると、連続でヌンチャクを振り回し、プロテクションに叩き付ける。

この二人、同じ戦い方をするが、その性質は全く正反対だった。
スバルは一撃一撃の攻撃力が高いパワータイプ。
対し西麗は、一撃の攻撃力より手数の多さで圧倒するスピードタイプ。

「そりゃそりゃそりゃそりゃ！！」

連続でヌンチャクを叩きつけていると、プロテクションのその個所に罅が始める。

「やばっ！」

「まだまだ！　虎王神速槍！！」

そういうと、ヌンチャクは姿を変え、薙刀に似た神速槍になる。
どれを持ち直すと、ひびの入った個所に連続で突きを繰り出す。

そしてついに、プロテクションが音を立ててガラスのように砕けた。

「このまま一気にもらうよ！」

そう言って、西麗は再び、神速槍を構えなおし、再び突きを繰り出す。

「まだまだ！」

しかし、今度はスバルも対応でき、攻撃を円形のシールドで防ぐ。

「何の！　いくら防御を張っても同じことだよ！」

そう言って、再び突きを連続で繰り出す。

「強いね」

ここで防御しながら、スバルは西麗にそう言ってきた。

「勿論、この日のためにどれだけ扱かれていたことか」

「でも、私も負けられないからね！」

そして防御しながら、西麗の攻撃を押し返す。

「おっと！」

弾き飛ばされつつ、空中でくるりとまわって着地する。

「流石に一筋縄ではいかないかな？」

（ねえ）

（何？）

突然、スバルからの念話が西麗に届く。

（このままだとさ、多分決着つかないと思うんだよ）

（奇遇ね、アタシも同じこと考えてた）

幾度となく拳を交えてきて、西麗はすでにそんな気がしていたのだ。

手数で押せば西麗が有利だが、それを破るだけのパワーがスバルにはあり、まさにお互いの長所がお互いの攻撃を打ち消しあっているのだ。

（それでさ、一つ提案があるんだけど）

（何？）

スバルから言い出された条件は、非常に単純で明快なものだった。

（次の一撃で決着をつけない？　お互い、全力全開で！）

（……スバル、だっけ）

（うん）

（アンタとはうまくやってけそう。ここまで考えが合うなんて滅多にないよ）

西麗も、同じことを考えてたりしてた。
無論、全力で行けばスバルに軍配が上がるのは百も承知だが、西麗にも奥の手がないこともなかった。

「一撃必倒……」

「旋風裂穿……」

お互い攻撃の構えに入ると、スバルの右手には水色の魔力が、西麗の右手には、風のようなものが集まり始める。

「ディバイーーーン！」

「虎王……」

「バスターーーー！！！！！」

「裂空けーーーーん！！」

そして叫びと共に、水色の魔力の奔流が放たれ、ドリルのように渦巻く風を纏った拳が、それを穿っていく。

「「はあああああ！！！！！」」

二人の戦いはしばらくは拮抗していたが、終わりはふいに訪れた。

突然、西麗の右手に纏っていた風が、霧散してしまったのだ。

「えっ？」

そんな間抜けな声と共に、西麗は水色の奔流に飲まれ、そこで意識が途切れた。

「はぁ、はぁ……」

一方、ティアナと対峙していた龍清は押されていた。

お互いに決定打を与えることができず、しばらく術の打ち合いが行われていたが、龍清の体力がここに来て限界に達し始めていた。

（まずい、このままじゃジリ貧だ。こうなったら……）

ここで龍清は意を決し、懐から五枚ぐらいの符を取り出し、それを上空に投げる。

「雷神よ、来たりて我の敵を討て！！」

そうと唱えると、五枚の符から一斉に青い雷が周囲に降り注いだ。
そしてそれを回避するため、ティアナの攻撃が鈍った。

「今だ！　破山剣召喚！！　活木符！！」

その隙に、破山剣を召喚し、四枚の符を自分の足と手に貼った。

「これで、決めます！！」

そういうと、地面を蹴り、一気にティアナに近づく。

「なっ、早！」

先ほどとは全く違うスピードにティアナは驚くが、その間に龍清は彼女の懐に入り込む。

「これで、終わりだあああ！！！！」

そして、一気に破山剣を振り下ろす。

だが……

「えっ！？」

何と、斬った目の前のティアナは、揺らめきながら消えてしまった。

「これは、一体……がっ！？」

突然の事に固まったその瞬間、背中に衝撃が走り、彼もまた、そ

のまま意識を手放した。

「う、うーん……」

しばらくして龍清が目を覚ますと、視界に入ってきたのは白い天井だった。

「あれ、ここは……」

上半身を起こし、あたりをきょろきょろ見渡してると……

「ウニャ～～～」

隣から妙な声が聞こえてきたため視線を向けると、西麗が眠っていた。

そしてここにきて、ようやく思考がまとまってきた。

「ああ、そうか。僕、突然後ろから攻撃されて……」

そして、試験の結果を予想し、深いため息をする。

「うーん……かまぼこ！！」

と、ここで西麗が意味不明の寝言を吐いて復活。

「あっ、起きた」

「うにゃ？　かまぼこは？」

「駄目だ、まだ寝ぼけてる」

寝ぼけ眼できょろきょろしてる西麗を見て、呆れた顔をする龍清。

「クキュー」

「ニャー」

するとここで、青龍と白虎が二人の頭に乗っかってくる。

「ああ、君たちも起きたんだ」

「クキュー」

鳴き声を上げる青龍だが、どこかさみしげに聞こえた。

「あっ、起きたんだ」

ここで、部屋に入ってきたのはフェイトだった。

「気分はどう？」

「何とか大丈夫です。一人寝ぼけてますけど」
「かまぼこ～……あれ？」
寝ぼけてた西麗もようやく目を覚ました。
「ここどこ？」
「ここは医務室だよ、模擬戦が終わった後、ティアナとスバルが二人をここまで運んでくれたの」
「そうだったんですか……すいません」
事情を確認した後、龍清はフェイトに謝罪した。
「どうして謝るの？」
「だって、僕たちあの二人に負けったんですから、不合格ですよね、折角いろいろ手伝ってもらったのに……」
申し訳なさそうに言ってると、フェイトはくすくす笑い始めた。
「ふふ、大丈夫だよ」
「えっ？　でも……」
「リイン、アギト」
フェイトが呼ぶと、リインとアギトが入ってきた。

「こほん、東郷龍清さん、秋西麗さん、お二人の結果は……」

ここまで来て、すでに結果など目に見えていると思っていた龍清は、目をつぶって静かに聞く。

西麗はまだ状況が呑み込めてないのか、少しきょろきょろしていたが、龍清から合格発表だと聞き、龍清と同じく顔を暗くする。

そして、言い渡された結果は……。

「お二人とも、合格ですー！！」

「「……へっ？」」

まさかの結果に二人は間の抜けた声を上げる。

「合格って、だって僕たち、負けたんじゃ？」

「実技試験はな、試験者の技量を図るのが目的なんだ。だから勝敗

はあんまり関係ねえんだよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん、初めて受ける人は、大体そんな風に勘違いするんだよね」

フェイトの言葉を聞いて、龍清と西麗は一気に脱力した。

「ま、まあ、なんにせよ、あたしたちは受かったんだよね」

「ははは、そうだね」

こうして、二人は見事に試験を合格したのだった。

第七話　奮闘！　嘱託魔道師試験　（後編）（後書き）

今回は完全な駄文だと思います。

ネタはほぼ思いつきに近いし、描写もうまくかけてないだろうし。

それでも楽しんでいただけたなら幸いです。

さて、次回も楽しみにしててください。

第八話　勧誘、蠢く影（前書き）

今回は試験合格後の話、そして龍清の陰陽術についての説明です。

そして、今回はあの人の登場です。

では、お楽しみください。

第八話　勧誘、蠢く影

「二人とも、試験合格、おめでとう」

「おめでとうです～！」

「「はい！！」」

フェイトとリインからのねぎらいの言葉に、ほっとした安心感と嬉しさを混じらせながら、二人は返事をした。

その時……

グゥ～～～～～

「あっ……／／／」

盛大な腹の虫が龍清のお腹から鳴り響いた。

「お腹すいた～」

そして、西麗も既に空腹全開と言わんばかりの顔でベッドに倒れ

伏した。
尤も、実技試験であれだけの大立ち回りを演じたわけなので、お腹が空くのは無理からぬことであろう。
「ふふ、じゃあ食堂に行って何か食べようか」
「そ、そうですね／／／」
「賛成ー！！」
フェイトの言葉に二人も賛成し、一緒に食堂に行くこととなった。

しばらくして、龍清、西麗、フェイトの三人は食堂に向かった。
リインとアギトは途中で用事があると言って別れたのだ。
「あっ、来たわね」
「おーい、こっちこっち！」
食堂につくと、三人を呼ぶ声がした。
顔を向けてみると、そこにいたのは二人の模擬戦の相手、スバルとティアナだった。
「二人とも、待っててくれたの？」
「はい、いろいろ話したいこともありましたし」

フェイトの問いかけに、敬語ながらもどこか親しみのある感じで話すスバル。
これを見て、ふと龍清は聞いてみた。
「あの、スバルさんとフェイトさんって、お知り合いですか？」
「そういえば、ティアナともなんか仲良さそうだったよね？」
気になったのか西麗も聞いてくる。
「えーっとね、スバルとティアナは昔いた部隊で、私の親友の部下でその教え子なの」
「で、あたしとスバルは訓練校からの付き合いなの、いろいろ苦労させられたけど」
「ティア酷ーい！」
ティア何の説明に抗議の声を上げるスバル。そんな二人をほほえましく見つめるフェイト。
これだけで、三人の仲の良さを感じる龍清と西麗だった。

そして、カウンターで食事を受け取り、席について五人は食事をとっていたわけだが……

「「……」」

龍清と西麗の手の動きは止まっており、二人は唖然としていた。
そして二人の視線の先には……

「ん？　どうしたの？」

「い、いや、その……」

「よくそんなに食べるわねえ、太るわよ？」

二人が驚いていたのは、スバルの食べっぷりにだった。
最初、大きな皿に、天まで届くほどのパスタがあったが、それがスバルたった一人によってほとんど平らげられたのだ。

「って言うか、どこにそれだけ入るんですか？」

（あれは気にしたら負けよ）

龍清が西麗に追随する形で聞いた途端、アイコンタクトまじりでティアナが念話で答えてくる。

（い、良いんですか？）

（いいのよ、こっちはもう慣れたし）

訓練校からの付き合いという事もあり、事もないように話すティアナに、龍清はただ「はぁ」と答えまがら蕎麦を啜る。

「そう言えば龍清、聞きたいことがあるんだけど」

「何ですか？」

とここで、フェイトが質問して来たので聞いてみる。

「実技試験の時、私も見てたんだけど、最後にティアナのフェイクに斬りかかるとき、身体能力が上がってたみたいだけど、何をやったの？」

フェイトが聞いてきたのは、破山剣で斬りかかるとき、四枚の札を自分の手足に貼ったことで上がった身体能力の事だった。

「ああ、木式の事ですね」

「木式？」

すると、龍清は懐から五枚の符を取り出してテーブルに並べた。その札は、緑、赤、黄、白、黒と色とりどりで、それぞれ黒い文字（黒い符だけ白い文字）が書かれていた。

「僕の陰陽術は、用途に合わせた五つの術式があって、緑の符が「木式」、赤い符が「火式」、黄色い符が「土式」、白い符が「金式」、黒い符が「水式」と呼ばれてるんです」

「それで？」

「木式は術者の身体能力強化、火式は火を用いての攻撃、土式は仲間の補助や保護、金式は防御と拘束、水式は簡単な防御と回復と言う風に使い分けるんです」

「そうなんだ」

「でも、その金式と水式の防御ってどう違うの？」

ここで少し疑問に思ったティアナが聞いてくる。

ちなみに隣のスバルはもはやちんぷんかんぷんだった。

「金式の防御は強いですが、発動に少し時間がかかるんです。水式は防御自体は金式より脆く、術者しか守れませんが、発動が早いんです」

「でも、その符はどうするの？　見たところ使い捨てみたいだけど」

そう、龍清は陰陽術を使うたびに符を使用していた。

しかし、符は普通に紙なので、術を使うたびに符は減っていく。

となれば。当然補充をしないといけないわけなのだ。

「それはですね、一枚の紙をこうして……」

そう言うと龍清は、どこからか紙と筆を取り出し、すらすらと書き始めた。

「それで、後はこの紙に念を込めれば……」

そう言って念を込めはじめると、紙に光が渡っていき、次第に紙

の色が白から黄色に変色し始めた。

「っと、これで完成です。これは黄色ですから、土式ですね」

そう言ってさっき完成した符を懐にしまう。

「ねえ、今のって」

「はい、魔力光でしたね」

そして、その様子を見ていたフェイトとティアナはそう確認しあう。

「ちなみに金式は元々白いですけど、出来ると発光するんですよ。だからできたかどうか判別できるんです」

「へー、不思議だねえ」

一方で、ティアナの隣で見ていたスバルは手品を見せられた観客のように不思議がっていた。

「でも、僕自身もよくわかってないんです。僕の家相伝の陰陽術なんですけど、詳しいことが一切書かれていなくて」

「まあ、おかげであいつと戦ってる時はいろいろ助かったんだけどね」

あいつとは勿論、あの黒ずくめの男だ、フェイトとティアナはすぐに察しがついたが、事の次第を知らないスバルは首を傾げるしかなかった。

とまあ、龍清の陰陽術講座を終え、五人は普通に食事を続けていた。
スバルがおかわりを注文したので、また二人が驚いたのは、言うまでもないだろう。

「クキュー」

「はいはい、ほら」

「クキュキュー！」

「はい、今度は覚ましてあるから」

「ニャ」

とまあ、二匹がまた料理を要求して来たので、二人はそれぞれを食べさせるという事もあった。

「そう言えば、あの話、聞いてる？」

「はい、二人が試験を受けてる時に」
「私はティアから聞きましたけど、また一緒になれるんですね！」
「ふふ、そうだね」
「あの、何の話をしてるんですか？」
「何？　この疎外感」
楽しそうに話す三人に、置いてけぼりをくらった龍清と西麗が聞いてくる。
「あっ、そっか、二人にはまだいってなかったね」
「ま、どの道耳に入ると思ってたけど、いい機会かもね」
「「？？？」」
「実はね……」
と、フェイトが話し出そうとしたその時……

「そこから先は、私が話すわ」

突然、この場にいるメンバーとは違う声がしたので、声の下方向を振り向く。
するとそこには、茶髪にセミロングの女性が立っていた。
その顔を見た途端、フェイト、ティアナ、スバルは同時にその人物の名前を叫んだ。

「「「はやて（さん）！！」」」

「やっほー、久しぶりやな、フェイトちゃん、ティアナ、スバル」

その女性、はやては手を振りながら三人にあいさつを交わす。

「どうしてここにいるの？　もしかして、あの件？」

「せや。後スカウトやな」

「スカウトです～」

すると後ろからリインが現れる。

「んで、東郷龍清君と、秋西麗ちゃんやね」

「どうして、僕たちの名前を？」

突然名前を呼ばれ、龍清は少し困惑する。

「リインから聞いたんよ、後フェイトちゃんからちょこっとな」

ウインクしながらそう言うと、あいてる席に座る。

「私は八神はやて、フェイトちゃんの友達や」

「フェイトさんの？」

「せや、んで、ここに来たのはさっきも言った通りスカウトや」

「スカウトって？」

西麗が聞くと、はやては意を決して話し始める。

「最近、管理局が人が衣服だけ残して消える事件を捜査しとることは知っとるな？」

「はい、確か、フェイトさんとティアナさんは、その件で地球にいらしたんですよね？」

「そうだよ」

「それでな、近々管理局は、この案件に対する特別捜査部隊を編成することになったんや。ちなみに、部隊長は私や」

ここまで話して、すでに龍清と西麗は察しがついたが、知ってか知らずか、はやては話をつづけた。

「既に人選はほとんど終えとるし、フェイトちゃんたちも二つ返事で了承してくれた。そしてな……」

少し言いよどみながらも、再び意を決して話をつづけた。

「その部隊に、君たちも参加してほしいんよ」

「やっぱり」

「まあ、当然っちゃあ、当然？」

二人は黒ずくめの男が人を消す瞬間を見た目撃者、いわば事件解決の重要参考人なのだ。

事件解決を望む管理局が、この二人を黙って見過ごすわけがなかった。

「まあ、嘱託魔導師になったばっかりで申し訳ないんやけどな、曲もこれ以上犠牲者を増やすわけにもいかへんし、私個人としても、指を銜えて見てるのは嫌なんや」

初顔時の親しみやすさが嘘のように、真剣なまなざしではやては自分の胸中を話す。

その真剣さに、二人は一瞬たじろぎかけたが、真剣に話を聞く。

「この事件、二人にも協力してくれへんか？」

その問いかけに、二人の答えは当に決まっていた。

「勿論です。そんなことを聞いて、今さら知らんぷりはできません！」

「それに、あいつが絡んでるなら、どの道アタシたちも無関係ってわけにはいかないからね」

二人もまた、二つ返事で承諾した。

「ありがとうな、ほなら一週間後、部隊の結成式を行うから、ここに来てや」

そう言ってはやては情報端末を二人に渡す。

「ほんまにありがとうな、ちょっと気が早いけど、こっれからよろしくな」

「はい」

「よろしくお願いします」

こうして、二人はこの事件に本格的に参入することになるのだっ

た。

「あっ、一つ言い忘れとった。龍清君」

「はい、何ですか？　八神さん」

するとここで、何か思い出したように、はやては龍清を呼ぶ。

「はやてでええよ。そのな、これもちょっと言いにくいんやけど」

また言いよどみながら、はやては龍清の肩に手を置いて言った。

「初日は大変やと思うけど、頑張ってや」

「はい？」

「ほなリイン、家に帰るで」

「ハイです～」

「それじゃ、皆、また一週間後にな～」

そう言って手を振りながら、はやてはその場を後にしたのだった。

「ねえ。今の、どういう意味？」

「さあ？」

まったく解せない二人は三人の方を見るが。

「まあ、ご愁傷様？」

「大丈夫よ、あんたならできるから……多分」

何故かスバルとティアナからはそんな言葉をもらった。

「あ、あはは……」

そしてなぜかフェイトは、額に冷や汗を浮かべながら乾いた笑をする。

「何だろう、ものすごく嫌な予感がするんだけど」

後にこの予感が的中することになるとは、この時点での龍清は知る由もなかった。

所変わって、どことも知れぬ暗闇の世界。

巨大などす黒い瘴気の塊ともいえる珠の前に、その男は立っていた。

「まだか……」

男はしきりにそう呟いていた。

「まだ足りぬか。まあ、この程度で復活なさるとは思えないがな」

「うううううううううう」

まるで男の言葉に呼応するかのように、謎の呻き声が聞こえる。

「それに、やはりあ奴らをこのまま野放しにしておけば、間違いなく復活の障害になる」

そう言うと男の下に陣が現れ、再び男を黒い奔流が包み込む。

「龍と虎の力を継ぐ者よ、必ず私がこの手で葬る！」

そう言って奔流に飲まれた男はその場から消え失せた。

「うううううううううう」

そしてその世界に響いたのは、地を這うようなおぞましいうめき声だけだったという。

第八話　勧誘、蠢く影（後書き）

次回から特別捜査部隊、名称は最早言わずもがな、ここから原作キャラたちが大集合します。

そして二次小説お約束の、アレです。龍清哀れ……

青龍と白虎の名前、次の話までで締切りですので、思いついたらどんどんご応募ください。

次回もお楽しみ！

第九話　特務六課編成　龍清の受難。（前書き）

今回の話で、青龍と白虎の名前が登場します。
そして原作キャラたちも次々登場。

そして二次創作恒例の、あれです。

第九話　特務六課編成　龍清の受難。

「ん～」

嘱託魔導師試験から一週間後のこの日、朝早く起きたのは龍清だった。

試験の後、二人は転送ポートで地球の龍清の家に戻っていた。
主な理由として、着替えなどの必要なものを揃えることだが、二人はこれに加えて、ユニゾン状態での練習なども行ったりしていた。
ちなみにミッドへの行き方も聞いており、指定の時間に迎えが来るので、その指示に従えば良いというのだ。

「西麗は……まだ寝てるよね」

隣の部屋で寝ているであろう西麗の様子を確認すると、案の定、西麗はまだ寝ていた。
布団を蹴っ飛ばして寝ており、かなり寝相が悪いことが窺える。
ちなみに寝間着姿は、西麗が普通に淡い黄色のパジャマで、龍清は白い無地の浴衣のような姿だった。

西麗の様子を確認すると、龍清は部屋の押入れから、式盤と筮竹を取り出し、日課である朝の占いを始める。
今日一日がどんなふうになるかの目安として占うのだが、一週間前の去り際のはやての言葉がどうしても頭から離れないので、今日どんなことになるのか気になっていたのだ。

そしてその結果は……

「……」

結果を見た龍清はそのまま押し黙ってしまい、顔の様子からして、悪い結果のようだ。

「……大丈夫だよね。大丈夫……だよね」

一抹の不安を胸に秘めつつ、龍清は朝食の支度を始めるのだった。

「ここって言ってたわよね？」

「うん、確かにそう言ってた」

朝食と支度を済ませ、二人は龍虎を連れて海鳴公園にやってきた。

「でも、公園からどうやって行くのよ？

「さあ、それよりも僕は今朝の占いの結果が不安でならないんだけど」

繋がりがわからない西麗の疑問に対し、朝の占いの結果が気にな

り少し元気のない龍清。
二人がそんな会話をしていると……
「「おーい！」」
突然二人を呼ぶ声がしたので振り向くと、そこにはフェイトとティアナがいた。
「すいません。待ちました？」
「ううん、私たちも今来たところだし」
時間通りとはいえ、待たせてしまったことに龍清が謝るが、フェイトは気にしていないという風に返す。
「ところでさ、このままどうやっていくの？」
次に西麗がずっと疑問に思ってたことを聞く。
「大丈夫よ。準備はできてるから、このまま隊舎に転移するわよ」
「「へー」」
「じゃ、行くよ」
「「はい！」」
「クキュー！」
「ニャー！」

二人と二匹が元気よく返事すると、四人はそのまま転移された。

そして所変わり、ここはミッドチルダの首都クラナガンの一角にある、旧機動六課隊舎。

かつて、この地で起きた大事件を解決した伝説の部隊の拠点だったここに、そのかつての隊員たちが集結していた。

管理局が捜査している、消滅事件担当の特別部隊の結成式がここで行われるのだ。

そして部隊を率いるのが……

「この部隊に入る皆、よろしくな！」

ご存知、八神はやてだった。

「知っての通り、今起きてる消滅事件を解決するために、当部隊は編成されました。かつての皆も、新しくここに来た皆も、事件解決のために共に手を携え、頑張っていきましょう。っと、機動六課の時と同様、長いと嫌われるので、以上、特務六課部隊長　八神はやての挨拶でした！」

「それにしてもすごいね、ミッドチルダって」

「本当。ＳＦだよね、ここまで来ると」

結成式の終了後、龍清と西麗は結成式が行われたロビーを見渡していた。

西麗は見学と称して施設内をうろつこうとしたが、龍清が知り合いもいないのに勝手に動いたら迷子になると尤もな意見をしたため、ロビーでうろつくに留まっていた。

「だけど、浮いてたよね僕たち。みんな制服なのに、僕たち思いっきり私服だったし」

「うん、さすがにちょっと気まずい気がした」

そう、当然管理局の制服など持っていない二人は、思いっきり私服だったのだ。

一週間の間にもらわなかったのか？　と言う疑問が飛んできそうだが、嘱託とはいえ、一応二人は民間協力者という事で話が通っていたため、特にその辺りは言及されず、制服も渡されなかった。

最も、組織の部隊にいる以上それは不味いんじゃないか？　と言

うことで、後日制服が渡されることになっているそうだが。

「あっ、いたいた」

「二人とも！　こっちこっち！！」

すると、二人を呼ぶ声がした。

声の主はティアナとスバルで、その近くには、スバルと頭一つ違う位の赤髪の少年と、少年と同じくらいか少し低いぐらいのピンクの髪の少女が一緒にいた。

「スバルさん！　ティアナさん！」

「やっほー！」

二人に気付いた龍清と西麗も集まる。

「ちゃんとここにいたのね、西麗辺りが、探索に行こうとか言うと思ったんだけど」

「言いましたよ、でも見事に阻止しました」

「それはそうと、やっぱり乗ってるのね」

「えっ？　ああ、春青のことですか？」

そう言って龍清は頭に乗ってる青龍の春青を撫でる。

「それに西麗も、ちゃんと白秋を抱きかかえてますし」

「なんか好きみたいなのよね。あたしも好きだけど」
「いいなあ、後でアタシも抱いて良い？」
いつものように白虎の白秋をだいてる西麗を見て、スバルが自分も抱いていいか聞く。
「んー、オッケーだって」
「本当！　じゃあ、お言葉に甘えて」
西麗が念話で確認すると、そのまま白秋はスバルに抱かれる。
「うわー、凄いもこもこで気持ちいい。それにそんなに重くもないし、これ癖になるかもー」
相当お気に召したらしく、スバルはそんな言葉を口にするのだった。
「まったく、あんたは……」
「まあ、当人たちが喜んでるんですし、良いでしょう。ところでティアナさん」
「何？」
「こちらのお二人は？」
相方の締まりのない様子にあきれるティアナに、龍清は視線を一緒にいた少年と少女に向けて聞いてくる。

「ああ、まだ紹介してなかったわね。この二人はエリオとキャロ、前いた部隊の仲間よ」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです。この子はフリードっていいます」

「クキュ～」

ティアナの紹介に、赤髪の少年エリオと、ピンクの髪の少女キャロと白い飛竜のフリードリヒが挨拶を交わす。

「僕は東郷龍清」

「秋西麗よ、よろしくね」

「はい！」

「よろしくお願いします！　って、フリード？」

「ん？　春青？」

挨拶を交わしていると、フリードと春青の様子がおかしいことに、キャロと龍清が気付く。

よく見ると、二匹はお互いを見つめあっていた。

やがて……

「「クキュ」」

フリード、右の翼を上げる。

春青、左の翼を上げる。

「「クキュ」」

今度はフリード、左の翼を上げる。

春青、右の翼を上げる。

「「クキュ」」

最後に二匹、大きく翼を上げる。

そんな動作を一しきり終えると……

「「クキュー」」

お互いの顔を摺り寄せあっていた。

「なんか、仲良くなったみたい」

「ですね。良かったねフリード、お友達ができて」

「クキュー」

キャロの言葉に、嬉しく鳴声を上げるフリードだった。

「あっ、皆ここにいたんだ」

六人が知り合い、他愛のないことで談笑していると、栗色の髪をしたサイドポニーの女性が語りかけてきた。

「なのはさん！」

「お久しぶりです」

「うん、スバル、ティアナ、久しぶり」

二人の言葉に、なのはと呼ばれた女性も嬉しそうにその挨拶を返す。

「エリオとキャロも久しぶり、元気にしてた？」

「あっ、はい」

「元気にしてました」

そして、エリオとキャロも少し緊張気味ながらも、嬉しそうに返す。

そして四人にあいさつを終えたなのはは、龍清と西麗に視線を向

ける。

「二人が、龍清君と西麗ちゃんだね」

「あの、貴方は？」

「私は高町なのは。フェイトちゃんとはやてちゃんのお友達」

「んで、私たちを教導してくれた人」

「ってことは、貴方がm……むぐぅ」

西麗が何か言おうとした途端、ティアナと龍清がその口を塞いだ。

（ちょっと西麗、初対面の人にそれは失礼だよ！）

（えっ？　だって、前にティアナが・・・・・・）

（いい西麗。なのはさんの前でその言葉は禁句よ。行ったら最後、桜色の極光が襲ってくるわよ）

（……わ、解った）

念話で会話しながらも、ティアナの表情からマジだと悟った西麗は、取り敢えず言わないと言う。

「さて、感動の再会と親睦を深めてるところ悪いんだけど、皆デバイスは持ってるよね？」

「「「「ばっちりです！！」」」」

なのはが確認すると、四人は各々のデバイスを見せる。

「えっと、僕たちは、その……」

「うん、フェイトちゃんから聞いてるよ。二人はその子達がデバイスなんでしょ？」

「はい」

返答に困る龍清だったが、すでになのはは事情を聴いていたらしく、ほっと一安心する。

「それじゃ、皆あそこに行こうか」

「「「「はい！！」」」」

「二人もついてきてね」

「あっ、はい」

「はーい」

そう答えると、龍清と西麗はなのは達の後をついて行った。

そしてついた場所は……

「ここは？」

「やけにでかいって言うか、広いって言うか」

二人は海の上にある、でかい人工島のような場所に来ていた。

「ここはね、昔私たちがなのはさんの教導を受けてた時に使ってた、訓練用のシミュレーターよ」

「えっ？　これがですか？」

ティアナの答えに、二人は目を疑う。

「どう見ても唯の鉄の塊が浮いているようにしか見えないんだけど」

「まあ、見てて」

スバルに言われ、暫く待っていると、味気なかった鉄の踏み場が、一瞬にしてビルの廃墟群のような光景になった。

「うわー！」

「すごーい！！」

「ま、自然な反応よね。私たちも、初め見た時は驚いたし」
「本当だよねー」
「「ふふ」」
目を丸めて驚く二人の反応に、当時を思い出したフォワード人は苦笑する。
「さて、皆揃ってるね」
するとここで、なのはがやってきた。
「なのはさん。今日は何をするんですか？」
「そうだね、まずは昔の感覚を取り戻すために模擬戦といきたいところだけど、その前に二人の実力を確かめておきたいかな？」
「えっ？　僕たちのですか？」
「うん。一応、嘱託試験の模擬戦の映像は見せてもらったけど、やっぱり直接見ておきたくて。だから二人には、また模擬戦をしてもらうよ」
「良いですけど、相手は誰ですか？」
「そうだねー。やっぱり、スバルとティアナ……」
「いや、私がやろう」

なのはが模擬戦相手を選定していると、どこからともなくまた声が聞こえてきたので振り向くと、二人の女性が立っていた。

一人はキャロと同じピンク色の髪のポニーテールをした凛とした女性。

もう一人は、紅い髪をした三つ編みの少女だった。

ポニーテルの女性はスバルたちと同じ制服だが、紅い髪の少女はなのはと同じ制服を着ていた。

「よっ、お前ら」

「「シグナムさん！！」

「「ヴィータさん！！」」

これにフォワード陣が素早く反応し、二人の女性の名前を言った。

「えっと、お知り合いですか？」

「うん。まずこちらがシグナムさん。そして、こっちが私の同僚のヴィータちゃん」

「お前のことは主から聞いている。それとアギトからな」

「主？」

「はやてちゃんのことだよ」

「へー」

挨拶もそこそこにすませた二人だが、何故だが龍清は、シグナムが登場してから妙な悪寒を感じずにはいられない。

「東郷だったか？　まずお前の相手は私がしよう」

「んで、その後アタシがお前の相手をする」

と、シグナムは龍清を、ヴィータは西麗を指差した。

「えっと、どうして」

「主とアギトから聞いたのだが、お前は剣が使えるそうだな」

「剣？　もしかして、破山剣のことですか？」

シグナムからの問いに、龍清は思い出すように答える。

「いや、でも僕は術主体で、剣はあんまり使いませんよ？」

「だとしてもだ、同じ剣を使うものとして、貴様と戦ってみたいと思ってな」

「いや、でも……」

「ええい！　男がいつまでもぐちぐち言うな！　ほらいくぞ！！」

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

どうにか断ろうとするも奮闘むなしく、シグナムに首根っこを掴まれて龍清はそのまま連行されたのだった。

「にゃはは。相変わらずだね、シグナムさん」
「ったく、あのバトルマニア」
そんななのはとヴィータの呆れ声が聞こえたとかなんとか。

おまけ

龍清がシグナムに連行された後。
「あのー、なのはさん、ヴィータ……さん？」
「何？　西麗ちゃん」
「あの人、バトルマニアって」
「言葉通りの意味だよ。シグナムは戦うのが好きなんだ。って言うか、何でアタシは疑問形なんだよ？」
「いや、だって、あたしよりどう見ても年下だし」

「アタシは大人だ！」

「いや、そんな背丈で言われても説得力な……」

「てめえ、アイゼンの頑固な汚れになりてえか？」

「……すいません」

第九話　特務六課編成　龍清の受難。（後書き）

自分としては、今までの中でかなり考えて作りました。
次は龍清の受難、バトルマニアとの模擬戦です。

ご意見、ご感想、ありがとうございます。

そして龍虎の名前は楚良様のを使わせていただきました。
他にも名前をご応募いただいた皆様、本当にありがとうございます。

第十話　模擬戦その一　対決！　無敵青龍ＶＳ烈火の将

廃ビルが立ち並ぶ空間の中に、その二人は立っていた。

片やピンクのポニーテールを風に揺らす凛とした顔つきの女性、シグナム。

片や頭に青い龍を乗せた黒い髪の少年東郷龍清。

なのはに指示に従い、龍清の実力を測る為に模擬戦を行おうとしているところだ。

「はぁ。今朝の占い、それにはやてさんの言葉の意味が漸く解ったよ」

「なにをぶつぶつ言っている。早くセットアップしろ」

ため息をつきながら呟く龍清に対し、業を煮やしたのか、シグナムが急かす。

すでに彼女はベルカ式の防護服「騎士甲冑」に身を包み、その手にはデバイスである愛剣「レヴァンテイン」が握られていた。

「まぁ、何時までもぐちぐち言ってても始まらないか。いくよ、春青」

「クキュー！」

龍清が呼びかけると、やる気満々とばかりに春青が鳴声を上げる。

「必神火帝！　天魔降伏！！」

掛け声とともに龍清と春青は光に包まれ、それが晴れると、鎧をまとった姿になっていた。
シグナムはその姿を見て、一言感想を述べる。
「ふむ、試験の映像を見せてもらった時も思ったが、やはりお前と秋のその姿は騎士甲冑に似ているな」
「えっ？　バリアジャケットじゃないんですか？」
シグナムの言葉に素朴な疑問を呈した龍清が聞いてきた。
「魔法に二体系あることは知っているな？」
「はい、ミッドチルダ式とベルカ式、でしたっけ？」
「そうだ、魔力で構成する防護服を、ミッド式ではバリアジャケット、ベルカ式では騎士甲冑と呼ぶ」
「成程」
「両者に呼び方以外に差異はないが、お前たちのそれは、我々の騎士甲冑に似ている」
「そうでしたか」
「まあ、無駄話はここまでだ。早く剣を構えろ」
「えっと、どうしてもですか？」

「どうしてもだ」
「はぁ、解りました」
観念した龍清は、尻尾の先端にある宝玉を取り出す。
「破山剣召喚！」
そして掛け声とともに、宝玉は龍王破山剣に姿を変える。
「これでいいですか？」
「ああ、構わん。高町、始めてくれ」
「はい。それでは二人ともよーい……始め！！」
シグナムに催促され、なのはが模擬戦開始の合図を告げる。
そして、それと同時に一気にシグナムが距離を詰める。
「い、いきなり！！」
近づいてくるシグナムに驚きながらも、龍清は破山剣でその一撃を防ぐ。
ぶつかり合った刃は火花を散らし、鍔競り合いとなる。
「い、いきなり来ますか？　こういう場合、様子見するものじゃ……」
「生憎、貴様の戦闘データは見せてもらっていたのでな。しかし、

本当に素人か？　私は全力で斬りかかったはずだが？」

「まぐれですよ、まぐれ！！」

そう言って龍清は一気に押し出し、シグナムと距離を取る。

「火招符！」

再び近づくであろうシグナムを警戒し、牽制の為に赤い符を投げる。

符はやがて火球となってシグナムに襲い掛かる。

「甘い！！」

しかし、飛んできた火球を、シグナムは見事な太刀筋で切り捨てる。

「嘘！」

「驚いてる暇はないぞ！」

再び高速で近づいてきたシグナムに、龍清は回避で対応する。

直撃こそしないが、刃が鎧に掠る。

そして龍清は再び距離を取って術で攻撃しようとする。

だが……

「レヴァンテイン、カートリッジロード！！」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅ　Ｆｏｒｍ》

「シュランゲバイセン！！」

レヴァンテインから空の薬莢が排出されると、レヴァンテインが鞭のような形となり、刃が撓りながら龍清に襲い掛かる。

「嘘！　うわ！？」

そのまま刃は龍清に直撃、龍清はそのまま吹っ飛ばされ、廃ビルに叩きつけられた。

「龍清さん、大丈夫でしょうか？」

「シグナムが相手だからね、非殺傷設定は掛けてるだろうけど、あれはかなり本気だったね」

模擬戦の様子を見て、龍清を心配するエリオと、先ほどの様子を冷静に分析するフェイト。

「あれがフェイトちゃんとティアナが言ってた、龍清君の魔法？」

「はい、陰陽術と言ってましたけど、知ってますか？」

「私はよく知らないな。確かに地球にそういうのはあるけど」

「まあ、龍清のは特別らしいけどね」

なのはとティアナの会話に、西麗が補足を付け加える。

「まあ、それはさておき、龍清大丈夫？　あのシグナムって人、結構強いけど」

「そりゃそうだ。近接戦闘はベルカの騎士の得意分野、しかもシグナムはアタシたちの中でもトップクラスの実力を持つんだ。新人に負けるような奴じゃねえよ」

ヴィータの言葉を聞いた西麗は、少し考えるようなしぐさの後に言った。

「まあ、龍清もただで負ける気はないでしょうがね」

「あっ、龍清が出てきた」

ティアナがそう言った先には、廃ビルに建ちこめる噴煙の中から現れた龍清が映っていた。

「げほっ、げほっ、強いなあ、でももうちょっと手加減してほしかった」

シグナムに吹っ飛ばされた龍清は、噴煙の中から姿を現しながらそう呟く。

（やっぱり接近戦じゃ分が悪い、かといって、中途半端な距離も効果はなさそうだし……）

これまでの戦闘で得た情報を冷静に分析する。

まず、自分は術主体で距離を取っての戦いが得意だが、接近戦はほとんど西麗に任せっきりだったのであまり得意ではない。

対しシグナムは、近接戦を得意としており、こちらの戦法をすでに知ってか、距離を詰め、大技を放つ機会を与えてくれない。

加えて、先ほどの攻撃で中距離も攻撃可能であることを知ったため、半端に距離をとっても先ほど同様、シュランゲフォルムの餌食となるのが目に見えていた。

（……こうなったら、まだ未完成だし、通じるかどうか解らないけど、あれを試してみよう）

ある秘策を胸に秘め、龍清は再び攻撃を仕掛ける。

「龍王炎符水！！」

炎符水をシグナムへと放つ。

「そんな攻撃が当たると思ってるのか！」

攻撃事態は変則的な軌道だったが、やはりシグナムには当たらなかった。

「悪いがそろそろ決めさせてもらう！」

そう言うとシグナムは一気に近づいてくる。

（準備は終わった。勝負は一瞬、いくよ、春青！！）

（クキューーー！！）

春青と念話で相槌を打つと、龍清はその場を離れる。

「逃がすか！」

無論、それを逃すまいとシグナムも追いかける。

「もらった！　紫電一閃！！」

距離を詰めたシグナムは、レヴァンテインに炎を纏い、得意の技、紫電一閃を放つ。

「この！！」

負けじと、龍清も破山剣で攻撃を防ぐ。

「私の渾身の一太刀、その程度で防げると思うな！！」

「思ってませんよ！」

「何！？」

鍔競り合いの状態から、龍清は蹴りをシグナムの腹部に叩きこむ。

そのまま吹っ飛ばされたシグナムは空中で体勢を立て直す。

「今だ！」

そして、今を好機ととらえた龍清は、そのまま印を組む。

すると変化は、シグナムの真下で起こった。

「な、何だ！」

突然、三本の光が天へと昇る。

そして、そこに三角柱の結界が出来上がり、そのままシグナムを包み込む。

「金式の新しい結界術、まずはうまくいった」

「ほう、流石にこのままやられる奴ではなかったか。だが、何時までも私を閉じ込めておけると思うな！」

そう言うと、レヴァンテインから再び空薬莢が飛び出し、刀身に炎が灯る。

「紫電……一閃！！」

シグナムは紫電一閃を放ち、龍清が設置した結界は簡単に砕け散る。
しかし、すでにその時、龍清が術の発動を行おうとしていた。
「何！」
「結界は時間稼ぎ、この術を発動するための布石です！」
そう言って一枚の符を上空に投げると、そこに八卦陣が現れる。
「龍王の天雷、集いて我が敵を討て！」
そう言うと、八卦陣に蒼い雷が集い始める。
「砲撃！　いや、収束魔法か！？」
シグナムがその様子を見て驚くが、時すでに遅しだった。
「龍王、蒼雷砲！！」
掛け声とともに、蒼く太い雷がシグナムの頭上に落ちる。
蒼い雷の着弾点では大爆発が起こり、近くの廃ビルの壁がごっそり消滅するのだった。
「やったかな？」
未完成とはいえ、先ほどの術を喰らえば、いくらシグナムが百戦錬磨の強者であっても、無事では済まないだろう。

しばらくの沈黙が、その場を支配する。
だが、その沈黙は不意に破られる。
「翔けよ、隼！」
その掛け声とともに、噴煙の中から何かが一直線に飛んできた。
「がっ！？」
龍清の鳩尾には、一本の矢が命中していた。
貫通こそしなかったが、その衝撃に、龍清はそのまま気を失い、地上へと落ちて行った。
だが、最終的に落下することはなかった。
「もう、シグナムさん、やりすぎですよ」
「すまん、高町。少し熱が入ってしまった」
落下しかけていた龍清を助けたのは、純白に青いラインの入ったバリアジャケットを身に纏ったなのはだった。
「しかし、最後のあれには驚かされたな」
「そうだね、今はまだまだだけど、きっと招来、スバル達に劣らないくらい強くなりますね、この子」
（なのは、こっちは準備終わったぜ）
シグナムと会話していると、念話でヴィータが準備が終わったこ

とを伝える。

（うん、ちょっと待っててね。龍清君を医務室に運ぶから）

（了解、さっそく患者第一号だな）

（そうだね）

（高町、向こうに着いたら、後は私が運ぼう）

（はい、お願いします）

運んでる途中、なのははシグナムと念話で会話しながらディスプレイを覗き込む。

そこには、ぶんぶんとハンマーを振るヴィータと、準備運動をする西麗がそこに写っていた。

第十話　模擬戦その一　対決！　無敵青龍ＶＳ烈火の将（後書き）

あれ？　ちょっとバトルマニアさが出てない気がする。

でも、あんまり出すのも問題な気がしたのも事実、でもこれで良いのか？　と思うのもまた事実。

やっぱり戦闘描写がうまくかけてるか心配です。

次はヴィータ対西麗、またパワーとスピードの対決です。

ご意見、ご感想、ご指摘、是非とも送ってください。

第十一話　模擬戦その二　激突！　最強白虎ＶＳ紅の鉄騎

龍清とシグナムの模擬戦が終わったその頃。
シミュレーターの別の場所でもまた、模擬戦が行われようとしていた。

片方は紅い三つ編みの少女、ヴィータ。
なのはと同じ白を基調とした教導服ではなく、紅い騎士甲冑に身を包み、愛用のハンマー型デバイス「グラーフアイゼン」を二回、三回とバッティングのように振る。

もう片方は黒髪のポニーテールを風に揺らす少女、西麗。
戸惑っていた龍清と違い、こちらは既に白虎「白秋」と融合（ユニゾン）を済ませており、白と黒の虎模様の鎧を着て準備運動をしていた。

《二人とも、お待たせ》

準備運動をしている二人に、なのはから通信が入る。

「おお、どうだ？」

「どっちが勝ちました？」

二人は決着がつく前に模擬戦の準備を行っていたため、二人の勝敗は知らない。
なので二人はなのはが通信に出るなり模擬戦の結果を聞いてきた。

《良い所は言ってたんだけど、シグナムさんが勝ったよ》

「あちゃー、龍清負けちゃったのか」

《でも本当にいいところまではいってたんだよ？》

「へー。ま、あいつがそこらの新入りに負けるとは思えねえけどな」

《あはは、それで二人とも、準備は良い？》

「おお」

「いつでも」

模擬戦の結果を簡潔に答えた後、なのはは二人に準備ができてるかを聞き、二人はお互いに向き合いながら肯定の言葉を放つ。

《それじゃ、よーい……始め！！》

そして、合図とともに模擬戦が始まる。

「先手必勝！！」

合図と同時に、西麗は一気に駆け出す。

「甘(あめ)えんだよ！」

そう言うとヴィータは懐からビー玉ぐらいの大きさの銀色の球を取り出す。

そして、紅い光がそれを包み込むと、球は野球のボールぐらいの大きさになる。

「いくぜ！　シュワルベフリーゲン！！」

そう言って、ヴィータはグラーフアイゼンで球を叩く。

すると、叩かれた球は曲線を描きながら西麗に向かっていく。

「おあ！？　ほっ、よっと」

いきなりの事に驚くが、西麗はそれを鮮やかな身のこなしでひょいひょいかわす。

「はっ！！」

そして時間差で飛んできた最後の一発を避けられないと判断したのか、目の前にやってきた球を手刀で叩き落とす。

しかし、途中で動きを変えたため、近づいていたスピードは一気に失速していた。

「もらったー！」

「何ですと！？」

そして、西麗に一気に近づいたヴィータが、一気にアイゼンを振り下ろす。

「ほわぁ！？」

振り下ろされるアイゼンを、器用な動きでかわす。

「まだ終わりじゃねえぞ！」

「のわ！　ほっ！　危なっ！」

ハンマーの一撃一撃は大振りだが、その分当たれば大きい。
西麗は距離を取りたかったが、ヴィータの猛攻が激しく、なかなか距離を取る動作に移れない。

「ああもう！　虎王飛拳！！」

しびれを切らし、至近距離から虎王飛拳を放つ。
とっさの行動だったが、これによりヴィータの猛攻が一瞬鈍り、その隙に距離を取る。

「ふぅ、やってくれますね」

「お前が接近戦タイプだってのは、この前の試験の映像を見せてもらって解ってるからな。一気に懐に飛び込もうって魂胆だったろうが、まっすぐ突っ込んできたから迎え撃ちやすかったぜ」

「成程、なら、最初っから本気でいくとしいますか！　虎王神速槍

！！」

西麗は手加減なしでいくと宣言すると、神速槍を出現させ、それを両手で保持し、構える。

そして、両社はしばらくにらみ合った後。

「「はあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

一気にぶつかり合った。

そして屋外では、なのはをはじめとするメンバーが、龍清とシグナムの模擬戦の時と同様、二人の模擬戦の様子を見ていた。

「真正面から突っ込むなんて、何か昔のスバルを見てるみたいね」

「うぅ、エリオ、キャロ、ティアが酷いよー」

「ご、御免なさい。私にはフォローできません」

「だ、大丈夫ですよ！　僕もそうでしたから！！」

西麗の様子を見て昔のスバルを思い出しそう呟くティアナ。
それにスバルは、隣のエリオとキャロにフォローを求めるが、キャロは全くその通りだと思ってたので丁寧に謝り、エリオは必死にフォローを行う。

「それにしても、やっぱり二人とも対照的だね」

「うん、ヴィータちゃんはオールラウンダーだけど、基本は一撃重視のパワータイプ。だけどあの子、西麗ちゃんは、手数の多さで攻めるスピードタイプみたい」

模擬戦の様子を見ながら、フェイトとなのはは冷静に分析していた。

「でも、手数の多さだけじゃ、ヴィータちゃんには勝てないよ」

そう言うと、なのはは再び模擬戦の様子を見守る。

「うおりゃ！！」

「おっと！　お返し！！」

「何のっ！！」

一方、両者の戦いは一進一退だった。

大振りのヴィータの攻撃をかわすと、西麗はすかさず神速槍で突きを繰り出す。

しかし、ヴィータも防御魔法でそれを防ぎ、再びアイゼンで攻撃を繰り出す。

この状況が続いており、いわゆる千日手の状態となっていた。

「このっ！　そりゃそりゃそりゃ！！」

だがここで、西麗は神速槍での連続突きを繰り出す。

「ちっ、アイゼン！」

≪Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ≫

グラーフアイゼンが受け答えすると、目の前に紅いシールドが現れる。

「その程度で、防ぎきれると思わないで！！」

どんどん突き出される神速槍での攻撃に、ヴィータのシールドに罅が入り始める。

「なっ！？」

ヴィータはその様子に少し驚いたが、すぐに回避行動をとったため、シールドは破られるが、攻撃が当たることはなかった。

「やったな、アイゼン！」

≪Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ≫

そう言うと、グラーフアイゼンから空薬莢が排出され、その形状も変わる。

ハンマーの形をしているのは変わらないが、片方に四角錐状のスパイク、もう片方にロケットブースターのようなものがついていた。

そして再び空薬莢が排出されると、ロケット部分が噴射し、ヴィータが駒のように回転し始める。

「あっ、何かイヤーな予感……」

そしてその予感は現実のものとなるのだった。

「いくぞ！　ラケーテン、ハンマー！！！！！」

ロケット噴射で勢いよく回転しながら襲ってきた。

「おわっ！？」

思わず神速槍で防ぐ、だが……

「それで防げると、思うなよ！！」

その言葉通り、神速槍はラケーテンフォルムのグラーフアイゼンに折られ、そのまま西麗本人に直撃する。

「がふっ！？」

直撃を喰らった西麗は、そのまま地面に叩きつけられる。

「あれっ、少しやりすぎちまったか？」

思わず本気になってしまったが、冷静になってみてやり過ぎたと思った。

「おーい、大丈夫かあ？」

噴煙の中にいるであろう西麗に、ヴィータは声をかける。

「痛た、そんなこと言う位ならもうちょっと手加減しなさいよ！！」

そして噴煙の中から声が聞こえた。

「そんな大口叩けるならまだ大丈夫だな。んじゃ、これで止めといくぜ、アイゼン！！」

≪Ｇｉｇａｎｔ　Ｆｏｒｍ≫

空薬莢が二発排出されると、グラーフアイゼンが巨大なハンマーとなった。

その大きさは通常形態よりはるかに大きく、ヴィータの身長を軽々と越えていた。

「ちょ！　そんなのあり！？」

規格外としか言いようのない大きさに、西麗は声を上げる。

「轟天、爆砕！」

しかし、そんな言葉など露知らず、ヴィータはハンマーを大きく振りかぶる。

「だったらこっちも。旋風裂穿！」

それに対し、西麗も右手に風を集め、それを纏う。

「ギガント、シュラーーーーーク！！」

「虎王、裂空拳！！」

そして、お互いの叫びと共に、ヴィータはグラーフアイゼンを振り下ろし、西麗は右手を強く突き出す。

お互いの力は拮抗し、二人はさらに力を入れる。

「「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」

そして暫くして、二人のいる場所で大爆発が起こる。

轟音と爆煙が立ち込める中、その中で立っていたのは……

「はぁ、はぁ……」

西麗だった。

「や、やったーーーーー！！！！！」

ギガントシュラークを打ち破ったことで、西麗は勝利したかのごとく雄たけびを上げる。
しかし、それがいけなかった。
「……がふっ！？」
突然、後頭部を衝撃が襲い、そのまま西麗は意識を失ってしまうのだった。

「油断大敵だな」
西麗に最後の止めを刺した張本人、ヴィータはグラーフアイゼンをぶんぶん振りながら言う。
「お疲れ様。ヴィータちゃん」
するとそこへ、なのは達がやってきた。
「おお。スバル、ティアナ、こいつを医務室に運んどいてくれ」
「「はい」」

ヴィータの言葉に二人は返事をして、西麗を医務室に運ぶ。

「それで、彼女はどうだった。ヴィータ教導官殿？」

少し悪戯っぽく、フェイトはヴィータに聞いてくる。

「昔のスバル達みてえだったな、まだ粗削りなところはあるけど、そこらの新人よりはいい動きしてたぜ。ま、ちょっと動きが直線的だったけどな」

「そうだね。龍清君も、とっさの機転と言うか、術を出すタイミングが絶妙だったしね」

二人の教導官は、それぞれの長所と短所を的確に当てる。

「取り敢えず、二人は御眼鏡に適ったってことかな？」

「ま、そういうことだな」

「ふふ」

「後は、これは前から思ってたことなんだけど」

ここでフェイトは、懸念していたことを話す。

「……そうだね、今回の模擬戦でも、ヴィータちゃんにやられてたしね」

「やっぱ必要かな？　あの二人にも」

「まあ、その辺りは、シャーリーと相談してみるよ」
三人でそんな会話をしていると。
《なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、ちょっとええか？》
突然、三人のもとに通信が入る。
通信の主ははやてだ。
「はやてちゃん。どうしたの？」
《いやな、三人に、ちょっとお願いしたいことがあってな》
「お願いしたいこと？」
《まあ、そんな大したことやないんやけど……》
そう言ってはやては、三人にお願いを話す。
《……っという訳なんや》
「成程……良いよ、それくらいなら」
「うん、二人にも慣れてもらおうと思ってたし」
《ほな、準備はロングアーチスタッフがすでに始めてるから、三人ともよろしくな》
「「「オッケー！」」」

こうして、特務六課総出で、あることが準備されていったのだった。

第十一話　模擬戦その二　激突！　最強白虎ＶＳ紅の鉄騎（後書き）

次は模擬戦の後日談、そしてある大イベントを行います。

ご意見やご感想、お待ちしております。

第十二話　親睦会と言う名のＣｈａｏｓ

「う、う～ん……あれっ？　ここは……」

模擬戦終了後、意識を取り戻した龍清は、周りを見渡しながら記憶をたどる。

「……そっか、僕、最後の最後でやられたんだっけ。ってことは、ここは医務室？」

シグナムとの模擬戦の最後で、突然飛んできた矢を喰らって、そこで意識を失ったことを思い出し、龍清は冷静に場所の特定を行う。白い床と天井が見え、自分もまた、床や天井と同じ白いシーツのベッドの上に寝かされていた。

「うーん、むにゃむにゃ……」

「あっ……」

そして隣のベッドでは、西麗が頭に大きなたんこぶを作って寝ていた。

「西麗も、負けたんだね」

「むにゃむにゃ、もう駄目、食べられない……へへへ」

「・・・・・・」

何やら楽しそうな夢を見ているようなので、取り敢えず放ってお

くことにした。

「ん？」

そして、自分の足元に何か重みを感じるので視線を落としてみると。

「クキュウ……」

自分に寄り添うように春青がいた、どうやら眠っているようだ。

「そうか、心配してくれてたんだ。君だって、疲れてるはずなのに……」

自分の事を気にかけてくれていたであろう春青の頭をゆっくり撫でる。

「ありがとう」

「……クキュ？」

すると、さっきまで静かに寝ていた春青が目を覚ました。

「キュ？　……キューーー！！」

そして龍清が目を覚ましたことを確認すると、すぐさま飛びかかってきた。

「うわっ！　ちょ、くすぐったいよー！！」

「キュー、キュキュー！！」

よほど心配していたようで、龍清の言葉を無視して、春青は擦り寄ってくる。

そんな春青にくすぐったさを感じつつも、彼も抱きしめて離さない。

「うにゅ？　チャーシューは？」

するとここで、寝ぼけ眼で西麗も起きてきた。

「おはよう、どうだった？」

「うん？　えーっと、ヴィータさんのでっかいハンマーを防いで、間一髪って思ったら、後ろになんか衝撃が……」

「それって、油断したところをやられたって事じゃないの？」

龍清の的を射た発言に、西麗は顔を真っ赤にする。

「う、うるさいわね！　そういうアンタだって、油断してやられたんじゃないの！！」

「うっ、それは……」

顔を真っ赤にして反論してきた西麗に、図星を突かれたために、龍清も言葉に詰まる。

「し、仕方ないでしょ。剣での接近戦しかしてこなかったし、それに未完成とはいえ術も決まったから。倒すとまではいかなくても、

反撃できないくらいダメージは負わせたかなあ、なんて思ってたら。いきなり矢が飛んできて……」

「アタシだって、いきなりハンマーがでっかくなって、押しつぶそうとしてきたのよ！　あれを防ぐのに手いっぱいだったんだから、気がそれるのも仕方ないでしょ！！」

お互い負けた原因を話し合いながら口論を続ける。

「ふふふ、シグナムとヴィータちゃんに負けたのに、ずいぶん元気ね」

「全くだ」

するとそこへ、白衣を着たボブヘアーの金髪の女性と、蒼い毛並みの大型の犬がやってきた。

「あれ、貴方達は？」

「そっか、会うのは初めてだったわね。私はシャマル、この六課で、医務を担当しているの。それで、こっちはザフィーラ」

「よろしくな」

「「犬が喋った！？」」

やってきた一人と一匹、シャマルとザフィーラが自己紹介を終えると、ザフィーラが喋ったことに龍清と西麗は驚きの声を上げる。

「……狼なのだが」

「あっ、すいません」

「って言うか、突っ込むとこそこ！？」

「ふふ、あっ、二人とも、体の調子は如何？」

ザフィーラとプチ漫才を繰り広げた二人に、シャマルは身体の調子を聞いてくる。

「あっ、大丈夫です」

「そう、でも念のために検査をするから、また横になってもらえるかしら？」

「はい」

「ほーい」

「キュー」

「ウニャ？」

そう答えた後、二人は再び横になる。

その際、寝坊助が一匹漸く起きたようだったが。

「……よし、大丈夫みたいね。二人とも、もう良いわよ」

「「はーい」」

少しして検査が終わり、再び二人は起き上がる。

「あっ、二人とも」

「気が付いたんだ」

するとそこへ、なのはとフェイトがやってきた。

「体の方は如何？」

「大丈夫です。さっき検査してもらいました」

「もうぴんぴんです！　いえい！！」

龍清は説明しながら、西麗はVサインを作って元気をアピールする。

「そっか、じゃあ早速で悪いんだけど、一緒に来てくれるかな？」

「えっ？　どこにですか？」

「それは着いてのお楽しみ。シャマル達は？」

「私は遠慮しておくわ。まだ確認することがあるし、ザフィーラの健康チェックもしないといけないから」

「すまんな」

「解った。それじゃ、二人とも、ついて来て」

「「あっ、はい」」

こうして、四人は医務室を後にした。

「さ、着いたよ」

二人が連れてこられた場所は、食堂だった。

だが、そこは様々な装飾が施されており、テーブルには大量の料理が並べられていた。

そして、六課の局員の全てが、ここに集結していた。

「あっ、来ましたよ」

「なのはさーん！　フェイトさーん！」

「ほら、二人もこっちに来なさいよ！」

すると、ある一角に集まってたフォワード陣。

エリオが四人を確認し、スバルが手を振ってなのは達を呼び、ティアナが龍清と西麗を呼ぶ。

「あの、これは一体何ですか？」

フォワード達のいるところへ集まった後、龍清は一体何をしているのかを聞いてみる。

「親睦会だよ」

「「親睦会？」」

「ほら、私たち機動六課にいたメンバーだけならともかく、龍清達みたいに今日集まったメンバーもいるから、親睦を深めようという事で、開くことになったの」

「「へー」」

返ってきたなのはの答えに、二人は一度は首を傾げたが、フェイトの説明に納得する。

「まあ、はやてちゃんがイベント好きなのも、主な理由の一つなんだけどね」

「「「「「あはは……」」」」」

「「ああー」」

なのはの言葉に、フェイトを含めたフォワード陣は乾いた笑を浮かべ、龍清と西麗はどこか納得した声を出す。

「そう言えば、はやてちゃんは？」

「八神部隊長でしたら、料理を並べ終えて、一緒に談笑してたんですけど。「準備があるから」と言って、どこかに行ってしまいました」

当の主催者であるはやての行方を聞くと、エリオがそれに答える。

「むぐむぐ、それにしても、やっぱり部隊長の料理は美味しいですね」

「えっ！　これ、はやてさんが作ったんですか！？」

食べながら言うスバルの言葉に、龍清は驚きの声を上げる。

「はやてちゃん料理がすごい得意だからね」

「ヴィータ副隊長は、「ギガうま」って言ってたわね」

「いや、実際その言葉が当たりなんじゃないかな。あたしも中華なら自信あるけど、これはすごいクオリティ高いよ」

「本当ですよねえ」

そんなこんなで、スバル、エリオ、西麗は料理を堪能し。

「クキュ～」

「キュ～、キュキュ～」

「二匹とも、すっかり仲良しになったね」

「そうですね」

互いにじゃれ合う龍二匹を見て、龍清とキャロは嬉しそうに笑顔がこぼれていた。

「皆、お待たせー」

八人で楽しく談笑していると、そこに主催者であるはやてがやってきた。

何やらいろんなものを持ってきて……

「はやてちゃん。何なのそれ？」

「ふふふ、ちょっとしたゲームをこの九人でやろう思ってな」

『ゲーム？』

疑問符を浮かべる八人に、はやてはゲームの内容を伝える。

「それは……王様ゲームや！！」

そう言って取り出したのは、「王」と書かれた割り箸。

「王様ゲーム……ですか」

「そや、まあ大丈夫や、節度わきまえれば、十分楽しいから、ほら皆、座って座って」

どこからともなくシートを取り出して広げ、参加者たちはその上に座る。

「ルールは知ってるな。一応付け加えると、行き過ぎた命令は無しやで！」

「そんなことしそうなのははやてちゃん位だよ」

「うんうん」

「うぅ、二人とも酷いで」

（あの、はやてさんって、いつもこうなんですか？）

（普段はなのはさん達と同じで優しいし、同じくらい凄い人なのよ。ただ、こういう場面ではね、こんな感じよ）

（まあ、イベントで楽しむのは、悪い事じゃないから……）

「ほな、始めるで！！」

親友二人の口撃に少しへこんでいたが、すぐに気を取り直し、ここに、王様ゲームが幕を開けたのだった。

『王様だーれだ！！』

始まった王様ゲーム第一回、果たして王様は……

「おっ、早速私や！」

いきなり王様になったのははやてだった。

「さあて、どんな命令にしようかなー♪」

「なのは、すごく悪い予感がするんだけど」

「私もだよ、フェイトちゃん」

どうもはやての反応と経験から、何か悪寒を感じ取ったようだ。

「よし、5番の人、私に胸を揉ませてなー」

（（（（あー、やっぱり））））

何となく予想してたのか、なのは、フェイト、スバル、ティアナが同じことを感じてた

「ふふふ、さーて、誰なんやろなあ。なのはちゃんかな、フェイトちゃんかな？　あっ、スバルもええし、ティアナも捨てがたいしなあ」

わくわくした様子で五番の相手を探す。

果たして五番は……

「あっ……」

西麗だった。

「ほお、西麗か。これはこれでええかもな。ではさっそく……」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　何よ胸揉むって！！　それは流石にやりすぎじゃないの！！！！」

「ええやんかー、ちょっとしたスキンシップやってー、それに、王様の命令は絶対やで？」

「そ、それはそういうルールだけど……」

「大丈夫やって、そんなに酷い事せえへんから」

「いや、ちょ、待っ……ひあ！？！？」

こうして西麗は、はやて独特のスキンシップの餌食になったのだった。

その頃、外野組はと言うと……

「あの、龍清さん？」

「どうして、私たちの目を塞いでるんですか？」

「君たちには少し刺激が強すぎるというか、健全な育成に有害と言うか……」

必死に胸を揉まれる西麗から視線をそらしながら、エリオとキャロの目を塞いでいた。

そして、過去の被害者であるなのは、フェイト、スバル、ティアナは安堵の表情をしつつ西麗に同情の眼差しを送っていた。

「はぁ、はぁ、酷い目に遭った」

「いややなあ、ちょっとしたスキンシップやよお」

「えーっと、気を取り直して、やりましょうか？」

「そ、そうね」

龍清とティアナの言葉で王様ゲーム第二回を行うことに。

「あっ、私だ」

次に王様になったのはなのはだった。

（良かった。なのはさんなら、間違っても変な命令は出さないよね）

（そ、そうよね）

全員なのはが王様になったことに関して安堵の表情を浮かべる。

「うーん。どんな命令をしようか、いざとなると悩むねー」

当の王様となったなのはは、どんな命令をしようか悩んでいた。
すると、彼女の目に、食堂に設置されたステージが入った。
そこではリインがアウトフレーム姿で何かを歌っていたが、それを見て、なのははピンと閃いた。

「じゃあ命令するよ。2番と3番、それと6番と7番の人は、四人一組であのステージで歌ってくること」

『おおーーー』

流石と言うべきか、なのはの見事な采配に全員感心する。
この命令なら、王様ゲームに参加している面子以外の人達も楽しめる。
しかも、ここにいるメンバーはかなりの美声揃い。
きっとみんな楽しめること間違い無しだろう。

そして、選ばれたメンバーは……

「あっ、私だ！」→7番

「私も」→3番

「ま、またー！」→2番

「私もです」→6番

2番は西麗、3番はティアナ、6番はキャロ、7番はスバルだった。

「ほな四人とも、頑張ってきてや」

とりあえず、さしたる抵抗もなく、四人はステージの上に立つ。

「ねえねえ、何歌おうか？」

「うーん、二人とかならともかく四人だからね、ちょっと大変かも」

と、二人で話し合っていると。

「それなら、あたし良い曲知ってるよ」

西麗が手を挙げた。

「本当ですか？」

「うん、えーっと……あっ、あった！」

そして選曲してみたところ、どうやら乗っていたようだ。

「それじゃ、いくよ！」

「良いよー！」

「もお、こうなったらやるしかないわね」

「わ、私も頑張ります」

「それじゃ、あたし達の歌を聞けーーー！！」

西麗、先ほどの胸揉みの事をきれいさっぱり忘れたいのか、かなりノリノリだ。

そして、音楽と共に、四人は歌い始める。

以下中略

音楽終了と共に、歌い終えた四人は、会場から拍手喝さいを頂いた。

「ふぅ、すっきりしたー」

そして、再び王様ゲームの舞台に戻ってきた四人」

「お疲れ様」

「結構良かったで」

「本当」

上からなのは、はやて、龍清とそれぞれの感想を述べる。

「せやけど、そういう命令ならフェイトちゃんにあたってほしかったなあ」

「ああ、それ解る。フェイトちゃん歌うまいからねえ」

「そ、そんなことないよ／／／」

「さ、次いくで」

と、そんな感じで王様ゲームは続けられた。

「部隊長、差し入れ持ってきました！」

すると、一人の男が人数分の缶ジュースを持ってきた。

「おお、ヴァイス君。ありがとうな」

はやては男から缶ジュースを受け取る。
「ほな皆、好きなの持ってってや」
はやてがそう言うと、皆が思い思いの物に手を伸ばす。
「あの、先ほどの方も、知り合いですか？」
ヴァイスと呼ばれた男が去った後、龍清がはやてに聞いてくる。
「彼はヴァイス・グランセニック。普段はヘリパイロットやけど、武装局員でもあるんや」
「ヴァイス陸曹も、機動六課時代からの付き合いでね、あたしも色々お世話になったのよ」
「へー」
そんな風に会話していると……
変化はふいに訪れた。
「ほらほら、王様ゲームの続きやるでーーー！！！！」
「あっ、あれ？　なんか、はやてさん、テンション高くないですか？」
「そ、そうね……」
そしてここから災難が、ある二名に降りかかるのだった。

「よっしゃあ！！　私が王様やーーー！！！！！」

テンションの高いはやてが王様になってしまい、一同は恐怖を拭い去れない。

「ほな命令するでー！　１番と４番の人はこの衣装を着る事！！！！！」

そう言ってはやてが取り出したのは、ミニスカのメイド服。

それを見て、全員顔を青ざめる。

「心配せんといても、全員分のサイズ用意してるから、さあ、誰や？　一斉に番号みせい！！！！！」

テンション高めのその言葉に、なのは達は番号を見せる。

だが、メンバーの中に、該当者はいなかった。

ただ、二人を除いて。

「龍清くーん、エーリオー」

「「は、はははは……」」

「ほれほれ、はよお、番号みしてえや」

「あっ、あの、部隊長。僕、ちょっと飲み物買ってきます！」

「僕、一寸トイレに！」

二人は身の危険を察し、すぐにその場を離れようとした。

だが……

「「へぶっ！？」」

二人の足元にバインドがかかり、二人はそのままこける。

その際、手に持ってたくじを放してしまい、番号が露わになる。

そう、「1番」と「4番」が……

「決まりやな、ほれ二人とも、王様の命令は絶対やで……」

「「い、嫌だーーーーーーーーー！！！！！！！！」」

その後、どういう訳か、今後の王様ゲームはどんどんはやてが王様になってしまい、龍清とエリオが籤運の悪さから引き当ててしまい、王様ゲームは、半ばはやてによる二人のコスプレ会をなってしまう。

しかも、その様子は会場にいた局員たちに当然見られてしまい、しばらく女性局員たちの間では、二人の女装姿の写真が出回ったとか、そうでなかったとか。

後日、ヴァイスが持ってきた缶ジュースの中に酒が混じっていたことが判明。ヴァイスの証言から、犯人はきつい罰を受けることになるのだが。

それはまた、別のお話。

第十二話　親睦会と言う名のＣｈａｏｓ（後書き）

３０００字～５０００字の間で切り上げてたのに、今日はそれを超えてしまった。

提案をくれた楚良様、そしてアドバイスをくれたＤ級管理者「永雛」様、本当にありがとうございます。

最後が滅茶苦茶になってしまった気がしますが、今回はこの辺で。

次回から本格的に事件が始まります。

と言っても、まだ導入部分、事件が起こる手前までを書きます。

第十三話　ファーストミッション（1）（前書き）

来週のテスト期間が終われば、夏休みに入ります。
補修なんてことにならなければ、執筆し放題……と、言いたいところですが。
この夏は実家に帰省するので、あまりパソコンにかぶりつきすぎてると、親とかに何と言われるやら……ま、そこはその時になったら考えるとしましょう。

今回は訓練風景、次の話もこんな感じになります。本格的なミッションは次の次です。

第十三話　ファーストミッション（1）

六課始動から、今日で一週間が経過した。

この間、特にこれと言った事件や報告などはなく、龍清と西麗、そしてフォワードメンバー達は訓練に明け暮れていた。

「そおりゃあーーーーー！！」

「おっと！」

「一閃必中！！」

「うわっ、危な！？」

「クロスファイア、シュート！！」

「フリード、ブラストレイ！！」

「龍王爆雷符！！」

龍清はティアナ、キャロと術の撃ち合いを演じ、西麗はスバル、エリオの攻撃を文句を言いながら軽やかな身のこなしでかわしていた。

「はーい皆、集合！！」

するとここで、なのはから集合の号令がかかり、戦闘をやめて彼

女のもとに集まる。

「個人技術の訓練はここまで、次はチーム戦の訓練をやるよ」

「「「「はい！！」」」」

「「は、はい」」

「じゃ、五分後に開始だからね」

そう言うと、なのはも準備のためにその場を後にした。

「さてと、久しぶりね、これも」

「そうだね」

「えっと、何をするんですか？」

うんうんと頷くスバル達四人に、再び蚊帳の外となった龍清が聞いてくる。

「これからやるのはシュートイベーションて言って、五分間なのはさんからの攻撃を避けるか、なのはさんに一撃与えればそれで終わり、誰かが一発でも当たれば、最初からやり直しっていうやつよ」

「ご、五分間も、ですか？」

「お二人とも、なのはさんの攻撃を五分間避けられる自信はありますか？」

エリオが聞くと、龍清と西麗は首を同時に横に振る。
「あはは、だよねー。私たちも自身ないし、今のなのはさん達は、リミッターもついてないから、尚更無理だよ」
「だから、機動六課の時と同じ、何が何でも一撃入れるわよ！」
「「「はい！！」」」
「「おー！！」」
ティアナの掛け声に、五人は一斉に叫ぶのだった。

「じゃあ皆、準備は良い？」
5分後、バリアジャケットを身に纏ったなのはが上空から声を掛ける。
それに対し、龍清達は「はい！！」と元気な声で返事する。
「それじゃ、いくよ。レイジングハート！！」

《ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ》

なのはの愛機、レイジングハートの電子音と共に、彼女の周囲に桜色の魔力弾が無数現れる。

「あ、あれを全部避けろって言うんですか？」

「無茶苦茶よ！！」

現れた魔力弾の数を見て、龍清と西麗は顔を青ざめた。

「ましてあれだけの数を５分間も？　アタシでも無理だって！！」

「だったら、意地でも一撃入れなさい！　良い？　作戦はさっき説明した通りよ！　じゃあ、各自散開！！」

ティアナの合図とともに、それぞれが一斉に散らばり、廃墟の中に姿を隠す。

（流石だね。固まってるとシューター、最悪バスターの餌食で一網打尽だもんね）

散らばり、一斉に身を隠した全員の行動を見て、なのはは冷静に分析し、感心する。

（でも、スバル達の動きは大体解ってるから、普通にやるだけじゃ私に一撃与えるのは難しい。それは解ってるだろうから、そこに二人をどう混ぜ込んでいくか、そこが考えどころかな？）

なのはがティアナの戦術を冷静に分析していると……

「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「そりゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

なのはの両脇から、スバルと西麗が襲い掛かってきた。

（二人の性格からすると、十分考えられたけど。まだシューターを飛ばしていないのに来るとは思えないし、少し動けば二人が激突するだけ。つまりこれは……）

「フェイクだね」

そう言ってなのはが避けると、二人はぶつかると同時に消えて行った。

「そして本物は……そこだね！！」

そして、振り向きながらシューターを飛ばす。

そしてその先には、彼女の読み通り、スバルと西麗がいた。

「流石です！　相棒！！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

「そりゃあ！！」

飛んできたシューターに対し、スバルはプロテクションを展開し、西麗は神速槍を回転させて攻撃を防ぐ。

「一閃必中！！」

「龍王破山剣！！」

すると、今度は下からエリオが、上から龍清が攻撃を仕掛けてきた。

しかも、二人ともスピードが速い。

（これは、二人とも補助魔法を受けてるね。でも……）

少し驚きながらも、まだ数多く残ってるシューターを二人に向ける。

「クロスファイア！！」

「シューティングレイ！！」

しかし、二人に向かって飛んできたシューターは、ティアナとキャロによって迎撃される。

「「もらった！！」」

そして、補助魔法によって勢いを得た二人が、同時に襲い掛かる。

「レイジングハート！！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

しかし、そこはフォワードの教官であり、管理局のエースである

なのはも簡単には墜ちなかった。
二人の目前にプロテクションを張り、一瞬の隙ができたところを後ろに下がる。
結果、二人の攻撃はプロテクションを破っただけでなのはには当たらず、補助魔法もそこで切れてしまう。

「あっ！」

「しまった！！」

二人はすぐに不味いと悟ったが、目の前を見てみると、なのはが砲撃の準備をしていた。

（二人とも、早く下がって！！）

すぐに不味いと感じたティアナが、二人に退避するよう命じる。

「いくよ！」

《ｓｈｏｒｔ　ｂａｓｔａｒ》

「シュート！！」

しかし、その刹那、砲撃が二人に襲い掛かる。
ところが、極光が収まった後、二人のいたところには誰もいなかった。

「ふぅ、危なかったー」

「た、助かりました」

よく見てみると、エリオの手を掴んで、龍清が背中の翼を羽ばたかせて、なのはより上の位置にいた。

その後、龍魂召喚で大きくなったフリードで飛んできたキャロに、エリオを引き渡す。

（じゃあ皆、次で決めるわよ。準備は？）

（こっちはオッケーだよ、ティア）

（右に同じ！）

（僕もいけます！）

（僕たちも大丈夫です）

（はい）

念話で飛んできたティアの質問に、５人は同じ返答を返す。

「悪いけど、そろそろ決めるよ！　シュート！！」

すると、すでに制限時間が迫っているのか、なのはが一斉にシューターを出して放つ。

「まずは僕から！　九天応元雷声普化天尊！！」

龍清が札を上へ投げると、蒼い雷が一斉に降り注ぐ。

そしてそれは、なのはを狙いつつ、なのはの放ったシューターを

打ち落とす。

そしてそれを避けようと、なのはは高度を下げる。

「もらったー！！」

するとそこへ、西麗が後ろから襲い掛かる。

「レイジングハート！！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

無論、これに対して防御を取る。

「まだまだまだーーーーー！！！！！」

しかしこれに、西麗は手に持ってる神速槍の連続突きで、プロテクションを破ろうとする。

「……何コレ、堅っ！！」

だが、いくら連続で突こうと、なのはの防御が敗れる気配はなかった。

「でも、まだまだーーー！！」

（西麗、下がって！　後はあたしがやる！！）

（おっ、了解！！）

念話を受けると、西麗は突きをやめ、その場を離れる。その彼女の後ろには……

「ディバイーーーーン……」

右手に魔力を収束していたスバルが迫ってきた。

「バスターーーーー！！！！」

そして、掛け声とともに、なのはのプロテクションにぶつける。

その直後、二人のいた場所で大爆発が起こる。

「や、やったの？」

「解んないけど」

「大丈夫よ、スバルなら」

そしてしばらくの沈黙の後、爆煙が晴れてくる。

「……ふぅ、おめでとう」

《ｍｉｓｓｉｏｎ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

その直後、なのはがレイジングハートの電子音と共に労いの言葉を掛けながら下りてきた。

「うーん、流石ティアナだね、最後の詰めをスバルに任せるなんて」

「エリオは昔やったので、すぐ破られると思ったんです。龍清と一

緒に攻撃させたときに、それを防がれてすぐにこの作戦が思いついたんです」

「成程、西麗は私の気を引き付ける囮で、私の防御を削る役でもあったと言うわけか」

うんうんと、嬉しそうに頷きながら、ティアナの作戦を評価するなのは。

「龍清と西麗も、すっかりチームワークが板についてきたみたいだね」

「そんな、僕たちはティアナさんの指示に従ってただけですし」

「そうそう、そんな大したことはしてないですよ」

と、なのはの褒め言葉に二人で照れてると……

「「……あれ？」」

突然、二人のユニゾンが解除された。

「春青？」

「クキュウゥゥゥ」

「白秋、どうしたの？」

「ニャウ……」

そして、そのまま降りてきた2匹を二人が受け止めると、2匹とも、どこか弱弱しく項垂れ、か細い鳴声を上げる。

「なんだか、元気ないですね」

「最近訓練漬けだったからね、2匹とも、疲れちゃったのかな？」

心配そうにフリードと共に見つめるキャロに、なのははここ1週間を思い返し、原因を予想する。

「二人とも、ちょっと2匹を貸してくれるかな？」

「えっ？　どうして？」

「これからシャーリーの所に行くんだけど、せっかくだから、2匹をフルメンテに出してあげようよ」

「ああ、成程。解りました」

「あっ、スバル達もデバイスを貸してくれるかな？　成長した皆に合わせて、シャーリーと調整するから」

『あっ、はい』

そう言うと、龍清と西麗が2匹を預けたのを皮切りに、スバル達も自分のデバイスを預ける。

「じゃあ、午前中の訓練はここまで。午後は皆のデバイスと、2匹の具合を見て判断するから」

『はい！！』

「じゃあ、私は一足先に言ってるね」

「春青と白秋の事、よろしくお願いします」

「うん、二人もしっかり休んでね」

「はーい」

そして、午前の訓練が終わり、全員でシミュレーターを後にするのだった。

第十三話　ファーストミッション（1）（後書き）

今回は結構考えて書いたのですが、出来はどうだったでしょうか？

この小説を読んでいただいてる方、出来る限りでいいのでご感想をください。じゃないと、自分でうまくできてるか、不安なので。

さて、この1週間は忙しくなりそうなので、今回はここまで。

第十四話　ファーストミッション（2）

フォワード達がなのはと訓練をしていた時と同じ時間。
特務六課の部隊長であるはやては、三人の人物と通信をしていた。
「そっか、今のところ、新たな報告は上がってないんやな」
《ああ、地球に調査に行ってから今日まで、今のところはな》
一人は、時空管理局の提督、クロノ・ハラオウン。フェイトの義兄である。
《それと、次元航行艦の件だが、申請が何とか通った。手続きがまだ残っているが、早ければ今月中には使えるようになるはずだ》
「御免な、本当なら私が直接いかなあかんのやけど、こっちも始動したばっかりで、いろいろ大変やから」
《気にしなくていい。本局も地上本部も、今回は全面的に協力してくれてる。まあ、君たちに解決を押し付けているんだ。これ位融通が利いてくれないとな》
《私たちの方こそ、また貴方達に面倒を押し付けて、御免なさいね》
はやてから向って真ん中のディスプレイに移ってる金髪の女性がはやてに謝る。
彼女の名はカリム・グラシア。聖王教会をまとめる人物で、管理局少将の地位を持つ人物である。

「ええよ。この事件は放っておけへんし、それに、カリムやクロノ君がこうして手伝ってくれるだけで、心強いで。ま、人員は、まだちょっと不安やけどな、事件が事件なだけに」

《それなら心配ない。余裕ができたら、あいつらを回してやるからよ》

そして最後に、向かって右のディスプレイに映ってる人物は、陸士１０８部隊の隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐。スバルの父親であり、立場こそ逆転したが、はやての尊敬する上司である。

「ありがとうございます、ナカジマ三佐。いやー、あの子らも協力してくれるんやったら、百人力ですわ」

《なあに、本部の連中がどう言おうが、嬢ちゃんの頼みなら、断る義理はねえからな》

《そうだ、はやて。彼らの様子はどうだい？》

ここで、クロノが話題を変えて話してきた。

「龍清君と西麗ちゃんの事やな。二人ともええ子や、将来も有望やし」

《ああ、前にスバルが話してた奴らか？》

「そうです。今の時間やと、なのはちゃんに絞られとるんやないかな」

《そうか。二人も、大変だな》

こうして、今後の打ち合わせと談笑に浸る、はやて達四人だった。

その頃、訓練を終えたフォワード達はと言うと……

「ぷはー！！　生き返るー！！」

「大げさよ」

「あはは」

ここは六課のシャワールーム、現在使用しているのは、スバル達女性メンバーである。

「しっかし、ここ一週間で、あんたたちがどれだけ凄いのかよく解った」

「そうかな？」

「そうよ。ま、その理由も納得できるけどね。あんな厳しい訓練を一年も受けてたんなら納得するわ」

西麗は先ほどのシュートイベーションをはじめ、ここ一週間の間に受けた訓練を思い返し、スバル達の強さと、その秘訣に、改めて感心していた。

「しかも、それが三年前だから、スバルとティアナがあたしや龍清と同じくらい、エリオとキャロは１０歳の時から受けてるわけでしょう」

「あ、はい」

「すごいよねー、あたしなんて１０歳って言ったら、集落で腕白してた位なのに」

「そんな、そうでもないですよ」

「そうそう、それになのはさんも、ちゃんと考えて訓練メニューを組んでくれてるし」

「そうなんだ」

「そうよ、私たちより、なのはさん達の方がもっとすごいわよ」

「それは一週間前にその片鱗を見せてもらいました」

西麗が言っているのは、一週間前、六課に来たばかりの時にやったヴィータとの模擬戦の事である。

そんな風にシャワーを浴びながら話をつづけた。

「そう言えば、西麗さんと龍清さんのご出身も、地球なんですよね」

「そうよ。知ってるの？」
「機動六課時代に、ロストロギアが地球で見つかってね、その時に行ったのよ」
「へー、どこなの？」
「海鳴市って場所で、なおはさんや八神部隊長の故郷だって」
「海鳴市……ってあそこ！？」
それを聞いた途端、西麗が素っ頓狂な声を上げた。
「何？　知ってるの？」
「うん。あたしと龍清は、その市で会ったんだもん」
「てことは、西麗も海鳴出身？」
とここで、スバルが聞いてくる。
「違うよ。ティアナとフェイトさんは知ってるだろうけど、あたしは中国の遺跡を守る一族の末裔で、遺跡に近い集落に住んでたの」
「あの遺跡ね」
「へー、集落に住んでって所は私と同じですね。どんなところだったんですか？」

決して他意はなく、キャロは興味本位で聞くが、西麗の表情は暗くなる。

「ああ、うん……」

「どうしたの？」

その変化に気付いたティアナは、西麗に聞いてみる。

「その、あたしの集落なんだけどね。もう、無いの」

「「「えっ？」」」

「あたしが日本に来る前。おおよそ、二年前ぐらいかな。村が変な奴らに襲われてね、皆殺されて、生き残ったのはあたしだけ。後は、あたしが持ってた、五行霊の示した方向に向かって行って流れ流れて日本に」

その話を聞いて、少し周りが重たい空気になる。

まあ、こんな話を聞かされて、平然としてる人など、まずいないだろう。

「あ、あの、御免なさい」

ここで、話を切り出したキャロが、西麗に謝った。

「ううん。いいよ、知らなかったんだし。それに、龍清やあんた達とも会えたわけだから、悪い事ばっかりって訳でもないしね」

「前向きなんですね」

「そんなんじゃないよ、空元気なだけ」

と、こうして暗い空気は払拭され、四人はまたお喋りに夢中になるのだった。

「……遅いなあ」

「そうですね」

「クキュ～」

一方、こちらはシャワールーム前で待っている、龍清とエリオ、そしてフリードである。

女性陣が使っているので入るわけにもいかず、こうして待っているのだ。

「何でこんなに長いんだろうね」

「でも、機動六課の時もこんな感じでしたよ？　まあ、女性の人は、身だしなみに気を使うそうですから」

「そんなものなのかなあ？」
と、疑問に思いながら、二人と一匹は待ち続けてる。
「クキュ～」
「フリード、元気ないね」
「春青の事が心配なんだね」
「キュ～」
「そっか、仲が良かったんだもんね」
「うん、僕も心配だよ」
フリードと同じく、龍清も心配そうな顔で下を向く。
「大丈夫ですよ。シャーリーさんは優秀ですから、きっと二匹とも、元気になりますよ」
「そうかな……」
「はい。僕のストラーダや、スバルさん達のデバイスを作ったのも、シャーリーさんですから」
「そうなんだ。凄い人なんだね」
心配で少し暗くなっていたが、エリオと会話しているおかげで、

少しだが明るくなった。

「そう言えば、龍清さんも、地球の出身ですよね？」

「ああ、そうだよ」

とここで、奇しくも、女性陣と同じ話題に、この二人も触れていた。

「もしかして、海鳴市の出身ですか？」

エリオがそう聞くと、龍清は首を横に振る。

「違うよ。確かに海鳴市に住んでいたけど、出身は京都なんだ」

「キョウト？」

と、京都を知らないエリオは首を傾げる。

「えっとね、日本にある町の一つで、昔からある古い建築物が結構並んでる、有名な観光都市なんだ」

「そうなんですか」

「うん。それに、京都は古くは日本の政治の中枢で、陰陽師も主は京都、当時は平安京って呼ばれてたんだけど、そこが主な行動拠点だったからね」

「龍清さん、詳しいんですね」

「こう見えても、歴史や天文学とかは得意なんだ。それに陰陽師は天気を読んだり、星を見て占ったりするのが、仕事だったからね」

と、そんな風に会話していると。

「おまたせー、空いたよー」

と、スバルの掛け声を筆頭に、ぞろぞろと出てきた。

「じゃ、僕らも入ろうか」

「はい」

二人が風呂を済ませた後、一行は昼食をとり、その足でデバイスルームに向かった。

「シャーリー、入るわよ」

そう言って、年長者のティアナが最初に入るが……

「……」

突然、そのまま固まってしまう。

「ティア？」

「どうしたんですか？」

固まったのを見て、スバルとエリオが続いて覗き込み、その流れでキャロ、龍清、西麗も次々と部屋の中を覗き込む。

そして、その様子を見て全員固まる。その先には……

「きゃはは、やめてください～」

「く、くすぐってえよー！　あはは！！」

「は～、癒されますね～」

春青、白秋とじゃれ合うリインとアギト、そしてそれを見て和んでるシャーリーがいた。

（うわあ、何かすごいデジャヴ）

（いいなあ～）

（えーっと、何手声を掛ければ……）

（ど、どうしよう）

と、この様子を見たティアナは少し呆れかえり、スバルは羨まし

そうな目で見つめ、エリオとキャロはこの状態をどうしようか困ってた。

「春青！」

「白秋！」

「クキュ？」

「ニャ？」

とここで、龍清と西麗が呼びかけると、さっきまでリイン達とじゃれ合っていた二匹は二人の方を向き、すぐに飛びかかってくる。

「キュ～、キュキュ～！！」

「ニャー！！」

「良かった。元気になったんだね」

「本当。安心したわよ」

二匹が元気なったのを確認して、二人は安堵の表情を浮かべ、同時に顔も明るくなる。

「ところで、どうしてリイン曹長とアギトも居るんですか？」

とここで、再起動したスバルがシャーリーに聞いてくる。

「ああ、はい、なのはさんから二匹を預かった時に、ちょうどお二

人の精密検査も行おうとしてたところなの」
「そうだったんですか」
シャーリーの説明に、キャロが納得したような声を上げる。
「シャーリーさん。ありがとうございます」
龍清は、シャーリーに俺を言って頭を下げる。
ちなみに、いつもの定位置にいない春青はというと……
「キュー！」
「クキューキュキュ！！」
「ニャー！！」
白秋、フリードと共に、デスクの上でじゃれ合っていた。
その様子を、近くで見ているスバルが和んでいるのは、まあ、良しとしよう。
「一週間の訓練で、大分疲労が蓄積してたみたい。これからは不調かなって思ったら、定期的によってね」
「はい」
「それと、検査のついでにこの二匹を調べて見たんだけど」
「何か解ったの？」

「ええ。あっ、その前にこれ、皆に返しておくね」

そう言って、シャーリーはスバル達にデバイスを返してあげる。

「これまでの訓練で収集したデータから、皆に合うように微調整をしたから、今までより動きがよくなるはずだよ」

「あっ、皆そろってるね」

と、ここで、なのはがタイミングよく入ってきた。

「あっ、なのはさん」

「来ましたね。さて、全員揃ったところで、ちょっとこれを見てください」

そう言って、コンソールを動かすと、そこには二匹の、春青と白秋のデータが映し出されていた。

「二匹の基本的な構造は、動物型であることを除けば、リイン曹長やアギトさんと、ほとんど変わりはありませんでした。ある一点を除いて……」

『ある一点？』

全員が疑問符を浮かべると、シャーリーはその一点を指差した。

「ここです」

それは、二匹の体の中心部、魔力を全身に送ってる部分を差す。

「そこって、リンカーコアですよね？」

それを見て、エリオが至極当然の質問をする。

「それが、この二匹のこれは、リンカーコアじゃないんです」

『えっ！？』

これを聞いて、全員が驚く。

「……もしかして」

「……やっぱり？」

ただし、龍清と西麗を除いて。

「二人とも、これが何なのか解るの？」

何か納得した様子の二人に、スバルが聞いてくる。

「それって、五行霊ですね」

「ああ、西麗が持ってたあのロストロギア」

とここで、ティアナが思い出したように言う。

「はい。依然調べた、五行霊のデータと、この二匹のデータが、見事に一致するんです。そしてこの珠を通して、二人の魔力が、二匹に送られているんです」

『へー』

と、シャーリーの説明に、フォワード陣は感心するばかり。

「さあさあ、二匹の事は取り敢えず置いといて、午後の訓練に行くよ」

「あっ、はい！」

「二人は如何？　行ける？」

「大丈夫です」

「もう二匹とも、元気になりましたから」

「クキュー！！」

「ニャー！！」

「よし、じゃあ早速……」

と、全員でシミュレーターに行こうとしたその時、デバイスルーム一体に、赤いランプの点灯と共に、サイレン音が鳴り響くのだった。

第十四話　ファーストミッション（2）（後書き）

若干暗い話を織り交ぜました。明るいばかりよりは、良いかなと思いました。

次回からいよいよファーストミッション、二人の活躍を、お楽しみに！！

第十五話　ファーストミッション（3）（前書き）

一週跨いでしまいました。楽しみにして頂いてる方々、本当に申し訳ありません。

今回はいよいよ最初の任務、面白みはないと思いますが、何卒、よろしくお願いします。

第十五話　ファーストミッション（3）

「まさかこれから訓練って時に出動命令が下るなんてね～」

「本当、凄いデジャヴだったわね」

「「あ、あはは・・・・・・」」

デバイスルームで起こった出来事に、スバルは呑気に、だが懐かしそうに呟く。

その隣では、ティアナが六課時代の初出動の事を思い出して溜息を付き、更にその隣のエリオとキャロは乾いた笑いを浮べていた。

現在、デバイスルームにいたメンバーはヴァイス陸曹の操縦するヘリの中にいる。

理由は先ほどの会話からも解るとおり、デバイスルームでの会話の後、フォワード陣のデバイスと春青、白秋の調子を確かめる為に、いざシミュレーションルームへ足を運ぼうとした矢先、第一級非常態勢を示すアラームが鳴り、特務六課初の出動命令が下されたのだ。

現在、ヘリの中にいるのは、操縦士のヴァイスは当然として、スターズの隊長であるなのはと、副隊長のヴィータ、そしてスバル達旧フォワード陣に、龍清、西麗の９人である。

「それじゃ、今回の任務の内容を確認するよ」

ここで、なのはの言葉と共に、全員がディスプレイを見つめ、任務の内容を確認する。

それによると、ミッドチルダの首都、クラナガンから少し離れた地点で異常な魔力反応を検地したということだ。
当初、地上本部の首都航空隊と陸士部隊から先遣隊を編成し、偵察を行なわせたのだが、その部隊からの連絡が途絶。

続く第二、第三の先遣隊も同様の事態となり、容易ならざる事態と判断した上層部が、特務六課に出動要請を下したということだ。

「つまり私達の任務は、魔力反応の調査と、行方不明の先遣隊の捜索、といったところでしょうか」

「ま、そんなところだな」

これまでの説明から、任務の主旨を理解するティアナに、ヴィータも頷きながら相槌を打つ。

「魔力反応は動く様子が無いけど、予断を許さない状況だから、気を引き締めていこうね」

「「「「はい！！！！」」」」

流石に慣れているだけあって、フォワード陣の返事ははっきりしていた。

それに対し……

「う～……」

「ニャ～」

肩を強張らせ、「緊張しています」と自己主張しているような固まった表情をしながら唸る西麗。
そんな主人の様子など露知らずと言ったように、抱きかかえられている白秋は呑気に欠伸などしていた。

「西麗ちゃん」

「は、はい！！」

そんな様子に気付いたなのはが西麗に話しかける。

「緊張してる？」

「えっと、その……はい」

一瞬、どう返答すればいいのか困ったが、率直に自分の気持ちを答える。

「大丈夫だよ、訓練でやった事をしっかり発揮できればうまくやれるよ」

「はあ……」

そうは言われても、やはり緊張はそう簡単にはほぐれないものである。
とここで、意外な人物によって西麗に助け舟が渡された。

「大丈夫ですよ、西麗さん」

その意外な人物とは、キャロだった。

「私も初めての時は、不安で一杯でしたけど、ちゃんとできたんですから、西麗さんならきっとうまくやれますよ」

「そ、そうかな・・・・・・」

キャロの励ましに、西麗は照れくさそうに頭をかく。

「まあ、私達もいるんだから、そんなに気負わないの」

「そうそう、別に一人でやれっていってるわけじゃないんだからさ」

「自信を持ってください」

「皆……そうだね、緊張しすぎて、ちょっと自信なくしてたよ」

キャロに続き、ティアナ、スバル、エリオからも激励の言葉をもらい、西麗も緊張がほぐれ、自信を取り戻す。

「皆、ありがとう」

「どういたしまして」

西麗のお礼に全員を代表して答えたのはスバルだった。

そしてその様子を見て、なのはも安心したような表情になる。

「ところでよ」

「ん？　何ですか？」

すると、今までその様子を見守っていたヴィータが話しかけてくる。

「アイツは何やってんだ？」

そう言ってヴィータが向いた方向に、全員も視線を向ける。

「……」

その視線の先にいたのは龍清だった。

彼は出動した時から椅子ではなくヘリの床に座り、何処からともなく取り出した式盤図を広げ、これまた何処からともなく取り出した筮竹を使って、さっきからこの場に居る面子には良く解らないことをやっているのだ。

「ああ、あれ？　占いですけど」

『占い？』

西麗の答えに全員が頭に疑問符を浮かべる。

「そ、龍清は朝起きたときとか、何か起こりそうなときに決って占いをするの。それに、龍清の占いは良く当たるのよ」

西麗が説明していると……

「うーん……」

丁度占いを終えたらしく、龍清が唸りながら式盤図と筮竹を片付けていた。

「龍清、どうだった？」

西麗は龍清に占いの結果を聞いてくる。

「正直言うと、あんまり良い結果じゃないね。初任務で言い難いけど、何か良からぬことが起こりそうな気がする」

「キュゥ……」

龍清は申し訳なく思いながらも占いの結果を伝える。
それに追随するように、春青も元気なく声を上げる。

「ねえ、西麗」

「何？　ティアナ」

とここで、ティアナが西麗に問いかけてきた。

「龍清の占いって、そんなに当たるの？」

「百発百中……とはいかないけど、八割がたの確率で的中するよ」

これまでも、龍清の占いは良くも悪くも的中していた。
ある時は川を渡ろうとして豪雨に見舞われ溺れそうになり、また
ある時はチンピラ数人をノックアウト下結果、頭にヤのつく方々に
追い回されたり。

まあだがしかし、この占いのお陰でここまでやってこれたというのも事実なので、あまり馬鹿にも出来ないのだ。

「うーん、その良からぬ事ってのがなんなのか解らないと対処の仕様が無いけど……とりあえず、細心の注意を払うって事でいいかな？」

「そうですね、それが一番妥当かと」

結果がどうあれ、そのような事を言われては、不確定情報といえど疎かには出来ない。

とりあえずなのはの言うとおり、現場では細心の注意を払って行動するようにという事で、全員が同意した。

「おーい、そろそろ目的地に着くぜ」

とここで、操縦席からヴァイスの声が聞えた。

「それじゃ、作戦を説明するね。目的地は森林が生い茂っている為ヘリを着陸させられないから、その上空から降りて調査を行なってもらうよ」

「んで、アタシとなのはは上から指示を出す。後、遅れてフェイトとシグナムもい来るからな」

『はい！！』

と、一通り説明を受け、いよいよ特務六課最初の任務が開始されるのであった。

「ねー、そっち見つかったー？」

「何も、ティアはー？」

「あんた達ねえ……そう簡単に見つかったら、苦労しないでしょ」

鬱葱と生い茂る茂みの中を掻き分けつつ捜索を続ける西麗とスバル。

だが、捜索を開始して1時間も経っていないのにこの様子である二人に、ティアナは呆れるより他になかった。

目的地に到着し、地上に降り立ったフォワード達は、ティアナの提案で三人一組となって捜索を開始することにした。

そして、もう一組のチームと別れ、現在三人は魔力反応が検地された場所へ向っていた。

「っていうかさあ、こんなに植物生い茂ってるのに目的のもの探すって難しくない？」

「まだ物って決まったわけじゃないけどね。それに、反応のある場

所まであと少しよ、文句言わない」

確かに、西麗の言うとおり、視界をも遮るほど生い茂るこの森林地帯で、目的の物を探せというのは酷な話だろう。

そんな愚痴を洩らす西麗に、クロスミラージュで目標地点を確認しながら、ティアナは叱咤しながら、歩を進める。

だが、暫く三人が歩いていると……。

「ん！」

突如、西麗の足が止まる。

「？　どうしたの？」

突然止まった西麗に、スバルが声を掛ける。

だが、西麗はしっ！　とジェスチャーを送りながら、周りを警戒する。

「……白秋が反応してる。何か、嫌な気が漂ってるって」

『グルル……』

警戒する西麗の中では、白秋が今までの猫っぽい仕草ではなく、虎そのものを思わせるように牙をむき出しにし、低く唸る。

そして、やがて西麗の言った事は現実となった。

「気をつけて、何かいる」

西麗の発したその言葉に、スバルとティアナも戦闘体制を取る。
この草木生い茂る森林の中、何処から敵が襲ってくるか解らない。
三人は密集体型を取り、全神経を研ぎ澄まして、敵を待つ。

そして、暫くして物音が聞え、三人がその方向を向くと。

「なっ！」

「何……これ！」

三人の目の前に現れたのは、おどろおどろとし、人の姿をしたもの、鳥の姿をしたもの、獣の姿をしたものなど、様々な姿を持つ化け物の大群だった。

第十五話　ファーストミッション（3）（後書き）

えー、うちのパソコンの関係から、暫く更新速度とクオリティが低下するかもしれませんが、何卒御容赦下さい。

はー、早く一人暮らしに戻りたい。

第十六話　ファーストミッション（4）

「……むっ！」

「如何したんですか、龍清さん？」

「今、何か不穏な気を感じた気が……」

ティアナ達が謎の集団と対峙したその頃、もう一方のエリオ、キャロ、龍清のチームは、もう一つの任務である音信を絶った先遣隊の捜索を行なっていた。

しかし、場所は木々や雑草が森林地帯であり、捜索は現在の所難航を極めていた。

もし先遣隊が全滅していたとしても、生き残りがいれば、その魔力反応を手がかりに捜せるのだが、残念ながら現在もその反応は無い。

その為、三人は逸れないように寄り集まりつつ、地道に捜索していたのだった。

「向こうの方で何かあったんでしょうか？」

「それは解らないけど……嫌な予感がするなあ……」

ヘリの中で行なった占いの結果の事もあり、龍清は不安を隠しきれず、思わず吐露する。

「でも、スバルさんたちなら、よほどの事が無い限り大丈夫でしょうし。上空には有事に備えて、なのはさんとヴィータ副隊長が待機してるんですよ。もしもの事があっても大丈夫だと思うんですけど」

「そうだと良いんだけど……」

現在の布陣と実力を鑑みて、心配気味の龍清にキャロがそう説明するが、龍清はやはり不安を拭いきれない。

「……如何したんですか？　何か元気ないですけど」

しかし、さっきからの龍清の様子は、どうも占いの結果を懸念してるだけではない様子だと思ったのか、気になったエリオが龍清に問うた。

「あっ……うん。ちょっと昔の嫌な事を思い出してね、気が滅入っているだけだよ」

「嫌な事……ですか？」

不思議に思ったキャロが聞くと、龍清も頷いた。

人間である以上、嫌な事、不快に思う事は人生の中で必ずあるものだろう。

それ自体は不思議な事ではないが、このような場所で思い出す嫌な事とはなんだろうかと、二人は疑問に思う。

「うん、僕が小さい頃、大体……6、7歳の頃かな。家の爺様に、「修行じゃ！」とか言われて、夜に家の近くの雑木林に放り込まれた事があるんだ」

「「えっ！？」」

突然のカミングアウトに、二人は思わず驚きの声をあげる。

「いやあ、本当に大変だった。わけもわからずいきなり雑木林の中に、しかも真っ暗な中に突っ込まれたんだもん、スッゴイ怖かったよ」

「そ、それはそうでしょう……」

「ああ……あの時の事を思い出すだけで腹が立ってくる」

とても気持ちの良いものではない昔話をし、湧き上がる怒りを抑える龍清の横でエリオが突っ込む。

まあ、6，7歳の子供がいきなり真っ暗闇の雑木林に放り込まれて恐怖を覚えない筈が無いし、そんな事を思い出せば、それを行なった相手に怒りが湧き上がるのも当然の事だろう。

というか、下手をすれば暗所恐怖症確実のトラウマ物である。

「あ……あの、龍清さん。少し落ち着いてくださ……キャッ！？」

とここで、怒りで拳が震えてる龍清をたしなめようとしたキャロだったが、突如何かに足を引っ掛けて転んでしまった。

「キャ、キャロ！」

「大丈夫？」

当然、転んだ所を見た二人は心配してキャロに近寄る。

「う、うん、大丈夫。でも、一体何に足を引っ掛けて……えっ？」

無事をアピールしつつも、何に足を引っ掛けたのか気になって足

元を見る。
だが、その引っ掛けたものを見たキャロも、その視線を追ったエリオと龍清も、その物を見て絶句する。

それは、一般武装局員に支給される、杖方のストレージデバイスだった。

「これって……デバイス……だよね」

「どうして、こんな所に……って、龍清さん？」

絶句していた二人だったが、ここでエリオは、龍清がデバイスが見つかった辺りの草むらをかき分けて何かを探しているのに気付く。

「……あった。二人とも、これ」

しばらくして、草むらの中から見つけ出し、龍清が二人に見せたのは、エリオやキャロも着てる、茶色を基調とした管理局員の制服だった。

「やっぱりこれって、報告にあった行方不明になった魔道士の人のかな？」

「そうだと思います」
「という事は、この辺りに残りの人のも？」
「そうかもしれない。とにかく、この辺りを捜してみよう」
「「はい」」
既に一種の確信を得ていた三人は、見つかった辺りを重点的に捜索する。
その結果、やはり同様のデバイスや制服が発見された。
「これは決りだね。早速皆に伝えないと！」
「はい！　……あれっ？」
さっそく事の子細をなのは達に伝えようとするが、その時、キャロがその違和感に気付く。
「どうしたの、キャロ？」
「念話ができない……誰とも繋がらない」
「「えっ？」」
突然の言葉に二人も一瞬ポカーンとなる。
「まさか、そんな筈は……あれ？　本当だ」

「どうして何だ？」

始めは信じられなかったが、二人も直ぐに連絡を取ろうとすると、ノイズのようなものが入り混じり、念話が出来なかった。

どうしてかと三人が頭を悩ませた、その時……

「それはこの周囲に、外部からの干渉を遮断する結界を張ったからだ」

「「「！！」」」

突然声が聞え、三人は声のした方向に視線を向ける。

するとそこには、黒い煙のようなものが渦巻いており、やがてそれは、人の形を成していく。

「あっ！　お前は！！」

そして、その声の主を確認すると、龍清は驚きの声を上げ、一気に警戒心むき出しになる。

「久方ぶりか、龍を継ぐ者」

一方、声の主である黒衣を纏った男も、龍清に明確な殺意を持って呟く。

「まんまと罠に嵌ったな」

「という事は、今回の出来事はやっぱりお前が！」

「そうだ。貴様達が私の邪魔をするであろう事は解っていた、だから私は貴様達を抹消することにした。だがただでは動くまい、その為餌を撒き、お前達を誘い込んだのだ」

「そう言う事か。占いの結果に『災いをもたらすもの』とあったからね。そんな奴は僕の知る限りではお前しかいなかったからね」

「ふふふ、さて、無駄話はここまでだ。まずは貴様から消してやる！」

そう言うと、男は杖を龍清に向け、そこから放たれた黒い奔流が襲い掛かる。

「金固符！！」

無論、それでやられる龍清ではない。

すぐさま防御の符を取り出し、黒い奔流を防ぐ。

「ふっ……」

しかし、男は不敵な笑みを浮べていた。

すると突然、龍清の頭上から、巨大な腕が襲い掛かってきた。

「しまった！」

そう思うが、既に防御は間に合わない。

そして、その巨大な腕が振り下ろされ、轟音と共に地面がめり込む。

「ふふふ、他愛も無い……むっ？」

男は龍清が潰れた事を確認しようと、めり込んで出来た地面の穴を覗き込むと、そこに龍清の姿はなかった。

不思議に思い、辺りを見渡していると、直ぐに見つかった。

「大丈夫ですか？　龍清さん」

「う、うん。助かった。ありがとう、エリオ」

「いえ、訓練の時のお礼です」

穴の開いた場所から少し距離を取った場所に、エリオと共にいた。

どうやら、龍清が潰される寸前に、ソニックブームで助け出した

ようだ。

「ええい！　またしても邪魔しおって……」

「フリード、ブラストレイ！」

苦々しく思っている男のところへ、キャロに命じられたフリードがすかさず火球を口から放つ。

男はすかさず手に持ってる杖から黒い障壁を張り、フリードが放った火球を防ぐ。

「おのれ……まあいい、邪魔者がいるようだが、それもこの鋼來がいれば、わざわざ手を下すまでも無いか」

そう言うと、地面で杖を叩くと、下に黒い魔方陣のような紋様が現れ、そこから黒い煙のようなものが現れ、男を包み始める。

「待て！　逃げるのか！」

「貴様を消すのは容易だが、邪魔者がいてはそれも進まん。それに、鬼門を制御せねばならないのでな」

（鬼門？　鬼門だと！？）

「ああそうだ、貴様達を囲む結界はこの鋼來を倒す事で消える。尤も、貴様達がコイツを倒す事など、無いだろうがな」

そう言うと、男は煙に包まれて消えた。

「グウゥウーーーー」

そしてそれと入れ替わるように、うめき声と共に光沢を帯びた肌を持つ巨人が現れた。

「また、でかいのを出してきたもんだなあ」

「えっ？　前にもこんなことが？」

「うん、まあね」

少し呆れ気味に言う龍清だったが、直ぐに表情を引き締める。

「ま、それは兎も角。こういうとき、如何すれば良いと思う？」

そう二人に聞く龍清。

二人は顔を見合わせたあと、それぞれの意見を言う。

「さっきの人は、これを倒さないとここから出られないって言ってました」

「連絡が出来ないから、外の人達に助けを求める事もできない。つまり……」

「そ、これを倒さないといけないって事だよね？」

その言葉に、二人も頷く。

「それに、向こうはやる気満々みたいだしね」

そう言って龍清が指差した所には、再び巨人、鋼來の豪腕が振り

下ろされようとしていた。
程なくしてそれは振り下ろされるが、龍清とキャロが障壁を張って一瞬の時間を稼ぎ、その隙に再び逃げる。
「とにかく、このままじゃ防戦一方だから、攻めに転じようか！」
「「はい！！」」
このままでは何時までも埒が明かない判断し、三人は覚悟を決めて鋼來に振り向く。
そして、それぞれの得物を構え、対峙するのだった。

第十六話　ファーストミッション（４）（後書き）

いつもの時間に更新できず、すいません。

それと私、一昨日の夜から腹が不調を訴えてます。
今日中か明日には治ってると良いなあ。でも治ってなかったらまた定時に更新できないかもしれません。

その辺りの事も、どうか御容赦下さい。

それと予定を変更し、次回は練習を華ね、戦闘描写重視でいき、ファーストミッション編を終わりにしたいと思います。

でも次の任務はどうしよう、あっ、ホテルアグスタ的な話にはしませんよ？

第十七話　ファーストミッション（5）

「キエエエエエ！！」

「アクセルシューター！」

「シュワルベフリーゲン」

奇声を上げながら襲い掛かってくる異形に、桜色の光球と紅い光を纏った鉄球が撃ち込まれ、命中した数体の異形は地面に墜落して行く。

龍清、エリオ、キャロが、今まさに戦闘を開始しようとしていたその頃、他のところでも事態は急転していた。

二組の報告と有事に備え、上空で待機していたなのはとヴィータは、龍清たちの連絡が無い事に、一足先に疑問を抱き、その異変にいち早く気付いた。

そして、三人のいたところに結界が張られたのを感じ、直ぐに急行しようとしたとき、突如二人の元を、スバル達を襲ったのとはまた別の異形の大軍が襲い掛かってきた。

このため、二人は臨戦を余儀なくされ、救出にいけないでいたのだ。

「しつけーんだよ！！」

三又の矛を構えながら襲ってきた異形の突撃をかわすと、ヴィータは手に持ってるアイゼンで異形の背中を勢いよく叩く。

異形はそのまま勢いよく地面に叩きつけられ、その場に噴煙が上

がる。

「レイジングハート！」

《Ｓｈｏｒｔ　ｂｕｓｔｅｒ》

その一方、次々と襲い掛かる異形の群れに、なのはの十八番である砲撃が炸裂する。

桜色の極光が敵を包み、それが晴れると、異形がひしめいていた眼前一帯には何も残っていなかった。

「くそっ！　こいつら、いくらやってもきりがねえ！」

しかし、次々襲い掛かってくる異形たちに、ヴィータが毒づく。

実際、倒しても倒しても、何処からとも無く現れ、物量で攻めてくる異形たちに二人も辟易していた。

その上、今すぐに龍清達を助けに行かなければならないという思いもあって、二人は徐々に焦り始めていた。

「早く助けに行きたいけど……こうも数が多いと、こっちも動くに動けないし」

「だけど、このままやっててもジリ貧だぜ！　どうすんだよ！！」

どうにもならないと解っていても、焦る気持ちから怒鳴り気味に叫ぶヴィータ。

なのはもその気持ちは察するも、未だに好転する気配の無い状況に、焦りを強くする。

しかし、そんな二人の気持ちなど知る由も無く、異形たちは再び奇声を上げて襲い掛かる。

「フォトンランサー、ファイア！」
しかしそこへ、別の方向から金色の魔力弾が異形に向って放たれ、そして貫く。
爆煙が晴れ、異形たちが落ちると、その向こうに人影が見えた。
「なのは、ヴィータ、大丈夫？」
「フェイトちゃん！」
「シグナムにアギト！」
二人の声の通り、現れたのはフェイトとシグナム、そして融合騎のアギトだった。
「どうしたヴィータ。この程度で音を上げるとは、新人どもの教導が忙しくて腕が鈍ったか？」
「はっ！　うるせえ！　コイツらバカの一つ覚えみてえに力押ししかしてこねえから、うんざりしてたんだよ！！」
笑みを浮べながら皮肉気味に言うシグナムに、これまた強気気味に返すヴィータ。
無論、嫌味でも皮肉でもなく冗談であり、ヴィータもそれが解ってるので腹も立たなかった。
「そうだ、フェイトちゃん！　龍清君とエリオ、キャロと連絡が取れないの」

「なんだって！？」

なのはから今の事態を聞き、それを聞いたフェイトも驚きを隠せない。

「直ぐに助けに行こうとしたんだけどよ、コイツらがどんどん沸いて出てくるから手間取ってたんだよ」

「姉御、沸いて出るってコイツらはぼうふらか？」

そして自分たちの今の状況を話すが、その際の表現にアギトが突っ込みを入れる。

尤も、本当に倒しても倒しても次々出てくるため、表現事態はあながち間違ってはいないのだが。

「でもちょっと待って。それって、ティアナたちの方にも敵が来てるって可能性も……」

「うん。でもどっちみち、この敵を何とかしないと、助けにいけないよ」

四人が話してる間も、異形は次々と現れ、四人に襲い掛かる。

一体一体は然程強くなく、歴戦の勇士であるなのは達なら倒す事は造作も無いが、こうも数で攻められては援軍に行く暇など無い。

「ならば……アギト！」

「おう、あれだな！」

ここで、シグナムは事態を打破する為、アギトを呼ぶ。

「「ユニゾン・イン！！」」

そしてそう叫ぶと、二人は光に包まれ、そこにはさっきとは違う髪と騎士甲冑をしたシグナムが立っていた。

「剣閃烈火……」

呟きながらレヴァンテインを構える。

その刀身には炎が燈っており、全てを焼き尽くさんとする勢いであった。

「火竜一閃ッ！！」

そして、かけ声と共にレヴァンテインを横に一閃する。

すると、空を埋め尽くすほどの異形の大軍は炎に飲み込まれ、一瞬にして灰となって消えた。

「流石シグナムさんとアギトだね」

「よし、後はみんなの救援に……」

「待て、テスタロッサ」

足止めをしていた異形の大軍が消え、フォワードの救援に行こうとしたその時、フェイトをシグナムが止める。

「救援には私とヴィータで行く、お前達はここに残れ」

「どうしですか？」

「あれを見ろ」

シグナムが指差した方向には、再び空を覆うほどの異形の大軍が迫って来ていた。

「げっ！　まだくんのかよ！！」

再びやってくる大群を目の当たりにし、ヴィータがそう洩らす。なのはとフェイトも、あれだけの大群がまだやってくるのかと、驚きを隠せない。

「まあ、そう言うわけだ。それに、あの大軍がやってくる方向に何かあるはずだ。お前達はそっちの対処に当たってくれ」

「……解りました」

「心配すんな。あいつらは簡単にやられねえし、あたしらもやらせねえよ！」

心配気味に了承するフェイトにそう言うと、ヴィータとシグナムは二手に分かれてフォワードの救援に向う。

「フェイトちゃん。心配なのは解るよ、でも……」

「解ってる。今は目の前の事に集中するよ」

そう言うと、二人は目の前の大群に再び目をやるのだった。

「リボルバーシュート！」

「クロスファイア、シュート！」

「虎王飛拳！」

一方、謎の魔力反応調査の為に赴いていたスバル、ティアナ、西麗のチームは、なのは達を襲ったのとは別の異形の大軍に襲われていた。

別と言っても、向こうが鳥や蝙蝠などを模したような空を飛ぶ異形だったのに対し、こちらは牛の顔をしたものや巨大なムカデなど、地上の生き物や虫を模したものが多かった。

「ああもう！　数が多いったらありゃしない！！」

「ティアー、砲撃で一双とか出来ない？　これじゃきりがないよ！」

現在三人のポジションは、ティアナを中心にスバルと西麗が１８０度をカバーするような陣形となっている。

大軍に囲まれている以上、フロントアタッカーである二人をカバーし、尚且つ前線向きではない彼女を守るように出来てる陣形である。

「このままじゃ確かにきりが無いけど、収束してる暇が無いのよ！
それにアンタたち、私が準備を整えてる間、援護無しでコイツらの猛攻を防げる？」

「それはちょっときついわね。飛鎌脚！」

ティアナの問いかけに西麗はそう答えつつ、襲ってきた異形に鋭い蹴りをかます。
実際、倒すたびに次の異形が襲い掛かってくるため、格闘戦を得意とする二人もティアナの援護無しではきつい状況なのだ。

「でも、このままじゃどうにもならないし、何とかならないの？」

「今のところはないわね、残念ながら」

「そんな～」

三人とも会話を続けながらも、攻撃の手は緩めなかった。

「っていうかこいつら、一体何処から出てくんのよ？」

「誰かが転移魔法で送ってるのかな？」

攻撃しながら呟くティアナの疑問に、スバルがしごくマトモな意見を出す。
これだけの数が押し寄せてくるのは、誰かが集団転送を行なってると考えた。
だが、ティアナはその考えを否定する。

「それは私も考えたんだけど、集団転送でもこれだけの数を一辺に送ってたら転送する方は直ぐにばてるだろうし、ちびちび送ってたんじゃこんな状況にはならない」

「じゃあ、どうして？」

疑問符を頭に浮べるスバルだが、西麗がふと考えられる原因を口にする。

「あの魔力反応が原因……とか？」

召喚した神速槍で異形を真っ二つに切り裂きながらそう呟いた。

そしてそれにティアナも頷く。

「それしか考えられないわね。恐らく、あの魔力反応がコイツらを呼び出何かなんじゃないかしら」

「じゃあ、あの魔力反応を何とかできれば、この状況から抜け出せるの！？」

「何とかできれば……ね」

そう呟くしかなった。

原因は予測できたが、それに近づく事が叶わないのが現状なのだから。

「とにかく、なのはさん達も事態に気付いてるでしょうし、暫くはこの状況を維持するわよ！」

「オッケー！」

「守りってのは、性に合わないんだけどね！」

そうお互いに確認しあいながら、再び襲ってくる異形の群れに向かい、得物を構える三人であった。

「アルケミックチェーン！」

そして、結界内に閉じ込められた龍清、エリオ、キャロの三人は、結界からの脱出を図るため、謎の男が仕向けた巨人、鋼來（こうらい）との戦闘に突入していた。

再びその豪腕を振り下ろそうとする鋼來に、キャロが出した桃色の魔力光でできた鎖が撒きつき、動きを阻害する。

「一閃必中！」

「龍王破山剣！」

そして動けなくなった所に、ストラーダを構えたエリオと、破山剣を取り出し、一気に斬りかかる。

しかし……

「えっ！？」
「なっ！？」
二人の刃は鋼來の巨体を貫くことも切り裂く事も出来なかった。
そして、腕に巻きついていた鎖を引きちぎり、二人をその豪腕で薙ぎ払う。
「「うわっ！？」」
払われた二人はそのまま吹き飛ばされるが、体勢を立て直して着地した為、地面に激突という事態は避けられた。
「ブラストレイ！」
そこへすかさず、巨大化されたフリードから、普段の姿のそれとは比較にならない火球が放たれ命中する。
「やった！　……えっ？」
命中を確認したキャロだったが、次の瞬間、目の前の光景を見て驚きを隠せなかった。
ブラストレイが命中した箇所は、傷一つ付いてなかったのだ。
「そんな！」
「硬すぎでしょ、どれだけ堅い皮膚なの！？」

龍清が叫んでると、再び鋼來が腕を振り下ろす。
それを難なくかわし、三人は念話で作戦会議を始める。

（どうする？　このままじゃまったく先に進まないよ）

（攻撃をかわすのは何てことないですけど、こっちの攻撃がまるで通じてませんよね、あれ）

先ほどの攻撃を見る限り、三人の攻撃は相手にダメージを負わせるどころか、かすり傷一つつけることはできなかった。
三人は共通の認識として、あの硬い皮膚を如何にかしなければ、事態は好転しないと考えていた。

（エリオ君。ヴォルテールなら、あの巨人に対抗できると思うんだけど？）

（だ、駄目だよ！　確かにヴォルテールなら倒せるかもしれないけど、ここで使ったら火事になっちゃうよ！！）

（そ、そっか……）

何か思いついたキャロだったが、その提案はエリオに即座に否定された。
キャロもそれを使うと何が不味いのか直ぐに理解した。
その一方で、再び龍清を狙って鋼來が腕を振り下ろし、それをひらりとかわして破山剣で攻撃するが、傷付ける事はできなかった。

「たくもう、本当に硬いなあ、まるで鉄みたいに……鉄？」

攻撃しても傷つかないその体に文句を言う龍清だったが、ここで

一つひらめいた。

（二人とも、ちょっと良いかな？）

（はい）

（何ですか？）

（少し、本当に少しでいいから、時間を稼いでくれないかな？）

（何か思いついたんですか？）

念話で時間を稼いで欲しいと言った龍清に、エリオが聞いてくる。

（確証は無いけど、もし僕の読みが確かなら、何とかなるかもしれない）

そう呟く龍清、どうなるかはやってみなければわからないが、今は他に頼る手が無いのも事実。

龍清自身も不安はあったが、このままでは座して死を待つようなものだった。

（……解りました。出来る限りやってみます！）

（私も、何かお手伝いできますか？）

（よし、とりあえずあいつは動きが鈍いから、エリオが動き回っていれば大丈夫だと思う。キャロも暫く空を飛んで注意を引いて。後、強化の準備をお願い）

（はい！）

こうして念話を終えると、龍清は距離を置き、エリオとキャロは鋼來の周りを動き回り、相手を撹乱する。

（よし！　まずは……）

そして、自分の案に乗ってくれた二人の期待にこたえるため、龍清もまた、勝利の布石を敷き始めるのだった。

「着いた」

そして、その結界の外にヴィータは到着した。

その結界の中に、エリオ達が捕らえられいるのだ。

「よしっ、じゃやるか。アイゼン！」

《Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ》

グラーフアイゼンから空薬莢が排出されると、ハンマーのヘッド部分片側にスパイク、もう片方に水神ロケットが現れる。

「ラケーテン……ハンマー！」

そして結界から少し距離を置き、回転しながらアイゼンを結界に叩きつける。

しかし、結界はびくともしなかった。

「ちっ。まあ、こんなもんで壊れるなら、とっくにあいつらが破って出てるか」

ラケーテンで破れなかった事に舌打ちするが、特に期待してなかったのかあっさり一人納得する。

「しかし、ここで時間を食ってるわけにもいかねえ。一気に行くか、アイゼン！」

《Ｇｉｇａｎｔ　Ｆｏｒｍ》

ヴィータのかけ声に反応し、空薬莢を二発排出すると、模擬戦で西麗を驚愕させた巨大ハンマーとなり、一気に振りかぶる。

「ギガント、シュラーク！！」

そしてかけ声と共に、一気に巨大化したアイゼンを振り下ろす。

「ぶち抜けーーーー！！」

かけ声と共にぶつかる結界とアイゼン。

この一撃が、結界内での勝負に影響を与えている事に、この時のヴィータは知る良しもなかった。

「う、うわっ！？」

「な、何なの！？」

そして結界内、鋼來を撹乱していたエリオとキャロは、結界内の振動に気付く。

当然、鋼來もそれに気付き、二人への注意がそれる。

「いまだ！　ストラーダ！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

それを好機と捉えたエリオは、ストラーダを構えて一気に突進する。

その結果、鋼來の足元をすくい、その結果、鋼來は体制を崩す。

「……見つけた！」

するとそこへ、何かを見つけたらしく龍清が叫んだ。

「二人とも、下がって！」

「「はい！」」

そして合図を送り、二人を後退させる。
それを確認すると、四枚の札を空中に投げ、両腕を突き出すと、片腕に二枚ずつ張り付く。
それを確認すると、更に懐から五枚の札を取りす。

「まずは、龍王炎符水！」

まずは炎符水をだし、鋼來の胸の辺りに直撃する。
ダメージないようだが、命中した胸の辺りは真っ赤になっていた。

「そして……これだ！」

そう叫ぶと、取り出した五枚の札を空中に投げ、印を組む。
すると、投げられた五枚の札は円環状に配置され、回転しながら一つの円状の物が出来上がる。

「巽の方、風門解放！！」

そう叫ぶと、円状の物体は開き始める。

「風門転送、行雲流水！」

そう言って印を組んだ手を突き出すと、風門から大量の水が現れ、再び鋼來の胸の辺りを直撃する。
炎符水によって熱せられた部分は大量の水によって冷やされる。
無論、鋼來はダメージを受けた様子はなったが、変化は直ぐに訪

れた。
冷やされた直後、胸の辺りにひびが入り始めたのだ。
日々は次第に大きくなり、鋼來もそれに伴い苦しみ始める。
「今だ！　二人とも！！」
「はい！　キャロ！」
「ブーストアップ！」
龍清が合図を送ると、すぐさま二人も攻撃に入る為、キャロがエリオに補助魔法をかける。
「ストラーダ！」
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》
そして再び空薬莢が排出され、ストラーダの槍先に電撃が纏われる。
「紫電一閃！！」
そして、かけ声と共に鋼來の胸元に向って突っ込み、一気に貫いた。
「グォオオオオオオオオ！！！！」
鋼來は悲鳴に近い断末魔を上げ、そのまま倒れる。
それと同時に、結界が硝子のように砕ける。

「や、やった……」

その様子を見て、ホッとして気が抜けたのか、そのまま地べたに座り込む。

「龍清さん！」

「大丈夫ですか！」

突然のその様子に、驚いた二人が近づく。

「うん、大丈夫。ちょっと気が抜けて……ははは」

乾いた笑いを浮べながらも無事をアピールする。

「おーい、お前ら！」

とここで、ヴィータがやってきた。

「ヴィータさん」

「大丈夫か？　いきなり結界が壊れたからよ、何があったんだ？」

「えっとですね……」

状況説明を求められ、三人はさっきの出来事を話すのだった。

「ぬぅ、鋼來がやられたか……」

一方、巨大な魔力反応の正体である、巨大な魔力の渦の近くに立つ黒衣の男は苦虫を潰したような顔をしていた。

「だが、奴らは我が眷属たちの構成で疲れ果てている筈だ、この調子で行けば勝てる。この鬼門ある限り、まだ勝機はある」

男が言う魔力の渦「鬼門」から、絶え間なく異形が現れる。

このために、物量で押し込めると考えた男は勝機を確信していた。

「ふふふ……我らの悲願、何人たりとも邪魔はさせ……ん？」

男が何か訝しげ、そ方向を見つめたその時……。

桜色と金色の光が、鬼門に向って放たれ、命中する。

「なっ！　き、鬼門が！？」

光が晴れると、そこにあったはずの鬼門は消えていた。

「シーリングシュート。久しぶりにやったけど、流石なのはだね」

「フェイトちゃんも、流石だよ」

その極光が放った正体は六課分隊長二名、なのはとフェイトであった。

「おのれー！　よくも邪魔を！！」

鬼門が消えたことに憤りを表すと共に、再び杖を振りかざし、黒い魔方陣の中に消えて行く。

「待ちなさい！」

男が転移しようとしてるのを確認し、フェイトが一気に加速して捕まえんとする。

しかし、彼女が到達するより前に、男は消えてしまった。

「……逃げられた」

そう呟くのでいっぱいだった。

（おーいなのは、フェイト）

とここで、ヴィータから念話が入った。

（ヴィータ？　どうしたの？）

（悪いんだけどさあ、ちょっと手を貸してくれねえか？）

（どうしたの？）

（それがよ、龍清が力が抜けてるらしくてな、エリオとキャロも無

事だったんだけど、遺留品を運ぶので手一杯でよ、アタシじゃ身長差あるからさ、運ぶの手伝ってほしいんだよ）

（あはは、初めての任務だもんね、解った）

（よろしくなー）

そう言うと念話が切れる。

「いこっか」

「うん」

さっきの念話で多少悔しさがまぎれたのか、そう返すと、フェイトはなのはとともに飛んで行く。

こうして、特務六課最初の任務は終わりを告げたのだった。

第十七話　ファーストミッション（5）（後書き）

今回はお休みさせてください。

今の今まで執筆してて、疲れてます。

とりあえず、次の任務の内容も考えないと……。

第十八話　ミッションアフター

「ん、ん～……」

陽光が燦燦と降り注ぐこの日、その太陽の光に照らされ、龍清は目を覚ました。

「あれ？　……僕何時の間に部屋に？」

目を覚まして起き上がり、あたりを見渡して、そこが自分の部屋だと直ぐに解るが、何時部屋に入ったのかと首を傾げる。

そこで昨日の事を思い出しながら、何故部屋にいるのかを考え始める。

（えーっと、昨日は訓練を終えて、デバイスルームに行って説明を受けてたら、出動要請が出て……）

まずは日々の日課ともいえる訓練の事から始まり、そこからデバイスルームでの説明、ファーストミッションへと考えをシフトして行く。

そして、ミッションの途中での出来事も整理していき、途中で力が抜けて動かなくなってしまい、なのはとフェイトにヘリまで送ってもらった事なども整理して行く。

その時は、あまりの自分の不甲斐なさに恥かしくなってしまう。

（そ、それで、ヘリに乗って六課の隊舎に戻って……ここから先が思い出せない）

ヘリに揺られながら戻ってる途中からの記憶が途切れており、気が付いたら部屋で寝ていたという結果に至った。

ただその時、ミッション中の出来事や、ヘリに揺られてる途中、隣で西麗が大口を開けて寝ていた事を鑑み、一つの結論に至る。

「寝ちゃったのか……」

確かにヘリに揺られてる間、疲れによるものなのか、睡魔に襲われてうとうとしていた記憶があり、そこから先の記憶はやはりなくなってる。

その様子から察するに、恐らくヘリに揺られてる間に疲れがどっと眠気として襲ってきて、そのまま勝てずに眠ってしまったのだろう。

そして、眠ってしまった自分達をたたき起すのもかわいそうだと思ったなのは達が、自分と西麗を部屋まで運んでくれ、そのまま朝を迎えたのだろうという結論に至った。

「……ちょっと情けないや」

力になるとか言っておきながら、助けになるどころか迷惑を掛けてしまったと、少し自己嫌悪に陥ってしまう。

別にこの程度の事、彼女達は気にしていないだろうが、当人としてはそうもいかなかったりする。

「……シャワーでも浴びてこようか」

今気づいた事だが、自分の姿が制服（上着はハンガーに掛かっていた）姿であり、しかも、ヘリの中から今の今まで眠っていたのだとすれば、当然、夕食も入浴もしていないのだ。

この後、訓練や朝食などで人と顔を会わせる事を考えると、流石にこのままというわけにはいかないのだ。

そう考え、着替えを持って部屋を出ようとしたとき、頭に重みを感じた。

「ん？　春青？」

「クキュー」

重みの正体は、自分のユニゾンデバイスである春青だった。

「一緒にシャワー浴びようか」

「キュー！」

そう問いかけると、春青も嬉しそうに鳴いた為、一緒に部屋を出たのだった。

「あっ……」

「「あっ」」

制服に着替えてシャワールームを出ると、スバル、ティアナとばったり鉢合わせした。

「龍清、おはよう」

「お、おはようございます」

返答に困ってると、さも当然のようにスバルが挨拶を交わしてきたので、龍清もとりあえず挨拶を返す。

「昨日はお疲れ様。大変だでしょ？」

「え、ええまあ……終わった後寝ちゃったみたいでしたし」

「まあ、初めての任務で緊張していたんでしょ。それにエリオとキャロから聞いたんだけど、結構大変だったみたいね」

「あはは……でも、二人がいたお陰で助かりましたから」

スバルから労いの言葉をもらった後、自分が寝てしまった事を自嘲気味に言うが、エリオ達から事情を知っていたらしく、ティアナもスバルもさして気にしている様子ではなかった。

その様子を見て、龍清は少し胸を撫で下ろす。

「あれっ？　そういえば西麗は？」

とここで、スバルが西麗がいない事に疑問をあげる。

訓練の時も、大概二人で着たりしてただけに、彼女がいない事が

不思議だった様だ。

「西麗なら、まだ部屋で寝てますよ。朝に弱いものだから、中々起きないんですよ」

「そういえば、訓練始まる前は結構眠たそうにしてたわね」

龍清の軽い説明に、これまでの様子を思い出して、ティアナの言葉と共に三人一緒に苦笑する。

訓練が始まる前の彼女はかなり寝起きと寝相が悪く、起きてもかなりの寝惚け眼で足取りも若干危なかったりする。

「でもそろそろ起さないと、訓練に間に合わないよ？」

「ええ、ですからこれから部屋に戻って起してきます。すみませんが、遅れるかもしれないとなのはさんに伝えておいてくれませんか？」

「解ったわ」

「オッケー！」

言葉を交わすと、龍清は二人と別れて部屋を後にするのだった

数分後、甲高い金属同士がぶつかる音と「ニャアーーーー！？！？」という鳴声に似た悲鳴が、二人の部屋の当たりから聞えたのであった。

「はーい、今日はここまで」

「「「「「ありがとうございました！」」」」」

「「「あ……ありがとう……ございい……ました……」」」

そして、朝6時から始まった朝錬も終了し、なのはのかけ声にフォワードたちは元気よく答える。

約二名、息切れを起こしてはいるが。

「今日は昨日の任務の事でブリーフィングを行なうから、午後の訓練はなし。皆も疲れてると思うから、終わったらゆっくり休んでね」

『はい！！』

息切れを起してた二人も、何とか息を整えて返事をして、その日の訓練は終了した。

そして所変わって、六課の食堂。
朝錬を終えた一行は、六人と三匹揃って朝食をとっていた。

「それにしても……本当によく食べるわね、あんた達」

「「ふぇ？」」

わかめスープを啜りながら西麗が呆れ気味に言う方向には、うず高く詰まれたパスタ二つを次々その胃袋に収めていく、スバルとエリオの姿があった。

既におなじみになりつつある光景であるのだが、やっぱり見てるほうとしては圧巻の一言である。

「それだけのものが一体何処に入ってるのよ？」

「えっ、これぐらい普通だよね？」

「はい」

そんな疑問さえ、二人はさも当然のように答えた為、西麗もそれ以上追求できず、頭を抱え込むのだった。

「気にするなって言われても、やっぱり気になっちゃいますよ。一体二人とも、それだけの量が何処に行ってるの？」

定食の焼き魚を口にしながら、龍清も思わず胸のうちの疑問を口にする。

「まあ、なれないうちは思うのも無理ないけどね。その内気にならなくなるわよ」

「はい、私もそうでしたから」

思わず疑問を浮べた龍清だったが、経験者の談と言うべきなのか、ティアナとキャロのその言葉に、「はぁ」と気の抜けた返事で返すしかなかった。

「そういえばさ」

とそこへ、スバルが龍清に一つ聞いてきた。

「龍清って、占いが得意なんだよね？」

「はい、そうですけど？」

そう答えると、スバルは突然言って来た。

「じゃあさ、ちょっと見せてくれない？」

「えっ？」

突然のそんなお願いに、龍清も驚く。

「ちょっとスバル！　いきなり何言い出すの！」

「だってさー、この前の任務の時の占いもぴったりだったじゃん。凄く気になるよ！」

任務の時の占いも、簡易的ではあったが、占いの内容が見事に当たっていたのだ。

それに、スバルも年頃の女の子ということなのか、こういう事に興味心身だ。

「いや、見せるのは一向に構いませんけど、この後皆さん仕事ですよね、見せてる暇無いんじゃあ？」

「あっ……」

「そうよ。これから任務の報告書を書かなきゃいけないのに、そんな事してる暇あるわけ……」

「面白そうやなー」

龍清の言葉にスバルも詰まり、そこにティアナの追撃があったのだが、そこへ思いもよらぬ援護がスバルについた。

全員が振り向くと、六課の部隊長はやてがそこにいた。

「んまあ、仕事を放り出すのは駄目やから、機会があったらって事でええかな？」

「ええ、別に構いませんけど」

はやての提案に、別に見られて困るものでもなかったので、龍清も抵抗なく承諾する。

「さて、そろそろ朝の時間も終わるで。報告書、しっかり作製してな」

「うぅ、書類仕事かあ……ティア～「自分でやりなさい」……まだ何も言ってないのに～」

書類仕事が苦手なスバルは欝な気分になり、ティアナに助力を乞うも、一言でばっさり切られ、ｏｒｚとなる。

そんな姿に、龍清とエリオとキャロは苦笑し、西麗は呆れながら酢豚を口に頬張るのだった。

そして午後、ブリーフィングルームに六課の隊長陣、フォワード陣、ロングアーチスタッフが集められた。

「さて、皆に集まってもらったのは、昨日の任務での事や」

はやてがそう言うと、フォロスクリーンに、例の魔力の渦と、なのは達を襲った異形達、そして、龍清達の言う黒衣の男の映像が映った。

それを確認すると、隣にいたシャーリーが説明を始める。

「まず、皆さんを襲った、こちらの異形の集団についてですが。調べたところ、該当するデータは存在しませんでした」

コンソールを叩きつつ、シャーリーは件の異形たちが管理局のデーターベースになかった事を伝える。

ロングアーチのメンバーは驚愕の表情をしていたが隊長陣とフォワードメンバーは然程驚いてはいなかった。

「んで、この手の事に詳しそうな専門家は如何見る？」

「そこで僕に振りますか……」

突然話題を振られ、龍清が呆れた表情で呟く。

「私見ですけど、普通の生き物が何かの要因で変異した、と考えるのが普通ではないでしょうか？」

「まあ、それが普通だよね」

「そうですね」

至極真っ当且つ論理的な返答に、執務官二人も同意する。
まあ、普通に考えればそう考える方が自然であるのは明白である。
「まあ、そうやね。とりあえず、こっちは数でせめて来る事以外は大した問題やないから良いけど、本題はこっちや」
そう言って次にスクリーンに映ったのは、例の魔力の渦だった。
「こっちについては、まだ詳しい情報がないのでなんとも言えませんが。恐らく、転送魔法の一種だと思います」
「そうだよね、その渦から次々さっきのが出てきたわけだからね」
「あれは厄介だったぜ。次々沸いてくるんだもんな」
渦の説明について、様子からなのはが同意し、その時の事を思い出していたヴィータが肩を竦めながら言う。
倒しても倒しても次々とその渦から沸いてくる、実際に相手しただけに、その厄介さは身にしみていた。
「この渦。確か、鬼門って言ってたよね？」
「うん。そうだったね」
「鬼門……ですか……」
「どうしたんですか？」
鬼門という言葉に思うところがあったのか、考え込む龍清が気に

なり、キャロが聞いてくる。

「なんや、何か心当たりでもあるんか？」

「ええ、まあ……」

一手間置いて、龍清は鬼門について喋り始める。

「鬼門というのは北東の方角の事で、陰陽道では鬼が出入りする方角として、万事に忌むべき方角なんです」

おー、と、なのは、はやて、西麗の地球出身組は感心する。

後はちんぷんかんぷんであったが、スバルにいたっては頭から若干煙が出始めている。

「えーっと……つまり、良くない事が起こりやすい方角、ということです」

簡単に説明して、その場にいた全員が納得する。

「まあ、それはともかく。この鬼門という渦が、異形たちを出す転送魔法の一種という事はまず確実やな」

「そうですね」

「そして、この事件の容疑者として、この黒衣の男の逮捕を重要課題としてこの案件に対処します！」

『はい！！』

こうしてブリーフィングは終わり、一同は新たな決意を持ってこの案件に取り組む事を誓うのだった。

第十八話　ミッションアフター（後書き）

いつもどおりの滅茶苦茶展開でしたが、いかがだったでしょうか？

とりあえず自分の力量と実家のパソコンの状態では、これが限界です。

とりあえず感想だけでなく、ここが駄目、こうしたほうがいい、という指摘も下さい！

第十九話　執務官のお手伝い（前書き）

今回はD級管理者「永雛」様の御提案により、サイドストーリー的な話にしたいと思います。

まずは導入部から、それではどうぞ

第十九話　執務官のお手伝い

「……暇だね」

「そうね～」

「クキュー」

「ニャー」

いつものようになのはの朝練を受け、終了後に朝食をとった二人と二匹は、六課隊舎内をただ歩いていた。

以前前述したとおり、嘱託とはいえ、二人は民間協力者という立場なので、六課の事務仕事などには基本参加しなくてもいいのだ。そのため、基本的に六課全体が忙しくなる８時から１２時程のこの時間帯は、基本的にフリーで暇なのだ。

「でもさ、このままでいいのかな？」

「何が？」

「ほら、僕達民間協力者って事になってるらしいけど、皆が一生懸命仕事してるのに、こうやってぶらぶらしてるってどう？」

「……確かに」

龍清の言い分も尤もだった。

協力者とは言え、民間人に正規局員と同じ仕事を全て押し付ける程、管理局も血も涙もないわけではない。
まして二人は志願して危険な任務に前線メンバーをとして出てもらってるのだ、これだけでも十分ありがたい事だ。

しかし、任務がない時は何処もそうだが、この六課も平和そのもの。
非番の局員以外は皆仕事に勤しんでいるが、万年非番のような二人にとって、任務以外の仕事など無縁そのものだった。

しかし、自分から協力するといっておいて、これは如何なものかと、龍清は常々思っていたのだ。

「でもさ、任務以外であたし達にできる事ってあるの？　書類仕事とか出来ないわよ」

「そ、それは……」

だが、西麗の言葉に直ぐに詰まってしまう。

任務以外でいざ手伝える事となると、スバルたち前線メンバーや、ロングアーチスタッフが毎日やってる報告書作製などの書類仕事だが、１８歳の二人には、当然書類の作り方のノウハウなどない。
他にも仕事は山ほどあるが、どれも自分たちに出来るものがあるのかと言われれば、残念ながら肯定は出来なかった。

「……自主錬でもしてようか」

「そうね」

「キュー」

「ニャー」

とりあえず自分たちに今できる事といえば、任務の時、足を引っ張らないように鍛えておく事。

そう考えた二人と二匹は、時々やってる自主錬をしようという結論に至り、移動を始めるのだった。

「あれっ？　はやてさん？」

「本当だ、フェイトさんとティアナもいる」

移動を始め、食堂についた二人はある光景を見た。

それは、向かい合わせに座って難しい顔をしている、六課の部隊長はやてと、凄腕の執務官、フェイトとティアナだった。

「如何したんですか？」

「あっ、龍清君。西麗ちゃんも」

三人の顔を見て心配になった龍清が、はやてに声を掛ける。
龍清と西麗自身、三人のこんな顔を見るのは初めてといえば初めだったので、何かあったのかと気になったのだ。
「実はな、本局と地上本部から、フェイトちゃんとティアナにそれぞれ仕事が入ったんよ」
「えっ？　二人同時にですか？」
「んまあ、ほぼ同時やな」
はやての話によると、ついさっき、執務官であるフェイトとティアナの二人に、本局と地上本部から、それぞれ仕事が入ったのだ。
フェイトは本局から、とある管理外世界でロストロギアと思しき反応があったため、その調査と確保。
ティアナは地上本部から、違法魔道師による連続殺人事件の捜査協力であった。
「でもそれなら、早く行った方がいいんじゃないんですか？」
「それはそうなんやけど……」
「何？　何か不都合があるの？」
「どっちも、何があるのか解らないから、助っ人に誰かについてきてもらおうと思ったの」
「でもタイミングが悪くてね、皆殆ど出払ってるのよ」
龍清の尤もな言い分に言いよどむはやてに、気になった西麗が問

うと、フェイトとティアナがその理由を話す。

ロストロギアと言うのは、その大半が危険なものであり、いくら凄腕執務官のフェイトといえど、一人で行くのは危険を伴う。

ティアナのほうも、違法魔道師というのは殺傷設定で魔法を使う連中もいるので、一人で出すわけには行かない。

そこで、誰かに助っ人として同行してもらおうと思ったのだが、実はそれぞれにタイミング悪く同じ様な内容の以来や要請が来たらしく、殆どの人が居ないのだ。

「なのはちゃんとヴィータは地上本部の方で新人たちの教導、シグナムとアギトも首都航空隊に出向してておらんし、スバルはさっき防災部隊の方で救助要請が届いたって言うんで飛び出していってしもうたし、エリオとキャロも、密猟者の確保に協力して欲しいって要請があって行ってしもうたんよ」

「そ、それは……」

「前線メンバーが殆ど抜けてる。この上あの男が何か行動起したら対処できないんじゃあ……」

恐ろしく間の悪いこの状況に、龍清と西麗も顔を青くする。

この上フェイトとティアナも居なくなるわけなので、もし例の黒衣の男が何かリアクションを起したり、最悪六課を襲撃されたりしたら一溜りもないだろう。

とは言え、この六課には龍清と西麗に、はやて、シャマル、ザフィーラ、リイン、ヴァイスと、それなりに戦えるメンバーがいるので、全く無防備というわけではないのだが。

「まあ、それは兎も角としてな、二人に同行できる人がいなくて困ってるんよ」

「ロストロギアは危ないものも多いから、シャーリーは連れて行けないしね」

「あたしも補佐がいればいいんだけど、いないからね」

ロストロギアの危険性を重々承知してるフェイトは、後方でのバックアップ主体の自身の補佐、シャーリーを危険な目にあわせるわけには行かない。

ティアナも一人で行動するのは今に始まった事ではないが、内容が内容だけに、念には念を入れたいのだ。

「あのお、でしたら……」

とここで、話を粗方聞いた龍清は三人にとってとんでもない事を言い出した。

「僕達を連れて行くってのは如何でしょうか？」

「「「えっ！？」」」

突然の提案に、三人は素っ頓狂な声を上げる。

「要するに、連れて行く人がいなくて困ってるんでしょ？　あたし達もやる事無くて暇を持て余してた所なのよ」

「人手が足りないって言うなら、僕達がそれぞれ行けば大丈夫でし

ょ？　お手伝いくらいは出来ますし」

「そ、それはまあ、確かにそうやけど……」

確かに今誰もが都合がついて一緒にいける人がいないため困っていた所だ。

正規局員であるなのは達はこのように都合がつく事もあるが、それに対し、嘱託である二人は基本的に仕事がないため、都合がつく事は殆どない。

しかし、龍清の提案にはやて達は難色を示す。

「でも、ロストロギアって危ないものが結構あるし、ティアナの所だって殺人事件を起してる魔道師が犯人だよ？　危険だよ」

「フェイトさん、僕達ここに来る前から何度も危険な目に遭ってきますし、この前だって任務で危ない目に遭ったんですから、今更ですよ」

「って言うか、あたしもそのロストロギアの保有者だし」

「そ、それは……」

すっかり忘れてしまいがちだが、西麗もロストロギアとして、春青と白秋の核となってる宝珠を所持している。

一応申請は通っているし、危険度も低いので、さして問題はないのだが。

「それに……協力するって言っておきながら、皆が働いてるのに何もしないっていうのは心苦しいですし、『このままでいいのか？』って思うんです。だから、できる事は協力したいんです！」

そして最後に、常々思っていた胸のうちを打ち明ける。

別に誰かにそんな感じの事を言われたからとか、そう言うのはない。

寧ろ、目の前にいるはやて達も含め、この六課の人々は良い人達ばかりだ。

民間協力者とは言え、やる事もなく、こうやって暇を持て余してる二人に苦言を言ったりせず、二人が自主錬してる姿を見かけたりすると、逆に励ましの言葉を掛けてくれたりするのだ。

だが、いやだからこそ、自分たちにも何か力になれる事があるのではないかと、常々思い悩む事があった。

それに、自分から力になると、協力すると言っておきながら、このままで良いのかという思いが、これに拍車を掛けていたのだ。

西麗もそこまで思いつめてるわけではないが、このままではいけないという事は常々思っていた。

その為、口にこそ出さなかったが、その目は龍清のそれと同じだった。

「「「……」」」

龍清の胸のうちを聞いた後、その場を暫く沈黙が支配する。

「フェイトちゃん、ティアナ」

が、その沈黙を、不意にはやてが破る。

「正直な、私も六課の任務以外で二人を危険な目にあわせるのは感

心せえへん。でもな、二人がここまで力になりたいといってるのに、その熱意を無碍にするのは、もっと悪いとおもわん？」

その言葉が意味する所はただ一つ。

了承、ということだった。

「それじゃあ「但し！」……但し？」

意味を即座に理解し、龍清が喜びの声を上げようとしたとき、はやてが釘を刺してきた。

「現場では二人の指示に従うこと。それと、突っ走って無茶したりせえへんこと。これが守れんようなら、同行は認めんで！」

その時のはやての顔は、二人が見た事もないほど真剣な顔だった。

その顔に二人は一瞬たじろぐが、直ぐに少し間をおいて言った。

「解りました。必ずお約束します！」

「当然の事だもんね、了解！」

「よし、それならオッケーや。ほな二人とも、お願いできる？」

「はい！！」

こうして、はやての了承を得て、二人はフェイトとティアナの手伝いをする事になった。

が、その直後、はやてがこんなことを言って来た。

「せやけど、万が一約束を破ったりしたら、なのはちゃんに砲撃を

撃たせるさかい、覚悟しいや？」

「「そ、それだけは御勘弁をーーーーー！！」」

悪戯じみた笑みを浮べながら言ったはやての言葉に、二人は訓練の時の恐怖を思いだし、お互いに抱締めあって震えだす。

そしてそんな二人に、フェイトとティアナは苦笑しつつも、内心同情するのだった。

～オマケ～

地上本部、訓練場にて

「……くしゅん！」

「ん？　どうしたなのは、風邪か？」

「ううん、何か私の話をされたような……」

こんなやりとりが、あったとかなかったとか

第十九話　執務官のお手伝い（後書き）

次回からこの話を本格的に進めます。
まずはフェイトの方から。誰がついてくのか、どんな内容になるのか、次回をお楽しみ下さい。

第二十話　執務官のお手伝い　（ロストロギア捜索）（前書き）

我が城、金沢の下宿先に戻る目処が立ちました。

９月１９日の月曜日です。

つまり、実家のよぼよぼパソコンでの執筆は、これで一旦終了です。

次からはマイパソコンでの執筆になるので、実家での執筆時より執筆し易くなる為、実家にいる間の執筆での経験なども活かし、よりよい作品に仕上げたく存じます。

さて、今回はフェイトのロストロギア捜索の話し。

ついて行く人物は誰か、そして一体どうなるのか？

それでは、どうぞお楽しみください。

第二十話　執務官のお手伝い　（ロストロギア捜索）

「ここですか？」

「うん。そうだよ」

ここはとある無人世界。

その地に、フェイトと龍清は降り立った。

二人がやって来た目的は一つ。

この地で反応が出たというロストロギアの捜索、ならびに確保である。

「それで、そのロストロギアはどこに？」

「もらったデータによると、もう少し先みたい」

二人はフェイトのデバイス、バルディッシュに表示されるデータを頼りに歩き出した。

空を飛んで移動するほどの距離でもなかった為、歩いて行ったのだが、暫くすると、反応のあると思しき場所に辿り着く。

「……これって」

「遺跡だよね、どうみても」

それは、遺跡と呼ぶのにふさわしい建物だった。

「この中に、そのロストロギアが？」

「反応はこの中からしてるみたいだし、間違いないと思う」

バルディッシュに映し出されてるデータには、間違いなく遺跡の中からロストロギアの反応がいている。

これはつまり、この中にロストロギアがある事を示している。

「でも、これそのまんま入って良いんでしょうか？　こういうのって、中に侵入者撃退用のトラップが仕掛けられてたりするんじゃ……」

「でも、見た限り他に入り口もないし、ここでもたついていても仕方ないよ。罠があるかもしれないけど、とりあえず、進むしかないと思う」

「ですよね」

龍清は罠が仕掛けられてる事を考えるが、ロストロギアを確保するのが、管理局員の務め。

執務官であるフェイトは無論の事、嘱託魔道師である龍清もそうなので、あーだこーだ言ってもこの中に入らねばそれをなせない。

と言うわけで、フェイトと龍清は遺跡の中に入り、データを頼りにロストロギアを捜索するのだった。

「何ていうか……意外なほどすんなり進みますね。逆に怖いぐらいです」

「気を抜いちゃ駄目だよ。まだ道半ばだから、罠がないとは言い切れないよ」

「解ってます」

遺跡の中に入って捜索を続けるフェイトと龍清だったが、現在の所、罠らしい罠に遭う事もなく、すんなり進んでいる。

だが、目的のロストロギアは発見できてないので、今だ気が抜けないのは事実である。

ちなみに遺跡の中は暗く、本来なら道も壁も見えないのだが、フェイトが掌に変換資質で電気の球体を作っており、龍清も火式を使って火球を浮遊させて明かりを灯している。

「それにしても、無人世界って聞いてましたけど、こんな遺跡があるなんて思いませんでしたよ」

明かりを灯して共に移動しながら、龍清はふと思った事を口にする。

無人世界と呼ばれてるとおり、この世界には人っ子一人いない。

それは歩いている時に改めて認識したが、まさか人がいない世界に遺跡があるとは想像してなかったのだ。

「無人世界と言っても、大きく分けて二つあるんだよ？　一つは元から人が住んでいない世界。もう一つは、何らかの要因で滅びて、人がいなくなってしまった世界」

「滅びてって。それって、ロストロギアの所為だったりですか？」

何らかの原因と聞いて、龍清は真っ先にそう聞く。

ロストロギアの事は嘱託試験勉強で習っており、その危険性に思わず息を呑んだほどだ。

更に聞けば、自分たちの故郷である地球でも、世界を滅ぼしかねないロストロギアが二度事件を起したということも聞いていたので、聞かずに入られなかった。

「勿論、ロストロギアが原因だったりもするよ。でも、戦争だったり、質量兵器……ああ、質量兵器って言うのは、魔力を使わない兵器の事ね。地球で言う所の爆弾とか核兵器とか、そういうのね。そういうのも原因だったりするから、一概にはいえないんだけどね」

「そうですか。でも、この世界は……」

「多分、後者の世界だと思う」

遺跡があるという事は、この世界に文明が存在した事を示している。

しかしそれなのに無人世界になっていると言う事は、何らかの要因でこの世界に住んでいた人が滅んでしまったのだろう。

「諸行無常、盛者必衰って奴か……」

隆盛を誇ってたものもいずれは衰退する。
世の理とは言え、龍清は虚しさを感じずにはいられなかった。
「でも、こういう遺跡の調査って、本来はユーノの専門なのになあ」
「ユーノ？」
話を続けながらも、ロストロギアの捜索を続けている最中、フェイトがそう呟く。
その際出た聞きなれない人物の名に、龍清は思わず首を傾げる。
「ああ、ユーノって言うのはね、私やなのはの知り合いで、無限書庫の司書長を務めてるの。ユーノは一族がこういう遺跡の発掘とか、考古学の専門だから、連れて行けば助けになっただろうなあって」
「へえ。確かに、遺跡調査なら、そう言う人の出番でしょうね」
「うん。おっと、そろそろ目的地に着くみたい」
バルディッシュに映し出されるディスプレイに、ロストロギアの反応が強くなった事が示されると、二人はおしゃべりをやめ、気を引き締めつつ。その目的地に向うのだった。

二人がついたのは、明らかに部屋と呼ぶにふさわしい広さの場所だった。

天井に穴が開いており、そこから光が差し込んでいるため、部屋は通路と違って非常に明るかった。

目の前に石段がある事意外は特に何の変哲もなく、その石段の上に、怪しい光を放つ円形の鏡があった。

「あれが、ロストロギアでしょうか？」

「反応はあの鏡からしてるみたいだから、間違いないと思う」

バルディッシュに映し出されているディスプレイを見て、龍清の問いにフェイトは確信を持って答える。

「じゃあ、あれを封印して持ち帰れば、この任務は終了ですね」

「あっ、封印は私がするよ。龍清、まだそう言う術知らないでしょ？」

「あっ、はい。じゃあ、お願いします」

「うん、任せて」

そう言って、フェイトがロストロギアの封印に掛かろうとした時だった。

突如、ロストロギアが輝き始めた。

「こ、これは一体！」

「龍清！　気をつけて！！」

「あっ、はい！　金式！！」

容易ならざる事態と察したフェイトの言葉に、龍清は咄嗟に金式の札を取り出し、それを地面に貼り付け、自分とフェイトと、ロストロギアの間に壁を作る。

暫くすると、輝きは収まっていった。

「大丈夫ですか？」

「平気。龍清は？」

「僕も平気です。それより、さっきの光は一体……えっ？」

「どうしたの？　龍……清……」

龍清は目の前を見た途端、我が目を疑った。

その様子に気づき、フェイトも前を向くと、驚きを隠せず絶句する。

何故なら、ロストロギアのある前を見た途端、二人が目にしたのは……

「わ、私？」

「どうして、僕が……」

もう一人の「自分たち」だったのだから。

「ど、どういうことですか？　何で、僕達が……」

「きっと、ロストロギアが発動したんだ」

突然の事に困惑する龍清に、こういう場に慣れているのか、フェイトは冷静に予測する。

「えっと、こういう場合って如何すれば？」

「落ち着いて。とりあえず、あの私達が何もしないなら、このまま封印処理を続行しよう」

少しばかり落ち着きがなくなっている龍清、それを窘めつつ、これから取るべき行動を言うフェイト。

とりあえずの行動として、目の前の自分たちが危害を加えるような事をしなければ、問題なく封印処理を行うという。

暫く様子見をしていたが、特に向こうは動く気配がなかった。

「……来ないみたいですね」

「そうだね。じゃあ、このまま封印を行なおうか」

とりあえず危害は加えてこないと判断し、ロストロギアの封印に取り掛かろうとする。

しかし、封印処理の為にフェイトがロストロギアに近づこうとしたその瞬間。

「！！」

突如、もう一人のフェイトが襲い掛かってきた。

「くっ！」

振り下ろされるサイズフォームのバルディッシュをすぐさま防ぐが、その力に驚いていた。

（この私、見た目だけじゃない。踏み込みの速度、振り下ろすスピードまで同じだった！）

まるっきり自分と同じ動きをした目の前の自分に、フェイトは驚きを隠せない。

「龍王、炎符水」

しかしそこへ、今まで静観していたもう一人の龍清が、炎符水を放ってくる。

「しまった！」

もう一人の自分が攻撃を仕掛けてきた時点で、もう一人の龍清が攻撃を仕掛けてくる事は十分に予測できた事だった。

しかし、目の前の自分があまりにも自分とそっくりな動きをしている事に気がいってしまい、その事を完全に失念してしまっていた。

「龍王炎符水！」

しかし、フェイトに向って放たれた炎符水は、もう一つの炎符水によって阻まれる。

それを放ったのは、自分と一緒に来た龍清だった。

「このっ！」

そして龍清は破山剣を手に、もう一人のフェイトに斬りかかる。

すると、もう一人のフェイトはすぐさま離れ、龍清の攻撃をかわす。

「フェイトさん、大丈夫ですか！」

「うん、大丈夫。ありがとう、龍清」

「いえ、礼には及びません」

龍清のお陰で危機を脱したフェイト。

礼を言った後、龍清と共に目の前の自分たちに向き直る。

「龍王、破山剣」

すると、もう一人の龍清も、その手に破山剣を持つ。

だが、もう一人のフェイトもそうだが、よく見てみると、破山剣を持っている手が左手だった。

「炎符水だけじゃなく、破山剣まで一緒なんて」

「ここまで来ると、私の方も油断は出来ないね」

さっきの様子を見るに、おそらく向こう側のフェイトも、同じ技、同じ魔法を使ってくることだろう。

自分たちと全く同じ武器、同じ技を使う事に驚く二人に対し、向こうのフェイトと龍清はバルディッシュと破山剣を構える。

「これって、倒さないと封印は出来ないって事ですかね？」

「そうだね。でも気をつけて、ただの偽者ってわけじゃないみたいだから」

「はい！」

そして二人もまた、お互いの得物を構え、もう一人の自分たちと

相対するのだった。

「フォトンランサー！」

「フォトンランサー」

まず、攻撃を仕掛けたのはフェイトだった。
一番先にはなったフォトンランサーに、偽フェイトもフォトンランサーを放ち、相殺する。

「はあっ！！」

相殺されたと知るや、今度はバルディッシュをサイズフォームにして偽フェイトに斬りかかる。
無論、偽フェイトもバルディッシュをサイズフォームにしてこの攻撃を防ぐ。

「火招符」

そしてその後ろから、偽龍清が火球をフェイト目掛けて飛ばしてくる。

「水式、水流符！」

だがそれを、龍清が水式の符を投げて発生させた水の壁で防ぐ。

「お前の相手はこっちだろ！」

そしてそう叫ぶや、破山剣を持って偽龍清に斬りかかる。

これを偽龍清は、懐から符を取り出して地面に貼る。

すると、地面から壁が現れ、龍清の攻撃を防ぐ。

「むぅ、見た目とか武器だけならまだしも、人の使う術までそっくりコピーしてるなんて、何かいらつくなあ」

目の前にいる自分の偽者の挙動を見て、龍清はつまらなさそうに呟く。

実際、偽者が使ってる陰陽術は、幼い頃から苦労と努力を重ねて手にしてきたものだ。

それを、ロストロギアの力によるものとはいえ、あっさり相手に使われているとあっては、龍清じゃなくとも面白くはないだろう。

「龍清」

とここで、偽者と近接戦を演じてたフェイトも、様子を見る為に一旦離れ、龍清と合流する。

「大丈夫？」

「ええ、何とか。それにしても、人が苦労して身につけた術をああも簡単に使われるって、こんなに気分が悪いものなんですね」

「あはは。私も対峙して少しビックリしてるよ。私ってこんなに強かったんだなあって」

率直に今自分が思ってる事をお互い口にする龍清とフェイト。

これまで数度の攻撃で解った事は、目の前の自分たちは容姿だけでなく、武器、術、それらを使用する際の癖などまで全てをコピーしている。

唯一の相違点は、全ての動作等が鏡に映ったように逆である事である。

実際、偽者のフェイトも龍清も、バルディッシュと破山剣を持っている手がオリジナルと逆向きである。

「それでどうしましょう？　このままだときりがありませんけど」

「そうだね。でも、どうすれば……」

とは言え、お互い互角であれば、このままでは勝てないまでも負ける事はないだろう。

しかし、未来永劫この場に留まるわけにもいかないため、如何にかしてこの分身を倒さねばならない。

「せめて、如何にかして動きを止められないかな？　そうすれば、その隙にロストロギアを封印できるのに」

「うーん……あっ」

するとここで、龍清が何か思いついたような顔をする。

「あの、フェイトさん」

「ん？　何？」

「少しだけ、気をひきつけてもらえませんか？」

耳打ちするようにそう呟く龍清。

向こうも特に動き出す気配がなかったため、フェイトもその呟きに耳を貸す。

「どうにかできるの？」

「ええ、まあ。ただ術式の準備に少し時間が掛かるんです。その間、どうにかしてあの偽者たちの注意を僕から逸らしてくれませんか？」

龍清は既に懐に手を忍ばせてあるが、準備に掛かるのか、不安そうな顔をしている。

「……解った。やってみる」

「すいません。なるべく早く終わらせます」

しかし、フェイトは龍清を信じ、囮役を買って出る。

それを聞くと、龍清はフェイトの後ろに隠れ、術式の準備に取り掛かる。

（とりあえず、あの二人を龍清から引き離そう）

大して広くはない部屋だが、それでも、少しでも引き離しておけば、それだけ龍清の身に降りかかる危険は少なくなる。

そしてフェイトは何より、この二対の偽者を自分にひきつける方法について、既に予測が立っていた。

「はあっ！」

暫く様子見をした後、構えを取った刹那、ソニックムーブで一気にロストロギアの鏡に近づく。

しかしそれは、二体の偽者によって阻まれてしまう。

が、これはフェイトにとって予想の範疇だった。

（やっぱり、この二人はこのロストロギアを守ろうとする。まあ、このロストロギアが生み出したんだから、当然といえば当然かな）

この二人が現れた時、最初は何もしなかったのに、フェイトがロストロギアに近づこうとした瞬間、攻撃を仕掛けてきた。

それはおそらく、ロストロギアの防衛機構か何かが働いて、近づくフェイトを敵と認識して、攻撃を仕掛けたのだろう。

先ほどの行動から、そう察するのは決して難くなかった。

（でも、これは逆に利用できる。この偽者たちはロストロギアを守る事を優先する。その習性を逆に利用すれば……）

そう考えていた刹那、後ろから偽龍清が斬りかかる。

それをバルディッシュで防ぐが、その後ろから偽フェイトが斬りかかる。

「っ！！」

身を屈めてその攻撃をかわすと、偽龍清の剣を弾き、体勢を立て直して偽フェイトに攻撃を加える。

無論、再びその攻撃は止められるが、直後、フェイトの周りにスフィアが現れる。

「フォトンランサー、ファイア！」

そして現れたスフィアから、フォトンランサーが放たれる。

無論、よく出来ているとは言え、至近距離からの攻撃に対応できる筈もなく、偽フェイトはフォトンランサーをもろに食らって吹っ飛ばされる。

「ハーケンセイバー！」

そして吹っ飛ばされた偽フェイトに向って、ハーケンセイバーを放つ。

「金固符」

しかしそれは、二人の間に割って入り、金式の術を放った偽龍清によって防がれる。

それを防いだ後、偽龍清は破山剣で斬りかかる。

「フォトンランサー、ファイア」

そしてその後ろから、偽フェイトによってフォトンランサーが放たれる。

偽龍清の攻撃を防ぎつつ、そのフォトンランサーをプロテクションによって防ぐ。

（龍清、早くして。流石に私でも、何処まで持つかわからない……）

偽者の自分、そして偽者の龍清の攻撃に、流石に自分でも何処まで持つか不安がよぎる。

その後も二人の攻撃をフェイトは度々危機に見舞われるが、何とか捌き、攻撃をかわす。

（フェイトさん！　準備できました！）

とここで、龍清から準備完了の念話が届く。

（これから術式を発動しますので、もう少し頑張ってください！）

（解った！　任せて……！！）

準備が終わり、これから発動するとの事で、引き続き発動までの時間を稼ごうとするが、その刹那、フェイトは顔を青ざめた。

何故なら偽者の自分が、砲撃の準備をしようとしていたのだ。

しかも、その砲撃を放とうとしている軸線上には、龍清が印を組んでいたのだ。

「トライデント、スマッシャー」

そして準備の終わった偽フェイトが、砲撃を龍清に向けて放つ。

「龍清！」

フェイトが叫ぶが、その直後……龍清のいた地点で大爆発が起こる。

それが、砲撃が直撃したせいだと理解するのに、時間は要らなか

った。

「龍……清……」

フェイトは完全に、最悪の事態を想定してしまっていた。

あの砲撃を受けて、無事でいられることなど無きに等しい。

既にその考えが、フェイトの頭の大半を占めていた。

しかし、暫くすると、変化が訪れた。

（これは……霧？）

突如、部屋が霧の様な物に包まれ始めたのだ。

程なくしてそれは、フェイトも、偽者たちも包み込んでしまった。

視界が利かなくなった偽フェイトと偽龍清は、暫くあたりを見渡していたが、突如、二人の目の前に影が現れる。

すると防衛機構によるものなのか、偽者二人はその影に襲い掛かる。

しかしその直後、偽者二人は長方形の金色の箱のようなものに閉じ込められた。

「えっ？　あれは一体？」

霧で視界が利かないフェイトだったが、その金色に光る箱のようなものが見え、それに疑問の声をあげる。

「……捕まえたよ」

とそこに、別の声が聞えてきた。

そしてその声を聞いたフェイトは、すぐさまその声の正体が解った。

「その声は……龍清！　龍清なの！！」

「はい、何とか間に合いました」

その声の主とは、やられたと思われ龍清だった。

「無事だったんだね！」

「ええ、何とか間に合いました。術式発動の直後に水流符で防御したんです。危機一髪でしたよ」

話によれば、準備が完了した術式を発動させた直後、流水符を発動させて、間一髪砲撃を防いだという。

しかし、かなり僅差だったらしく、後一歩遅ければ、間違いなく砲撃の餌食になってたところだろう。

「それよりフェイトさん。早く封印を！」

「う、うん！　でも、この霧で視界が……」

そう、ロストロギアを封印しようにも、この霧が視界を遮っており、封印を行なえないのだ。

「大丈夫です。案内役がいますから」

「案内役？」

程なくして、龍清の言う案内役が現れる。

「キュー、キュキュー」

「春青！？」

それは龍清のユニゾンデバイス、春青だった。

「えっ？　って事……龍清、今融合（ユニゾン）してないの！？」

そう、春青がここにいると言う事は、今の龍清はユニゾンしていない、いわば丸腰の状態と言う事だ。

「大丈夫です。それより春青、フェイトさんを！」

「キュー！　キュー！！」

「あっ、春青！」

突如飛んで行く春青を見失わないようにフェイトも追いかける。
程なくすると、そこには光り輝くロストロギアが置かれてる石段の前に着く。

「これなら……よし！」

そう言うと、バルディッシュをロストロギアに当てる。
程なくして、ロストロギアは光をなくした。
封印がなされた証拠だった。

そして暫くすると、霧も晴れた。

そして再び部屋内を見渡すと、そこには龍清と、結界内に閉じ込められた偽者二人が見えた。
だが、見えて程なくして、偽者は消えてしまった。
「どうやら、間に合ったみたいですね」
「龍清、大丈夫……って、怪我してる！！」
フェイトは改めて龍清様子を見ると、制服の左腕の部分が焼け焦げており、そこから血が滴っていたのだ。
「あっ、本当だ。術式を維持するのに集中して気が付きませんでした。やっぱり水式じゃ駄目だったか」
「と、とにかく！　ロストロギアも確保したし、早く戻って治療しないと！！」
こうして、ロストロギアを確保する事に成功した二人は、遺跡を後にして、次元航行艦へと戻って行ったのだった。

「っ……思ったより酷かったなあ」

ここは次元航行艦の中、現在龍清とフェイトはその中にある休憩所の椅子に腰掛けていた。
彼の左腕には包帯が巻かれており、医師によれば、一週間は動かさないようにと言い渡されたのだった。

「御免ね、油断してた。まさか狭い部屋の中で砲撃を使うなんて思ってなくて」

「いえ、僕も少し高を括ってましたから、ある意味自業自得ですよ」

フェイトにしても龍清にしても、まさかあの狭い室内で強力な砲撃魔法を撃ってくるとは思ってなかった。
下手に使用すれば、部屋全体が崩落して、自分たちは愚か、偽者やロストロギアも巻き込む危険があったのだから、そんな事はしないだろうと、可能性は低いだろうと思ってたのだ。

「キュウ……」

「大丈夫だよ、春青」

心配そうに傷を見つめる春青に、龍清は頭を撫でながら呟く。

「とりあえず、一週間は動かさなければ治るそうですし、心配要りませんよ」

「うん。でも、本当に御免ね」

心配要らないとは言うが、やはり気にしてるのか、フェイトは再び龍清に謝る。

「でも、龍清がいてくれたお陰で本当に助かったよ。あのロストロギア、きっと私一人だったら、もっと苦戦してたと思う」

「そんな事ありませんよ。でも、お役に立てたのなら嬉しいです」

フェイトにお礼を言われて、龍清も嬉しくなる。

「さてと、ティアナさんの方は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ。ティアナはこういう捜査結構慣れてるし」

「そうですか、まあでも……」

途中で言葉を区切ると、龍清は苦笑しながら言った。

「きっとその犯人、自分のやった事を凄く後悔するだろうなあ」

「そうだと良いんだけど、連続殺人の犯人って、中には自分の快楽の為に事を起すような人もいるから……」

「いや、きっと後悔しますよ。だって、西麗がいるんですから……」

「？？？」

龍清のこの言葉を、この時のフェイトは理解できなかったが、六課に戻ってきた時、この言葉の意味を知る事になるのだった。

第二十話　執務官のお手伝い　（ロストロギア捜索）（後書き）

やっぱり最後が何かグダグダになったと思う。

しかし、この更新を持って、実家での執筆は終わりです。
月曜に帰るので、そこから我が城での執筆が再び始まります！

よりよい作品に仕上がるよう努力しますので、どうか、これからもよろしくお願いします。

次回はティアナの担当です。

相棒は勿論西麗、そして龍清の言葉の意味とは……

第二十一話　執務官のお手伝い　（殺人犯捜査）（前書き）

今回はもう一つ、ティアナと西麗の話です。

ただ、やはり後半が滅茶苦茶になってしまった気がしますので、どうかご容赦ください。

第二十一話　執務官のお手伝い　（殺人犯捜査）

「ここが、噂の現場？」

「噂のじゃないけど、まあそうね」

龍清とフェイトがロストロギアの捜索を行ってた頃、地上本部からの依頼を受けたティアナと、その手伝いの為について来た西麗は、クラナガンのある場所にやってきた。

目的は、近頃クラナガンを騒がせている、連続殺人事件の捜査であった。

「じゃあ、事件についてもう一度確認しておくわよ」

「ほーい」

到着すると、ティアナはクロスミラージュを使って、今回の事件の捜査資料を確認する。

事の発端は１０日前、一人の女性の遺体が発見された。
死因は刃物で心臓を一突きされたこと、ほぼ即死の状態で、凶器などは見つかっていない。
事件場所は人通りが少なかったため目撃者などがなく、唯一の手がかりとしては、現場にかすかに魔力反応が残ってたことから、犯人が魔導師であることだけだった。

その後も、同様の手口で一人、そして先日、二人も犠牲者が出たのだ。

「その話を聞く限りだと、刃物の形をした魔力弾で心臓部分にぐさりって感じかな？」

「まだそうとは言い切れないわよ？　心臓に一突きなんて、包丁でもできるからね」

「まあ、それもそうだけど」

違法魔導師の仕業とあって、西麗の考えもありと言えばありだが、実際にそうだと決めつける事は出来ない。

今現在の情報では、考えれば他にも方法はいくらでもある。

一口に刃物と言っても、それが魔力弾だという確証につながるものは無く、魔力反応だって、それが攻撃に使われたという確証がないのだから。

「とにかく、まずは現場を当たってみましょう。何か見落としてるかもしれないし」

「現場検証は捜査の基本ってね。了解！」

彼女たちが現場に来たのも、何か見落としで、物証が残ってるかもしれないという推測からであった。

ティアナの掛け声に、西麗も了承。そのまま二手に分かれて、現場の周辺の捜索に掛かるのだった。

「っで、何も見つからなかったと」

「うん……」

一時間後、二人は途中経過の為に集まったが、結果は芳しいものではなかった。

事件はあると通りとその周辺で起こっているのだが、共通として、昼は人通りが平均的に少なく、夜は全く人気が無くなるのだ。

つまり、証言らしい証言が取れないのだ。

「まあ、こっちも特に物証とか証言が取れたわけじゃないから、別に責めるつもりは無いけど」

「って言うかよく考えてみたらさ、事件発生から十日も経ってるわけでしょ？　もう犯人、物証になりそうなもの持ち去って、ここから逃げたって可能性は？」

「それは考えられるけど。それだったら、不審人物がうろついていたって証言があってもいいはずじゃない？　人通りが少ないからって、誰も通らないわけじゃないんだし」

西麗の言葉に、ティアナはそう反論する。

確かに人通りが少ないッと言っても、人っ子一人通らない場所などそうはない。
まして夜はともかく、昼はそれなりに人が通ることもあるので、もし犯人らしき人物がうろついていたりするのなら、証言がないなどと言う事は無い。
無論、相手が自分の姿を不可視にする魔法を使ってたりすれば、話は別なのだが。

「殺された被害者たちに、共通点とか無いの？」

「今調べてもらってる最中。でも、犯人が誰なのか目星もついてないし、何が解るか……」

「はあ、完全に手詰まりかあ……」

そう言って西麗は深いため息をつく。

「あたし、ちょっと担当の所にこれまでの捜査経過とか聞いてくるから。悪いけど、ここ任せていい？」

「はいはい。どうせ手詰まりだしね。ここからなるべく動かないから、なるべく早くねー」

「ええ。早めに戻るから、それまでお願いね」

そう言ってティアナは車に乗り込み、そのまま現場を去っていった。

「はあ……任せるって言われても、物証も証言もなし、それでここに残ってどうしろと？」

あからさまな愚痴を言う西麗だが、引き受けた以上、ほっぽり出すこともできない。
それに、クラナガンの地理もよく知らないわけなので、その場で待ってるしかない。

「ニャウ……？」

「あっ、白秋。って言うかあんた、今の今まで寝ていたの！？」

「ニャ？」

愚痴を零しながら待ってると、西麗の腕の中で眠っていた白秋が目を覚ます。
白秋は現場まで移動中、ティアナの車の中で眠りについた。
そして、今の今まで西麗の腕の中で眠っていたのだ。

「はあ、あんたって時々、大物なのかそうじゃないのか、解らなくなることがあるのよねー」

「ニャ？」

西麗のぼやきに、白秋は首を傾げる。

物事に動じないのは大物の証ともいえるが、主人である自分がせっせと聞き込みとかをしてるのに、その腕の中でのんびり寝ていたのだ、本当にそうなのか解らない。
尤も、ユニゾンデバイスとは言え、東西南北を守護する四神の一匹なのだから、大物と言えば大物なのだろうが。

「……ニャ！」

すると突然、白秋は西麗の腕の中から飛び出し、近くの路地裏に消えてしまう。

「あっ！　ちょっと白秋！！」

そして西麗も、その後を追って路地裏に入る。

「ニャッ！　ニャッ！」

そこには、ごみ箱に爪を立てて昇ろうとしてる白秋の姿があった。

「ちょっと白秋、何やってるの！　そんなことしたら……」

西麗が駆け寄るが、時すでに遅し。

「ニャッ！？」

突如、ごみ箱は白秋の体重によって、そのまま音を立てて倒れてしまう。

「あちゃ～……」

西麗は顔に手を当てながら、「やっちゃった」的な顔をして呆れた。

「白秋、大丈夫？」

「ニャ～」

西麗が呼ぶと、倒れたごみ箱から、白秋がひょっこりと姿を現した。
けがの類はなさそうだが、ごみをかぶってる様子だった。
「全くもう、あーあーこんなに散らかして……」
西麗は白秋についてるごみを払うと、そのまま抱きかかえ、散乱したごみを立て直したごみ箱に入れていく。
その最中、一つの袋に目が行く。
「何この袋？　まあいいや、取り敢えずこれもゴミ箱に……」
入れようとしたが、その手が突如として止まる。
何故なら、その袋は一部が破けていたのだが、その破けたところから。
「……えっ？」
何か、赤いものがこびりついた刃物のようなものが顔を出していたのだ。
（えっ？　何コレ？　赤いのがついてるし、刃物みたいだけど……これってもしかして……）
嫌な予感が浮かんだその時。
「あれっ？　西麗、どこ行ったのー！」
通りの方から、西麗を呼ぶ声が聞こえた。

恐らく、ティアナが戻って来たのだろう。

「ティ……ティアナ！　ティアナーーーー！！」

そして、その声を確認した刹那、大慌てで西麗はその袋と白秋を持って駆け出すのだった。

所変わって、ここは殺人事件の担当をしている陸士部隊の隊舎。

「結果、出たわよ」

「どうだった？」

「ビンゴだったわ。あのナイフにこびりついてた血痕と、被害者の血液が一致したそうよ」

西麗がごみ箱から発見した袋の中身は、血の付いたナイフだったわけだが、解析してみたところ、被害者の血液と、ナイフについていた血痕が一致したのだ。

白秋の毛並みをブラシで整えながら、西麗はティアナから報告を

受けた。
ちなみに、先ほどのごみ箱のごみが付着したために、白秋は西麗と一度風呂に入っており、西麗の髪と白秋の毛は湿り気を帯びていた。

「それと、こっちで捜査経過とか聞いて、気になったことがあるの」

「気になった事？」

西麗が首を傾げると、ティアナはクロスミラージュにその情報を映し出す。

「今までの犠牲者は四人、そのうち三人は、外見上のある部分が共通してるの」

「ある部分？」

「髪よ」

そう言って映し出されたディスプレイには、今までの犠牲者の顔が映し出された。

「最初の被害者を含めた三人は、皆髪の色が金髪だった。だけど、三人目とほぼ同時に見つかった四人目の女性は髪を染めていたけど、色は赤、地毛の色も茶髪だったのよ」

「それが何なの？」

「あくまで推測なんだけど、犯人は、金髪の女性を狙ってるんじゃないかしら？」

ティアナの立てた推測はこうだ。

・犯人の狙いは金髪の女性（理由は今もって不明）

・何らかの方法であの場所、或いはその周辺で待ち伏せし、目標を発見すると、バインドを掛け逃げられないようにする。

・その後、ナイフで心臓を刺し、殺害。

・人通りが少ない事と、その時誰にも見られなかったことから、日を置き、同様の犯行を実行。

・しかし、三人目を殺害したことさい、四人目の被害者にその現場を見られてしまう。

・そこで口封じのため、被害者を殺害、遺体を別の場所に移動させた。

と、大筋でまとめればこのようになる。

「まあ、あくまで推測だから、確証はないけどね」

そう、これはあくまで推測であり、可能性の一つでしかないのだ。確たる物証や証言が無い以上、これに縛られるのは危険である。

「でもま、確かめる方法はある」

「そうなの？」

「ええ。その為に、ちょっと手伝ってもらえないかしら？」
確認の意味を込めてなのか、ティアナは西麗にそう聞いてくる。
「勿論！　って言うか、そのためについて来たわけだからね」
「そうだったわね。じゃあ、ちょっと耳を貸して」
そして、西麗に耳打ちをし、その確かめる方法と言うのを伝える。

その夜、事件のあった通りの近くを、一人の金髪の女性が歩いていた。
すでにあたりは暗く、周りには人の気配などなかった。
その女性は、家路を急ぐように速足で歩いていた。
だが突然……
「！！？」
突如、女性の体を光る輪のようなものが拘束する。

「……見つけたぞ」

そしてその目の前から、一人の男が姿を現す。
その手には、包丁が握られていた。

「お前が……お前がいけないんだ……」

何かをぶつぶつ呟きながら、男は包丁をちらつかせる。

「飛んで火にいる夏の虫とは、正に、このことだ！！」

そう言って男は、ナイフを片手に女性に近づく。

しかし……

「それは、こっちの台詞よ！」

突如、バインドされてる女性が、回し蹴りをかましてきた。
男は突然の事に反応できず、そのまま回し蹴りを喰らって吹っ飛ばされる。

「な！　何！？」

突然の事に男は驚くが、その隙に、オレンジ色のバインドを体に掛けられる。

「ふぅ、本当に引っかかるとはね。流石、執務官殿と言うべきかしら？」

「いや、あたしもまさかこんな簡単に引っかかるとは、正直思ってなかった」

金髪の女性が冗談混じりで言うが、奥の方から現れたオレンジの髪の女性は、それに呆れ気味に言う。
そのオレンジの髪の女性は言わずもがな、ティアナである。

「ところでさあ、何時までこうしてるの？」

「あっ、そうね。ご苦労様」

そう言って指を鳴らすと、金髪の女性はその姿を真の姿に変える。

金髪は真っ黒な黒髪になり、顔も元気っぽい顔になる。
その正体は、西麗だった。

「な、何が、どうなって？」

「あんたはまんまと罠にはまった、そう言う事よ」

西麗の言葉に、後ろのティアナ、そしていつの間にかそばにいた白秋が頷くのだった。

「さてと、陸士部隊にはさっき連絡したから、もうそろそろ来ると思うけど。その前に、何で金髪の女性を狙っていたのか、動機を聞かせてもらおうかしら？」

「くっ……」

ティアナの言葉に、男は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「全部、全部あいつが悪いんだ！」

「あいつ？」

その後、程なくして男は動機を話す。

男は、もとは管理局の武装局員だったという。
魔力は少なく、唯の武装局員だったが、彼は一人の女性のために

一生懸命働いた。
管理局で稼いだ給料は、生活費を除けば、その大半が女性に貢がれた。
だが、ある日任務で負傷し、職務への復帰ができなくなったという。
するとその女性は、忽然と姿を消してしまったというのだ。
それを男は、「自分に魅力が無くなったから」だと思い込み、行き場のない憤りを、今回の犯罪でぶつけていたのだという。
「……呆れた」
「そんな動機で……」
「そんな動機！　貴様たちにとってはそうだろうが、俺にとっては大事に問題なんだ！！」
動機を聞き、そのくだらなさに呆れる西麗とティアナに、男が逆上する。
「そうだ、すべてはあいつらが悪いんだ！　金髪の女全てが悪いんだ！　だから……」
男が力説するように叫ぶが、その途中……
「ふん！」
「ぐはっ！」

「えっ！？」

突如、西麗が男を殴る。
平手打ちではなく、グーで殴ったのである。

「な、何をする！」

「座る」

「はっ？」

「良いからさっさと座る！」

怒ろうとする男に、西麗はものすごい剣幕で座るよう強制する。
その様子に思わず、男は座り込むが……

「正座！」

男は胡坐をかいて座ったため、西麗は正座をするように命じる。
その剣幕に気圧され、男は反射的に正座になる。

「あのさあ、もうちょっと冷静に考えればさ、何でいなくなったのかとかわかるでしょ？　なのに何それ？　自分に振り向きもしなくなったからってやつあたり？　すっごい神経疑うんだけど？」

「なっ！」

「それにさ、唯のやつあたりならまだいいけど、あんた人殺してるのよ？　それについては何の罪悪感もないわけ？」

「そ、それは……」

「大体アンタさあ。まず自分が見向きされるような人物だって思ってるわけ？　鏡見て自分の胸に手を当てて聞いてみなさいよ！　そもそも……」

二時間後……

「それにあんたは……」

「あ、あのさあ、西麗」

「何？」

「そろそろやめてあげない？　そいつ、顔真っ青よ？」

ティアナに言われ、男の方を振り向くと、男の顔は顔面蒼白となっており、視線の焦点が合っていないようだった。

二時間にわたる正座と、西麗の説教のダブルパンチを受けて、心身ともに疲弊してしまったようだった。

「うーん……まだ言い足りないけど。ま、ティアナに免じて、この位で勘弁してあげる。あっ、白秋預かってくれてありがとう」

説教タイムを終了すると、西麗はいつの間にか眠ってしまっている白秋をティアナから受け取る。

彼女の足元でいつの間にか丸くなって眠っていた白秋を、ティアナが抱きかかえていたのだ。

その後、男はやってきた陸士部隊に引き渡され、この事件は終わりを告げたのだった。

「あんたってさ、よくあんなに説教できたわね」

その後、隊舎へ戻る途中、ティアナは運転しながら西麗にそう呟くのだった。

「ああ、あれ？　だってさ、むかつくじゃん。あんな理由で人を殺すなんてさ」

「まあ、気持ちは解るけどね。でもあそこまでされてるのを見てたら、あいつに同情しちゃうわよ」

先ほどの様子を見て、ティアナは思わず苦笑する。

引き渡す際、男は二時間にわたる正座によって足が痺れてしまい、まともに歩くことすらできなかった。

しかも、焦点がまともに定まっていなかったために、その足取りは足の痺れと相まってかなり覚束なかったため、陸士の魔導師たちに後を任せたのだった。

「まあ、昔は私もされてたからね」

「誰に？」

「うちの爺様。かなり厳しい頑固者でね、あたしがやんちゃして悪戯したりするたびに、良く正座させられて、長いと一日近く説教されたわ」

「あー、その影響ね」

「まあね」

そんな他愛のない会話をしながら、二人は六課の隊舎へ戻っていくのだった。

オマケ

六課帰還後……

「と、いう訳なんですよ」

「あはは……龍清の言ってたことって、こういう事だったんだね」

のちにこの話を聞いたフェイトは、龍清の言葉の意味を理解するとともに苦笑しつつ、その犯人に同情するのだった。

第二十一話　執務官のお手伝い　（殺人犯捜査）（後書き）

後半やっぱり滅茶苦茶になってしまった感が。

なんでだろう？　一応頭で考えてる通りには書けてると思うんですが。

まあ、今回はご都合主義が入ってるかもしれませんが、ご容赦ください。

次回はちょっとブレイク話、原作キャラを出そうかと考えてますが、来週にするべきか、その次にするべきか。

誰が出るかはお楽しみですが、皆さん、どちらがいいでしょうか？

第二十二話　龍虎のクラナガン見学　（前篇）（前書き）

今回は一寸ほのぼの系の話。

特に事件らしい事件は、この段階では出しません。

第二十二話　龍虎のクラナガン見学　（前篇）

あれから三日、特に変わった様子も報告もなく、六課前線メンバーは、今日も今日とて、なのはの教導を受けていた。

ただし、前回の任務で負傷した龍清は、まだその傷が癒えていないため外され、ヴィータ監修の元、陰陽術の練習をしていた。

本人は左手さえ動かさなければ大丈夫だと、参加を志願していたが、なのはとティアナから（凄い威圧付で）、「無理はしないように」と言い渡されたため、仕方なく、皆から少し離れた位置で行っている。

「しっかし、お前のその術、見れば見るほど不思議だよな」

龍清の練習を見守りながら、ヴィータはそう呟いた。

「お前のその、陰陽術だっけ？　パッと見見た感じ、補助系の魔導師のそれと似てるんだよなあ」

「そうなんですか？」

術の練習を一通り終えた龍清がそう聞くと、ヴィータは頷く。

「あたしもなのはと同じで教導官やってるから、いろんなタイプのやつを見てるからな。お前の術は見た感じ、キャロやシャマルと同じ何だ。あの二人も、回復、防御、拘束と、補助系の魔法を一通り使えるしな」

ヴィータの言うとおり、龍清の陰陽術五つのうち四つは、攻撃と補助どちらに分けるかと言われれば、後者の方に当たる。

身体強化の木式、味方の援護主体の補助及び防御の土式、防御と拘束の金式、回復主体の水式。

どれも自身、並びに味方を間接的に助ける補助的な要素のものだ。

「だけど、補助系魔導師はそれ系のを複数扱える半面、攻撃には向かないのが大体セオリー何だよ。キャロとか見てれば解るだろ？あいつは攻撃をフリードや味方に依存してるからな」

「ああ、見てれば大体、そんな感じでしたね」

「でもお前は、どれもこなせる上に戦闘も可能、オールラウンダーって言っても、限度ってもんがあるだろ」

「まあ、僕爺様や父上から「器用貧乏」って言われてましたし。それに戦闘ができるのは、この子のおかげですから」

「キュー」

ヴィータの言うとおり、攻撃系の魔導師でも、防御やバインドを習っている場合は多いが、回復や補助などについては、正直「持ってて損はない」程度で、その手の分野の魔導師に比べれば、明らかに応急処置程度にしかならなかったりする。

だが龍清は、ユニゾンによる補正があるとはいえ、味方の補助も、戦闘もこなせるという、非常に優秀すぎる戦闘体系なのだ。

「それに、僕は基礎しか教えてもらってませんし、僕の使う術が全

てって訳じゃないんですけどね」

「そうなのか？」

「ええ。使う人によっていろいろバリエーションとか違ってきますから」

龍清が言うには、一言に陰陽術と言っても、彼が使うのは誰もが覚える初歩の物らしく、熟練した陰陽師は、さらにそれをさまざまな術に昇華するのだという。

「ふうん。でもま、戦闘面はまだ粗いな。補助だってあんま使ってる気しないし」

「これでも西麗と二人だけの時は頻繁に土式を使ってたりしたんですけどね、ここに来てからあまり使う機会が減りましたね」

「まあ、味方のサポートにはキャロがいるからな」

そんな感じに、ヴィータのアドバイスを受けながら練習をしていると……

《嘱託魔導師、東郷龍清様、秋西麗様、至急部隊長室にお越しください》

突如、龍清と西麗はアナウンスに呼ばれた。

「えっ？　僕？」

「どうしたんだろうな？　でもま、丁度休憩にしようと思ってたと

ころだし、さっさと行って来いよ」

「あっ、はい」

「龍清！　こっちも休憩に入ったから、早く行きましょう！」

「うん！　今行く！」

丁度向こうも休憩に入ったらしく、西麗に呼ばれ、龍清は左腕を動かさないように押さえながら、その後を追っていくのだった。

「「えっ？　お休み？」」

「せや」

部隊長室に入った二人がはやてから言い渡されたのは、フォワード陣全員に休暇を与えるというものだった。

「この前、フェイトちゃんとティアナの仕事のお礼として、地上本部と本局から、一日だけ休暇をもらったんや。調査も有力な手がかりがあれ以来なくて行き詰ってしもうてるし、気分転換には、丁度

いいやろ」

「そりゃあ、このところ訓練漬けで、ありがたいって言えばありがたいけど……」

「僕はこの通り怪我をしてますから、碌に参加できてないですけど……」

無論、休暇と聞いて、二人も嬉しいことは嬉しい。

西麗は訓練漬けの毎日に辟易していたし、龍清も左腕の怪我が直ってないので、まともに参加できないことに気を病んでいた。

気分転換という意味では、はやての言った通り、この度の休暇は正にうってつけだった。

「それにクロノ君から、『二人とフォワードは、休めるときに休ませておかないと、はやて達みたいに働きづめになるから』って言われとんねん。失礼やね、まるで人をワーカーホリックみたいに」

そんなことを言われたという事もあって、少し不機嫌そうにはやてはそう言う。

それを見て、二人は苦笑するしかなかった。

実際、二人は仕事の様子を見る限り、なのはやフェイト、スバル達はかなり働いてるように見える。

フェイトやティアナは、執務官と言う立場上、忙しいのは納得できる。

なのはも教導官、はやてに至っては部隊長という立場もあって、本局や地上本部に足を延ばすことが多々あり、かなり忙しそうだった。

しかし、それでも仕事を続けようとするあたり、確かにワーカーホリック気味だと、二人は思っていた。
だからはやての不機嫌そうな態度にも、苦笑するしかなかったのだ。

「まあ、それはさておき、今日はフォワード陣の訓練はお休みや、何かあったら現場に急行して貰うけど、それまでは自由に過ごしてええから、スバルとティアナに頼んで、クラナガンでも見学に行ってきいや」

「ま、それも良いかもね。あたしも興味あるし」

「ああ、龍清君は解っとると思うけど……」

「左腕は動かさないように、ですよね。この前も少し動かして、大変な目に遭いましたし」

この大変な事と言うのは、怪我した翌日、その訓練で無理やり左腕を動かして、傷口が開いたので、シャマルに大目玉をくらったという話なのだ。

無論、始めは参加を止められていたのだが、左腕を極力動かさないことを条件に参加させてもらたのだが、模擬戦で、思わず攻撃を左腕でガードしてしまったのだ。

その結果、傷口が開き、医務室でシャマルに散々絞られたのだ。
普段、シャマルには優しいイメージを持っていただけに、その時はかなり驚愕したという。

「ま、解っているならよし。スバル達にも伝えておいてなあ」

「はーい」

こうして、フォワードと龍清達の休暇が決まったのだった。

「さてと、三人とも、準備は良い？」

「オッケー！」

「はい」

「良いわよ」

部隊長室から出た後、フォワード陣に休暇の事を話すと、当然一向は大喜び、早速何するかについて話し合ったりした。

訓練が嫌いなわけではないが、流石にいつまでも同じでは、西麗同様、飽き飽きするものなのだ。

それで、西麗がスバルとティアナに、クラナガンに連れてってほ

しいと言ったら、二つ返事で二人は承諾し、今は準備を終え、出発しようとしていた。

「でもさ、龍清は良いの？」

「何がですか？」

ティアナの車に乗り込んだ後、助手席のスバルが聞いてきた。

「無理に付き合わなくても良いんだよ？　怪我も治ってないし、隊舎で待っててても」

「いえ、僕も興味ありますし。それに、西麗を一人にすると、町で迷子になりそうな気がして」

「なっ！？　余計なお世話よ！！」

「ああ、成程。はしゃぎ過ぎて、いつの間にか迷子になってたってオチね」

「あるある。あたしも小さいころあったし」

「うぅ……」

龍清自身、クラナガンに多少なりとも興味があったので、そう返事する。

尤も、最後の一言が、西麗にとっては余計だったのだが、ティアナとスバルからも肯定され、黙りこくってしまう。

「でも、エリオとキャロも二人っきりで大丈夫かなあ？　いくら管

理局員って言っても」

「大丈夫よ、あの二人も子供じゃないんだし。それに、二人っきりの時間を邪魔するのは野暮ってものよ」

「……成程。『馬に蹴られて何とやら』って奴ね」

「そう言う事」

不安げに言う龍清に言ったティアナの言葉の意味を納得した西麗。しかし、二人の言葉の趣旨を理解できず、龍清とスバルは頭に疑問符を浮かべるのだった。

「さ、そんなことより、行くわよ！」

そう言って会話もそこそこに、ティアナは車のアクセルを踏む。そして四人は、クラナガンへと向かっていくのだった。

「ふぅ、今日の仕事終わりや」

一方その頃、部隊長室で今日の仕事を終えたはやてはそう呟く。

「お疲れ様ですー」

とそこへ、リインがお盆を持ってやってきた。

追記しておくと、今の彼女は普段の１０?前後の身長ではなく、大体キャロと同じくらいか、少し小さい位である。

労いの言葉を掛けると、お盆に載っていた急須で、湯飲みにお茶を入れる。

「いやあ、もう慣れたもんやけど、やっぱこうも仕事が多いとかなわんわ」

「はやてちゃんにもお休みだったら良かったのにですー」

背伸びしながら言うはやてに、リインがそう言う。

この部隊で一番仕事量が多いのは、何を隠そう彼女だ。

部隊長として、さまざまな書類の整理や捜査の進展状況等の報告、捜査に必要なものの申請など、部隊運用に関して彼女は頑張っている。

その為に、その苦労も、隊の中では一番だろうし、そんな彼女にも休暇があったとしても、それは当然だと思う。

「ありがとうな。でもええんよ、前線で頑張ってるスバル達に比べたら、私の苦労なんて小っちゃいもんや」

しかし彼女は、そんな苦労をおくびにも出さずそう言う。

実際、体を張って頑張ってくれてる彼女たちに比べれば、デスクワークと指揮主体の自分の苦労など、遠く及ばないと考えている。

リインの言葉は嬉しい限りだが、やはり部隊長としての職務をこなす方が、今の彼女にとっては重要だったりするのだ。

「せやけど、なのはちゃんとフェイトちゃんには、もうちょっと休暇を与えられるようにせえへんとな。あの性格やし、あの子の事もあるしな」

「ですねー」

淹れてもらった茶を啜りながら、そんな歓談をしていると、突如、彼女のデスクに通信が入る。

「ん？　誰からやろ？」

不思議に思い、通信を入れる。

「よっ。頑張ってるか？」

「ナカジマ三佐！」

通信を入れてきたのは、陸士１０８部隊の部隊長、スバルの父、ゲンヤ・ナカジマだった。

「まあ、ぼちぼちと言ったところです。でも今のところ、これと言った進展はないですね」

「そっか、まあ元々厄介そうな案件だからな、そう気に病むなよ」

「ありがとうございます」

無論、六課としても調査などは進めているが、やはりあの一件以来、これと言った動きがないため、操作はあまり進展してるとは言えなかった。

そのことで少し顔を暗くするが、ゲンヤに励まされ、再び元の顔になる。

「それで、今日はどういったご用件で？」

「おおそうだ、あいつらの転向が思ったより早く準備が終わってな、明日にはそっちに送れそうだ」

「そうですか。あの子たちが来てくれるんやったら百人力や！　ほんまにありがとうございます」

「良いって良いって。お前さんも大変だろうからな、これ位は当然だ」

そう言って手を振りながら言うゲンヤ。

そしてその後も、二人は雑談を交え、今後の事を話し合うのだった。

「ここが……首都クラナガン」

「ほえ～～～」

一方、クラナガンに到着した二人は、開いた口が塞がらなかった。

「すごーい！　めっちゃ近未来的！！」

「こういうのって、映画の世界だけだと思ってた」

西麗は目を輝けせて興奮し、龍清はその街並みを見て驚きを隠せない。

「さてと、二人とも、どこか行きたいところとかある？」

二人の反応にスバルと共に苦笑しながらも、ティアナは二人につぶやく。

「いえ、僕は特に」

「あたしもかな？　もうこの光景だけで満足しそう」

「キュー」

「ニャウ……」

だが、二人も来るのは初めてであったし、特に行きたい場所や、興味のある場所などは特にない。
二人の返事を復唱するかのように、春青と白秋も鳴く。
「なので、お二人にお任せします」
「そう言われてもね～。急に決まったことだから、私たちも特に予定ないし」
「私も特にないなー」
とは言え、二人に伝えられるまで休暇の事など聞いてなかったので、二人も特に予定は無し。
「とりあえずさあ、何か食べながら考えない？」
「あんたはアイスが食べたいだけでしょ？」
「あはは、ばれた？」
スバルの提案の意図を簡単に見抜いたティアナに、スバルはあははと笑う。
そんなやり取りを見て、龍清と西麗は、流石親友と納得していた。
「でもま、他にやることもないしね。二人の観光も兼ねてるわけだし、そうしましょう」
「そうですね」
「あたしもそれでいいよ」

「じゃあさ！　いっそこのまま食べ歩きとか」

「調子に乗るな」

己の欲望を満たそうとするスバルに、ティアナの鉄拳制裁が下る。

涙目で蹲るスバルをよそに、ティアナは龍清と西麗を連れて歩きはじめる。

そして痛みが引いた後、スバルはその後を追っていくのだった。

第二十二話　龍虎のクラナガン見学　（前篇）（後書き）

うーん、特に目新しい人物を出すことはなかった。

次の後編では、新たな原作キャラを出します。

誰を出すかは、まあ、何となくですが解ると思います。ヒントは、はやてとゲンヤさんの会話です。

そして後編では、新たな動きが、起ころうとします。

次の話が終わったら、物語は長編に入ります。

みなさん、これからも当小説を、よろしくお願いします。

第二十三話　龍虎のクラナガン見学　（後篇）（前書き）

今回は原作キャラがまたまた新たに登場。

そして、物語はさらなる展開に！

第二十三話　龍虎のクラナガン見学　（後篇）

ここは、クラナガンのとある洋服店。

その店の試着室の前で、一人の少年が立っていた。

「キャロ。まだ？」

「もうちょっと」

それは、龍清達と同じく、休暇をもらったエリオだった。

お休みという事で、どう過ごそうか考えていたら、キャロに「ショッピングに付き合ってほしい」と言われたのだ。

自身も特に予定はなく、彼女の頼みなら断る道理もないため、二つ返事で了承し、今はここで、選んだ服を試着中のキャロを待っているという事なのだ。

「他にも立ち寄るところがあるんでしょ？　早くしないと時間が無くなるよ？」

「うん。でももうちょっと待って」

急かしてるわけではないが、彼の言うとおり、休暇は今日の一日だけだ。

今後、このような機会がいつになるか解らないので、出来るだけ時間を無駄にしたくは無いのだ。

それに、試着室の前で待たされて、かれこれ２０分ぐらいになる。
周りの視線とかかなり気になっているのだ。
「早くしてほしいよ……ね、フリード」
「クキュ～」
何やってるんだ？　って言う視線が非常に気になり、早くしてほしいという思いを呟きながら、抱いているフリードの頭を撫でていると……
「お待たせー」
という声が聞こえると、試着室のカーテンが開かれ、ピンクのワンピースに白いジャケットを着たキャロが立っていた。
「どうかな？」
「え？　えっと……良いと思うよ？」
「むぅ……」
服の感想を言われ、取り敢えず当たり障りなく、素直に感想を言うエリオだったが、答えを聞いた途端、キャロは不機嫌そうな顔になる。
「ど、どうしたの？」
ちゃんとほめた筈なのに、なぜ不機嫌そうなのか？
まったく理由が見当たらないエリオはキャロに問いかける。

「エリオ君。実はどうでもいいとか思ってる？」

「えっ！？」

思わぬ答えを言われ、驚くエリオ。

「そ、そんなことないよ！　どうしてそう思ったの？」

「だってさっきから同じような事しか言ってないんだもん」

「……あっ」

ここまで言われ、エリオは如何してキャロがそう言ったのか理解する。

今試着してる服以外にも、何度か別の服を試着しては感想をもらっていたのだが、その都度のエリオの感想は……

「良いよ」

「良いんじゃないかな？」

「うん、良いと思うよ？」

と、このように、あまりにも味気ない感想を述べているのだ。
本人は素直に言ってるつもりなのだが、同じ様な感想を二度、三度と言われては、流石にキャロとしても「本当はどうでもいいんじゃないのか？」と思うのも、無理からぬことだろう。

「本当にそんなつもりはないんだよ？　ただ……」

「ただ？」

「その……キャロは何着ても似合うなあって」

これも裏表のない、自身の思ったことをそのまま口にしただけだ。
しかし、こんなことを言われたキャロの反応は……

「も、もう……そんなこと言われたら、許すしかないよぉ……／／／／／」

顔を少し赤らめながらそんなことを呟くのだった。

これがかつて、ある人物によって仕込まれたプラン通りに回るだけだった二人のデートだと、一体だれが想像できただろうか？

「「ん……？」」

とその時、二人のデバイス、ストラーダとケリュケイオンに通信が入る。

「通信？　相手は……ティアナさん？」
「私はスバルさんからだよ」
何かあったのかと思い、二人は通信を開く。
《やっほー。エリオー、キャロー！》
《二人とも、今どこにいるの？》
「クラナガンの洋服店です。キャロに買い物につきあってほしいと頼まれて」
《そうなんだあ。二人とも、デートを邪魔しちゃって御免ねー》
「「で、デート！？！？」」
スバルのデート発言に、二人の顔は瞬間湯沸かし器のごとく真っ赤になる。
顔からどことなく湯気が立っているのは、気のせいではないだろう。
「「／／／／／／」」
それでもって、言われた二人は顔を真っ赤にしたまま俯いてしまう。
《こらスバル、あんまりからかうんじゃないの》
スバルをそう叱るティアナも、顔はどこかにやけていた。

「そ、それよりどうしたんですか。まさか、鬼門が現れたとか！！」
話題を逸らすように、エリオはティアナとスバルに何があったのか聞く。
いや、前にも一度こんなことがあったので、話題逸らしの為ではないかもしれないが、少なくとも二人からしてみれば、必死に話題をそらそうとしてるようにも見えなくもない。
ちなみにキャロの顔はまだ真っ赤だったが、しっかり話は聞いていた。
《ああ、ちがうの。別に緊急事態じゃないわ。いや、こっちからしてみれば、ある意味匹敵するんだけどね……》
「「？？？」」
二人が何の事かと首を傾げていると、ティアナはこんなことを聞いてきた。
「二人とも、龍清と西麗を見なかった？」
「えっ？　龍清さんと西麗さんをですか？　いえ、僕たちずっとここに居ましたし」
「はい、外の様子も見てないので」
「そう」
「あの、二人がどうかしたんですか？」

龍清と西麗の居場所を尋ねられた二人は、店に入ってからずっと居たことを伝えると、何があったのかティアナに聞く。

そして返ってきた答えは、ある意味予想通りで、予想外だった。

「あの二人、迷子になったのよ」

「「……は？」」

ティアナの答えに、二人はそう呟くしかなかった。

「ねえ」

「何？」

「ここ、どこ？」

「知らないよ……」

一方、件の迷子、龍清と西麗は、クラナガンの町の中に（当然と言えば当然だが）いた。

しかし、そこに本来一緒にいるはずのティアナとスバルの姿はない。

西麗の問いかけに、龍清もまたそう返すしかない。

そう、ティアナの言った通り、二人は「迷子」になってしまったのだ。

「どうしてこうなったんだっけ？」

「自分の行動を振り返ってみなよ」

龍清の冷静且つ冷ややかな返答に、二人は何故こうなったのかを思い返す。

アイスを食べながら、クラナガンをティアナ達と一緒に練り歩いていた。

←

ある一つの店が目に入り、面白そうと思った西麗がその店に向かう。龍清もそれについていく。

←

見終わった後、美味しそうな食べ物の店を発見、そちらに向かう。

←

その後も似たような店を練り歩く。迷子にならないよう龍清もそれについていく。

←

あれ？　ここどこ？→今ここ。

「……」

「解った？」

つまるところ、あちこちに西麗が寄り道したために迷子になり、

迷っては不味いと思った龍清は、そのまま巻き添えをくらったのだ。
「りゅ、龍清！　あんた自慢の陰陽術で場所とか解らないの！！」
「陰陽師はコンパスじゃないよ！　解るわけないじゃんか！！」
迷子になってることに気付き、パニック気味に言う西麗に、龍清もそう反論する。
まさか年にして高校生ぐらいになって、未知の世界の首都で迷子になるなど、一体だれが想像できただろうか？
「ああもう！　携帯なんて持ってないから二人に連絡できないし、如何すりゃいいのよ！！」
「こんなことなら、はやてさん辺りに地図でも貰ってくればよかったなあ……」
今さら言っても後の祭りなのだが。
「はぁ……どうすんのよ？」
「どうするって……二人が見つけるまで待つしかないんじゃあ？」
「そんなことしてたら日が暮れるわよ！！」
見知らぬ街で迷子になってしまった二人。
この町に詳しいスバルとティアナが見つけるまで、大人しく待っているのが一番建設的なのだが、ここがどこだかわからない以上、そんなことしてては時間がかかりすぎると、少しイライラしていた

西麗は怒鳴る。
「じゃあどうするの？　こっちから捜すの？」
「そうよ。取り敢えず、大通りみたいなところに出ましょう。そうすれば、あの二人も見つかりやすいと思うし」
「うーん……それしかないかな？」
確かにここで待っててもいつ来るかわからない。
其れならこちらから解るであろう場所に移動し、見つけてもらう確率を上げようと、二人は移動を始めようとすると……

「何だよ？　お前ら」
「何なんスか？」
突如声が聞こえてきたので、二人が声の下方向を振り向くと、赤髪の女性二人を、数人の男達が取り囲んでいたのだ。
「君達可愛いじゃん。何、迷子？」
「だったら俺達と一緒に来ない？　いいとこ連れてってやるからよ」
「おお。まさかあたしの魅力に引き寄せられてきたっスか？」

「ウェンディ、馬鹿なこと言ってんじゃねえ。こんな奴らほっといてさっさと行こうぜ！」

そう言って短髪の方が、いかにもノリの軽そうな方の腕を掴んで立ち去ろうとする。

しかし、男達はそれを許さない。

「おいおい、そう邪見にするなよ。悪いようにはしねえからよ」

「うっせーな。あたし等は待たせてる奴がいるんだ。邪魔すんなよ！」

「もしかして男？　そんな奴より俺達と一緒の方が楽しいって」

「ああもう、しつけぇ！」

今尚付き纏ってくる男達に、短髪の方が癇癪を切らしかけたその時。

別の腕が、女性の腕をつかんでる男の腕をさらに掴む。

「その辺にしておいたら、その人達嫌がってるでしょ」

その腕の正体は西麗だった。

「ああ？　なんだおめぇ！」

「うーん……正義の味方？」

「いや、その例えはどうかと……」

西麗の答えに、後ろから来た龍清が呆れ気味に返す。

確かに言い方としてはあながち間違いでもないだろうが、もう少しストレートに言っても良いと思う。

「はぁ？　正義の味方ぁ？　あはは！　こいつは傑作だ！！」

男が笑い始めたのを気に、他の男達も笑いはじめる。

「って、そんなことはどうでもいいの！　大の男が、寄ってたかって女の子を取り囲んで、恥ずかしくないわけ？」

そう、西麗がここに来たのも、つまるところそう言う理由なのだ。

軟派なのははたから見ても明らかだったのだが、複数で取り囲んでってのが頂けなかったのだ。

「へ！　ガキ二人がでしゃばってんじゃねえ！　ヒーローごっこならよそでやってな！！」

「まあ待てよ。見てみるとこいつらも中々可愛いじゃねえか。どうだい？　この二人と一緒にお前さん達も……」

と、男の一人が西麗の肩に手を伸ばした、その瞬間……

「いててててて！？！？」

西麗は流れるような動きで、男の腕を捻上（ひねあ）げる。

「悪いけど、こっちもあんた達に構ってるほど暇じゃないの！」
「なっ、てめえ！！」
すると男達も敵意を持ち、一人が西麗に襲い掛かるが。
「ニャア！」
「なっ、何だこのくそ猫！！」
「ニャー！！」
「いててて！！」
西麗に襲い掛かってきた男の顔面に張り付いた白秋が、その自慢の爪で顔を引っ掻く。
「何やってるんだ！　たかがガキ一人に……おわっ！？　な、何だ！？」
其れとは別に、残り三人の男達も西麗に襲い掛かろうとするが、突如として、地面から足が離れ、ふわふわと浮き始める。
「誰も一人でやるなんて、一言も言ってないでしょ？」
西麗がそう言う隣には、右腕を突き出す龍清がいた。
「お、お前の仕業か！　おい！　さっさと下ろしやがれ！」

「もう勘弁したのなら、下ろしてあげますけど？」

「ふざけんな！」

「そうですか、それじゃあ……」

そう言って龍清が腕を動かすと、男たちはそのまま、まるで無重力空間を漂っているかのように、中をふわふわ浮きながら揺さぶられる。

「うわあ！　や、やめろ！」

「目が回る～～～」

「うっ、気持ち悪くなってきた……」

男たちがグロッキーになり始めたころに、龍清はゆっくり男達を地上に下ろす。

そして地上に降りた男たちは、ふらふらになって足取りも覚束なかった。

「まだやる？」

「やりますか？」

「キュ～……」

「フカーーーーッ！！」

余裕に言う西麗と、再び腕を突き出す龍清。
春青も男達を睨みつけ、白秋に至っては毛を逆立てて威嚇している。
「くそっ！　この借りは必ず返すからな！　覚えてやがれよ！！」
そう言って男たちは退散していくのだった。
「うわぁ、いかにも三流の悪役が言う台詞だね」
「よく言うわよ。借りたもの返したことないくせに」
「キュウ」
「ニャ」
そう言いながら、二人は男達に囲まれていた女性に近づく。
「大丈夫ですか？」
「お、おお」
「大丈夫っス」
龍清の問いかけに、二人は無事だという。
「ま、あんな奴ら。あたし一人でもどうにかできたけどな」
「へー、そうなんだ」

「それはそれは、お邪魔しちゃったかな？」

すると、赤髪の短髪の方がそう言ってきたが、特に二人も気にする様子なく呟く。

「もう、ダメっスよノーヴェ。助けてもらったのにそんなこと言っちゃあ。あっ、どうもありがとうっス」

「いえいえそんな、当然のことをしただけですし」

「困ったときはお互い様ってね」

一方それに対し、髪を後頭部で纏めている方が短髪の方を抑えつつ、二人にお礼を言う。

かなり対照的な二人だが、顔のつくりがどこか似ていることから、双子か姉妹であることは直ぐに察しがつく。

「あっ、自己紹介がまだでしたね。僕は東郷龍清と言います。この子は、春青」

「クキュー」

「あたしは秋西麗。こっちは白秋」

「ニャッ」

二人と二匹が自己紹介をするが、それを聞いた途端。二人は何か考え込むような顔になる。

「東郷？　秋？」

「何かどっかで聞いた覚えが……ああーーーーー！！！！」

とここで、突如としてノリの軽い方が大声を上げる。

「な、何だよウェンディ！」

「ノーヴェ！忘れたっスか！？　この二人、スバルがメールで言ってた二人っスよ！！」

「メール……ああ！！」

とここで、ノーヴェと呼ばれた女性も大声を上げる。

しかし、龍清と西麗も、二人の会話の中に、非常に聞き逃せない名前に反応する。

「えっ？　スバルさん！？」

「あんた達、スバルの知り合い！？」

「知り合いも何も、あたし等スバルの家族っスよ！」

「「ええーーーーーーーーーー！！！！！」」

ウェンディと呼ばれた女性の言葉の後、クラナガンの一角に、二人の大声が響くのだった。

「ティアー」

「スバル、見つかった？」

「ううん、こっちは何も。そっちは？」

「こっちもよ。ったく、あの二人、一体何処に行ったのよ！」

一方、龍清と西麗を手分けして捜索していたティアナとスバルは、一度合流して結果を報告するも、成果はなかった。

二人はデバイスでお互いに通信しあいながら探しいていたが、いかんせん見当もつかず、ただがむしゃらに探すしかなかったのだ。

「龍清がいるから、大丈夫だとは思うけど、こうも当てがないとこっちも探しようがないわよ」

「どうしよう。もたもたしてたら日が暮れるよ？」

「とりあえず、エリオやキャロからも結果を聞きたいし、一旦合流しましょう」

「オッケー！　……ん？　あれは……」

通信の後、エリオとキャロも捜索に加わってくれたため、見つけたら連絡が入るようになっている。
連絡がないという事は見つかってないという事だろうが、それでも、一度経過を聞きたいと、二人と合流するため移動しようとしたとき、スバルが何か、正確には誰かを見つける。

それに気が付き、ティアナもその視線をたどってみると、そこには、藍色の髪にリボンをつけた、二人がよく知る人物が立っていた。

「「ギンガさん（ギン姉）！！」」

「えっ？　スバル！　ティアナ！」

それは、陸士１０８部隊に所属するスバルの姉、ギンガ・ナカジマだった。

「二人とも、どうしてここに？」

「今日、私たち、というより、フォワード陣全員で休暇をもらったんです。ところでギンガさん。どうしたんですか？」

ここにいる理由を教えた後、ティアナは、どうしてギンガがここにいるのか理由を聞く。
先ほど遠目で見た限りでは、誰かを捜しているようだった。

「あっ、そうだ。二人とも、ノーヴェとウェンディ見なかった？」

「えっ？　見てないけど、二人も来てるの？」

「うん。実は私たちも、お父さんから「たまには羽を伸ばして来い」

って言われてね。本当はチンクとディエチも一緒に来るはずだったんだけど、「後詰が残ってるからいい」って」

「ふむふむ」

「それで三人で来たんだけど、途中でウェンディが「気になるお店を見つけた」って言うから、途中から別行動になったの。ここで待ち合わせしてるんだけど、なかなか来なくて」

ギンガは何故自分たちがここにいるかを二人に話す。

陸士１０８部隊でも、ゲンヤから休暇をもらったギンガは、ノーヴェ、ウェンディを伴ってクラナガンにやってきた。

その途中、ウェンディがパンフレットを見ながら何か気になるお店を見つけたらしく、ノーヴェと一緒に別行動をとった。

だがそれ以降、全く連絡が来なくて困っているのだ。

「まさかあの二人も迷子になったんじゃあ」

「それはないわ。別に迷うような道でもなかったし、それに二人ともデバイス持ってるから、ね、ブリッツキャリバー」

《ｙｅｓ》

ギンガは自分のデバイス「ブリッツキャリバー」に確認を取ると、電子音と共に肯定と答える。

「じゃあ、何かあったのかな？」

「うーん……あっ、そう言えばスバル達はどうしたの？」

「あっ、実は……」

と、今度はギンガに聞かれ、スバルが龍清と西麗の事を話そうとしたとき……

「あっ、いたっス！」

「おっ、ラッキー。ティアナ達もいる！」

「良かったぁ、一時はどうなるかと思ったよ」

「大げさだっつうの」

スバル達がいる方向とは反対の方向から、四人の声が聞こえる。

三人が振り向くと案の定、龍清、西麗、ノーヴェ、ウェンディの四人だった。

「二人とも、無事だったんだ！」

「ええ、まあ」

「全く！　勝手に動き回らないでって言ったでしょ！」

「だはは、面目ない」

合流直後、龍清はスバルに無事を確認され、西麗はティアナからありがたい説教をもらっていた。
そして一方では、ギンガと合流したノーヴェ、ウェンディも……

「もう、二人とも。心配したんだからね」

「う、悪かったよ」

「御免なさいっス」

と、こちらもギンガからお説教をもらっていた。

「それにしても、どうしてあんた達、ノーヴェとウェンディと一緒にいたわけ？」

「えっと、ちょっと事情がありまして」

龍清がここに至るまでの経過をティアナに話す。

まず迷った後、大通りに出て二人に見つけてもらおうとしようとしたところ、ナンパされているノーヴェとウェンディを見つけ、ナンパしていた男衆を撃退。

その後、二人がスバルの姉妹であることを聞き、また、ギンガと待ち合わせをしていることを聞かされ、それについていき、後はそのまま六課の隊舎に戻ろうと、二人と行動を共にすることになったのだ。

「成程ね……」

「迷子になったことについては、ご迷惑をおかけしました」
「良いよ良いよ、無事だったんだし。ね、ティア」
「ま、これに懲りたら、今度から迷子にならないようにね」
「そうね。もうこりごりよ」
今回の事で懲りた西麗も、そう呟くのだった。
「えっと、君達が龍清君と西麗ちゃんね？」
「えっ？　あっ、はい」
「貴女は？」
すると、ギンガから声を掛けられる。
「私は、陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ。スバルとこの子たちの姉よ」
「えっ！　スバルさんのお姉さん！？」
「まだいたの！？」
「あれっ？　言ってなかったっけ？」
ギンガに自己紹介され、また二人は驚くが、その懸念事項について、スバルは首を傾げる。

「今日はノーヴェとウェンディが世話になったみたいで。二人に代わってお礼を言うわね。ありがとう」

「いえ、僕達もノーヴェとウェンディがいたから、スバルさん達に合流できたわけですし」

「それに、色々話してて楽しかったし」

お礼を言うギンガに、二人もそう返す。

ちなみに龍清が何故二人の事を呼び捨てにしているのかと言うと、初めはさん付けで敬語だったんだが、ノーヴェから「何かむずむずするからやめろ！」と言われ、ウェンディからも「堅苦しいからやめてほしいっス」と言われたため、結局呼び捨て&ため口で話すことになったのだ。

「さて、じゃあそろそろ戻るわよ。それと、エリオとキャロも探してくれてたから、あったら二人にも謝っておきなさい」

「そうそう。せっかくのデートを邪魔したんだからね」

「えっ！　そうだったんですか！？」

「へぇ、最近のちびっ子って進んでるのねえ」

と、エリオとキャロが捜してくれていたことに、二人も驚く。

尤も、二人とも着眼点は違っているが。

「じゃあ、私たちも帰りましょうか？」

「おお」
「はいっス」
と、ギンガ達も陸士１０８部隊に戻ることに。
「では、私たちはこれで」
「ギン姉！　ノーヴェ！　ウェンディ！　またねー！」
「今日はありがとう！」
「ばいばーい！」
と、六課陣はそのまま隊舎に戻っていくのだった。

余談だが、エリオとキャロに謝る際、西麗が「デートしてたんだって？　邪魔しちゃってごめんね」と言ったので、二人の顔は本日二度目のトマト顔になったのだった。

そして翌日、特務六課の訓練用シミュレーターにて。

「「「「……」」」」

龍清、西麗、スバル、ティアナの四人は、唖然としていた。

シミュレーターについた途端、なのはから。

「今日から一緒に訓練や任務をする仲間を紹介するよ」

と、言われたので、全員でどんな人だろうと待っていると、そこにやってきたのは……

「ギンガ・ナカジマ、及び、Ｎ２Ｒ。本日付で、特務六課に一時転属となります！」

昨日別れたギンガ、ノーヴェ、ウェンディ、そして、銀髪に眼帯の身長が五人の中で小さい少女と、長い茶髪を後頭部で束ねた女性がきれいに整列していた。

「……」

「あははー……」

そしてそんな中、昨日別れたばかりなのに、またこうしてであったことに、ノーヴェはどこか気恥ずかしそうに、ウェンディは苦笑しているのだった。

「えっと……なのはさん。どういう事ですか？」

昨日のやり取りから、少しぎこちないながらも、ティアナはなのはに聞く。

「うん。今回の事件はさすがに私たちだけじゃ荷が重いだろうなあ

ってことで、陸士１０８部隊のゲンヤ三佐が、こっちに派遣してきてくれたの」

「お父さんが？」

「うん。はやてちゃんも大助かりだって、喜んでたよ」

なのはの言うとおり、今回は事件が事件なので、いくら一騎当千のなのは達と言えど、かなり難しい話である。

その為、どうにか協力要員がほしかったはやての要請に、ゲンヤ三佐が承諾。クラナガンでも被害者が出てるという事で、地上本部も承諾し、ここにやってきたという事なのだ。

「そういう訳だから、皆、またよろしくね」

「あっ、はい！」

「うん！」

「勿論です！」

「よろしくお願いします！」

ティアナ、スバル、エリオ、キャロの順に、ギンガの返事を返す。

「さてと、じゃあ次はＮ２Ｒの皆に自己紹介してもらうよ。龍清君と西麗ちゃんは知らないだろうからね」

「えっと……そうですね」

まさか昨日、ばったり自分とノーヴェ、ウェンディがばったり会った、なんて今さら言えるわけもないので、そのまま進めることに。

スバルとティアナ、ノーヴェ、ウェンディ、そして龍清と西麗が、これに苦笑していたのは仕方ない事だ。

「ではまず私が。N2Rのリーダー、チンク・ナカジマだ」

「……ノーヴェ・ナカジマ」

「ディエチ・ナカジマです」

「ウェンディ・ナカジマっス！　よろしくっス！」

と、次々と自己紹介をするN2Rの面々。

しかしこれを見て、龍清と西麗は少し思ったところがある。

「スバルさんとギンガさんって、ご姉妹多いんですね」

「しかも全員似てないし」

「まあ、ナカジマ家は色々凄いからね」

そんなティアナの言葉に、すごく納得する二人だった。

「……駄目だ」

所変わって、ここはどこにあるのかもわからない、暗闇の世界。

その中心で、一人の男がぼそりと呟いた。

龍清と西麗を付け狙う、あの黒衣の男だ。

「これでは足りぬ、全然足りぬ。話にもならん」

男は黒い水晶のようなものを除きながらそう呟く。

その表情は、思い通りに事がうまくいってないという表情だった。

「あらあら、中々進んでいないようですね」

するとそこへ、男とは違う別の声が聞こえる。

その声が聞こえた方向に、男は振り向く。

「……お前たちか」

男が振り向いたその先には、三人の女性が立っていた。

「大変ですわね〜、あのお方復活が捗らないばかりか、四神の抹殺も未だにできてないのですから」

「大変大変〜」

「こんな調子で大丈夫なのか？」

「ふん。まだ奴らは力を使いこなしてはいない、抹殺するのは容易い。それに、まだ二匹しか復活していない。残りを抹殺すれば済むことだ。それより、貴様たちの方こそどうだ？」

三人の言葉を意にも介さぬように言いながら、男は三人の様子を逆に聞く。

「全然。あちこちで収集はしてきたけどこの程度。あまりにもレベルが低すぎますわ」

そう言って一人の女性の手のひらには、球状に光る何かがあった。しかし、それでは非常に足りないらしく、男もそれを見て落胆の表情をする。

「ぬぅ……その程度では、とてもあのお方の復活など不可能だ。いや、あのお方どころか、こちらの方々さえも」

そう言う男の周りには、四つの石像が置かれていた。

其れにも何か秘密があるようだった。

「ふふ。ですが、面白いものを見つけました」

そう言って女が取り出したのは、一つの宝珠のようなものだった。

「それは？」

「これは、人の心を吸収し、力に変えるという宝珠だそうです。正

しき力を求めるなら人を信じる心、破壊を求めるなら人々の恐怖の心を吸うというものです」

「ほう……」

それを聞いた男は興味を持つ。

「これを用いれば、あのお方の復活も可能かと」

「恐怖の心を吸収し、破壊の力をあのお方に注ぎ込む。成程、確かに利用できるな」

女性の話を聞き、男は不敵な笑みを浮かべる。

「では、さっそく恐怖の心の吸収を始めるか」

「それについてですが、私に考えがあります」

「考え？」

男の言葉に、女性も不敵な笑みを浮かべながら続きを言う。

「はい。うまくいけば、龍虎もまとめて始末できるかと」

「お前は食えんからな女狐……いいだろう。それでどうするのだ？」

「破壊の力を手に入れる、絶好の場所がございますれば、そちらで、恐怖の心を吸収して参ろうかと」

「ほう、一体何処だ？」

男の問いかけに、女性は目の前に手をかざす。
するとその前に、ある町の風景が現れる。
女性が示した、破壊の力を得る絶好の場所。
それは……

「倭国日本、京の都にございます」

第二十三話　龍虎のクラナガン見学　（後篇）（後書き）

凄い、自分でもすごい書いたと思ってる。

詰め込み過ぎた感はありますが、楽しんでもらえると幸いです。

それと、敵に新キャラ登場。

まあ、特に捻りはありません。この三人、ある意味皆さんがよく知ってる連中だと思います。今は明かしませんが。

次回から長編に入ろうと思います。

ギンガとＮ２Ｒを新たに加え、訓練と捜査に更に力が入る特務六課。

そんなある日、日本の古都京都で、謎の反応が検知されたという報告があり、一同は京都へ向かう事に。

果たしてその地で待っているものとは！？

これからも【リリカルなのは　四神伝奇】を、よろしくお願いします！！

第二十四話　特務六課　京都へ！

特務六課に、陸士１０８部隊からギンガとＮ２Ｒの面々がやってきて、既に一週間が経過した。

特にこれと言った事件も起こっておらず、日々訓練漬けの毎日を送っていたフォワード陣だったが、やはりギンガ達がやってきたことで、自然と訓練にもやる気が入っていたりした。

ただ、西麗がチンクの身長について触れてしまったので、彼女のＩＳ（インヒューレント・スキル）「ランブルデトネイター」の餌食になりかけたのを全員で止めたことについては、ある意味仕方ないと言えば仕方ない事だろう。

そしてこの日、午前の訓練も終わり、いつもの朝食風景でのことだった。

「んまあ、ある意味予想はしてたけどね……」

「してたんだけどなあ……」

西麗と龍清は、いつもならお馴染みであるスバルとエリオの大食いシーンを最早気にしないはずだろう。

そう、いつもなら……

「ん？　どうしたの？」

「あ、いえ……」

「何でもないです。はい……」

そう、いつもの二人に加え、ギンガもいるため、山盛りタワーが三つも並び、それを三人が少しずつ平らげる、と言う事態になっている。

ある意味予想できたことと言えばそうなのだが、流石に三つも並んでるとなると、ある意味圧巻としか言いようがないのだ。

「スバルさんとエリオのはもう見慣れましたけど、まさかギンガさんもあんなに食べるなんて……」

「もしかして、あんた達も？」

「一緒にすんな」

「流石にあそこまでは無理っス」

西麗の質問に答えたのは、ノーヴェとウェンディだった。

二人があそこまで食べるなら、こちらの四人もそうなのかと思ったが、二人がとっさに否定し、二人と同じ席にいたチンクとディエチも首を縦に振ったため、西麗も「そ、そうよね、流石に……」と言うのだった。

「あはは。……」

しかしその西麗の隣にいる龍清は、少し苦笑した後、少し表情を暗くする。

まるで、何か気になるところがあるように。

「……キュ？」

すると、そんな主の表情に、春青が気づき、不安そうに近づく。

「春青？」

「キュウ……」

心配そうに見つめる春青に、龍清はそっと優しくその頭を撫でる。

「大丈夫だよ、そんなに心配そうな顔をしないで」

「キュウ」

そうは言うものの、正直当人も気になることがあって、そのことで頭がいっぱいなのだ。

それは今朝、訓練の始まる前に行った占いで、とても気になる結果が出たのだ。

いや、それは結果と言うより、ある種の予言に近いものだった。

龍清の占いは、時として、ある種の予言に近いものを彼に見せることがある。

起こる時期まではさすがに解らないが、それは結果が出てから近いうちに必ず起こり、しかも、起こることは大概、誰もが予想もできないような大事だったりするのだ。

そして、今回出た占いの結果は、次のようなものだ。

月が満ち足りるとき、伝統と欲望、栄光と怨嗟が入り混じる都に、傾国の三姉妹現る。

悪しき心を悪しき力に変える宝珠を手にした三姉妹は、恐るべき闇の住人たちの封印を解き、都を恐怖と混乱に陥れる。

そして三姉妹は人々の恐怖をその手に集め、世界に闇をもたらす巨神に使える四つの僕を復活させ、世界を恐怖に陥れんとする。

この結果が何を意味するのか、そして何が起こるのか、その事で頭がいっぱいで、今日の訓練でさえ集中できない始末だった。

（伝統と欲望が渦巻く都……傾国の三姉妹……解き放てる闇の住人……一体、何の事なんだろう？）

予言の内容がある程度分かればいいのだが、今回ばかりは、どこで何が起こるのかさえ見当がつかず、唯考え込むしかなかった。

「……清……龍清。龍清！」

「はっ！」

と、占いの事で頭を悩ませていた龍清だったが、西麗に大声で呼ばれ、我に返る。

「えっ？　な、何？」

「何？　じゃないわよ！　さっきから話しかけてるのに全然反応がないんだもん」

「えっ？　そうだったの？　御免」

話しかけてるのに反応がない龍清に、少しご立腹の西麗に、龍清も反応しなかったことを悪いと思い、謝罪する。

「……龍清どうしたの？　なんか今日、ずっと様子が変よ？」

「そ、そうですか？」

そんな龍清の様子がおかしいことを、ティアナは見逃さなかった。

「そうよ、さっきだって西麗に話しかけられても反応なかったし」

「そう言えば、ここへ来るまでの間もずっと上の空だったし」

「訓練中もぼーっとしてる事、結構あったしね」

ティアナの言葉を皮切りに、スバル、なのはも、今日の龍清の様子を口にする。

「確かに。今日は結構ボーっとしてたよな」
「その所為で、壁とか、他の人に良く当たったりもしてましたし」
「何かあったんスか？」
加えて、今日の様子をノーヴェ、エリオも言い、ウェンディが何かあったのか聞く。
「えっと……ちょっと気になることがあって」
「気になる事？」
「ちょっと……ね」
龍清は、あくまで占いの内容に触れないようにしつつ、理由を打ち明ける。
「アンタが気になる事って、たいてい何か不味い事だったりするのよね。大方、今日の占いで、何かやばいことでも出たんでしょ」
「……はぁ」
「そうなんだ」
だが、西麗がずばり言い当ててしまったため、龍清は思わずため息を漏らす。
「まあまあ、あんたの占いで悪い結果が出るのは、今に始まった事

でもないでしょ。そう落ち込むことでもないじゃない」

「いつもなら……ね」

西麗の言う通りなのだが、流石に今回ばかりはそうはいかず、暗い顔をしながらそう呟く。

「何だ？　龍清は占いが得意なのか？」

と、そう聞いてきたのは、Ｎ２Ｒのリーダー、チンクだった。

「あっ、言ってなかったっけ？　龍清の占いって結構あたるらしいよ！」

「ほとんどが悪い事だけどね」

スバルの言葉に、西麗が続く。

非常に余計なひと言なのだが、事実でもあるので口を挟まない。

「で？　今日のは何て出たの？」

「それは……」

ティアナに聞かれ、龍清がその内容を言おうとしたとき。

「おっ、皆ここにおったんか。丁度ええわ」

そこに、リインとシグナム、シャマル、ザフィーラ、。アギトを伴ってはやてがやってきた。

「はやてちゃん。どうしたの？」

「皆。食事終わったらブリーフィングルームにちょお来てくれる？」

「何かあったの？」

三人の会話に、その場にいた全員が一気に注目する。

「何かあるかもしれない。曖昧な事しか言えへんけど、出動の必要があるかもしれへんのや」

「解った。じゃあ、午後の訓練はお休みにしておくね」

「うん、そうしてな。さて、仕事の話はいったん置いといて、私たちも、ご飯食べようか」

「はいです～！」

はやての言葉にリインが反応し、その後は普通に朝食風景となったのだった。

「……まさか……ね」

しかし、未だに今朝の占いの事が気になって仕方ない龍清は、その時も考え事に集中してしまい、西麗からどやされるのであった。

そして、ブリーフィングルームに集められた一同の前で、はやてが、今回の招集の理由を話す。

「少し前に、第９７管理外世界……まあ、ようは地球で、変な反応が検知されたんや」

「変な反応？」

「せや。魔力反応には違いなかったんやけどな、反応は三つ、ある都市に入ったんやけど、その後反応が消失してしもうて、それ以来全く反応がないんや」

はやての説明に、その場にいる全員が顔を見合わせる。

「それで、その反応って、何が違ったの？」

「それが、今まで見たこともない反応やったんやけど……まあそこは今は置いとくわ。問題はこれからいう事にあるんや」

本当は置いといてはいけないのだが、はやてにとっては、これからいう事の方が重大らしい。

「その反応の中に、微弱やったんやけど、ロストロギアと思しき反応があったんや」

その言葉に、全員が息をのむ。

「でもそれって、どこかの違法魔導師じゃないの？」

「その可能性もあるんやけどな、さっきも言ったように魔力反応が今までにない事例やったんで、断定ができないんや」

「まさかそれで……」

「そ、フェイトちゃんの察しの通りや」

はやての言葉に、フェイトは既に何かを察したようだ。

その様子を見た後、はやては声高らかに命令する。

「これより特務六課は、スターズ、ライトニングを伴い、目的地で魔力反応の調査、および、ロストロギアの回収に向かいます！」

『はい！！』

「メンバーは私とフォワード陣と隊長達にロングアーチスタッフ、それと救護要因としてシャマルを連れて行きます。グリフィス君とザフィーラ、それにギンガとＮ２Ｒは、隊舎の守りを、よろしくな」

「はい！」

「わが身に代えましても」

「任せてください！」

矢継ぎ早に指示を出すはやて。

それにグリフィス、ザフィーラ、ギンガの順に答えていく。

「でもはやてちゃん。私たちとシャマルさんは解るけど、どうしてロングアーチスタッフも？」

とここで、なのはが疑問に思ったことをはやてに聞く。

機動六課時代の出張任務も地球だったのだが、その時は、ロングアーチスタッフは連れてこなかったのに、なぜ今回は必要なのだろうか？

「実はな、丁度クロノ君から、次元航行艦の使用許可が下りたんよ。目的地には転送ポートがないから、船で目的地付近まで移動しようという事になったんや」

「解った！　船を動かす人員として、ロングアーチスタッフを連れて行こうって訳だね？」

「ピンポーン、その通りや！　ＪＳ事件の時の事もあるし、何かあればサポートもできる。これほど打ってつけのメンバーもおらんやろ？」

確かに、かのＪＳ事件においては、シャーリーとルキノはアースラのオペレーターとして、前線メンバーを陰ながらサポートしたのだ。

「すでにシャーリーたちには言っておいて準備に取りかかっとる、他の皆も、早く準備してな」

『了解！』

と、はやては部隊長らしく、凛とした指示を出す。

「あっ、そうだ。はやてさん。転送ポートが無いってことは、海鳴じゃないんですか？」

とここで、先ほどの話を聞いていたティアナが、ふと疑問を聞いてみる。

「せや。日本には違いないんやけど、違う場所なんや」

「どこなんですか？」

エリオの問いかけに、はやてはもったいぶるようにしながらも言った。

「今度の場所は日本千年の歴史の都、京都や！」

「「ええーーーー！！！！」」

はやての言葉に、なのはと西麗が驚きの声を上げる。

「京……都……」

しかしその一方で龍清は、なぜか顔を青ざめていた。

「とはいえ、これはあくまで仕事や、観光旅行やないからな」

「解ってるって。ね？　皆」

「私は良いですけど、スバルがね……」

「酷ーい！　私だって区別はつくよ！」
そんな二人のやり取りに、周りは苦笑するのだった。
「あの……はやてさん」
「なんや？」
するとここで、龍清がはやてに声を掛ける。
「その……誰かに代わってもらうことはできませんか？」
『えっ！？』
何と龍清は、今回の任務から外れたいというのだ。
「何や？　なんか不都合でもあるんか？」
「いえ、そういう訳ではありませんけど……」
どこか煮え切らない態度であるが、龍清はとにかく京都に行こうとしたがらない。
しかし、運命とはなんと残酷なものだろうか。
「でも龍清さん。この前、その京都の出身だって言ってませんでしたっけ？」
「あっ！　エリオ！　いまそれを言ったら……」

龍清が非常にやばいといった顔をするが、時すでに遅し。

「へぇ、そうなんかあ。ほなや龍清君は強制参加やで」

「えっ！　いや、それは……」

「京都の生まれ言うなら、京都の地理、結構知っとるんやろ？　私らも行くのは初めてやから、道案内をお願いしたいんやけど……」

「う、うぅ……」

最早逃げ場なし。

ここまで正論を言われては、流石に断るわけにはいかない。

「……解りました。やりますよ……」

「おおきにな。あっ、それから、現地で休憩所もほしいんやけど」

「えっ？　そんなの次元航行艦で充分じゃあ……」

「そうしようとも思ったんやけど、あんなどでかいのを空に浮きっぱなしにするわけにもいかんやろ？」

「それはそうだけど」

そんな会話の中で、また龍清は嫌な予感を覚える。

「と言う訳で、龍清君のお宅にでも泊まろうや」

「ええ！？」

予感的中と言うかなんというか、龍清は非常に驚く。

「だ、駄目です！　実家だけは絶対にやめた方が良いです！！」

「大丈夫や、正体隠しとけば、取り敢えず心配はいらんと思うで？」

「そう言う問題じゃありません！　とにかく駄目！　実家だけは絶対に駄目です！！」

どうあっても、実家に泊めさせまいと、龍清は必死に抵抗する。

しかし、現実と言うか、周りは非常なもので……

「龍清の実家かあ……気になるわね」

「あたしも気になる！」

「そうだねえ……陰陽師の家って、どんな風なんだろう？」

と、周りは非常に気になる様子。

「龍清君の実家に泊まりたい人、挙手～」

そしてはやての言葉に、任務参加者のほとんどが手を上げる。

「よし、決まりや」

「そ、そんな～……」

とうとう、龍清はその場にへたり込んでしまう。

「キュウ？」

「あの、龍清さん。すいません……」

そんな龍清の様子を見て、心配そうに見つめる春青と、その原因となるヒトことを言ってしまったエリオが頭を下げる。

「ううん、良いんだよもう……はあ……帰りたくないなあ……」

そう呟く龍清だったが、最早この流れを変えることはできないと悟り、京都の道案内を引き受けるよりほかになかった。

しかし、その目的地である京都で、想像を超える戦いが待っているなどとは、この時誰も、知る由もなかった。

第二十五話　絶叫！　奇怪！　東郷屋敷（前書き）

今回は京都にやってきた六課が、龍清の実家にやってきます。しかしその屋敷で、はやて達は散々な目に。

今回を含め、次回はオリキャララッシュとなります！

第二十五話　絶叫！　奇怪！　東郷屋敷

「と言う訳で。やってきたで、京都！！」

まるで修学旅行でやってきた学生見たく、はやてが大声で叫んだ。

確認されたという謎の魔力反応と、その反応と同時に確認されたというロストロギアの捜索、回収の為に、特務六課は京都へとやってきたのだ。

「すごーい！　海鳴市とはまた違う感じー！！」

「スバル、はしゃぎ過ぎ。少しは落ち着きなさいよ」

「でも、なんだか古めかしいと言うか、どこか歴史を感じる気はあるなあ」

「そうだね」

フォワード陣も初めての京都を見て、思い思いの感想をしていた。

海鳴市とは違う、管理外世界の文化に触れ、興奮を覚えずにはいられなかったのだ。

「はぁ……帰ってきてしまった」

一番後ろでため息をついてる龍清を除けば。

「なあ龍清。さっきからため息ばっかついてるけどよ、何がそんなに嫌なんだよ？」

「いえ……何も知らないって、幸せなんですね」
「はあ？」
そんな龍清の様子が気になったヴィータが聞いてみるが、龍清はそんなことを言って、再びため息をつく。
「なんや龍清君。せっかく実家に帰れるんやで、もうちょい嬉しいんやないの？」
「帰りたくなかったからこんなにため息ついてるんです」
「何や事情があるみたいやけど、ため息ばっかついてると、幸せが逃げるで？」
そうはやてに言われるが、龍清は言われた傍からまたため息をつく。
「あのお……本当に実家に泊まるつもりですか？」
「勿論や」
「今からでも遅くありませんから、どこか別の場所にしましょうよ。ホテルなりなんなり取ればいいじゃないですか！」
「何や？　泊まられると困ることがあるんか？」
「個人的に戻りたくありませんし、皆さんに迷惑がかかるから止めてるんです」

その言葉に、全員が疑問符を頭に浮かべる。
何か複雑な家族事情でもあるのか、戻りたくないというのは、まあ、人それぞれだが、自分たちも困るというのは、どういうことなのだろうか？

「龍清無駄よ。今さら何言っても、八神部隊長は変更しないわ」

「そう言うこっちゃ。ほら、早く案内してや」

「はぁ……解りましたよ」

最早何度目になるのか解らないため息を再びつき、龍清は実家までの案内を行うことに。

「ですが、これだけは守ってください。決して僕から離れない事、それと、僕の後ろをついてくること。でないと町でも家でも、迷っても知りませんからね」

「解っとるって。ほな、よろしくなー」

最早観念したらしく、せめてもの注意事項を教えると、龍清はそのまま実家へと六課の面々を案内するのだった。

「そう言えば龍清君って、どんな家族構成なの？」

龍清の案内で東郷家へ向かってる途中、ふと気になったなのはが聞いてきた。

その言葉に、他のメンバーも、「あっ」と声を上げる。

「そう言えば、あんまり聞いてなかったわね」

「まあ、私たちもあんまり話してなかったってのもあるけど……」

「僕たちは、御祖父さんがいるって聞いたぐらいですけど」

「なんだか、結構苦労されたみたいで……」

フォワード陣もこれまでの経過を思い出しつつ、今までその話題に触れなかったことに気付く。

エリオとキャロは任務中、かなり破天荒な祖父がいたという事を聞いた（と言うより愚痴ってた）が、どういう人物かまでは聞いていない。

「そう言えば、あたしも全然聞いてない……どうなの？」

西麗もその話題に触れたことがなく、ふと気になって龍清に尋ねてみる。

「まあ、そんな変わった家族構成はしてないよ。父と祖父、それと兄が二人。あっ、兄と言っても血縁は一人で、もう一人は分家から

養子入りして来たんだけどね」

「へー、兄弟がいるんだ。あたしは一人っ子だったけど」

別段隠す事でも無いので、龍清は簡潔に自分の家族構成を話す。

本人が言ったように、特に変わり映えのしない構成だが、これを聞いて、フェイトがふと疑問を投げかける。

「あれっ？　お母さんはいないの？」

そう、さっきの話を聞いた限りでは、全員男所帯なのだ。

姉妹がいないのはともかくとしても、母親は如何したのかと、フェイトは疑問に思ったのだ。

「母は元々体が弱かったらしく、僕が物心つく前に、病で亡くなったそうです。記憶は曖昧で、顔もあまり覚えてませんけど」

「あっ……ごめんね」

聞いちゃいけなかったことと思い、フェイトは謝った。

更にその後ろでは、スバルもどこか暗そうな顔をしていたのだ。

「いえ、良いですよ。父から話は良く聞いてましたし、何時までも気にしてられませんから……あっ」

龍清自身、あまり触れられて良い気分はしないが、向こうも悪気があって聞いたわけではないし、何時までも後ろを向いてばかりで

はいられないと返す。

「到着しましたよ」

と、装甲話してるうちに、一行は目的地である龍清の実家にやってきた。

それを見た、六課の面々の反応は……

「でかっ！」

「って言うか、広っ！！」

「龍清さん。こんなお屋敷に住んでるんですか！？」

「すごーい！！」

「ちょっと龍清！　あんたもしかして金持ちのボンボン！？」

「すっげー！」

「凄いです～！」

「これあたし等の家よりでっけーじゃん！！」

「これは確かに広いな」

「一体何坪あるのかしら？」

「うわぁ、これは一寸予想外やったわー」

「なのは、陰陽師ってみんなこんな感じなのかな？」

「そうじゃないとは思うけど、これは私もびっくりだよ」

上から順に、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、西麗、ヴィータ、リイン、アギト、シグナム、シャマル、はやて、フェイト、なのはが各々の感想を一言で告げる。

実際、龍清の実家と言うのは、白い塀に囲まれた、木造建築の屋敷だったのだ。

しかも塀の長さを見る限り、とても一般住宅など目でもないくらいの敷地を持っていることが窺いしれ、目の前の門が、一般住宅のそれとは明らかに違う事を物語っていたのだ。

「別にお金持ちじゃないよ。屋敷は平安時代から続いてるものを補修したりして使ってるだけだし、資産は普通の家と差して変わらないよ」

しかし龍清は、然したることもないように呟く。

「でもこんな屋敷に住んでたんやなあ、ちょお以外やわ」

「でも、どうして戻りたくないの？」

「それは……取り敢えず中に入りませんか？」

「そやね。いつまでもここに居たら迷惑やろうし、ほな、案内よろしくな」

「はいはい」

そう言って龍清を筆頭に、中に入ろうとしたその時だった。

「一番乗り〜！！」

そう言って、屋敷に入って言ったのは、リインと同様、アウトフレーム姿になっていたアギトだった。

「おい、アギト！」

「ああ！　アギトちゃんずるいです〜！！」

シグナムとリインが注意をするが。

「あっ！　その石畳……」

龍清が何かを注意しようとした時だった。

アギトが踏んだ石畳の一つが、ガコッ、という音を立てて沈んだ

その瞬間……

「ん？　なっ！？」

突如庭の方から、十数本の矢が飛んできたのだ。

「のわー！？！？」

『アギト　（ちゃん）！？！？』

矢が一通り刺さった後、全員でアギトに近づく。

「大丈夫か？　アギト！！」

「って、刺さってるです～！！」

全員で大騒ぎを始める中、龍清は。

「大丈夫ですよ。それ、おもちゃの矢ですから」

『……へっ？』

そう言われ、シグナムがアギトの頭に刺さった矢を抜くと、屋の先端にあったのは鋭い鏃ではなく、唯の吸盤だった。

「本当や……ただのおもちゃやこれ」

「何だよ、びっくりさせやがって……」

全員がほっと胸をなでおろすと、早速ティアナが龍清に聞いてくる。

「龍清、これってなんなの？　ただの悪戯とは思えないけど」

「こんなのまだ優しい方ですよ。屋敷に入ったら、こんなものじゃすみませんから」

「もしかして、これがあんたが泊めようとしなかった理由？」

ティアナの言葉に、龍清はこくんと首を縦に振った。

「おっしゃる通りです。実はこの実家、屋敷は屋敷でも……絡繰り屋敷なんです」

『絡繰り……屋敷？』

「しかも起動してるってことは……犯人は確実にあの人だ」

そう言う龍清の表情には、怒気が混ざっていたのだった。

「さっきお話したように、この屋敷は築千年は容易に越しています。だから結構がたがきてて、時々に補修してるんですよ」

「まあ、千年って言ったら結構な年数やからな、そのまま住み続けるんも、大変やろ」

「はい。でも補修したって限度があるじゃないですか？　だから先代の当主、つまり爺様の時に、一度解体して全面的な補修、と言うより、建て替えたんですよ。態々当時の設計図を蔵から持ち出してね」

石畳の上を歩きながら、龍清は実家、この東郷家の屋敷について、はやて達に説明していた。
龍清によれば、他にもいくつか石畳に罠が設置してあるらしく、全員龍清の足の動きを真似して動く。

「でもその建て替えの時、爺様が屋敷のあちこちに絡繰りを設置したんです。もとは防犯用だったんですけど、隠居してからもどんどん増やしていって、まあ、稼働してるのは大概夜分か、家の者が用事で出払ってる時なんですけどね」

「せやけど何でこんな真昼間から？」

「恐らく、僕が返ってくることを知って、罠に引っ掻けようとして起動させたんだと思います」

「そっか、龍清の御祖父さんってことは、当然あれもできるわけか」

「そう言う事です」

スバルの言うあれとは、占いの事である。
龍清にできて、その家族、まして祖父となれば、出来ないはずがないのだろうから。

「はい、ここが玄関です」

「一応確認しておくけど、まさかここにも仕掛け合ったりせえへんよね？」

「まさか。流石に多くの人が出入りしたりするわけですから、ある

わけないですって」

そう言って、龍清が真っ先に玄関に入って行く。

「ん？　何だろこれ？」

とその時、玄関にあった謎のスイッチをスバルが発見する。

「インターホンかな？　じゃあ押しとこうっと」

そう思い、そのボタンを押した次の瞬間……

「ヘブッ！？」

こーんという良い音と共に、龍清の頭に金ダライが落ちてきたのだ。

「ちょっ！？　龍清！！」

「だ、大丈夫！！」

そんな龍清に、西麗とフェイトが駆け寄る。

ただの金ダライだったため、幸い痛いだけで怪我などはしていな

いが、プルプルと、腕や肩が小刻みに震えていた。

「……あ～の～ひ～と～は～！！！！」

今まで誰も聞いたことのないような、明らかに怒ってることが解る声を放つ。

「皆さん！　ちょっと一緒に来てください！！　こうなったら、一言ガツンと言ってやりますよ！！」

そう言って龍清はさっさと屋敷の中へ入っていった。

「あっ！　ちょっと待ってや！！」

そしてその後を、はやてを筆頭に、六課の一面が追いかけていく。

余談だがこの直後、はやての頭に空き缶の山が落ちてきたのだった。

それからというもの、東郷屋敷に入った一行は、その罠に散々な目に遭わされていったのだった。

「のわー！！」

床に撒かれた油で滑るはやて

「ひぃー！！」

壁から放たれる鉄砲（ＢＢ弾）の嵐を受けるスバル。

「キャー！！」

床が開き、落とし穴に落ちるシャマル

「ん？　……なぁー！？！？」

「ニャー！？！？」

何も起こらないと思ったら、吊天井が落ちてきたことに驚く西麗と白秋。

「げぇー！？！？」

突然床を走るように襲ってくる刃　（竹みつ）に、大急ぎで避けるヴィータ。

「「ギャー　（です～）！？！？」」

振り子のように襲ってくるハンマーに驚き、身をかがめるリインとアギト

「階段？　二階があるのかな？　……キャ！？」

張りぼての階段が突然壊れ、驚くキャロ。

とまあこんな具合に、龍清を追いかけてる途中で、各々様々な罠にかかり、酷い目に遭っているのだった。

まだこの被害を受けてないのは龍清を除くと、なのは、フェイト、シグナム、ティアナ、エリオの五人である。

「すごいなあ……こんなに仕掛けがあるなんて」

「でも、いくら侵入者撃退用だからって……やりすぎだよこれは」

「ここまで来ると、最早趣味の範疇ではないのか？」

「もうそれしかない気も……」

「それなのに、これだけの罠を起動させもせず、平然と歩く龍清さ

んが凄いです」

あまりの仕掛けの多さになのはは驚き、あまりの多さにフェイトは呆れ、趣味の領域でしかないのではとシグナムが疑問を呈し、最早それしかないとティアナが苦言を呈し、そんな滅茶苦茶屋敷で、罠も起動せず普通に歩いて言っている龍清に、エリオは感嘆の声を上げるのだった。

「ふぇぇ……酷い目に遭ったわ……」

「何なんだよこの屋敷……」

「こんなところに住んでると言うか、こんな屋敷にする奴の気が知れないわ……」

「ニャフ……」

はやて、ヴィータ、西麗と白秋と、次々と罠にかかった面々が、覚束ない足取りで追いついてくる。

「大丈夫皆？」

「主、気を確かに」

「だ、大丈夫や。ちょっと驚いただけや……」

はやてがそうは言うが、皆色々参ってしまっていた。

「なんか、龍清君が泊めたがらない理由がよお解ったわ。こんな屋敷、泊まりたくは無いわな」

「でもさ、何か龍清を尊敬するよなあ。普段は温厚で、どっか頼りなさそうなところがあるのに」

「ヴィータさんに同感。ついでに、あいつがここに帰りたがらないのもよく解る」

「ニャァ～……」

ヴィータの言葉に西麗が同意し、白秋が呻き声の様な弱弱しい声を上げる。

「着いた！！」

とその時、龍清の大声が聞こえる。

全員が声の下方向へ向かうと、龍清は障子戸の前に立っており、今まさに戸を開けようとしていたところだ。

「お話がありま……」

最早怒り心頭の龍清が、戸を開けた次の瞬間。

部屋の方から飛んできた何かが、龍清の顔に直撃、龍清はそのまま庭の方に転げるのだった。

「キュ？　キュー！？」

「りゅ、龍清！！」

突然の事に一時騒然となるが、春青の悲鳴に似た鳴声と共に、一足先に我に返ったティアナが駆け寄り、それに続いて全員駆け寄る。

「いたた……」

顔を抑える龍清のそばには、野球の球位のサイズのゴムボールが転がっていた。

するとそこへ……

「はっはっはっは。この程度の罠も避けられんとは、まだまだ修行が足らんのお……」

其の声と共に、部屋から狩衣姿に烏帽子をかぶった、一人の老人が現れる。

「いきなり飛んできたら誰だって反応できませんよ！　そんなことより、こんな昼間から絡繰りを起動させるなんて！！」

一方、完全に頭に来ている龍清はそんな言葉を意にも介さず、目の前の老人に声を荒げる。

そしてその口調のまま、目の前の老人を呼ぶ。

「一体何を考えてるんですか！　爺様！！」

第二十五話　絶叫！　奇怪！　東郷屋敷（後書き）

東郷家は絡繰り屋敷。

ずいぶん前から考えていたことでしたが、いかがだったでしょうか？

次回は龍清の家族を紹介します。

設定ではなく、普通の話ですので、お間違えなく。

そして、龍清に関する意外な人物が！！

第二十六話　東郷一家ご紹介（前書き）

本編に入る前に、一つ言っておくことが。

感想返信を送ったいくつかの方に、この話の内容を一部ばらしましたが、とある事情で、その内容を一部訂正しましたので、何卒、ご容赦ください。

さて、今回は龍清の家族を一気に紹介します。

第二十六話　東郷一家ご紹介

「爺……様？」

龍清が目の前の老人に怒ってる傍ら、その際発せられた言葉に、はやてを始め、六課の面々はその老人に注目する。

「爺様ってことは……」

「あれが龍清の……」

「御祖父さん？」

フェイト、スバル、ティアナが順々に言った言葉で、目の前の老人が龍清の祖父であると、全員が認識するのに、時間は掛からなかった。

「大体！　なんでこんな昼間から起動させてるんですか！？」

「それは勿論。おぬしが今日ここに戻ってくると知ったのでな、久しぶりに戻ってくるので歓迎してやろうと……」

「こんな歓迎真っ平御免です！　それに僕だけならまだしも、皆さんまで巻き込んで！！」

「いやはや、楽しんでいただけたようで何よりじゃないか」

「楽しくないです！！」

今まで誰もが聞いたことも無い程、感情的に怒ってる龍清と、それを意にも介さず、悪びれた様子もなく「ほっほっほっ」と笑う祖父。

今までにない龍清の様子に、六課の面々は呆然とその様子を眺めているだけだった。

「全く！　あなたはいつだってそうだ！！　自分のやったことに全く反省の色がない！　そのせいで僕がどれだけあなたに殺されかけたことか……」

「おいおい、人聞きの悪いことを言うな」

何やら龍清に不本意な事を言われ、祖父も「心外だ」と言う旨の言葉を言う。

だが、その後彼の言った言葉に、六課一同は驚愕することに。

「儂がお前を裏庭の雑木林に放り出したのも」

『えっ！？』

「夜中の墓地に置き去りにしたのも」

『ええっ！？』

「暗闇の洞穴の中に十日間閉じ込めたのも」

『えええっ！？！？』

「すべてお前を立派な陰陽師にするためじゃ！！」

『ええーーーーっ！？！？』

祖父の言った、龍清への行いに、六課一同は驚愕の声を上げる。

しかし、本当に驚くのは、その次に言った龍清の一言だった。

「それらの行為を、９歳の子供にやらせる貴方がどうかしてます！！」

『9歳！？』

何と龍清、先ほどの祖父の過激な修行を9歳のころからやらされている様子。

その言葉に、再び声を揃えて驚愕する。

「りゅ、龍清君って……子供のころから苦労してたんだね」

「同情するなあ……」

「いや。それなのはさん達が言いますか？」

「「「うっ……」」」

しみじみ言うなのはとフェイトだが、ティアナに突っ込まれ、ぐぅの音も出なくなる。

と言うのもこの三人も、9歳と言う年端もいかない頃に魔導師になった。

なので、歳的に不相応な修行を受けさせられた龍清を、他人事のように（本人たちにその気はないだろうが）言えない立場なのだ。

まあ、それはエリオとキャロも同じなのだが……

「とにかく！！　皆さんを案内するので、早く解除してください！！」

「ほいほい」

龍清に怒られ　（反省の色なし）祖父は部屋の方に戻り、壁にあるレバーを上にあげる。

「やれやれ。口うるさい孫じゃのお……」

「貴方が余計なことしなければ良いんです！」

そう言うと、龍清ははやて達の方に振り向く。

「皆さん。これでもう起動しないはずですから」

「そ、そうか。それは良かった」

はやてを始め、罠にかかった面々はほっと胸をなでおろす。
もうあんな目に遭うのは御免だという思いでいっぱいだろう。

「ほうほう。中々の大所帯じゃのお」

とそこへ、龍清の祖父がひょっこりと顔をだし、はやて達を見る。

「客人と言っておったが、随分女子が多いようじゃの。女友達でも自慢しに戻って来たのか？」

「違います！　いや、友達という意味では否定しませんけど……疾しい気持ちで連れてきたわけじゃありません！！」

「解っておるわ。おぬしにそんな女子をナンパする様な度胸もないという事もな」

「むぅ……」

はっはっはっと笑う祖父に、龍清は頬を膨らませて怒る。

「あっ、えっと……こんにちは。八神はやて言います。皆を代表して、お邪魔いたします」

「ほお、礼儀正しいのお。いや、感心感心」

そんな二人のやり取りもそこそこに、六課を代表して挨拶してきたはやての対応に、ふむふむと二度、三度感心するそぶりを見せる。

「儂は東郷龍川（とうごうりゅうせん）。この通り口うるさい孫を持つ、唯の隠居爺じゃ、何もない家だが、ゆっくりくつろいで行ってくれ」

と、はやての挨拶に、龍清の祖父、東郷龍川が挨拶を返す。

しかしその際、何もないと言う言葉に、全員「嘘だ」と思ったのは致し方ない事である。

「もう……皆さん、屋敷の中を案内するので、ついて来てください」

そう言って、龍清が龍玄の部屋を出ようとした時……

「……（ニヤッ）」

ポチッ

「へぶっ！？」

龍玄が壁にあるボタンを押すと、床板の一枚が跳ね上がり、龍清の顔にクリーンヒットする。

「龍清君！？」

「大丈夫ですか！？」

その様子に驚いたなのはとエリオが駆け寄る。

床板が元に戻ると、龍清の顔には直線状に真っ赤になっていた。

「爺様！！」

「ほっほっほっ」

「もう！　行きますよ！！」

かんかんに怒った龍清は声を荒げつつ先に進み、はやて達もそれに続いて行くのだった。

「はっはっはっ、相変わらず弄りがいのある孫じゃ」

「……主も人が悪いの」

全員が去った後、けらけらと笑いながら部屋に戻る龍川だったが、その目の前に、今までいなかったはずの、髪の長い人物が立っていた。

「あのような事ばかりしていては、主、その内孫に嫌われるぞ？」

「何、龍清はああやって怒らせるぐらいが丁度良いのじゃ。あ奴はとにかく自分の胸に何でもしまうからな。怒らせて発散しないと鬱屈したものが弾けてしまうからな」

「意地の悪いことで……」

「お主もな……」

そう言葉を交わすと、二人はまた「ほっほっほっ」と笑うのだった。

「全く！　あの人は！！」

一方、祖父の悪戯染みた行動にかんかんに怒ったまま、屋敷の中を案内していた。

いま一同は荷物を置くために、大勢の来客用の部屋に移動中であり、向かって左側に庭があり、大きな池などがあったりする。

「まあまあ龍清君。気持ちは解らんでもないけど、そろそろ怒りを収めてな」

「大体。あの人はいつもああなんです！　僕を毎日からかって楽しんでるんです！！　やられる方としては堪ったもんじゃありません！！」

はやてに諌められるも、相当ご立腹だったため、あまり効果はなかったりする。

「龍清ってあんなに怒るんだ」

「意外だよねえ、普段が普段だけに」

「あれじゃない？　普段おとなしい奴ほど起こると怖いって奴」

「確かに。龍清ってあんまり怒ってるところ見たことねえしな」

その様子に、西麗とスバルが以外と言う顔をするが、ティアナが的を射たことを言って、ヴィータがそれに賛同する。

普段礼儀正しく、大人しい印象があるだけに、あそこまで感情を荒げて怒ることなど、予想できなくても仕方ないと言えば仕方ない。

「もぉ。あの人には本当に困ったものなんですから……」

「はいはい。言いたいことはよお解ったから、一旦怒りを収めてな、な？」

怒り心頭の龍清だったが、はやてが窘めてくれた事で、大分怒りも収まってきた様子。

いつもの表情などに戻り、改めて屋敷内を案内する。

「そう言えば、こんな広いお屋敷、ご家族だけで住んでるんですか？」

とそこへ、ふと疑問に思ったキャロが龍清に聞いてみる。

そしてその疑問に、他の面々も「そう言えば……」というような表情になる。

「ああ、それはね……」

そう言って龍清が庭の方を指差す。

一行が見てみると、庭で３・４人程の、リインやアギトと同サイズ位の子供が、庭で箒を掃いてたりしていた。

「屋敷の雑務は、大体あの子たちがやってるんですよ。働き者でしてね」

「あの子たちって、お手伝いさんか何か？」

「いえ。と言うより……」

スバルの質問に何か言おうとしたその時、前方からせわしなく走ってきた子供が転ぶのを見かける。

『！！？』

しかしその瞬間、あるものを見て一行は驚く。

転んだその子の頭から、獣耳がぴょこっと現れたのだ。

「えっ！　りゅ、龍清！　あ、あれって……」

西麗が面喰い驚いている。

全員が唖然としてるのを気にも留めず、転んだ子供は立ち上がり、頭を手で撫でるようにこすると、先ほどの耳が無くなっていた。

「西麗、ちょっと落ち着いて。今説明するから。君、ちょっとこっち来て」

西麗を落ち着かせる傍ら、さっき転んだ子を呼ぶ。

するとそれに反応し、子供が速足で近づいてきたので、その子を抱きかかえながら龍清は説明した。

「この子たちは、見た目はこの通り子供なんですけど……」

そう言って子供の頭に手を翳す。

すると、子供を煙のようなものが包み込む。

そしてそれが晴れると、龍清の手の中にいたのは。

『……狐？』

そこにいたのは、一匹の狐だったのだ。

突然の変化に、全員声をそろえて驚く。

「この子たちは本来、裏庭の雑木林にいる野生の狐なんですがね、こうやって変成術（へんじょうじゅつ）で人の形を取らせて、屋敷の雑務や、身の回りの世話をさせてるんですよ」

「へえ。便利やねえ」

「そうでもないですよ。かけてる術自体は弱いので、ああいう風に転んだりびっくりしたりするとすぐ元に戻るので」

説明しながら龍清が抱いてる狐の頭に手を翳すと、また煙に包まれ、狐はまた子供の姿になった。

そして下ろすと、またせわしなく走っていった。

「でもそんな事教えていいの？　ばれると色々不味いんじゃ……」

「皆さんだから教えるんですよ。それにこの家に来るのは、大体分

家の人間か同じ陰陽師の家の人間だけですから」

本来ならばれると非常に不味いものではあるのだが、魔法と言うものに関わってる六課の面々だからだと教える。

「ん？　……龍清、帰ってたのか」

とそこへ、一人の男性が姿を現す。

桔梗色の和服に身を包み、右目の部分は前が見て隠れているが、その顔は先ほどの祖父と違い、厳格そうだった。

「父上。はい、たった今戻ってきたところです」

目の前の男性に声を掛けられ、龍清は近況を報告する。

さっきまで祖父、龍川にからかわれて怒ってたのが嘘のように、その顔はどこか嬉しそうだった。

「ん？　その方々達は？」

「あっ、僕の客人です。しばらくこの家に泊めるんですけど、いいですか？」

「私は構わんが」

「有難うございます」

承諾を得、龍清は目の前の人物に深々と頭を下げる。

そしてその人物は、はやて達の方を向く。

「私は東郷蒼真（とうごうそうま）、この家の主だ。龍清の客人たちよ、大したもてなしはできないが、ゆっくりしていってくれ」

「あっ、いえ。お構いなく」

そう言うと龍清の父、東郷蒼真はそのまま去って行ってしまう。

「先ほどのが、この家の当主で僕の父、東郷蒼真です」

「何だか厳しそうな人だったね」

「ええ、厳しいです。でも立派な人ですし、陰陽師の腕も、僕よりは遥かに優れてます」

父の事を話す龍清だが、やはりその顔はどこか嬉しそうだった。

「何や龍清君、嬉しそうやな」

「そ、そうですか？」

はやてに指摘され、ちょっと照れくさそうにする龍清だった。

「さ、そんなことより、早く行きましょう」

そう言って、再び案内を始めようとした。

その時……

「ふひゃっ！？」

「きゅっ！？」

『龍清　（君）　（さん）！？』

突如、頭上から水のようなものが落ちてきて、龍清と春青は水浸しになる。

「龍清！　大丈夫！？」

「うわあ、びしょびしょや」

「取り敢えず吹かないと」

急いで全員で駆け寄り、フェイト達は持ってきたハンカチで龍清に掛かった水を拭き取る。

その一方で、ティアナとエリオは龍清の頭上を見る。

「特に、何か作動したような痕跡はありませんね？」

「てっきりあの御祖父さんが、何か作動させたのかと思ったんだけど……」

「いや、これはきっと……」

疑問を浮かべる二人に、龍清は、またどこか怒ってるような顔をする。

すると……

「おいおい、久しぶりに戻ってきて、危機察知能力でも薄れたか？」

その声と共に、目の前から二人の男が現れる。

一人は黒髪で、龍清と似たような散切りの頭をしており、どこか先ほどあった龍川に似た雰囲気を持っていた。

もう一人は黒髪だが、髪は背中ほどまで長く、今は呆れたような顔をしているが、穏やかそうだった。

「やっぱりあなたですか、辰水兄さん」

抗議の目で散切り頭の男、辰水を睨みながら言う。

「お前が今日帰ってくるってじっちゃんから聞いてな、久しぶりに驚かせてやろうと思ったんだよ」

「もお……だからって頭から水を落とすことないじゃないか！」

「ここを出る前のお前なら、この位避けられたんだろうがな」

龍清は自分に水を掛けた辰水に怒るが、当人はそう言って反省の色は見当たらない。

「しっかし、お前も隅に置けねえなあ」

「は？」

「だってよ、久しぶりに返ってきたと思ったら、こんな別嬪ばっかり連れて来るとはな。何だ？　こいつらを見せびらかしに来たのか？」

「違います！　皆僕の仲間です！！」

「はっはっはっ、だろうな。ほかの女を引っ掛けるような軟派な事、お前ができるわけないもんな」

「むぅ……またそうやって！！」

また怒りのボルテージが上昇する龍清だが、辰水はそれすらも楽しんでる様子だった。

「辰水。その辺にしておいたらどうだ？　それ以上は龍清が可哀そうだ。それに、着替えないと風邪をひいてしまう」

「このぽかぽかの天気で、風邪をひくのもおかしい話だと思うけどな。ま、この位にしておいてやるか」

そう言って、辰水は手をひらひらと振りながら、その場を後にするのだった。

「やれやれ……龍清、大変だったね」

「全くもう、爺様と言い辰水兄さんと言い、本当に困ったものですよ……」

「そう言ってやるな。彼なりに君を歓迎したんだよ」

「こんな歓迎、こっちから願い下げです！」

未だにご立腹の龍清を、男性はまあまあと窘める。

「えーっと……貴方は？」

そんな二人のやり取りの最中、目の前の男性の事をなのはが尋ねる。

「ああ、初めまして。私は東郷海馬（とうごうかいば）、先ほどのは東郷辰水（とうごうたつみ）と言うものです。以後、お見知りおきを」

目の前の男性、東郷海馬は自己紹介をしつつ、深々と頭を下げる。

「これはどうも親切に、私は八神はやて言います。ここにいる皆を代表して、今日からしばらく厄介になります」

「そうですか、大したもてなしはできませんが、どうかごゆるりと。さて龍清、早く着替えないと、風邪をひいてしまうよ」

「あっ、はい」

「そこの」

龍清に着替えを促すと同時に、海馬は丁度やってきた狐童子（仮名）を呼び止める。

「こちらの客人たちを客間に案内してくれ。私はこれから用事があるのでな」

海馬が指示すると、狐童子はぺこりと一礼する。

「それじゃあ皆さん、僕は一寸着替えてきますので。ここで失礼します」

「うん。ほな、風邪引かんようにな」

そう言って龍清は春青と共に、速足で去っていく」

「さて、私も失礼するが、何か困ったことがあれば、この童子達に申し付けてくれたまえ」

そう言って、海馬もその場を去っていくのだった。

そして、狐童子の案内の元、はやて達は客間に到着する。

「うわあ……」

「広ーい！」

「凄いなあ」

「本当だねえ」

「クキュ～！」

上から順に、ティアナ、スバル、エリオ、キャロとフリードの順に、通された客間を見た感想を言う。

一行は到着すると荷物をひとまとめにしておき、いくつかのグループになって談笑等を始める。

「ほんま、龍清君の家には驚きっぱなしや」

「だよなあ！」

「驚きがいっぱいです～！」

「つうか、家に罠仕掛けるってどんなモノ好きなんだよあの爺さん」

「しかし、どこか物足りなさもあるが……」

「もう、シグナム」

そして東郷家に色々驚かされっぱなしなのをはやてが言うと、アギトとリインもそれに同調、ヴィータは龍川の物好きさに呆れ、それを物足りないと言うシグナムをシャマルが窘める。

「つうか、あいつの家どんだけ規格外なのよ。それでもってなんであいつはあんな平凡に見えるわけ？　いや、実際はすごいのは解ってるけど……」

「それは……家族の人たちが個性的だからかな？」

「にゃはは、それは私も同感だよ」

その隣で、白秋を足の上に乗せながら背中をさすりつつ、家の規格外さと、龍清自身とのギャップに納得のいかない表情をする西麗と、その原因を言い当てるフェイトと、それに同意するなのは。

色々差はあるが、常識を超えた東郷家に、皆驚きを隠せないでいた。

「お待たせしました」

「キュウ」

しばらくすると、着替え終わった龍清と春青がやってくる。

さっきまでの服とは違い、龍川と同じ、狩衣姿だった。

「へえ、龍清君って私服はそっちなん？」

「いえ、でも実家では、こっちの方がしっくりくるんですよ」

「そうしてると、本当に陰陽師って感じねえ」

西麗の言葉に、はやてもうんうんと頷く。

「それでどうします？　このまま休んでますか？」

「いや、色々驚いてちょっと疲れたけど、取り敢えず今日中に、町にサーチャーでも設置してこようと思うんや」

「サーチャー？」

「魔力とか、ロストロギアの反応を検知する装置の事よ」

この後の予定について龍清が聞くと、はやては町にサーチャーを設置する旨を伝える。

その際、サーチャーについて首を傾げる西麗に、ティアナが解りやすく説明する。

「解りました。それじゃあ、出かける旨を父上に伝えて来ますので、先に玄関で待っててください」

「オッケー」

そう言って、龍清が客間を出て、廊下に出た、その瞬間……

「りゅーーーーーせーーーーーー！！」

「へぶっ！？」

『えっ？』

突如、何か声が聞こえたと思ったら、龍清が全員の視界から消える。

その後、何かにぶつかるような音が聞こえる。

「何や何や？」

「どうしたの？　龍清君」

「一体何が……」

はやて、なのは、フェイトを筆頭に、一同が廊下を見渡すと。

「いたた……」

頭を強く打ったのか、廊下に倒れ、後頭部を抑える龍清と……

「ひっさしぶりー！　元気にしてた？　龍清！！」

その龍清の上にいる、龍清と似通った狩衣の様な衣装に身を包んだ、女の子がいたのだった。

第二十六話　東郷一家ご紹介（後書き）

と、言う訳で、東郷家の家族紹介と、謎の女の子の登場。

女の子と言っても、龍清と同い年ぐらいです。

次回はこの女の事龍清の意外な関係が……そして六課一同、京都の町に赴きます。

第二十七話　陰陽の姫と龍清の過去（前書き）

今回は前回の少女と龍清の意外な関係が明らかに！！

そして、小さいころの龍清の話に少し触れます。

しかし、これが本編に関わることは、今のところありません。

第二十七話　陰陽の姫と龍清の過去

「は、晴香！？　どうして家に！？」

「辰水さんから、「龍清が今日帰ってくるって爺さんが言ってた」って聞いてね、大急ぎでやってきたの！」

「あの二人ーーーーー！！」

廊下の床に倒れこんだ龍清は、今自分の上に乗ってる少女に何故ここにいるのかを聞き、その原因が二人にあると知るや、また叫ぶ。

しかし、龍清の心境など露知らず、少女は龍清の上に乗っかったままである。

「そんなことより本当に久しぶり！　もういきなり独り立ちするとか言ってどっか行っちゃうんだもん。ずっと会いたかったんだよ！」

「解った、解ったから！　とにかく降りて！」

「良いじゃん、小さいころは良くやってたんだし」

「小さいころの話でしょ！　それに今日はお客さんだっているんだから！！」

「へっ？　お客？」

龍清に言われ、後ろを振り向くと、そこには唖然とした様子で二人を見つめるなのは達がいた。

そして龍清はアイコンタクトでなのは達に助けを求める。
しかし……
「あっ、別に気にせんでええよ。どうぞ二人でごゆるりと～」
「はやてさーーーーん！！」
狸（はやて）のいらない気遣いにより、その望みも絶たれてしまう羽目に。
「龍清～♪」
「ちょっ、お願いだから退いて！　それと抱き着くのをやめて！！」
とにかく今の体勢から逃れようと、必死に少女に自分の上から立ち退くようお願いする。
今少女は龍清の上に圧し掛かるようになっていて、女性とはいえ、自分と同年代の子が乗っかっているのだ、それ相応の重みがあるのは当然の事である。
だが龍清のその対応が不満だったのか、少女はとんでもないことを口にする。

「何よそのどこか冷たい態度」

「いや、そんなつもりは……」

「それが許嫁に対する態度なの？」

「あっ！　ちょ、それは……」

『い、許嫁ーーーーー！！』

少女の突然のカミングアウトに龍清が口を止めようとするも時すでに遅し。

そのカミングアウトを聞いた六課の面々が、声をそろえて驚きの声を上げるのだった。

「い、許嫁ってあれですよね、子供の時に結婚の約束をしたっていう！」

「そ、それだよね！　それの筈だよね！？」

「い、意外です……」

「龍清、あんた意外とアクティブなのね」

「いや、押しが弱かっただけかもよ？」

「にしてもすげー」

「うむ、どこか軟弱そうだと思ってたのだが、これには少し驚きだ」

「あらあら♪」

上から順に、キャロ、スバル、エリオ、ティアナ、西麗、アギト、シグナム、シャマルが、先ほどの許嫁発言に驚嘆し、全員で龍清を見る。

「ちょっ！　皆さん！　何か誤解してるみたいですが、そんな大したものじゃないですよ！！　いや、別に冗談とかでもないですけど……とにかく、皆さんが想像してるようなものじゃありませんから！　って言うかいい加減退いてよ！！」

「やーだ！」

いつまでも「退いて！」「退かない！」の言い争いを続け、その横で六課の面々が賑やかに龍清の許嫁談義に花を添えてるその時だった。

「お嬢様、そろそろ退いてあげたらどうです？　龍清様も困っておりますし」

六課の面々の後ろから、着物のような恰好をした、一人の成人女性のような人物がやって来て、少女に龍清に退くように言う。

「ええ、久しぶりに会ったんだから別にいいじゃん。それと、お嬢様って言うのやめてっていつも言ってるでしょ」

少女は不服そうにそう言いながらも、あっさり龍清の上から退く。

「はぁ、助かった。ありがとうございます。天乙さん」

「いえ、御気になさらずに」

少女が退いてくれたことで立ち上がった龍清は、目の前の天乙と呼ばれた女性にお礼を言う。

「さて、こっちは如何したものか……」

しかし直ぐに、未だに想像膨らませるはやて達の対応に、頭を悩ませるのだった。

「で、一体何処からお話すれば良いでしょうか？」

談義に夢中になる六課面々をなだめた後、一旦全員で客間に戻ることに。

無論、先ほど廊下で会った二人も加えてである。

「そやなー、まずはどんな感じにプロポーズをしたのかを教えてな」

「オッケー！」

「してません！　晴香も答えなくていいから！！」

開口一番、はやてが冷やかし半分で聞いてきたことに、龍清の隣の少女も元気よく答えようもするが、龍清が一言で遮る。

実家に帰って来てから、苦労ばかりしていると、龍清は内心ため息をつくのだった。

「まあ、はやての冗談はともかくとして、まずはその子の事を教えてくれないかな？」

代わりにフェイトが、龍清に隣の少女の事を聞いてくる。

「ああ、はい。えっと……」

「自己紹介位自分でやるから」

どこから言おうか詮索してるところへ、先ほどの少女がそれを遮り、自己紹介を始める。

「私の名前は土御門晴香（つちみかどはるか）。名門土御門家の陰陽師で、龍清の許嫁でーす！」

元気のいい自己紹介をする少女、晴香に、周りも好印象を持つ。

「それで、龍清の許嫁って、どういう事？」

次の質問は西麗からだった。

ちなみに、春青とフリードは、キャロが持ってきたバスケットの中に隠してあるが、白秋は、「見た目が猫だから出してても大丈夫だろう」という事で、普通に西麗に抱きかかえられてる。

尤も、これを聞いたとき、当人はすごく怒ったらしいが。

「許嫁って言っても、家同士が決めたことだしね。晴香の家と僕の家は、爺様が若いころから交流があって、その関係もあってね。あと陰陽師的理由で」

「何、陰陽師的理由って？」

前者はともかくとして、後者の陰陽師的理由と言うのが何か気になったスバルが聞いてみる。

「僕も晴香も、陰陽師として強い力を持っているって言われたので、僕たちを結婚させて、強い力を秘めた子孫を作ろうって考えからですよ。別に家だけじゃなく、陰陽師の家は大体そうなんです」

「成程、強いのと強いのを掛け合わせて、さらに強いのをって考え方ね」

「そう言う事です」

龍清の説明に、ティアナが簡潔にその意図をまとめる。

「にしてもさ龍清、この人たち本当に客人？」

「そうだけど、何で？」

すると晴香が、龍清になのは達の事について聞いてくる。

「だってさ、こんな大所帯に加えて、皆美人じゃん。なんか下心あって連れてきたの？」

「ありません！」

「……ま、そうか。龍清にそんな軟派な事できるわけないもんね」

「辰水兄さんにも同じこと言われたよ」

晴香の問いかけをぴしゃりと撥ね退けるも、その後言われた一言に、内心複雑になる。

確かに下心がないことは事実だし、自分もそんな軟派な事考えないしする気もない。

しかしこうもあっさり言われると、どこかもの悲しさを感じるのだった。

「逆を言えば、そのような事をしないと信頼されいるのですよ」

「物はいいようって言うんだよそう言うの、後人の心を読まないでいただけませんか？」

そんな心境を言われ、龍清は晴香の隣にいる女性にそう呟く。

「そう言えば、貴方は？」

とここで、シャマルが晴香の隣に控えている女性の事を尋ねる。

「ご紹介が遅れました。私、晴香お嬢様の身の回りのお世話をさせて頂いております。天乙（てんいつ）と申します」

シャマルに聞かれ、その女性、天乙は深々とお辞儀をする。

しかし、その隣の晴香はどこか不満そうだ。

「だから、お嬢様はやめてって何度も言ってるでしょ？」

「しかし、お二人の時ならともかく、公衆の面前ではしっかりせねばなりませんし」

「呼び方なんて誰も気にしないわよ。だからお嬢様はやめて、堅苦しいから」

「解りました、晴香様」

どうもこの晴香、堅苦しいのが苦手らしく、度々天乙が「お嬢様」と呼ぶたびにそれを修正させているらしい。

「そう言えば龍清、さっき部屋出た時、どこ行こうとしてたの？」

とここで、先ほど衝突した時の事を思い出し、龍清に聞いてみる。

「あっ、あれはね。はやてさん達に京都を案内させようと思って、玄関に行こうとしてたんだよ」

そんな晴香に、まさか魔法関連の話などできるはずもなく、当たり障りのない話題で逸らす。

それを聞いた晴香は「ふぅん」と一、二回首を振ると、こんなことを言い出してきた。

「だったらさ、あたしも良いかな？」
「えっ？」
「だから、京都の案内、私もやってあげようかって聞いてるの」
「えっ！」
これに龍清ははたと困った。
確かにこれだけの大人数、案内役は一人でも多くほしいところだが、彼女は自分たちが魔法関係者であることなど知らない。
下手してばれたら、どうなるか解ったものではない。
「そ、それは手伝ってくれるのは嬉しいし助かるけど……その、なんて言うか……」
如何したものかと答えを濁しつつ思案する。
ちらっとはやて達の方を見ると、その考えを察してなのか、はやてがこんなことを言ってきた。
「せやなあ、これだけの人数を龍清君一人に押し付けるのも大変やし、お願いしてもええかな？」
「任せといて！」
はやての言葉に、晴香はどんと胸を叩く。
（い、良いんですか？　もし魔法の事がばれたら……）

（まあ、なんとかなるやろ）

念話で心配そうに聞く龍清に、はやては楽観的に言うのだった。

そして準備を整えたのち、一行は二手に分かれて、京都案内（サーチャーセット）をすることになった。

まずこちらは……

「うわあ……海鳴市とは、また違う感じだなあ」

「本当だねえ」

「「キュー！」」

「えーっと……フリード、春青、はしゃぎ過ぎてバスケットから出ないようにね」

「アギトもだ、任務なのだからあまりはしゃぐなよ」

「解ってるよ」

「「キュウ」」

こちらは龍清とライトニングの面々。

京都の風景に目を奪われるエリオとキャロ、そして興奮気味のアギトとフリードと春青を、龍清とシグナムが窘めている状況だ。

二人に注意され、一人と二匹は声を上げ、二匹はそのままバスケットの中に大人しく戻る。

「さて、でもサーチャーをどこに設置するんですか？　一言に京都と言っても、結構広いですよ？」

「それは大丈夫。次元航行艦にいるシャーリー達から、反応があった場所のデータはあるから。出して、バルディッシュ」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ》

フェイトの掛け声に答え、待機状態のバルディッシュがディスプレイを出す。

無論、周りには見えないよう、バルディッシュを取り囲むように全員見てる。

「反応は大きいのが三つ、その内一つに、ロストロギア反応が確認された。それと調べによると、この三つは四か所の地点に移動した形跡があるの」

その説明の後、ディスプレイには、その移動したと思われる四つの地点が現れる。

「龍清さん。どこだかわかりますか？」

「どれどれ……」

バルディッシュのディスプレイに表示されている場所を見て、龍清は形跡のある場所を予想する。

「この位置だと多分、銀閣寺、東寺、竜安寺、貴船神社の四か所だと思います」

「場所解る？」

「はい。ただ全部回るとなると、日が暮れそうですけど。今の位置から回れるとすれば、銀閣寺と貴船神社ですかね」

「じゃあそこは私たちがやって、もう一か所はなのは達に任せよう」

「それが妥当だな。では東郷、早速案内してくれ」

「解りました。でも皆さん、日本円持ってますか？」

相談の末、自分たちは銀閣寺と貴船神社の二か所のサーチャー設置を担当し、残る二か所の設置を、なのは達に任せようという事になった。

だがここで、龍清はふと思った疑問を口にする。

知っての通り、フェイト達はどちらかと言うとミッドでの暮らしが普通であり、地球、日本の通貨を持っていないのではと思っていたのだ。

「大丈夫。今回の任務の事母さんに報告したら、「必要経費」って言って、ミッドのお金を日本円に換算してくれたの」

「お母さんって、あの、リンディさんでしたっけ？」

「そうだよ」

その疑問に、フェイトは心配無用と言う風に事情を説明する。

「それなら大丈夫かな。じゃあ案内しますので、しっかりついて来てくださいね」

とりあえず当面の問題はないと判断した龍清は、一同を連れて、最初の目的地である銀閣寺に向かうのだった。

（と、言う訳なの）

（解った。みんなに伝えとくね）

一方、こちらは晴香と天乙を案内役とするスターズとリイン、西

麗組。

フェイトから念話越しに情報を受け取ったなのはは、全員に伝える事を告げると、そのまま念話を閉じる。

「それで、皆さんはどこか行きたいところはある？」

そんなことは露知らず。晴香は振り返って、行きたいところはないか聞く。

「えーっとね、美味しいものがあるお店！」

そう答えたスバルに、ティアナから愛の折檻　（拳骨）が落ちたのは、仕方ない事。

「全く、あんたは本当に食べることしか考えないわね」

「やれやれ……」

ティアナの言葉に同調するように、ヴィータも呆れる。

「えーっと、じゃあ、竜安寺と、東寺をお願いできるかな？」

とここで、なのはが受け取った情報を基に、行先を告げる。

「まあ、今の時間じゃ全部回るとかできないだろうし、暫くは滞在するんでしょ？」

「まあな」

「じゃあ急がなくてもいっか、オッケー、皆ついて来て、はぐれないようにね」

「はいです～！」

と、気前よく言った晴香は先頭に立って、全員を目的地へ案内することに。

（なのはさん。さっき言った二か所が……」

（うん。さっきフェイトちゃんたちが教えてくれた、魔力反応が移動した形跡のある場所。四か所の内、二か所はフェイトちゃん達がやってくれるから、私たちは、残り二か所を担当するよ）

（了解）

（おお）

（解りました）

（はいです～）

（了解！）

（ニャー！）

と、念話で目的を確認し、一行は晴香についていく。

「そう言えば晴香って、龍清の許嫁なのよね？」

「そうだけど？　まあ龍清が言ったように、親同士が勝手に決めたんだけどね」

念話での確認を終えた後、ふと思った西麗が、晴香に龍清について聞いてくる。

「じゃあさ、小さいころの龍清とかどんな感じだったの？」

その質問に、なのは達も興味をひかれる。

「そう言えば……」

「どんな感じだったんだろう？」

一方質問された晴香は「うーん」と考えるような動作をした後、答える。

「まあ、今とあんまり変わらなかったかな。良く龍川爺様とか辰水さんにからかわれたり、厳しい修行に送られたり、それでそのことを私や海馬さんに愚痴ったり、大体そんな感じだったわよ」

「ああ、あの爺さん結構やばい事やらせてきたみたいだしなあ」

「そりゃあねえ、岩に括り付けて滝に打たせたり、竹藪の中に一週間置き去りにしたり、底の深い洞穴に放り込んで自力で昇らせたり、色々な目に遭ってきたみたいだからねえ」

『……』

何気なく言ったヴィータの一言に、さらりと晴香が言った、祖父

龍川の所業を聞き、なのは達は絶句する。

まだそれだけの事をされていたのか。と、全員が思ったのは仕方のない事だろう。

「あっ、でも、初めてあった時はだいぶ違ったかな？　ねえ、天乙」

「左様ですね」

しかしここにきて、ふと思い出したように言ったこの一言に、全員が再び興味を持つ。

「違うって？」

「うーん、私が龍清と会ったのは5歳の頃で、龍川爺様が家のお爺様を訪ねた際、一緒に連れて来てたのよ」

スバルの問いかけに、晴香がふと昔の話をし始める。

自分と龍清のなれ初めは、龍川が土御門家の家にやってきた時に、彼が連れてきたのだと言う。

「でもその頃の龍清は、自身が無いって言うか、結構おどおどしてたわね。まあ初めての場所ってこともあったんだろうけど、それでも落ち着きがないって言うか、周りを不安そうにきょろきょろしてたわね」

「へー、意外～」

西麗の言葉に、なのは達も頷く。

「それでね、なんていうか、ちょっとからかってみたくなってね。後ろに回って「わっ！」って脅かしたら、驚いた後急に泣き出したのよ。あれは流石にびっくりしたなあ。脅かすつもりが逆に驚かされたんだから」

ははははと笑う晴香だったが、なのは達は無い驚きを隠せなかった。

確かに龍清は苦言を呈する事が多かったりするが、あまり泣き言を言ってるところなどはない。

小さいころのこととはいえ、今とは全く違う龍清の姿に、新鮮さを覚えていたのだ。

「あっ、言っておくけど、このことは内緒ね。話したらきっと龍清怒るだろうから」

そう言って、晴香は案内を続行し、なのは達もそれに続いていくのだった。

第二十七話　陰陽の姫と龍清の過去（後書き）

次回はサーチャー設置後の、東郷屋敷で起こるハプニングと言うか、カオスを。

そして、今回の長編の、事件の前触れをお送りしたいと思います。

第二十八話　東郷家の大宴会　そして渦巻く暗雲（前篇）（前書き）

近頃世間では、ＴＰＰの問題で大騒ぎです。

農業に関するイメージが強いですが、決して我々も他人ごとではない。

知的財産権の保護を理由に、二次創作や同人活動が禁止される危険性があるのですから！！

しかし、たとえいかなることになろうと、われわれ人間の創作活動と意欲は、国にも、たとえ神であっても阻むことはできない！！

なので私は、自分のような青二才作者の作品でも、心待ちにして読んでくださる方々の為に、執筆活動を続けます！

皆さん、応援の程、宜しくお願いします。

さて、今回は長くなりそうなので、前後篇に分けることにしました。

それでは前篇、まずはどうぞ！

第二十八話　東郷家の大宴会　そして渦巻く暗雲（前篇）

「すごーい！！」

「すごいです～！！」

「ちょっとスバル、はしゃぎ過ぎ！」

「リインもだぞ、ちょっと落ち着け！」

晴香の案内の元、東寺に到着した一向。

その様子を見て、興奮するスバルとリイン、そしてそれを諌めるティアナとヴィータであった。

「そんなに珍しいものかなあ？　って、良く考えてみたら、ここにいるメンバーって、結構外人が多い気するし、当然かな？」

「それに私どもはここに住んでいるわけですから、見慣れて仕方ないかと」

「それもそっか」

その様子に少し呆れ気味の晴香だが、天乙に言われ、それもそうだと納得する。

（まあ、スバル達は海鳴を見てきたけど、こうやって地球の文化に直に触れるのは初めてだからね）

（あたしも初めてクラナガンを見たとき興奮してたから、気持ちは解らなくもないわね……）

なのはと西麗の会話にある通り、ここにいる面々の半分ぐらいは地球の文化を知らない（或いはあまり詳しくない）面々ばかりなのだ。

知らぬ文化に触れ、こうして興奮しても致し方ないと言えばそうなのだ。

「……ん？」

「？　どうしたの？」

そんな中、晴香は何か訝しげな顔をする。

それに気づいた西麗が聞いてみる。

「御免、ちょっと用事思い出しちゃってさ。ちょっと別行動するけど良いかな？」

「えっ？　良いけど？」

「ありがとうね、天乙、悪いけど皆の事頼むわね」

そう言うと、晴香はどこかへ走り去っていってしまう。

「じゃあ、取り敢えず二人一組になって、お寺の中を見てこようか？」

「賛成！」

「そうですね」

「賛成です～！」

そしてなのはの提案に、スバル、ティアナ、リインが賛同、ヴィータと西麗も頷いている。

「では、私はこちらで待っておりますので、こちらに集合という事で」

「はい、お願いしまーす」

なのはが天乙にそう言うと、なのはと西麗、ヴィータとリイン、スバルとティアナの組に分かれ、それぞれ観光（サーチャー設置）をするために散策を始めるのだった。

「えーっと……確かこの辺の筈……」

一方、単独行動をとり始めた晴香は現在、東寺、五重塔の中にいて、何かを探しているようだった。

「……あ、あった」

そして晴香はお目当てのものを見つけるが、その様子を見て驚く。

「……解かれてる」

彼女の目に映ってたのは、横に倒れる、一本の杭の様なものだった。

そしてその杭が撃ち込まれていたと思われる穴が、近くにあった。

しかも杭は真っ二つに折れていて、二度と打ち込むことができないようになっていた。

「これは一体……」

晴香はこの惨状を見て、不吉な予感を感じるのだった。

「ただいま戻りました」

時は経って夕暮れ時、一通り観光（サーチャー設置）を終えた一行は合流、東郷家に戻って来た。

「おお、お帰りなさい」

「お疲れ様」

それを出迎えたのは、はやてとシャマルだった。

何故この二人胃が屋敷にないに残ったかと言うと、何かあった時のための中継連絡役と、東郷家のメンバーへのカムフラージュ的な意味もあって残ったのだ。

（はやてちゃん。どう？）

（ばっちり誤魔化しといたで、皆もお疲れさんや）

（サーチャーは設置してきたから、後は反応が出るのを待つだけだね）

（せやな）

念話で晴香達に気付かれないように、なのは、フェイト、はやての三人は結果を報告し合う。

「それにしても疲れた～！」

「慣れない土地だもんね」

「僕たち何て山に登りましたからね」

「結構疲れました」

「あたしも～」

「ニャ～」

しかし、フォワードメンバーはくたくただった。
慣れない土地を歩いたりはしゃいだりしたためである。
特にエリオとキャロは、貴船神社への道中、山を登ったりした為、その疲労はなおさらだった。

（ほんまにお疲れさん。皆ようやってくれたな）

（お疲れ様）

そんなフォワード達に、はやてとシャマルは労いの言葉を投げかける。

「ほおほお、ずいぶん疲れ取るのお」

そこに現れたのは、龍清の祖父、龍川だった。

「あっ、爺様」

「龍川爺様！　お邪魔してまーす！！」

「ほおほお、晴香に天乙殿、久しいのお」

「お邪魔します。龍川様」

龍清の掛け声を合図にするかのように、晴香と天乙は龍川に挨拶をし、龍川も久しぶりに顔を見たためか、嬉しそうに顔がほころぶ。

こうしていると、普通の老人であった。

「さて、皆疲れとるようじゃのう。どれ、夕食の支度をさせとるから、その間に風呂に入って来てはどうかね？」

「えっ？　お風呂があるんですか！？」

龍川の言葉に、なのはが驚きの声を上げる。

龍清と晴香、天乙以外の他の面々も、驚きの表情をしていた。

「ああ、ここに来る時言いましたよね。この屋敷、古くなってきたから、一度建て替えたって、その時に浴室も新しく作ったんですよ」

「そう言う事じゃ、分家の者達が来た時様に大浴場に改装してあるから、皆で入ってきなさい」

「せやな、ほな皆、着替えを持って集合や！」

『おーーーー！！』

「ほっほっほ、元気でよろしい」

はやての掛け声に、全員疲労を忘れて、異口同音に叫ぶのだった。

「ここよ」

『おぉー！！』

晴香と狐童子の案内の元、着替えを持って六課一同は、東郷家の大浴場に来ていた。

その堂々と言うか、旅館かどこかの物と遜色ないその入り口に、一同は驚嘆の声を隠せないでいた。

「男女別……ですよね、良かった……」

ただ一人、風呂関連で少々厄介なことに遭った、エリオを除いては。

「そりゃあ男女別だよ、多くの人が来るんだから」

「遅くなりました！」

「あっ、龍清、それにキャロ」

「あんた達どこ行ってたの？」

とそこに、少し遅れて、龍清とキャロがやってくる。

「僕は一寸厨房に行ってました。凄い食べる人がいるわけですからね、量を大目にしておいてほしいとお願いしてきました」

「私はその……ちょっと聞きたいことがあって……」

龍清は厨房に行って、夕食の量を大目にしてほしいとお願いしたようだ。

キャロは何か言い難いことがあるのか、どこか言いづらそうに言った。

「そっか、ほな龍清君、エリオ、またな」

「「はい」」

そう言って、男二人はほかの面々と別れて男湯の方に入っていくのだった。

「あっ、龍清！　後で露天風呂の方に来てねー！」

そう言った瞬間、龍清が全力でずっこけた。

「もお、いきなりあんなこと言わないでほしいよ、もお……」

「あはは……何だろう、僕もなんか嫌な予感が……」

脱衣所に入ると、龍清とエリオはそんな風に、ため息をついていた。

「それで龍清さん。キャロと二人で遅れて、一体何をしてたんですか？」

「ああ、厨房に行ってたのは本当だよ、唯ちょっとね」

エリオに聞かれてそう答えると、龍清は来ている狩衣の裾を少し揺らす。

「もういいよ、出ておいで」

「「キュー」」

龍清がそう言うと、袖の中から、フリードと春青が現れた。

「えっ？　どういう事ですか！？」

「この風呂、一応動物オッケー何だよ。ほら、あの子たちも入ることとあってさ、でもこの子たちは、晴香や爺様の前で見せるわけにはいかないからね、それでちょっとね」

「成程」

その言葉に納得するエリオ。

白秋はまだ虎柄の猫と言う形で通せるか、フリードと春青はどうやったって誤魔化しが利かない。

しかしかといって、二匹だけ仲間外れと言うのもかわいそうなので、二人しかいない男風呂の方に入れることにしたのだ。

「でも、もしお兄さんや御祖父さんが入ってきたらどうするんです

？」

「それは大丈夫だよ、兄さんたちはこの時間は山の方で修行してるし、爺様は大体全員入った後に遅く入るから」

しかし、龍清の家族が入ってくることをエリオが示唆するが、龍清は彼らが入る時間帯を熟知していたため、心配はないと話す。

「さ、それより入ろうか」

「あっ、はい」

「「キュー！」」

龍清の言葉に、一人と二匹が、高らかに声を上げるのだった。

「気持ちぃ～～～」

「本当～」

「ふむ、中々いいものだ」

そしてこちらは女湯、風呂に入った一行は、その気持ちよさに顔が綻び、寛いでいた。

「せやけど驚きや、まさか檜風呂やなんて思ってもみんかったわ」

「まあ、初めはそんな感じですよね、でも私も気に入ってるし、悪いものでもないでしょ？」

「はい！」

晴香によれば、この檜風呂は建て替えの際、龍川が態々材木を取り寄せ、作らせたものだという。

それを聞いた面々は驚いたが、すっかり檜風呂の魅力に取りつかれ、気持ちよさと相まって、すっかり入り浸っていた。

時々鼻を擽る檜の匂いが、それを増大させている。

「本当に気持ち～、ね、白秋」

「ニャァ……」

すっかり顔の筋肉が緩んでいる西麗の頭では、檜風呂の香りによって、へにゃりとしている白秋が気持ちよさそうに鳴く。

「でも本当によかったの？　白秋まで風呂場に入れて」

「全然。ここ露天風呂もあるんだけど、時々裏庭に住んでる動物たちが使ってるからオッケー何だって」

『へー』

その言葉に、全員納得する。

「それにしてもさあ、一つ気になったんだけど……」

とここで、晴香がふと気になったことを口にする。

「あんた達さあ、どこで龍清と知り合ったの？」

『えっ？』

その言葉に、一瞬全員がどきっとする。

「いやさ、別に関係とか疑ってるわけじゃないよ？　でもさ、どうしてこんな大勢と、それもこれだけの美人揃いとどうやって知り合ったのか、気になったもんだからさ。で、実際どうなの？」

晴香の質問に、全員少し顔を青ざめる。

迂闊に話すと、自分たちの正体、そして今関わってる事件の事が、彼女に知れてしまう可能性があり、それは非常に不味かった。

どう話そうかと考えてる時、西麗が口を開いた。

「まずあたしが龍清と知り合ったのよ、町でチンピラに絡まれてたところを、あたしが一発のして、助けてやったのよ」

「ああ、人前で術なんて使えないでしょうしね。納得」

西麗は嘘を混ぜて、自分と龍清との出会いを口にする。

「それでね、その時のしたチンピラが暴力団関係者で、囲まれてぼこぼこにされかけたのを、こちらのはやてさんと、その親戚のシグナムさん達に助けてもらったってわけ」

「せ、せやな、んで、そのつてでなのはちゃん達とも知り合ったって訳や」

西麗の話に、はやても口裏を合わせ、念話で他の面々にも相槌を打つようにお願いする。

「ふーん、それは災難だったわね」

「本当にね、良かったよ、シグナムさん達が強くて」

「あ、あの程度のチンピラ、造作もないのでな」

「全くだぜ」

色々無理もありそうだが、取り敢えず信じてくれた晴香に、一同安堵する。

（あとで男連中にも話しておこう）

（そうだね）

と、念話で龍清達にも口裏を合わせるように思う西麗と、それに同意するフェイトだった。

「それは大変でしたねえ、では龍清様が皆さんをこちらにご招待し

たのは」

「そ、そう、その時のお礼をしたいって言うので、招待されたんですよ。ね、フェイトちゃん」

「えっ！？　あ、う、うん。そうなんです」

「そう言う事、納得したわ。ありがとう」

「いやいや」

天乙の言葉に、なのはとフェイトが口裏を合わせ、晴香の言葉に西麗がそれほどでもないと言う。

その内、真実をお教え頂きますよ♪

「！？」

「ニャッ！？」

しかし突如、西麗の頭に何か声が聞こえ、思わず振り向く。

「どうしたの？　西麗？」

「そうしたんですか～？」

「えっ、いや……何でもない」

その様子に、スバルとリインが気になり、声を掛けられると、西麗は何でもないと言って再び風呂につかる。

（気のせい？　でも、今確かに声が聞こえたし、頭に響く感じだった……あれは一体……）

ふと気になり、思考に耽る西麗。

「あのお、西麗ちゃん」

「……ん？　はい？」

「白秋ちゃん、溺れてるわよ？」

「えっ？」

その時、シャマルに言葉を掛けられ、そう言われて自分の前を見てみると……

「ニャーーーー！？！？」

手足をじたばたさせて溺れる白秋がそこにいた。

「あっ！？　白秋！！」

慌てて、救い上げ、再び頭の上に乗せる。

「ごめーん！　大丈夫！！」

「ニ、ニャァ……　（大丈夫じゃない……）」

うめき声をあげる白秋だが、念話越しで西麗はそう聞くのだった。

「……」

そんな中、はやてが晴香と天乙を見つめる。

いや、実際には、彼女たちの「ある部分を」である。

「？　どうしたんですか？」

それを不思議に思った晴香が、はやてに聞くと……

「いや、なんや年の割に大きいなあ思って」

「は？　……！！？」

一瞬何のことか解らなかったが、視線の先をたどって、直ぐに理解する。

彼女が追った視線の先は、自身の胸だったのだ。

「ちょお揉んでええ？」

「はあ！？　どこをどうなったらそんな答えにたどり着くの！！？」

「ええやんかあ、女同士何やし」

「女同士でも限度があるでしょ！？　って何で皆さんそんな「諦めろ」的な視線を送ってるんですか！！？」

突然、そう言われて混乱する晴香だが、良く見てみるとなのは達は、「ご愁傷様」的な視線を送ってる。

そしてその理由を聞くと……

「まあ、仕方ないよ、はやてちゃんだし」

「うん、はやてだもんね」

「諦めろ、主はそう言うかただ」

「心配すんなよ、何も疾しいことはねえから」
「はやてちゃんのスキンシップです♪」
「です～」
「また悪い癖が出たよ」
「諦めなさい、私たちも受けた洗礼よ」
「うんうん」
「すいません。私にはどうすることも……」
「うぅ……あの時の光景が……／／／／／／」

上から順に、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、シャマル、リイン、アギト、ティアナ、スバル、キャロがそう言葉を投げかけ、西麗はかつての歓迎会の時の光景を思い出し、胸を隠すように腕を組んで湯船の中に沈む。

「そんなあ！　ってちょっと！　お願いだから滲みよらないで！！
ってか天乙！　お願いだから助けて！！」
「すいませんお嬢様。はやてさんの目が本気の様なので、私にはとても。それに、こういうのも女性ならではのスキンシップと考えれば良いではありませんか♪」
「良くない！　ってかあんた絶対この状況楽しんでるでしょ！！」

「ふふふ、ではさっそく……」

「待って！　お願い！　お願いだから落ち着いてーーーーー！！！！」

その後、彼女がどうなったかは、その場にいた人間のみぞ知る事であった。

第二十八話　東郷家の大宴会　そして渦巻く暗雲（前篇）（後書き）

公式揉み魔、はやて再臨。

ちょっと暴走させすぎたかな？　とは思いましたが、カオス実現の為にやっちゃいました。

次回はカオスの本場、東郷家での夕食の話がメインです。

そして、さらなる伏線も張ります。

第二十九話　東郷家の大宴会　そして渦巻く暗雲（後篇）（前書き）

今回は先週の話の後半。

お風呂パニック男湯篇と夕食の話、そして、事件の前兆（伏線）です。

第二十九話　東郷家の大宴会　そして渦巻く暗雲（後篇）

イヤァアーーーーーーーーーーー！！！！

「「！！？」」

「「キュッ！？」」

一方、こちらは男湯。

まったりとお風呂を堪能していた龍清とエリオ、春青とフリードだったが、突如壁の方向から聞こえてきた悲鳴に気付き、壁の方を見る。

「龍清さん、今の悲鳴って……」

「声からして、多分晴香かな？　一体何があったんだろう？」

「「キュウ？」」

エリオの問いかけに、声の感じから晴香だと認識する龍清だったが、何があったのか解らず、その言葉に呼応するように、春青とフリードも子首を傾げる。

ちなみに二匹は沈まない程度に湯を入れた桶の中に二匹揃って入っている。

桶は湯船の中をぷかぷかと浮いているが、あまり二匹が暴れると転覆してしまうため、お湯につかりながら大人しくしている。

尤も、転覆しそうになった際には、龍清とエリオがちゃんと支えるので、問題ないと言えば問題ないのだが。

「多分、八神部隊長の仕業だと思います」

「はやてさんの？」

「はい。スバルさんやティアナさんも、被害に遭ったと話していたので、恐らく……」

「一体、何をしてるんだ、はやてさんは？」

「さあ、そこまでは……」

はやての仕業だというのはその会話で理解したが、被害にあった

面々が何をされたかについてはエリオも知らない様子だった。
実際は龍清は、今はやてがやってる行為を、一度親睦会で目撃しているのだが、まさかそれをやってるなどとは思いもよらないし、エリオも詳細を聞かされてないので、やってるかどうかは解らない。
まあ、普通に考えて、「胸を揉まれた」なんて、言うのは憚られるだろう。
「ふぅ、そんなことより久しぶりに入ったけど、やっぱり気持ちいなあ」
まあ、それはさておき、久しぶりに入った実家の風呂に、龍清の顔は綻ぶ。
あの祖父にあの兄ありで、あまり実家には帰りたくないのだが、この風呂に関してはかなり気に入ってる。
「僕も久しぶりに入りました。ミッドだとどうしてもシャワーになりますから」
「ああ、隊舎の浴室もシャワーしかないからね。って言うか、お風呂入ったことあるの？」
「はい。三年前に、機動六課の任務で海鳴に行った時に……」
すると、エリオはどこか表情が暗くなった。
「えっ？　もしかして、聞いちゃいけないこと聞いちゃった？」
「あっ、いえ、そういう訳では……」

何か触れてはいけないことに触れてしまったのかと思い、龍清は聞いてみるが、別に嫌なことに触れたわけではない。

「実は……任務で海鳴に行って、現地の人と一緒に、スーパー銭湯に行ったんですけど……」

「現地の人？　海鳴にも魔法を知ってる人っているの？」

「はい、フェイトさんやなのはさん達のお友達と、クロノ提督の奥さんと、あとフェイトさんの使い魔のアルフと一緒に」

「へえ、それで？」

「その……入ろうとした時に、キャロに「一緒に入ろう」って言われたんですよ。ほら、当時僕たちはまだ１０歳だったわけですし」

「ああ、そう言われればそうだね」

「オマケにフェイトさんまで一緒に入ろうって言ってきたし、周りの皆さんも助けてくれなくて、大変でしたよ」

「さ……災難だったね」

話を聞いて、龍清は冷や汗を流す。

「いや、何とか脱出して男湯に入ったんですけど、その後が大変でした」

「と言うと？」

しかし、この話にはどうやら続きがあるようで、龍清はその続きを聞く。

「実は銭湯には、「１１歳以下の男児のみ女湯への入浴を認めます」って注意書きがあって」

「成程、それでキャロやフェイトさんが女湯に連れて行こうとしたわけか……ん？　でもそれって……」

「はい、逆もまたしかり、何です」

「ま、まさか……」

そこまで聞いた龍清は、その先を一瞬予想した。

そして、その答えは……

「はい、キャロが男湯の方に、入ってきたんです……」

「キャロ……」

予想通りと言うべきというか何というか、その問いに、龍清は最早呆れるしかなかった。

「まあ、でも気持ちはわかるかな。僕も小さいころ、同じことがあったし」

「そうなんですか？」

「うん、今思い出しても恥ずかしいよ……」

龍清はそう言うと、先ほどのエリオのように、顔を暗くする。

「ほら、この家建て替えたって話したでしょ？」

「はい」

「実はその間、僕たち土御門家に厄介になってたんだよ」

「そう言えば、晴香さんのご実家って、どんな家なんですか？」

その話の途中、エリオがふと気になった晴香の家について聞いてみる。

「晴香の家、土御門家はね、古くは平安時代から続く、京都で知らない人はいない程の陰陽師の名家何だ」

「凄い家なんですか？」

「土御門家は元々、安倍家って名前で、その祖は、平安京でも有名な大陰陽師なんだ」

「という事は、晴香さんはその子孫なんですか？」

「そう言う事。まあとは言え、今の時代、一般的には唯家柄が良いだけの家なんだけどね。このことを知ってるのは同業者の家だけだよ」

「へー」

「で、話はそれたけど、屋敷を立て替えてる間、僕たち土御門家に厄介になってたんだ。でもそれでね……」

「な、何があったんですか？」

俯く龍清に、聞いてはいけないと思いながらも、思わず聞いてしまうエリオ。

「……僕が入浴中だって言うのに、入ってきたんだよ。しかも、タオルを体に巻かず、全裸で」

「……」

「しかもそのまま抱き着いてきたりしてさあ。本当にもう、あの羞恥心の無さには困るよ……」

「す、すいません……」

「いや、僕も恥ずかしいこと聞いちゃったみたいだからね。御相子だよ」

恥ずかしいことを聞いてしまったと謝るエリオだが、龍清もその前に彼の黒歴史を聞いてしまったという事で、当人も謙遜気味に言う。

「そうだ。エリオ、露天風呂いかない？」

「えっ？　露天風呂ですか？」

「そ。この家、露天風呂まで作ってあるんだ、裏庭に丁度いい源泉

があったんでね」
「そうなんですかー。行ってみましょう！」
「「キュウ！」」
と言う訳で、二人は露天風呂に行くことにした。

「うわあ、星空が綺麗です！」
「「キュウ！　キュキュー！！」
「あはは、喜んでもらえてうれしいよ」
露天風呂に移動した男湯メンバーは、風呂と星空に、その気持ちは大いに高まっていた。
「それにしても、龍清の御祖父さんって凄いんですね。あれだけの罠だけでなく、こんな露天風呂まで作らせるなんて」
「変なところばかり活躍する爺様だよ、あの情熱を１００分の１で

も性格の方に回してくれれば、少しは僕も家に戻ろうという気になるのに……」

「あ、あはは……」

エリオは素直に、龍清の祖父の凄さに驚かされてるが、龍清はあの性格が少しでも直ればと、ため息をつく。

それにエリオは、あの様子を見ているだけに、苦笑いを浮かべるしかない。

二人と二匹が、星空を見つめながら、露天風呂に浸かっていると……

「うぅ……何あの人、散々人の胸揉み倒しておいてまだ足りないとか……あっ」

「「あっ……」」

突如、露天風呂に晴香が愚痴をこぼしながらやってきた。

タオルもまかず、全裸状態で。

「は、晴香！？」

「龍清ー！！」

「えっ！　ちょ……ごばぁ！？」

「りゅ、龍清さん！？」

龍清の姿を確認するや、突如飛びついてきた晴香を受け止めつつ、龍清は湯船に溺れる。

そんな龍清を如何しようか、エリオはあわあわしだす。
「え、えーっと、龍清さんを助けないと！　あっ、でもその前に……」
エリオがとにかく龍清を助けなければという答えにたどり着くも、その前にやることがある。
「二匹とも、ちょっと大人しくしててね」
「キュー」
晴香が着たことで、取り敢えずばれないように、フリードと春青が入っている桶に、手ぬぐいを被せ、二匹を隠す。
「これでよしっ！」
と、隠し終えたところで、今まさに、龍清を助けようとした時だった……
「晴香、どうしたの？　なんか今凄い落としたけど……あっ」
「どうしたんですか？　何か動物が紛れ込んで……えっ？」
先ほどの音が気になったのか、突如露天風呂に、タオルを体に巻いたフェイトとキャロがやってくる。
「ふぇ、フェイトさん！　キャロ！」
「え、エリオ！？　ど、どうしてここに！！？」

「あれ？　言ってなかった？　この露天風呂、男湯と女湯で繋がってるの」

突然の邂逅に驚くエリオたちに、晴香が構造を詳しく説明する。

龍清に引っ付きながら。

「繋がってるってことは……」

「うん、混浴♪」

「そ、そんな事より離れて！　そしてタオルを巻いて！！」

「ええ良いじゃん！　久しぶりに一緒入浴しようよー！！」

「だー！！　ちょっと待ってー！！！！！」

龍清はどうにかして脱出を試みるも、昔から抱きつかれて解けた例がないため、そのまま暴れつつも、晴香の為すがままだった。

「す、すいませんフェイトさん！　キャロ！　ぼ、僕直ぐに上がりますので、では！！」

一方のエリオも、真面目さと気恥ずかしさから混乱し、二人と一緒にいるわけにもいかず、急いで男湯の方に戻ろうとするが……

ガシッ！

「へっ？」

突如、両腕を二人にがっしり掴まれてしまう。

「いいんじゃないかな？　久しぶりに三人一緒に入るってのも。ね、キャロ？」

「はい！」

「ええ！？　な、何言ってるんですか！！」

「だって、私も二人も仕事が忙しくて、六課に集まってもこうやって三人一緒になる機会なかったから、たまにはいいじゃない。ね？」

「そうだよ。それにまたこうやって一緒にお風呂に入れるなんて、滅多にないから、ね？」

「いや、でも……」

久しぶりの団欒といきたいのか、フェイトとキャロはエリオの腕をしっかり掴み、一緒にお湯に浸かろうと言ってくる。

エリオはどうにかして逃れようとするが。

「それともエリオは」

「私たちと一緒じゃ、やだ？」

「そ、そういう訳じゃ……」

「「じゃ、良いよね♪」」

「いや、そういう訳でも……あーーーーー！？！？」

この日、二人は露天風呂で、その若い命を散らしたのだった。

「「……」」

「はー、楽しかった！」

「気持ちよかったね？」

「はい！」

全員が浴場から上がり、今は着替えて廊下を移動してる最中である。

しかし、風呂上りから、龍清とエリオはずーんと肩を落として暗いオーラを放ち、晴香とフェイト、キャロは活き活きとした様子だった。

「あー、その……ドンマイ」

「もう済んだことなんだから、いい加減立ち直りなさいっての！」

「ニャー！」

そんな二人に、何があったのか知っているスバルが励まし、西麗が喝を入れる。

白秋も、そんな二人に続くように鳴く。

あの後、三人に好き放題されっぱなしだった龍清とエリオは、やがてやってきたスバルと西麗、そしてなのはによって、どうにか脱出できたのだ。

ちなみにフリードと春青も、スバルと西麗が二人を運んでる間に、晴香の目を盗んでなのはが回収、今は二匹とも、来る時と同様、龍清の来てる狩衣の袖の中に隠れている。

「エリオ、御免ね。露天風呂が混浴だったの、すっかり失念してた」

「いえ、良いんですよ。フェイトさんとキャロの誘いを断れなかった僕も悪いんです、龍清さんが気にすることはありません。だから

お気になさらずに」

露天風呂が混浴だったことをすっかり失念していた龍清はエリオに謝罪するが、エリオも、押しに弱かった自分が悪いんだと、龍清を励ます。

その優しさに触れつつ、申し訳ない気持ちになる龍清だった。

「ここです」

やがて、龍清が歩みを止め、目の前の襖をあける。

そこには、広い客間の中に、料理を乗せた配膳と座布団、そしてその前に、それを運んだと思われる狐童子達が、きちんと並べられていたのだ。

『うわあーーーーー！！』

その様子に、はやて達六課の面々は声を上げる。

「おお来たか」

その一方で客間には、龍清の祖父龍川と、兄、辰水と海馬の姿があった。

「あれっ？　父上は？」

「蒼真なら今日は土御門家に寄ってくると言ってたぞ」

「へっ？　家に？　何だろう？」

「さあ？」

「おーい、何呆けてんだよ？　早く来いよ！」

「こらこら、そう急かすものじゃないよ。どうぞ皆さん、お好きなところにお座りください」

辰水と海馬に言われ、我に返った一同は、取り敢えず言われた通り、好きなところに座る。

そして、全員が一通り座り終えた途端、狐童子達が何かを運んでくる。

「あれって……おひつ？」

童子達が運んできたのは、二つほどの大きな櫃（ひつ）。

そしてそれは、スバルとエリオが座った席の近くに置かれた。

「ああ、それは僕が指示しておいたんです。二人はかなり食べますから、大目に用意しておくようにって」

「でもよ龍清、いくらなんでもそりゃ多すぎじゃないのか？」

御櫃の正体は、龍清があらかじめ用意させた、スバルとエリオの分だった。

二人の大食いを間近で見て来ていただけに、龍清はその分を、童子達に作らせたのだ。

だが、明らかに十杯はあるであろうご飯の山を見て、辰水が苦言を呈す。

「大丈夫だよ、見てればそのうち解るから」

「ほっほっほっ、いやいや、子供はたくさん食べて、たくさん寝て、たくさん動いて、育つもんじゃ」

そんな辰水に龍清が呟き、そんな二人をよそに、龍川は「感心感心」と言った風に頷く。

「おー凄い！　これトロや！！」

「はやて！　こっちは鯛だぜ！！」

「すごーい！　美味しそー！！」

「こらスバル！　涎を垂らすな！！」

一方、配膳に並べられている料理の数々を見て、興奮を隠せない六課一同。

「いやはや、大したもてなしもできなんじゃからの」

「いやいや、十分なもてなしですよ、これ！！」

「しかし、いくら子息の客人とは言え、我らにこのような持成し、よろしいのでしょうか？」

大したもてなしもできないと言う龍川に対し、すでに料理を見る

限りでも十分豪勢なので、はやてはそんなことはないと言う。

しかしその隣のシグナムが、幾ら客人とは言え、素性の知れない自分たちにこれほどの持成しをすることに、ふと疑問を投げかける。

「いやなに、龍清の客人ならば、我らにとっても客人。これ位の持成しは当然です」

そんなシグナムの問いかけに、海馬が人当たり良く答える。

その答えに、六課一同は「おぉー！！」と感嘆する。

「龍清君。ほんまにええお兄さんもったなあ」

「ええ、僕の誇りです」

そんなはやてへの問いかけに、龍清も嬉しそうに答える。

「いやあ、そんなに褒めるなよ！　照れるじゃねえか！！」

「海馬兄さんの事です！！」

しかし、わざとかそれとも本気か、照れくさそうに言う辰水を、龍清が見事にバッサリ切り捨てる。

「さて、そろそろ頂かこうか？　せっかくのごはんが冷めてしまうし、もう待ちきれない子もいるみたいだしね」

海馬が言うその待ちきれないことは、言わずもがな、スバルの事である。

手を出そうとするたび、隣のティアナに伸ばして手を叩かれる。

「そうですね、それじゃあ皆」

『いただきまーす！！』

はやての合図とともに、東郷家の賑やかな夕飯が、始まるのだった。

そしてはやて達が、東郷家で夕食に舌鼓を打っている頃、ここ、銀閣寺では。

「ふっふーん、ちょろいちょろ～い」

寺の中をずかずかと進んでいく謎の人影。

聞いてみるに、一見軽そうな印象を与えるが、彼女の足元には、一人の人間、いや、陰陽師が倒れていた。

そして寺の中を進んでいくその人影は、やがて歩みを止める。

「あった〜！」

まるで子供が何かを見つけた様に、無邪気に言う謎の人影。

「御姉様御姉様！　目的の物はっけーん！！」

「ええ、解ってるわ」

そして、謎の人影に呼ばれると、その後ろから、別の人影がやってくる。

「ここで二つ目。残りもこの調子で行きましょう」

「はーい！」

妖しい雰囲気を醸し出しながら会話する二人。

その前には、地面に深々と打たれた、一本の「杭」が立っていた。

そして外では、美しい満月を、黒い雲が覆い隠していってしまう。

まるで、これから先の、京都の命運を暗示してるかのように……

オマケ

その1

「「……」」

「？　どうしたの？　エリオ、キャロ」

「龍清さん。このお刺身のお皿に置いてある、この緑色のものは何ですか？」

「えっ？　……ああ、これはわさびだよ」

「「わさび？」」

「そっ、日本の薬味の一つで、こうやって刺身に付けて食べるんだ」

「へー……はむっ」

「はむっ」

「えっ！？　ちょっと二人とも、そんな丸々食べたら……」

「「！？！？！？！？」」

「あーあ、二人とも大丈夫？　はいお茶」

「ら、らいひょうふでふ（だ、大丈夫です）……」

「あ、ありがとうございます……」

「わさびは多すぎると鼻につーんてくるんだよ。だから、これ位少量で付けて食べるの」

「「勉強になりました……」」

龍清が、エリオとキャロにわさびのレクチャーをしている別の所では。

「！！？　……ティ、ティア～……」

「ったくアンタは、何でもかんでも全部口に入れるな！」

「わさび全部そのまま食うやつなんて初めて見た……」

「（ペロッ）……ニャー！？！？！？」

一人と一匹、わさびの犠牲なるものが出たという。

その2

「……」

「お、おい……龍清」

「はい、なんですか？」

「その二人の腹はどうなってるんだ？」

「永遠の謎です」

「「へっ？」」

「す、すごい食べるんだね……」

「凄い客人を連れてきたもんだの～」

「あはは……」

スバルとエリオの食べっぷりを見て呆然としている祖父と兄二人に、龍清は苦笑いを浮かべるしかなかったという。

第二十九話　東郷家の大宴会　そして渦巻く暗雲（後篇）（後書き）

久しぶりにオマケ出してみた。いかがでしょうか？

次回は本格的に事件に入ります。

この京都で暗躍する謎の人物と、龍清と六課メンバーの内の二人が遭遇します。

敵の正体は？　そして誰と誰が龍清と一緒に遭遇するのか！？

ここから事件は大きく動きます。

皆さん、どうぞ楽しみに待っていてください！

第三十話　龍王、黒幕と対峙す。（前書き）

今回は諸々の事情により、今までで出来が良くない、もしくは、リリなのの世界観を壊してる可能性がありますが、それでも見ていただければ幸いです。

すっかり寒くなってきましたね。私も今週は体調不良に見舞われ、とてもつらかったです。

今日も咳を連発しすぎて、胸が少し苦しかったり……。

皆様も風邪をひかぬよう、体調には十分ご注意ください。

第三十話　龍王、黒幕と対峙す。

「う、うーん……」

空に昇った日の光に照らされ、龍清は目を覚ました。

しかし、寝ぼけ眼ながら、ふと体の異変に気付く。

（あれっ？　なんか体が重い。もしかして……金縛り？）

一瞬そんな考えが頭をよぎるが、意識が覚醒し、自分の体の方を見てみると、その正体はすぐわかった。

「うーん……龍清ー……」

それは、龍清の体の上に圧し掛かるように抱き着きながら眠る晴香だった。

「はぁ……いつもこれだもんな……」

しかし、すっかり手慣れたものなのか、晴香の拘束を解き、部屋の棚から占い道具の式盤と筮竹を取り出すと、朝の占いを始める。

「……水神の社……九頭稚鶏……玉石琵琶……封印は解かれる……」

一通り浮かんだ結果を言い終えると、占い道具を片付ける。

しかし、そのひょうょうはどこか不安げだった。

（水神の社って、恐らくあそこだろうね。封印が解かれるってこと

は、もしかして……）

その嫌な予感が当たってほしくないと思いながら、自分襖をあけて隣の部屋に入り、そこで着替えを済ませると、なのは達のいる客間の方に向かうのだった。

「ほな、昨夜の結果について、改めて確認するで」

龍清の到着を待って、はやて達は昨夜起こったことを整理していた。

夕食が終わり、皆が就寝に付く時間帯に、銀閣寺周辺に設置したサーチャーに反応があったために、密かに東郷邸を抜け出し、全員で調査に向かったのだ。

しかし、到着したころには残留反応しかなく、これと言った痕跡を見つけられなかった。

ただ見つかったものがあるとすれば、寺の中で発見された、人ひとり分の衣服だけだった。

「全員で捜索したのに、犯人につながりそうな手掛かりが無かったとか、なんか無駄骨感が……」

「ま、そう直ぐに尻尾を掴めるとは思ってなかったけど、手掛かり無しってのは少し悔しいわね」

せっかく眠いのを我慢して駆けつけたのに、これと言ったものを見つけられなかったことに西麗が愚痴を漏らす。

その隣でティアナは、事がうまくいかなかったことを仕方ないと思う反面、これと言ったものを見つけられなかったことに悔しさもあった。

「取り敢えず、まだサーチャーを仕掛けた場所に現れる可能性があるし、まだ警戒しておいた方が良いね」

「せやな。とはいえ、せめて相手の正体か目的位解らんと、後手後手に回りっぱなしや」

「です～」

何時までも済んだことを気にしてはいられない。

今回の事で、まだ残る三か所のいずれかに再び現れる可能性があるとして、フェイトの言葉通り、全員で警戒しておくことにするが、相手のことを何もわからない今の状況では後手に回らざるを得ず、はやてとリインは苦言を呈す。

「……」

「……キュウ？」

そんな中、龍清は一人目を瞑って黙り込んだままで、頭の上の春青がその様子を気にし、顔を覗き込む。

しかし、考え事をしているらしく、龍清はそんな春青の視線にも気づかない。

「龍清君？　……龍清君！」

「はっ！！」

とここで、さっきから黙りっぱなしの龍清を心配したなのはが声を上げたことで、漸く気づく。

「どうしたの？　さっきからずっと黙っていたけど？」

「あっ、大丈夫です。ちょっと考え事を」

「考え事？」

「はい、ちょっとね……」

なのはの問いかけに、龍清はそうはぐらかすように言う。

「けど、確かにこのままじゃ後手に回りっぱなしね。せめて全員でサーチャーの設置した場所を警邏するとかできればいいんだけど……」

シャマルの言うとおり、全員で反応があった場所を見回れば、犯人を見つけられる可能性はあるが、そんな事をすれば、東郷家の面々に怪しまれるのは明白である。

「ま、今は地道に活動するしか無いわな。変に行動して、この家の人達にばれるんも、厄介やし」

「何が厄介なの？」

「そりゃあ……えっ？」

はやてが至極まっとうな意見を言っていると、突然声がした。
思わずはやてが振り向き、全員が同じく声の下方向を振り向くと、そこにいたのは晴香と天乙だった。

『……わぁあ！？！？』

突然の事なので、全員驚く。

実際ははやてが先に驚き、そこから芋づる式に全員驚く。

「何よ、まるでお化けでも見た様に驚いて、傷つくんですけど……」

「あっ、御免な。ちょっとびっくりしてもうて」

「まっ、いきなり声を掛けた私も悪いしね。で？　何の話？」

顔を見るなりいきなり驚かれたものだから、晴香は不機嫌そうに言うが、いきなり声を掛けた自分も悪いとすぐに機嫌を直す。

そして、一体何の話をしていたのかと、はやてに問いかける。

「あっ、その前に晴香ちゃん。一体何時からそこに居たん？」

「つい先ほどですよ。朝起きたらお部屋に龍清様がいらっしゃらなかったとのことで、探していましたところ、こちらで皆様が何やらお話をしていたのをお見かけしましたので」

晴香に代わって、そばにいた天乙が説明するが、その説明を聞いた瞬間、全員の視線　（何人かにやにやして）が龍清に向く。

「何時もの事なんですよ、家に泊まると決まって部屋に潜り込んでるんです。それで何度爺様や辰水兄さんにからかわれたことか……」

しかし、事情説明をする龍清はずーんと暗い雰囲気を纏って沈んでしまい、周りにいたなのはやエリオ、キャロが必死に慰める。

（この様子やと。話は聞かれてへんようやな）

（そうみたいだね）

（ふぅ、一瞬心臓が止まったかと思った）

一方で晴香が自分たちの話を聞いていないようであることを念話で確認し、ほっと胸をなでおろすはやて、フェイト、西麗。

「まあ、それはともかくとしてや。今日はどのあたりを行こうか皆で相談しとったんや。でも回るところが結構あるから、厄介やなあって」

「そうなんですよ」

しかし、話を聞かれていないのならまだ誤魔化しが利く。

そう考えたはやては嘘を織り交ぜ、シャマルも相槌を打つ。

「成程ね、で、どこに行くか決まった？」

「いやあ、それがまだ……」

はやてがそう言うと、全員があははと失笑する。

勿論、念話で予め口裏を合わせておいたのだ。

「そうや晴香ちゃん。どこかお勧めの場所とか紹介してくれへん？」

「あたしでよければ良いけど？」

「ありがとうな。それじゃ、今日も観光といくで！」

拳を強く握りしめて元気に言うが、周りは「仕事であることを忘れてるのではないか？」と思うほどの良さに、少し心配気味にあきれるのだった。

その日の夜。

観光　（一応仕事）を終え、全員が就寝に付いた時間帯に、東郷邸の裏戸から、一人の人物がひっそり外へ出て行った。

「……誰も見てないね」

「キュウ」

それは龍清と春青だった。

龍清は外に誰もいないことを確認すると、こっそり外に出て行く。夜だと言うのに寝間着姿ではなく、白い狩衣に水色の袴を着ていた。

「それじゃ……」

「何をしているの？」

「えっ！？」

誰もいないことを確認し、何かを呼ぼうとしたその時、後ろから声を掛けられた。

「ティ……ティアナさん、スバルさんも……」

驚いて後ろを振り向くと、そこに居たのは、皆と一緒に客間で寝ていると思っていた、スバルとティアナの二人だった。

「ど、どうしてここに？」

「今日の龍清、今朝も昼間も様子がおかしかったからさ、ティアと二人で密かに起きて、後をつけてみたの」

「今朝も話してる最中だってのに、何か考え事をしてて上の空だったし、大方、今朝の占いの結果が気になって、それで確かめに行こうとした。そんなところでしょ？」

「す、寸分違わず……流石ですね」

「ティアは優秀な執務官だからね！」

自分の挙動を観察されてただけでなく、その理由までことごとく言い当てられ、最早絶句するしかない龍清だった。

「それで、一体何をしようとしてたの？」

「……はぁ、こうなったら誤魔化しは利かなそうですね」

「キュウ」

ここまで言い当てられては、最早言い逃れも何もできないと判断し、ため息をつきながら龍清は話す。

「貴船神社に行こうとしてたんです。ティアナさんの言うとおり、今朝の占いが気になって」

「貴船神社って、確か凄い山の方にあるんだよね？　上るの大変だったって、キャロが言ってた」

「はい」

「でも、ここからじゃ凄い遠いんじゃないの？」

「だから……」

そう言って龍清が手を二度叩き、しばらくすると、何かが近づいてくる音がする。

「あっ、来た来た」

暫くすると、牛車のようなものがやって来て、龍清達の目の前で止まる。

しかし、牛車の車輪の部分には、赤い鬼のような顔があり、スバルとティアナは驚きを隠せない。

「さ、乗ってください」

「え、ええ……」

龍清達が乗り込むと、牛車はカタカタと音を立てながら走り始める。

「少し揺れますけど、暫くしていればつくと思いますよ」

「それは良いんだけどさ、これ一体何？」

牛車に揺られながら、スバルは龍清に聞いてみる。

「これは朧車と言う、まあ言うなれば、妖怪ですね」

「「妖怪？」」

「えっと……要するに、昔の人が理解できないようなことを起こす、超常の存在、とでもいえばいいでしょうか」

首を傾げる二人に、妖怪について軽くレクチャーを始める龍清。

しばらく説明すると、ティアナは「成程」と解った風に呟く。

スバルは頭から煙を噴いていたが……。

「成程ね……ミッドじゃ考えらない事ね」

「まあ、ミッドや今の時代では馬鹿馬鹿しい事と思われますけど、今ほど発達してない昔にしてみれば、そう言う考えの方がむしろ普通だったんですよ」

「まあ、こっちでもロストロギアとかがあるから、完全に馬鹿に出来ないけど。ほらスバル、いい加減復活しなさい！」

龍清が説明を一通り終えると、ティアナは頭から煙を噴いてるスバルを小突き、再起動させる。

「で、どうしてその妖怪が、あんたの合図でやって来てるの？」

とここで、ティアナがふと気になったことを口にする。

龍清の説明を聞く限りでは、妖怪とは超常の存在で、人の手に負えるようなものではないと言う。

「ああ、実は僕が１３歳の頃、爺様に山奥に置いてけぼりにされて、徒歩で家に帰ることになったことがあって」

「ああ、やっぱり……」

話によれば、中学一年の時に、祖父龍川に騙されて山奥に置き去りにされ、「帰りたければ自力で帰ってこい」などと言われてしまい、そのまま徒歩で帰ることになったという。

それを聞いた瞬間、「やっぱりあの人か……」と、スバルとティアナは妙に納得してしまう。

「それで山を下りて、町に出たあたりで、こいつと会ったんですよ」

「でも、妖怪って人に悪い子とするんでしょ、如何して退治しなかったの？」

「こいつ、見ての通り見た目は立派なんですけど、非常に気の弱い奴でして、滅しようとした瞬間すごくびくびくしてて、何か滅するのが可哀そうになてしまって。まあ特に人に迷惑をかけたわけでもないので、見逃してあげたんですよ」

「そ、そうなんだ……」

「でもそうしたら、妙に懐かれてしまったんですよ。そこで僕の式にしてあげたんですよ。とはいえ、人前に見せられないので、こうして会うのも三年ぶりですけど」

「へ～」

そうやって朧車との出会いの話をする。

「でも変な話だよね、妖怪を退治する陰陽師と妖怪が仲良くなるって」

「そうでもないですよ？　中には妖怪を屈服させて式として扱う陰陽師もいますし、父上と兄さんたちも、たしかそうですから」

「へえ、そうなの？」

「って言うか式って？」

「式神……つまり使い魔みたいなものは、神様に位置づけされる存在に付ける名前で、獣だったり妖怪だったりする場合は、式って言い分けてるんです」

「うーん……」

「まあ、そんなに深く考えなくていいですよ。っと、ついたようです」

スバルが首を傾げたので、龍清が一言断りを入れると、朧車が止まったようであり、三人は車を降りる。

するとそこは、確かに山道のようだった。

「貴船山の、中腹あたりと言ったところでしょうか」

「うわあ、結構速いんだね」

「ええ。じゃ、ここで待っててね」

朧車にそう告げると、三人は貴船神社に向かって歩き出す。

「良いの？　せっかくだから目的地まで乗っていけば」

「いえ、貴船神社は水神を奉る神聖な場所。だから、妖怪の類は入れないんですよ」

しかし、せっかくなら目的地まで朧車で乗っていけばいいのでは？　と言ったのだが、龍清によると、貴船神社のように神様を祭ってる場所には妖怪は入れないとのことなのだ。

「そう言えば、今朝の占いが気になってここに来たのよね？　一体どんな結果だったの？」

「それは……」

歩きながらふとティアナは、龍清に今朝の占いの内容を聞こうとする。

その内容を、龍清が告げようとした時だった。

「キュ！」

「？　春青？」

「キュウ～……！！」

突然頭の上の春青が何かに反応し、まるで何かを威嚇するように低く唸り始める。

「……何かいる」

「ティア……」

「解ってる」

龍清の一言の後、三人は即座に警戒態勢になる。

木々の多いこの場所では、どこから攻撃が襲ってきてもおかしくない。

三人で周囲を警戒していると。

「……キュ！　キュー！！」

突如、春青が大声を上げる。

すると、三人のいるところに、何かが襲ってきた。

「うわっ！」

「なっ！」

「おわっ！」

三人は攻撃をかわし、同時にバリアジャケットを生成し、戦闘態勢になる。

「へー、中々いい動きするじゃんか」

「「「誰（だ）！！」」」

突如声が聞こえ、三人は一斉に得物を構える。

そして目の前にいたのは、一人の女性だった。

「しかも四神の一体とその使い手と遭遇するなんて、見回り何て退屈だったけど、あたしは運が良い！」

「四神……春青の事か！！」

「ってことは、龍清と西麗を襲ってた、あの男の仲間ね！」

「ってことは、昨日銀閣寺……だっけ？　あそこに現れたのも！？」

「何ごちゃごちゃぬかしてんだ！！」

三人で会話してると、女性はいきなり襲いかかってきた。

「くっ！　クロスファイア！　シュート！！」

「雷招符！」

攻撃を回避すると同時に、ティアナはスフィアを生成して複数の魔力弾を放ち、龍清の投げた符は雷球となって襲い掛かる。

「ふっ！」

女はそれをなんてことないように空中へ飛び跳ね、身を翻しかわす。

「はあーーーーー！！」

とそこへ、スバルが一気に突っ込んでくるが、女はそれさえもかわす。

そしてスバルの拳は、そのまま女の真下の地点に命中する。

「危ねー。でも、中々やるじゃねえか！」

とんと着地すると、女は嬉しそうな表情をする。

「退屈してたところだし、折角だ、少し遊んでやるよ！」

「一体貴方は、何者ですか！！」

「あー……そうだね、冥途の土産に教えてやるよ」

龍清が何者なのかと聞くと、女は声高らかに叫んだ。

「あたしは王貴人。傾国三姉妹の三女、王貴人様だ！！」

第三十話　龍王、黒幕と対峙す。（後書き）

今回の出来はあまりよくないと思います。

とりあえず、暗躍者の一人、王貴人と対峙した龍清、スバル、ティアナ。

次回はこの王貴人との戦闘、そして、意外な人物の登場です！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0262t/

魔法少女リリカルなのは　四神伝奇

2011年11月27日09時50分発行